仙台市文化財調査報告書第301集

前田館跡他

発掘調査報告書

中田南遺跡第3次・中田北遺跡・南目城跡
大野田古墳群第10.11次・元袋遺跡第5次
鴻ノ巣遺跡第10次・北目城跡第4.5次
南小泉遺跡第44～47次・袋前遺跡第2次
富沢遺跡第135.136次・西上野原遺跡
洞ノ口遺跡第12次・燕沢遺跡第12次調査

2006年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第301集 「前田館跡他発掘調査報告書」正誤表

	頁	誤	正
1	27	第23図観察表　図中番号2　写真図版12－3	写真図版　なし
2	27	第23図観察表　図中番号10　写真図版	写真図版　12－3
3	32	図版12　注記　3　D－1　第23図1	D－9　第23図10
4	32	図版12　注記　4　第23図4	第23図9
5	73	図版25　注記　1　第59図3	第59図2
6	85	第67図観察表　図中番号7　登録番号C－2	登録番号C－1
7	87	第67図観察表　図中番号3～9　写真図版36－	写真図版34－
8	93	図版34　注記　4～11　第68図	第69図
9	93	図版34　注記　4　第68図4	第69図9
10	93	図版34　注記　5　第68図8	第69図10
11	98	図版35　注記　3　C－1	C－4
12	129	第92図観察表　図中番号5　写真図版45－6	写真図版44－6
13	135	図版44　注記　3　第96図1	第96図2
14	152	第99図　スケール　10cm	5m
15	163	図版57　注記　5　I－1	I－2
16	163	図版57　注記　7　第102図2	第102図3
17	173	第115図観察表　図中番号3　写真図版59－3	写真図版59－4
18	173	第115図観察表　図中番号4　写真図版59－4	写真図版59－3

仙台市文化財調査報告書第301集

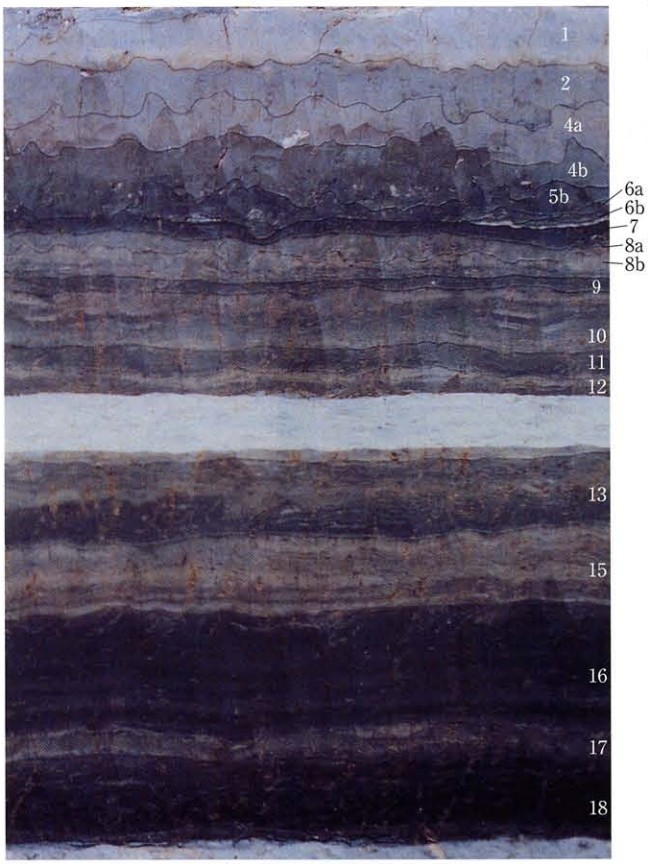
前田館跡他

発掘調査報告書

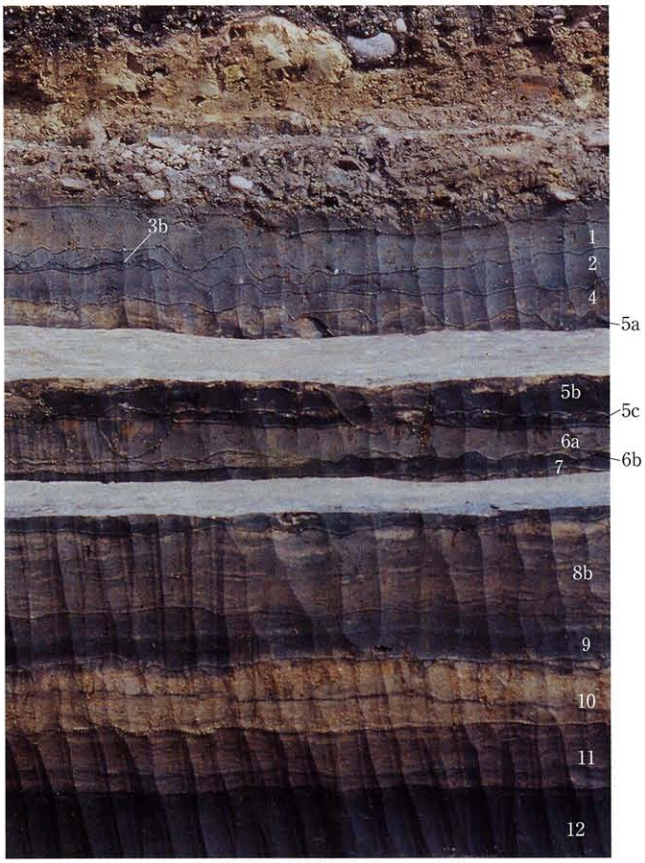
中田南遺跡第3次・中田北遺跡・南目城跡
大野田古墳群第10.11次・元袋遺跡第5次
鴻ノ巣遺跡第10次・北目城跡第4.5次
南小泉遺跡第44～47次・袋前遺跡第2次
富沢遺跡第135.136次・西上野原遺跡
洞ノ口遺跡第12次・燕沢遺跡第12次調査

2006年3月

仙台市教育委員会



1．1区東壁土層断面（1～18層）



4．3区東壁土層断面（1～12層）

2．1区東壁土層断面（19～27層）

5．3区東壁土層断面（13～17層）

3．2区北壁土層断面

6．3区東壁土層断面（18～26層）

富沢遺跡第135次調査の土層

西壁土層断面

北壁土層断面

Xc層水田跡畦畔痕跡

富沢遺跡第136次調査の土層と畦畔

序　文

仙台市内には現在約800ヵ所の遺跡が確認されておりますが、このような埋蔵文化財はその時代ごとにその地に住んだ人々の生活を伝えるものであり、各種開発事業によって絶えず破壊・消滅の恐れにさらされております。当教育委員会としましては皆様のご理解とご協力を得て、貴重な文化財を保存し、後世に伝えるように努めているところであります。

本報告書には、開発に先立ち、平成17年度に発掘調査を実施した前田館跡の他、中田南遺跡、中田北遺跡、南目館跡、大野田古墳群、元袋遺跡、鴻ノ巣遺跡、北目城跡、袋前遺跡、富沢遺跡、西上野原遺跡、洞ノ口遺跡、及び平成16年度に発掘調査を実施した南小泉遺跡、燕沢遺跡の調査結果を収録しております。

前田館跡は中世の城館跡とされていますが、今回初めて調査が行われました。調査によって中世の溝跡などが確認され、これまで知られていなかった遺跡の実態を知る上で貴重な資料を得ることができました。富沢遺跡の調査では、遺跡の範囲が更に北に広がっていることが確認され、仙台市富沢遺跡保存館で公開されている旧石器時代後期の森林跡と同じ時期の層が確認されています。

本書に掲載した調査成果が、地域の歴史の解明と文化財保護思想の高揚のため、お役に立てば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行まで多くの方々のご指導、ご協力をいただきましたことに対しまして、心より感謝申し上げます。今後とも文化財保護行政についてご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年３月

仙台市教育委員会
教育長　奥山　恵美子

例　　言

1　本書は、仙台市教育委員会が実施した民間開発事業に伴う前田館跡、中田北遺跡、燕沢遺跡第12次、富沢遺跡第135・136次、南小泉遺跡第46次と、個人住宅建設に伴う南目城跡、大野田古墳群第10・11次、元袋遺跡・鴻ノ巣遺跡第10次、北目城跡第４・５次、南小泉遺跡第45・47次、洞ノ口遺跡第12次、中田南遺跡第３次、大野田古墳群第11次、袋前遺跡第２次及び仙台市関連施設建設に伴う南小泉遺跡第44次、西上野原遺跡の発掘調査報告書である。

民間開発事業に係わる発掘調査は事業者の負担において実施し、個人住宅建設及び仙台市関連施設建設に係わる調査は公費で実施した。

2　本書の執筆・編集は、仙台市教育委員会文化財課調査係の担当調査員の協議をもとに、工藤哲司・門馬有希・三塚博之・浅野克樹・赤岡光騎が分担して行なった。担当は次のとおりである。

工藤：南小泉遺跡第44・45・47次、中田北遺跡、北目城跡第４・５次、燕沢遺跡第12次、西上野原遺跡、袋前遺跡第２次、富沢遺跡第136次

門馬：大野田古墳群第11次

三塚：前田館跡、富沢遺跡第135次

浅野：元袋遺跡第５次、中田南遺跡第3次、洞ノ口遺跡第12次

赤岡：南小泉遺跡第46次、南目城跡、大野田古墳群第11次、鴻ノ巣遺跡第10次

3　本書に掲載された陶磁器の産地および年代については、仙台市博物館の佐藤洋氏に鑑定をお願いした。

4　本書に係わる遺物・写真・実測図面等の資料については、仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1　本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原：1976）に準拠している。

2　断面図・平面図の標高値は、海抜高度を示している。

3　遺構は種別毎に次の略号を使用した。

SB：掘立柱建物跡　SD：溝跡　SE：井戸跡　SI：竪穴住居跡・竪穴遺構

SK：土坑　P　：ピット　SX：その他の遺構

4　遺物の登録は、以下の分類と略号を使用している。

A：縄文土器　B：弥生土器　C：土師器（非ロクロ）　D：土師器（ロクロ）

E：須恵器　F：丸瓦　G：平瓦　I：陶器　J：磁器

K：石器・石製品　L：木製品・杭材　N：金属製品　P：土製品

5　竪穴住居跡等における焼け面範囲は、網かけにより表現した。

6　土師器実測図における網は、黒色処理されていることを示している。

7　石器実測図においては、次のとおりに表現した。　磨り面の範囲

8　遺物観察表の（　）内の法量は残存値を示している。

9　本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田：1980）は、「十和田a（To－a）」と考えられ、十和田ａの降下年代は現在、西暦915年初夏とされている。（町田：1981・1996）

10　本書における「擬似畦畔Ｂ」という用語は、水田畦畔直下の自然堆積層に認められる畦畔状の高まりをさす（斎野ほか1987：「富沢－富沢遺跡第15次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第98集）が、本書では自然堆積層の高まりだけでなく、畦畔直下の下層の水田耕作土層に認められる畦畔状の高まりにもこの用語を使用した。

本　文　目　次

序文
例言
凡例
目次

Ⅰ　前田館跡発掘調査報告書

1　調査要項……1
2　調査に至る経過と調査方法……1
3　遺跡の位置と環境……1
4　基本層序……3
5　発見遺構と出土遺物……5
　1）溝跡……5
　2）土坑……7
　3）出土遺物……8
6　まとめ……8

Ⅱ　中田南遺跡第3次発掘調査報告書

1　調査要項……15
2　調査に至る経過と調査方法……15
3　遺跡の位置と環境……16
4　基本層序……16
5　発見遺構と出土遺物……17
　1）竪穴住居跡……17
　2）溝跡……18
　3）土坑……18
6　まとめ……19

Ⅲ　中田北遺跡発掘調査報告書

1　調査要項……23
2　調査に至る経過と調査方法……23
3　遺跡の位置と環境……23
4　基本層序……25
5　発見遺構と出土遺物……25
　1）溝跡……26
　2）竪穴住居跡……26
　3）土坑……29
　4）ピット……29
6　まとめ……29

Ⅳ　南目城跡発掘調査報告書

1　調査要項……33
2　調査に至る経過と調査方法……33
3　遺跡の位置と環境……33
4　基本層序……35
5　発見遺構と出土遺物……35
　1）溝跡……35　　3）ピット　……36
　2）土坑……35
6　まとめ……36

Ⅴ　大野田古墳群第10次発掘調査報告書

1　調査要項……39
2　調査に至る経過と調査方法……39
3　遺跡の位置と環境……39
4　基本層序……41
5　発見遺構と出土遺物……41
　1）Ⅳ層上面検出遺構……41　　2）Ⅳ層上面検出遺構　……41
6　まとめ……42

Ⅵ　大野田古墳群第11次発掘調査報告書

1　調査要項……47
2　調査に至る経過と調査方法……47
3　遺跡の位置と環境……47
4　基本層序……47
5　発見遺構と出土遺物……48
　1）小溝状遺構群……48　　3）ピット　……50
　2）土坑……50
6　まとめ……50

Ⅶ　元袋遺跡第５次発掘調査報告書

1　調査要項……53
2　調査に至る経過と調査方法……53
3　遺跡の位置と環境……54
4　基本層序……55
5　発見遺構と出土遺物……55
　1）溝跡……55　　3）ピット　……57
　2）土坑……55
6　まとめ……58

Ⅷ　鴻ノ巣遺跡第10次発掘調査報告書

1　調査要項……63
2　調査に至る経過と調査方法……63
3　遺跡の位置と環境……64
4　基本層序……65
5　発見遺構と出土遺物……65
　1）溝跡……65　　3）ピット　……66
　2）土坑……66
6　まとめ……66

Ⅸ　北目城跡第４次発掘調査報告書

1　調査要項……69
2　調査に至る経過と調査方法……69
3　遺跡の位置と環境……69
4　基本層序……69
5　発見遺構と出土遺物……70
　1）土坑……71
6　まとめ……73

Ⅹ　北目城跡第５次発掘調査報告書

1　調査要項……75
2　調査に至る経過と調査方法……75
3　遺跡の位置と環境……75
4　基本層序……75
5　発見遺構と出土遺物……76
　1）井戸跡……76　　2）ピット　……77
6　まとめ……77

Ⅺ　南小泉遺跡第44次発掘調査報告書

1　調査要項……81
2　調査に至る経過と調査方法……81
3　遺跡の位置と環境……82
4　基本層序……83
5　発見遺構と出土遺物……83
　1）SB１掘立柱建物跡　……83　　3）土坑　……88
　2）竪穴住居跡……83　　4）ピット　……88
6　まとめ……88

XII　南小泉遺跡第45次発掘調査報告書

1　調査要項……95
2　調査に至る経過と調査方法……95
3　遺跡の位置と環境……95
4　基本層序……95
5　発見遺構と出土遺物……95
　1）溝跡……95　　3）ピット……98
　2）土坑……98
6　まとめ……98

XIII　南小泉遺跡第46次発掘調査報告書

1　調査要項……101
2　調査に至る経過と調査方法……101
3　遺跡の位置と環境……101
4　基本層序……101
5　発見遺構と出土遺物……102
　1）溝跡……102
6　まとめ……105

XIV　南小泉遺跡第47次発掘調査報告書

1　調査要項……109
2　調査に至る経過と調査方法……109
3　遺跡の位置と環境……109
4　基本層序……109
5　発見遺構と出土遺物……109
　1）掘立柱建物跡……109　　2）土坑……111
6　まとめ……111

XV　袋前遺跡第２次発掘調査報告書

1　調査要項……115
2　調査に至る経過と調査方法……115
3　遺跡の位置と環境……115
4　基本層序……116
5　発見遺構と出土遺物……117
　1）溝跡……117　　2）小溝状遺構……117
6　まとめ……117

XVI　富沢遺跡第135次発掘調査報告書

1　調査要項 ……119
2　調査に至る経過と調査方法 ……119
3　遺跡の位置と環境 ……119
4　基本層序 ……122
　1）1区 ……122
　2）2区 ……124
　3）3区 ……125
5　発見遺構と出土遺物 ……127
　1）1区 ……127
　2）2区 ……128
　3）3区 ……130
6　まとめ ……133
7　富沢遺跡第135次発掘調査におけるプラント・オパール分析（株式会社　古環境研究所）……141

XVII　富沢遺跡第136次発掘調査報告書

1　調査要項 ……149
2　調査に至る経過と調査方法 ……149
3　遺跡の位置と環境 ……149
4　基本層序 ……149
5　発見遺構と出土遺物 ……151
　1）Ⅱ層水田跡の遺構と遺物 ……151
　2）Ⅲ層水田跡の遺構と遺物 ……151
　3）Ⅳ層水田跡の遺構と遺物 ……151
　4）Ⅴ層水田跡の遺構と遺物 ……152
　5）Ⅵ層水田跡の遺構と遺物 ……153
　6）Ⅶ層水田跡の遺構と遺物 ……154
6　まとめ ……154

XVIII　西上野原遺跡発掘調査報告書

1　調査要項 ……165
2　調査に至る経過と調査方法 ……165
3　遺跡の位置と環境 ……165
4　基本層序 ……166
5　発見遺構と出土遺物 ……167
　1）土坑 ……167
　2）出土遺物 ……167
6　まとめ ……167

XIX　洞ノ口遺跡第12次発掘調査報告書

1　調査要項 ……169
2　調査に至る経過と調査方法 ……169
3　遺跡の位置と環境 ……170
4　基本層序 ……170
5　Ⅲ層発見遺構と出土遺物 ……170
　1）溝跡 ……170
　2）土坑 ……172
　3）ピット ……173
6　Ⅳ層発見遺構と出土遺物 ……173
　1）溝跡 ……173
7　まとめ ……174

XX　燕沢遺跡第12次発掘調査報告書

1　調査要項 ……177
2　調査に至る経過と調査方法 ……177
3　遺跡の位置と環境 ……178
4　基本層序 ……180
5　発見遺構と出土遺物 ……180
　1）溝跡 ……180
　2）ピット ……181
　3）その他の出土遺物 ……181
6　まとめ ……181

図　目　次

Ⅰ　前田館跡発掘調査報告書

第 1 図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2
第 2 図　調査地点の位置 …… 2
第 3 図　開発範囲と調査区配置図 …… 3
第 4 図　遺構配置図 …… 4
第 5 図　南東壁断面図 …… 4
第 6 図　SD 1 溝跡断面図 …… 5
第 7 図　SD 1 溝跡出土遺物 1 …… 6
第 8 図　SD 1 溝跡出土遺物 2 …… 7
第 9 図　土坑実測図 …… 8
第 10 図　SK 1 土坑出土遺物 …… 8

Ⅱ　中田南遺跡第 3 次発掘調査報告書

第 11 図　遺跡の位置と周辺の遺跡 ……15
第 12 図　調査地点の位置 ……16
第 13 図　調査区配置図 ……16
第 14 図　遺構実測図 ……17
第 15 図　北壁土層断面図 ……17
第 16 図　遺構断面図 ……18
第 17 図　出土遺物 ……19

Ⅲ　中田北遺跡発掘調査報告書

第 18 図　遺跡の位置と周辺の遺跡 ……24
第 19 図　調査地点の位置 ……24
第 20 図　調査区・遺構配置図 ……25
第 21 図　SI 1 竪穴住居跡 ……25
第 22 図　土坑・溝跡 ……26
第 23 図　SI 1 竪穴住居跡出土土器 1 ……27
第 24 図　SI 1 竪穴住居跡出土土器 2 ……28
第 25 図　SI 1 竪穴住居跡出土石製品 ……29

Ⅳ　南目城跡発掘調査報告書

第 26 図　遺跡の位置と周辺の遺跡 ……34
第 27 図　調査地点の位置 ……34
第 28 図　調査区配置図 ……35
第 29 図　遺構実測図 ……35
第 30 図　遺構断面図 ……36

Ⅴ　大野田古墳群第10次発掘調査報告書

第 31 図　遺跡の位置と周辺の遺跡 ……40
第 32 図　調査地点の位置 ……40
第 33 図　調査区配置図 ……41
第 34 図　基本層断面略図 ……41
第 35 図　Ⅳ層検出遺構 ……41
第 36 図　Ⅶ層検出遺構実測図 ……42

Ⅵ　大野田古墳群第11次発掘調査報告書

第 37 図　調査区配置図 ……47
第 38 図　北壁土層断面図 ……48
第 39 図　遺構配置図 ……49
第 40 図　小溝状遺構群断面図 ……49
第 41 図　SK 1 ・SK 2 土坑平面・断面図 ……50

Ⅶ　元袋遺跡第５次発掘調査報告書

第 42 図　遺跡の位置と周辺の遺跡 ……53
第 43 図　調査地点の位置 ……54
第 44 図　調査区配置図 ……55
第 45 図　Ⅲ層遺構実測図 ……56
第 46 図　Ⅳ層遺構実測図 ……56
第 47 図　西壁土層断面図 ……57
第 48 図　遺構断面図 ……57
第 49 図　出土遺物 ……58

Ⅷ　鴻ノ巣遺跡第10次発掘調査報告書

第 50 図　遺跡の位置と周辺の遺跡 ……63
第 51 図　調査地点の位置 ……63
第 52 図　調査区配置図 ……64
第 53 図　遺構実測図 ……64
第 54 図　遺構断面図 ……65

Ⅸ　北目城跡第４次発掘調査報告書

第 55 図　遺跡の位置と周辺の遺跡 ……70
第 56 図　調査地点の位置 ……71
第 57 図　調査区配置図 ……71
第 58 図　遺構実測図 ……72
第 59 図　出土遺物実測図 ……72

Ⅹ　北目城跡第５次発掘調査報告書

第 60 図　調査区配置図 ……75
第 61 図　遺構平面図 ……76
第 62 図　調査区・遺構断面図 ……76

Ⅺ　南小泉遺跡第44次発掘調査報告書

第 63 図　遺跡の位置と周辺の遺跡 ……81
第 64 図　第44・45・46・47次調査区の位置 ……82
第 65 図　調査区配置図 ……83
第 66 図　遺構実測図 ……84
第 67 図　弥生土器・土師器１ ……85
第 68 図　出土土師器２・須恵器 ……86
第 69 図　石製模造品・石器 ……87

Ⅻ　南小泉遺跡第45次発掘調査報告書

第 70 図　調査区と遺構配置 ……95
第 71 図　遺構実測図 ……96
第 72 図　出土遺物 ……97

ⅩⅢ　南小泉遺跡第46次発掘調査報告書

第 73 図　調査区配置図 ……101
第 74 図　遺構平面図 ……102
第 75 図　SD１溝跡出土遺物実測図 ……102
第 76 図　SD２溝跡出土遺物実測図 ……103
第 77 図　遺構断面図 ……104

ⅩⅣ　南小泉遺跡第47次発掘調査報告書

第 78 図　調査区配置図 ……109
第 79 図　遺構配置図 ……110
第 80 図　遺構断面図 ……110

XV　袋前遺跡第２次発掘調査報告書

第 81 図　調査区の位置と周辺の遺跡 ……116
第 82 図　調査区配置図 ……116
第 83 図　遺構平面図 ……116
第 84 図　調査・遺構断面図 ……117

XVI　富沢遺跡第135次発掘調査報告書

第 85 図　遺跡の位置と周辺の遺跡 ……120
第 86 図　調査地点の位置 ……121
第 87 図　開発範囲と調査区配置図 ……121
第 88 図　調査区実測図 ……122
第 89 図　１区東壁断面図 ……123
第 90 図　２区北壁断面図 ……125
第 91 図　３区東壁断面図 ……126
第 92 図　１区出土遺物 ……129
第 93 図　２区出土遺物 ……130
第 94 図　３区２層検出遺構 ……131
第 95 図　３区４a層検出遺構 ……132
第 96 図　３区出土遺物 ……133

XVII　富沢遺跡第136次発掘調査報告書

第 97 図　調査区位置図 ……149
第 98 図　調査区断面図 ……150
第 99 図　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層水田跡畦畔痕跡 ……152
第100図　Ⅱ層SK１土坑 ……152
第101図　Ⅷ層・Ｘa層・Ｘc層水田跡畦畔痕跡 …152
第102図　出土遺物 ……153
第103図　富沢遺跡北東部の枡形囲式期の水田跡　155

XVIII　西上野原遺跡発掘調査報告書

第104図　遺跡の位置と周辺の遺跡 ……165
第105図　調査地点の位置 ……166
第106図　調査区と遺構配置 ……166
第107図　SK１土坑実測図 ……166

XIX　洞ノ口遺跡第12次発掘調査報告書

第108図　遺跡の位置と周辺の遺跡 ……169
第109図　調査地点の位置 ……170
第110図　調査区配置図 ……170
第111図　Ⅲ層遺構配置図 ……171
第112図　Ⅳ層遺構配置図 ……171
第113図　北・南壁土層断面図 ……171
第114図　遺構断面図 ……172
第115図　出土遺物 ……173

XX　燕沢遺跡第12次発掘調査報告書

第116図　遺跡の位置と周辺の遺跡 ……177
第117図　調査地点の位置 ……178
第118図　遺構実測図 ……178
第119図　燕沢遺跡東部遺構配置図 ……179

写　真　目　次

Ⅰ　前田館跡発掘調査報告書

図版１　前田館跡全景 …… 9
図版２　調査区南東壁断面 ……10
図版３　溝跡（SD１・２）……11
図版４　土坑（SK１・２）……12
図版５　前田館跡出土遺物１ ……13
図版６　前田館跡出土遺物２ ……14

Ⅱ　中田南遺跡第３次発掘調査報告書

図版７　中田南遺跡第３次調査出土遺物 ……19
図版８　遺構検出状況・SI１竪穴住居跡 ……20
図版９　遺物出土状況・調査状況 ……21

Ⅲ　中田北遺跡発掘調査報告書

図版10　中田北遺跡の調査状況１ ……30
図版11　中田北遺跡の調査状況２ ……31
図版12　中田北遺跡出土遺物 ……32

Ⅳ　南目城跡発掘調査報告書

図版13　調査区全景 ……37
図版14　溝跡・その他の遺構 ……38

Ⅴ　大野田古墳群第10次発掘調査報告書

図版15　遺構検出状況 ……43
図版16　小溝状遺構 ……44
図版17　遺構調査・完掘状況 ……45

Ⅵ　大野田古墳群第11次発掘調査報告書

図版18　第11次調査区の状況 ……51

Ⅶ　元袋遺跡第５次発掘調査報告書

図版19　遺構検出状況・土坑 ……59
図版20　土坑・溝跡 ……60
図版21　溝跡・完掘全景・土層断面 ……61
図版22　元袋遺跡第５次調査出土遺物 ……62

Ⅷ　鴻ノ巣遺跡第10次発掘調査報告書

図版23　遺構検出・調査状況 ……67
図版24　土層断面・遺構完掘状況 ……68

Ⅸ　北目城跡第４次発掘調査報告書

図版25　北目城跡第４次調査出土遺物 ……73
図版26　北目城跡第４次調査 ……74

Ⅹ　北目城跡第５次発掘調査報告書

図版27　北目城跡第５次調査出土遺物 ……77
図版28　遺構検出状況と基本層序 ……78
図版29　完掘状況と井戸跡 ……79

XI　南小泉遺跡第44次発掘調査報告書

図版30　遺構検出状況・掘立柱建物跡・土坑他 …89
図版31　SI 1 竪穴住居跡 1 ……90
図版32　SI 1 竪穴住居跡 2 ・完掘全景 ……91
図版33　南小泉遺跡第44次調査出土遺物 1 ……92
図版34　南小泉遺跡第44次調査出土遺物 2 ……93

XII　南小泉遺跡第45次発掘調査報告書

図版35　南小泉遺跡第45次調査出土遺物 ……98
図版36　南小泉遺跡第45次調査の状況 ……99

XIII　南小泉遺跡第46次発掘調査報告書

図版37　調査状況 1 ……106
図版38　調査状況 2 ……107
図版39　南小泉遺跡第46次調査出土遺物 ……108

XIV　南小泉遺跡第47次発掘調査報告書

図版40　遺構検出状況 ……112
図版41　SB 1 － 3 掘立柱建物跡 ……113
図版42　SB 2 掘立柱建物跡・土坑・全景 ……114

XV　袋前遺跡第 2 次発掘調査報告書

図版43　袋前遺跡の調査状況 ……118

XVI　富沢遺跡第135次発掘調査報告書

図版44　富沢遺跡第135次調査出土遺物 1 ……135
図版45　富沢遺跡第135次調査出土遺物 2 ……136
図版46　1 区全景 ……137
図版47　1 区作業風景・ 2 区全景 ……138
図版48　3 区全景 ……139
図版49　3 区検出遺構 ……140

XVII　富沢遺跡第136次発掘調査報告書

図版50　基本層と 2 ～ 4 層の状況 ……156
図版51　3 ～ 6 層の状況 ……157
図版52　7 ～ 8 層上部調査状況 ……158
図版53　8 層水田跡調査状況 ……159
図版54　8 ～10層水田跡調査状況 ……160
図版55　10層水田跡の調査状況 ……161
図版56　10層水田と土層断面 ……163
図版57　富沢遺跡第136次調査出土遺物 ……163

XVIII　西上野原遺跡発掘調査報告書

図版58　西上野原遺跡調査状況 ……168

XIX　洞ノ口遺跡第12次発掘調査報告書

図版59　洞ノ口遺跡第12次調査出土遺物 ……174
図版60　遺構検出状況・ピット群・Ⅲ層全景 ……175
図版61　検出遺構・北壁断面 ……176

XX　燕沢遺跡第12次発掘調査報告書

図版62　燕沢遺跡の調査状況 ……182

Ⅰ　前田館跡発掘調査報告書

1．調査要項

遺　跡　名	前田館跡（宮城県遺跡登録番号01121）
所　在　地	仙台市太白区中田６丁目55の一部
調査原因	宅地造成に伴う道路建設
調査対象面積	2,100㎡（街路敷設部分9,231㎡）
調査面積	50㎡
調査期間	平成17年５月24日～６月６日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課
担当職員	主査　工藤哲司　　文化財教諭　赤岡光騎　三塚博之　浅野克樹

2．調査に至る経緯と調査方法

平成17年２月18日付けで、柿沼一夫氏より上記地内における宅地造成工事に伴う発掘届が提出された。これを受けて平成17年４月20日・21日に、道路予定地内に12ヶ所のトレンチを設定して確認調査を行った。その結果、第１～10トレンチの大部分は重機による深掘りが行なわれ、遺構・遺物は発見されなかったが、第11トレンチで溝跡と見られる遺構を確認したため、５月24日からこの部分の本調査を実施することとなった。

東西約５ｍ、南北約10ｍの調査区を設定し、重機により耕作土及び盛土層を除去した。現地表下約1.３ｍのⅠ層上面で人力による遺構検出作業と遺構の掘り込みを行った。なお、耕作土及び盛土が崩れやすく安全を確保するため、調査区を各壁から50cmずつ縮小している。

また、５月24日に確認調査の第６トレンチの南側に第13トレンチ、北側に第14トレンチを設定し、堀跡の有無を確定するため追加の確認調査を実施したが、遺構を検出することはできなかった。

測量は、平面図は1/50平板測量、個別遺構は1/20実測、断面図は1/20実測とした。

写真記録は35mmカメラでモノクロームとカラースライドの撮影を行ない、実測を随時行った。

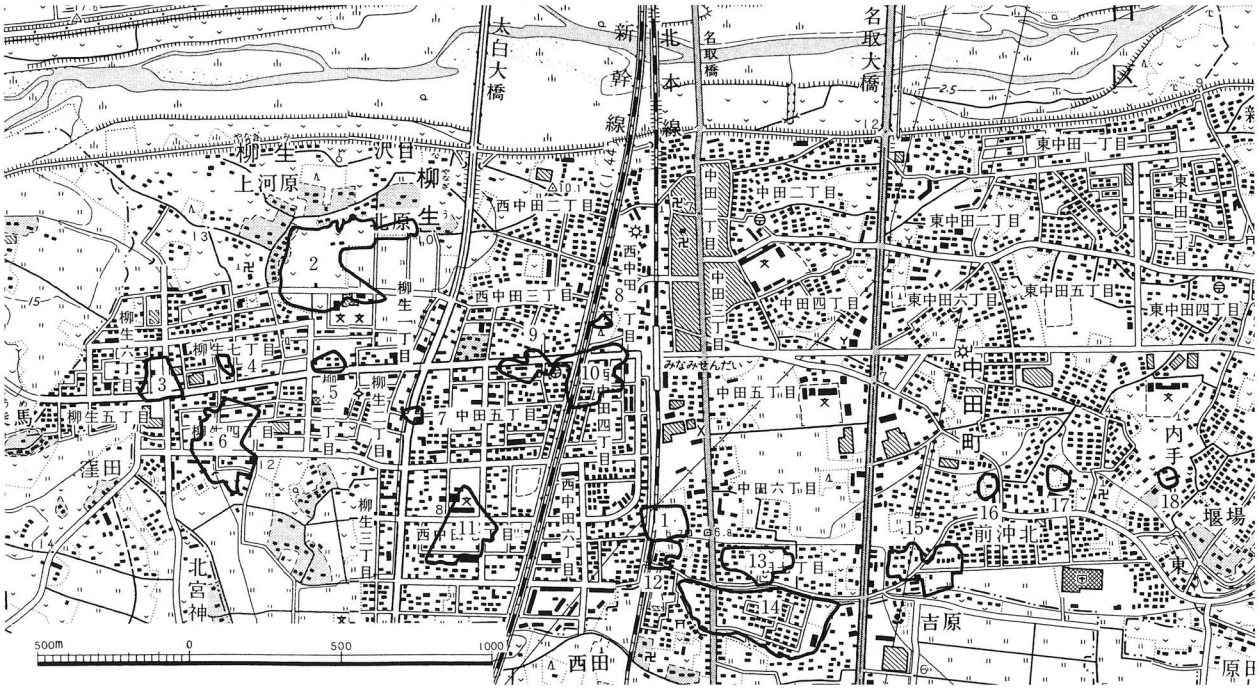
3．遺跡の位置と環境

前田館跡は仙台市の最南端部に位置し、仙台市太白区中田に所在する。JR東北本線「南仙台駅」の南方0.6km、名取川下流域右岸（南岸）、標高８ｍほどの自然堤防上に立地する。遺跡範囲の南側には「壇腰遺跡」のとの境界となる小河川の清水川（清水堀）が東流している。

当該地の周辺はかつて豊かな田園地帯が広がり、米・蔬菜類を栽培する近郊農業地帯として発展してきたが、近年では仙台市街のベッドタウンとして急激に都市化が進行している地域である。

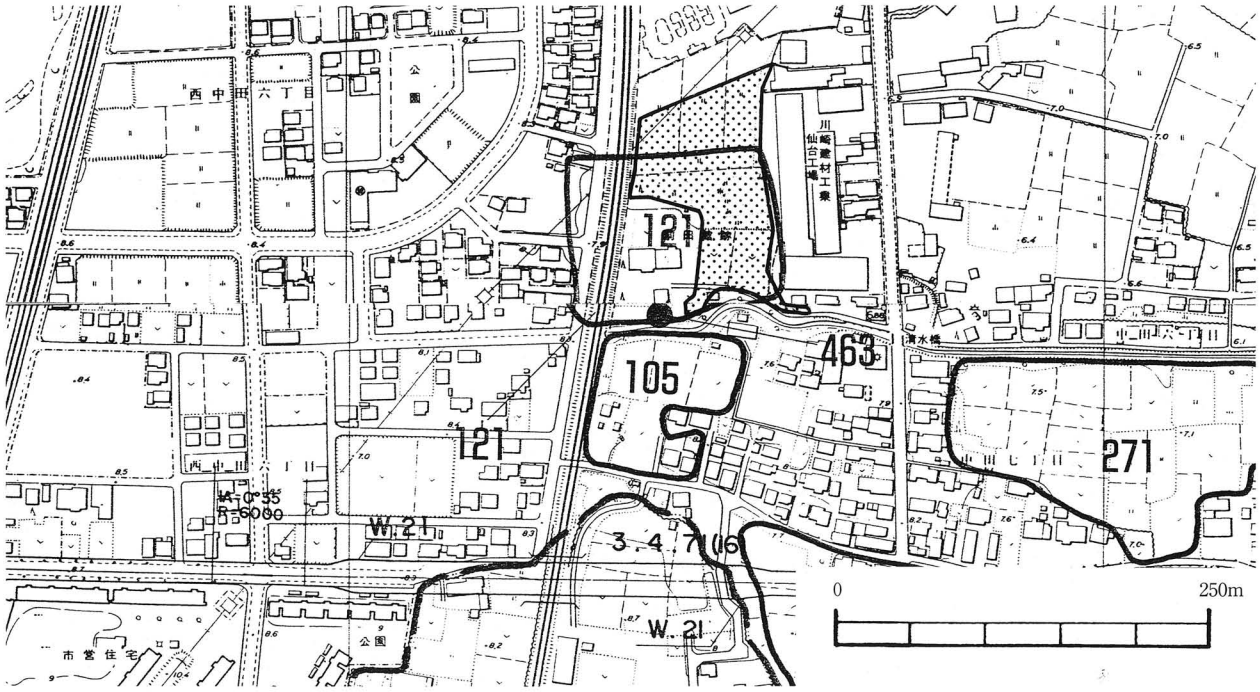
本遺跡は14世紀に佐々木勘解由が居城したと言われる城館跡である。紫桃正隆氏の『史料　仙台領内古城・館第四巻』によれば、二重水濠と土塁に囲まれた270m四方に及ぶ平城形式の屋敷で、周囲は湿原地帯が広がり、大小の湖沼や清水堀の流路などが複雑に入り組んで要害を呈していたとされる。

平成15年（2003）に南に隣接する壇腰遺跡の調査が実施されており、前田館跡の南側を画すると考えられる堀跡を検出している。

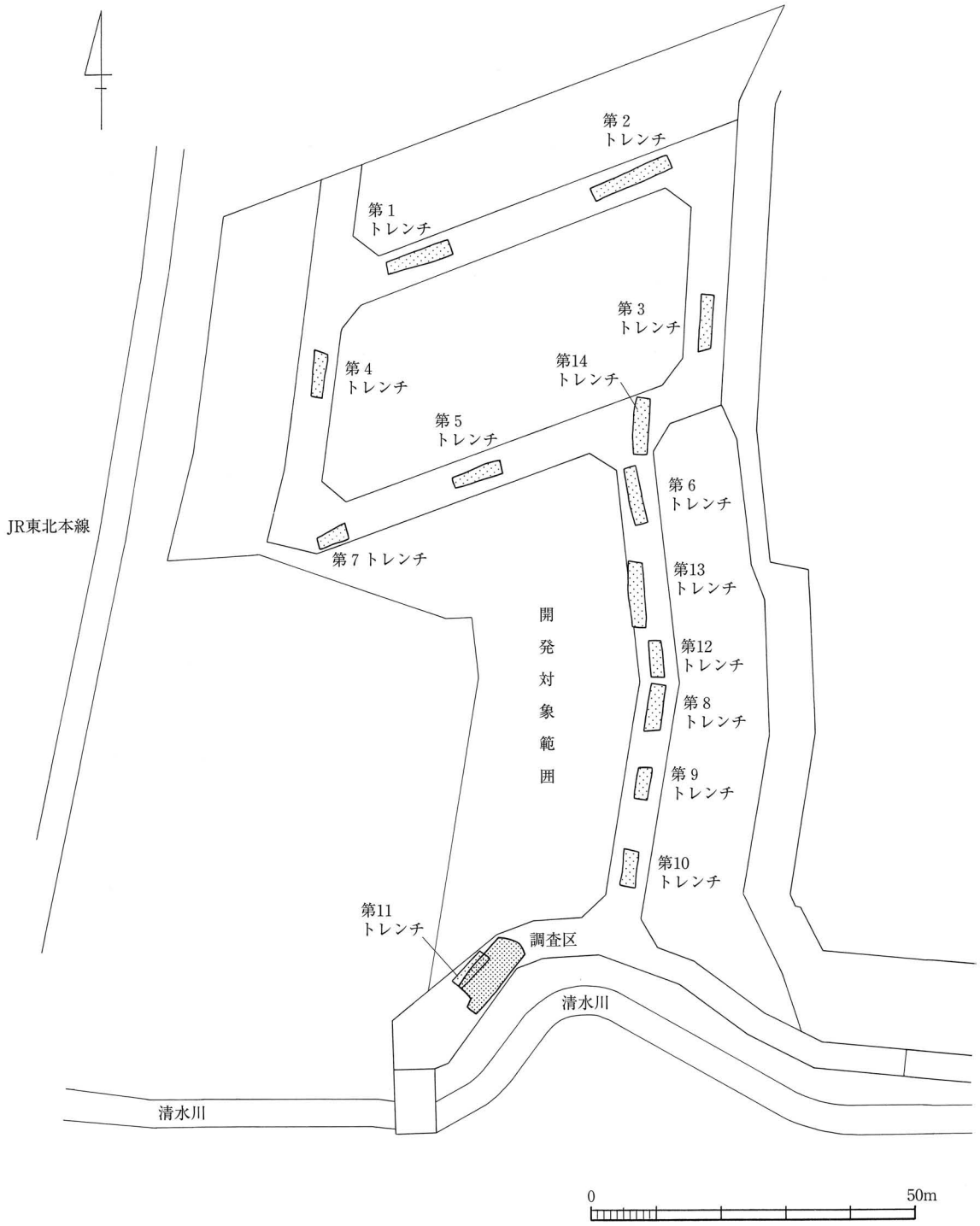


No.	遺跡名	種　別	立　地	年　代	No.	遺跡名	種　別	立　地	年　代
1	前田館跡	城館跡	自然堤防	中世	10	安久東遺跡	集落跡、方形周溝墓	自然堤防	弥生、古墳、古代、中世、近世
2	柳生台畑遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	11	栗遺跡	集落跡	自然堤防	弥生、古墳、古代
3	松木遺跡	集落跡	自然堤防	古代・中世・近世	12	壇腰遺跡	散布地	自然堤防	古代
4	雷遺跡	散布地	自然堤防	古代	13	北遺跡	散布地	自然堤防	古代
5	雷東遺跡	散布地	自然堤防	古代	14	中田南遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	縄文晩、弥生中、古墳、古代、中世
6	関場遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代	15	後川原遺跡	水田跡	自然堤防	弥生、古代、中世、近世
7	谷地田遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代	16	前沖中遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
8	中田神社裏遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代	17	前沖北遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
9	安久遺跡	集落跡	自然堤防	縄文晩、弥生、古代、中世	18	内手遺跡	散布地	自然堤防	古代

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1/25000）



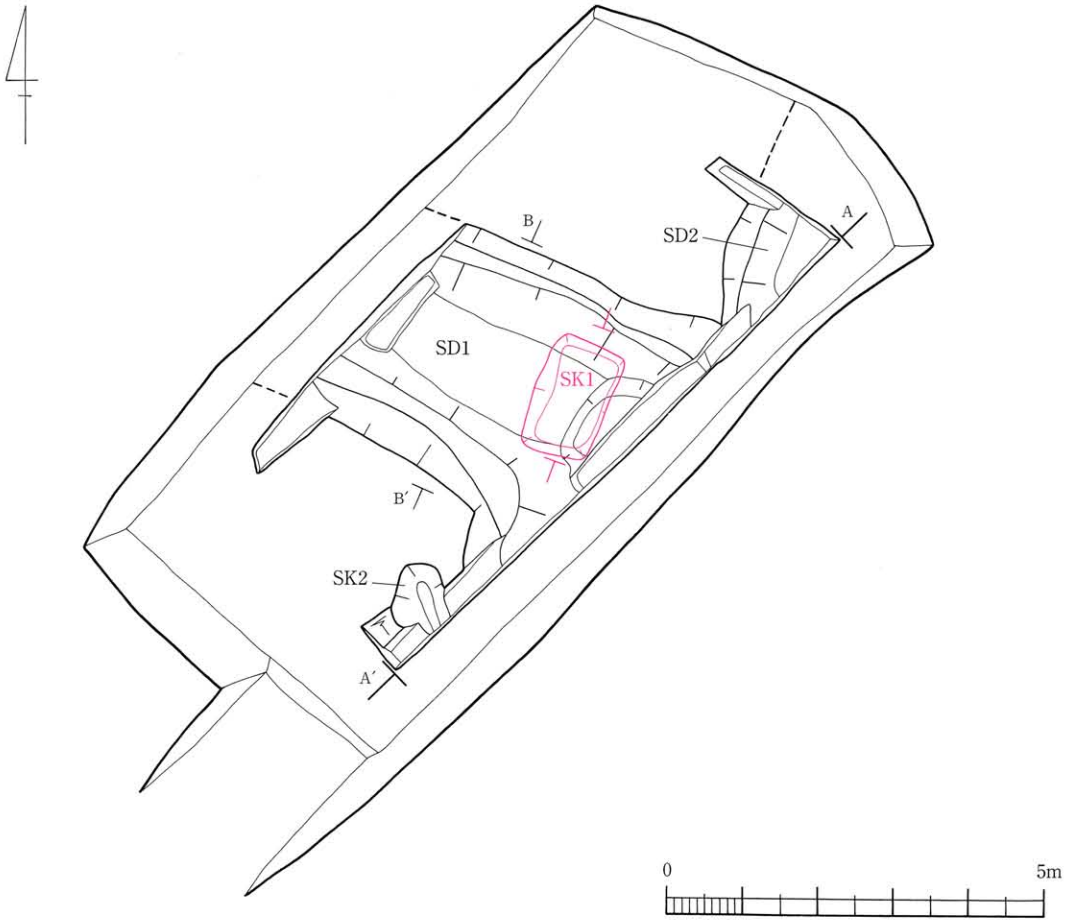
第２図　調査地点の位置（1/5000）



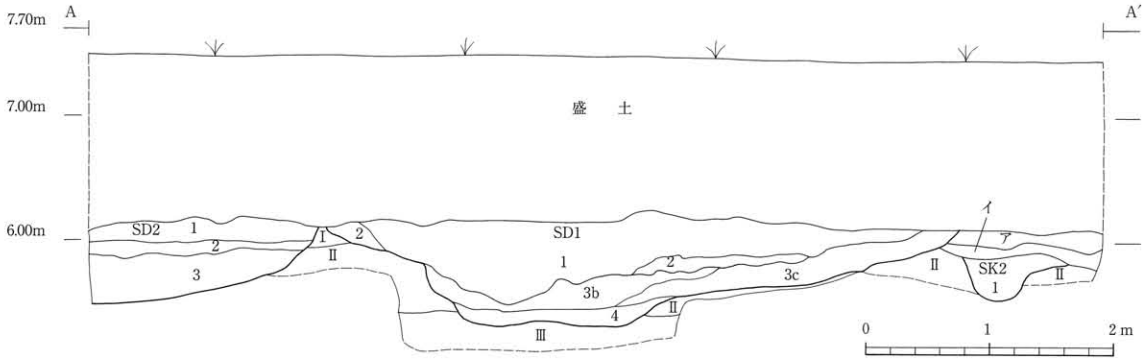
第３図　開発範囲と調査区配置

４．基本層序

畑耕作土及び盛土が約1.3mあり、その下に旧表土（Ⅰ層）がある。調査区で確認した基本層は大別３層に分けられる。調査区の中央で確認したSD１溝跡の北側と南側ではⅠ・Ⅱ層の厚さに違いが見られる。なお、調査区のほぼ全域にわたって、酸化鉄が集積している。



第４図　遺構配置図



遺構名	層位	土　色	土　質	備　考
基本層序	Ⅰ層	10YR6/3　にぶい黄橙色 10YR4/2　黒褐色 10YR2/1　黒色	粘土 粘土　の互層 粘土	全体に酸化鉄を含む。 層圧はSD1の北では60cm以上、南では10cm以上。
	Ⅱ層	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂	SD1の南では10YR6/4にぶい黄橙色の砂と互層。 全体に酸化鉄を含む。
	Ⅲ層	10YR6/4　にぶい黄橙色	粘土	上面は全体に酸化鉄を含む。
		5Y3/1　オリーブ黒色	粘土の互層	下面はグライ化。

遺構名	層位	土　色	土　質	備　考
SD2	1層	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	炭化物粒を含む。
	2層	10YR4/1　褐灰色	粘土質シルト	全体に酸化鉄を含む。
	3層	5YR3/1　オリーブ黒色	粘土	上部に酸化鉄を含む。
SK2	1層	2.5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	下面にⅡ層の砂を含む。
	ア	5Y5/2　灰オリーブ色	砂	酸化鉄の層を含む。イの層を巻き込んでいる。
	イ	5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	全体に酸化鉄を含む。

第５図　南東壁断面図

Ⅰ層　　にぶい黄橙色粘土、灰黄褐色粘土、黒色粘土の互層。層厚はSD１溝跡の北側で約60cm、南側で約10cm。全体に酸化鉄粒を含む。

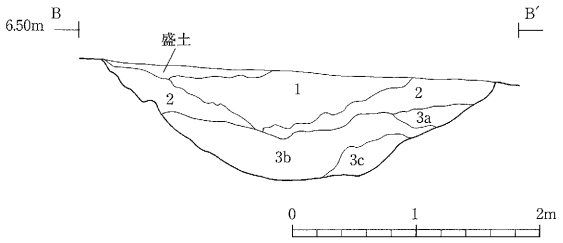
Ⅱ層　　にぶい黄褐色砂。層厚はSD１溝跡の北側で約25cm、南側で約55cm。全体に酸化鉄粒を含む。

Ⅲ層　　にぶい黄橙色粘土、オリーブ黒色粘土の互層。層厚は30cm以上。上面は全面に酸化鉄粒を含み、下面はグライ化している。

５．発見遺構と出土遺物

１）溝跡

SD１溝跡　【位置・重複】調査区中央部で検出した。SK１土坑に切られている。【方向・幅】全体の方向はほぼ東西方向である。検出された溝の全長は約4.2m、幅は検出面で3.2m前後、底面で1.2m前後である。調査区南東端で南方に広がっているが、清水川（清水堀）がすぐ東を流れており、調査区を拡張することができなかった。このためSD１溝跡が広がっているのか、南に向かって曲がっているのかを確定することはできなかった。【深さ・断面形】検出面からの深さは90cm程である。断面形はゆるやかなＵ字形を呈する。【堆積土・出土遺物】堆積土は大別３層・細別６層に分けられる。１層はにぶい黄褐色シルト質粘土、２層は黒褐色粘土、３a層は黒褐色粘土、３b層はオリーブ黒色粘土、３c層はオリーブ黒色粘土、４層は灰色砂とオリーブ黒色粘土の互層である。１層は人為的に埋め戻された土である。３a～３c層・４層は水成堆積層で、３a層はベルト付近の南側、４層は調査区南東端の溝の落ち込み部分でのみ確認した。１・２層の中層には酸化鉄の集積した層があり、しまりが強い。ある時点での地下水位を示している可能性が考えられる。出土した遺物については第１表の通りである。この内、図化できたものは底部に回転糸切り痕の見られる赤焼土器D－１（第７図１）、美濃焼の小型灰釉埦I－１（第７図２）、龍泉窯系の青磁の碗J－１（第７図４）、石鉢K－１（第７図５）、砥石K－２（第７図６）、磨面のある礫K－３（第７図７）、木片L－1（第７図９）、漆器の椀L－２（第７図10）、板状の木製品２点L－３・４（第７図11・12）、刀子N－１（第７図13）、釘と見られる金属製品N－２（第７図14）である。また、４月20・21日に実施した確認調査では11トレンチでSD１溝跡を確認しており、遺物は１層からロクロ使用の土師器の甕の破片４点、３層から茶臼１点・陶器片１点が出土している。確認調査の１層は本調査の１層に、３層は３b層に対応している。この内、図化できたものは在地産と見られる無釉の陶器の鉢I－２（第７図３）、茶臼の上臼K－４（第７図８）である。

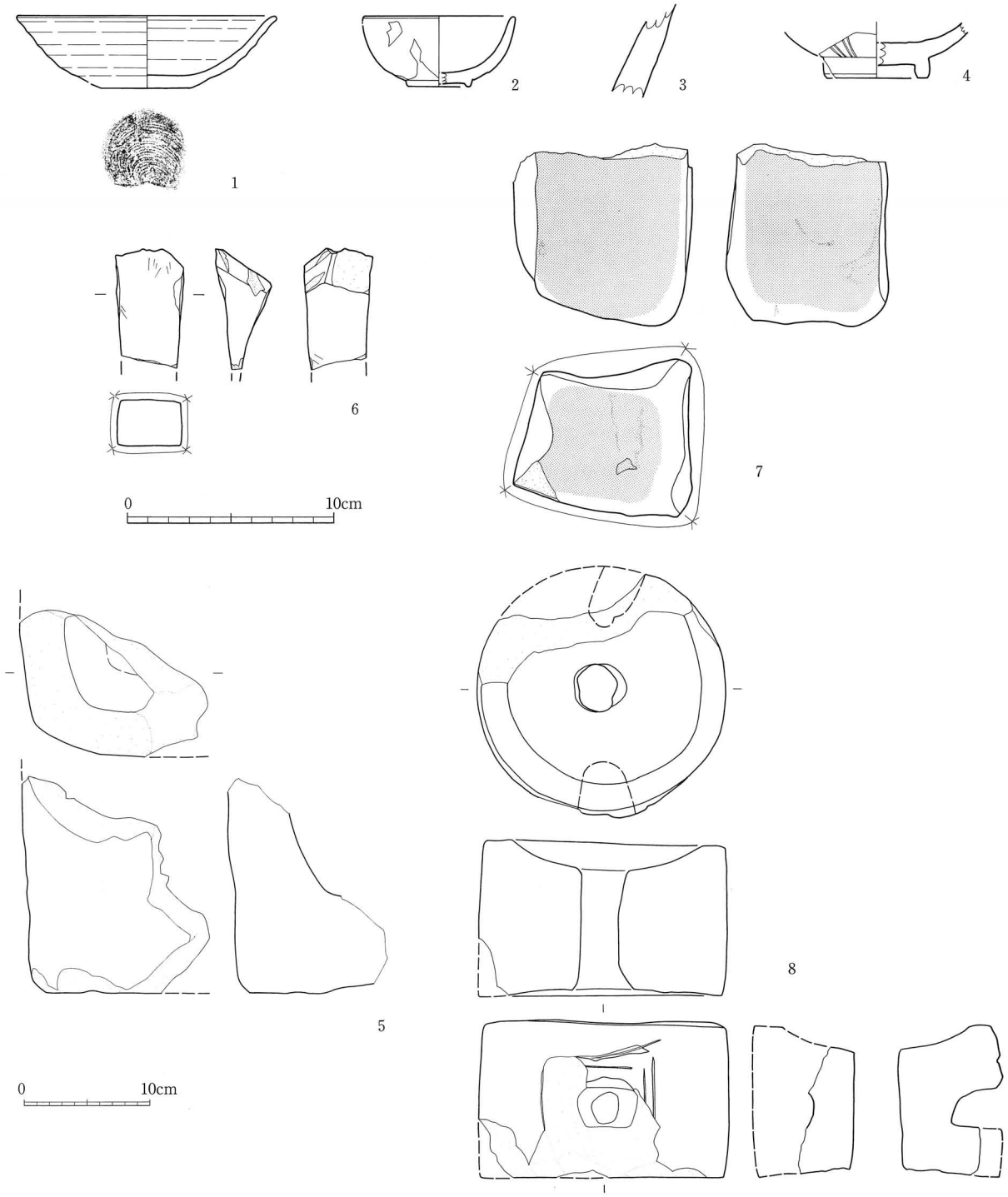


層位	土　色	土　質	備　考
1層	10YR5/3にぶい黄褐色	シルト質粘土	2層のブロックを含む。全体に酸化鉄を含む。中層に酸化鉄の集積層が見られる。
2層	10YR2/2　黒褐色	粘土	全体に酸化鉄を含む。中層に酸化鉄の集積層が見られる。
3a層	2.5Y3/1　黒褐色	粘土	10YR5/2灰黄褐色　粘土のブロックを巻き込むように含む。
3b層	5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	上面に植物遺体を多量に含む。
3c層	5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	10Y4/1灰色　粘土のブロックを巻き込むように含む。
4層	7.5Y4/1　灰色	砂	調査区南東端の落ち込み部分でのみ確認。
	5Y3/1　ｵﾘｰﾌﾞ黒色	粘土の互層	

第６図　SD1溝跡断面図（1/60）

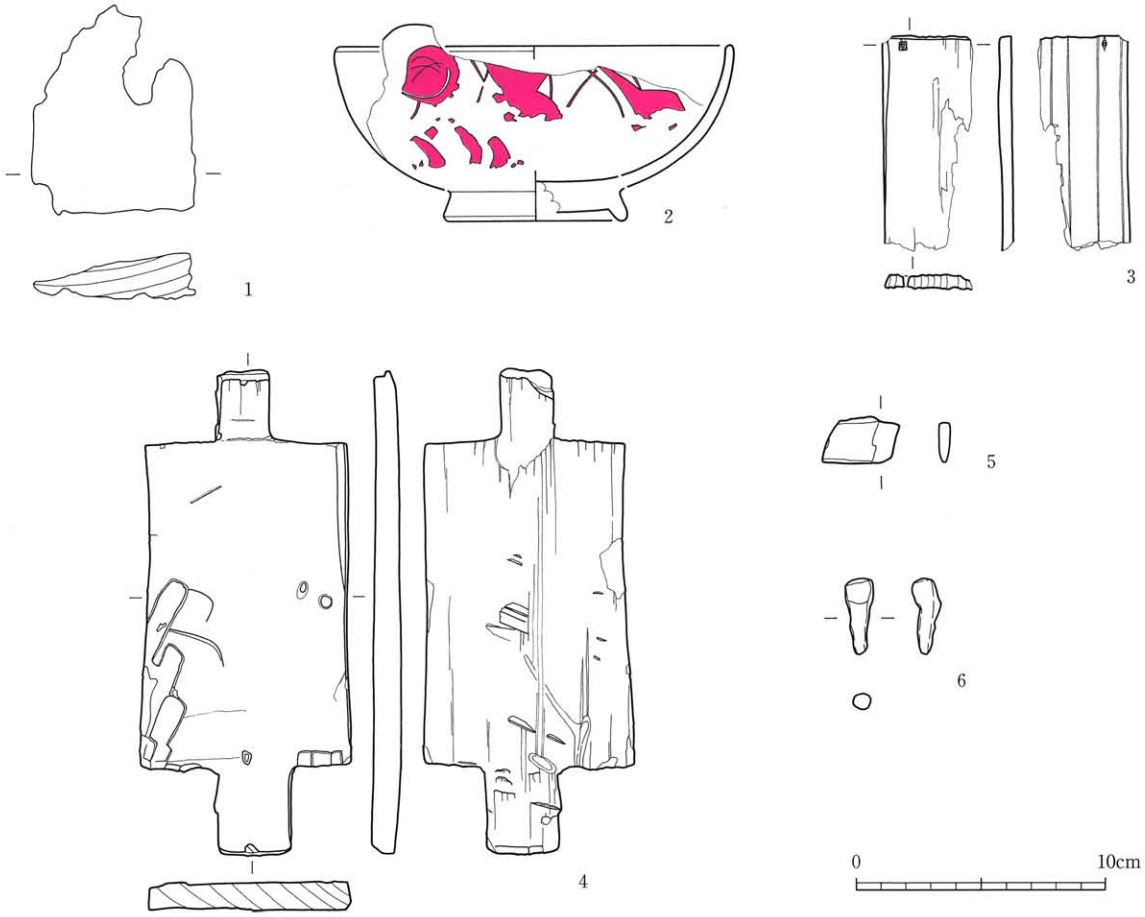
	土師器	須恵器	赤焼土器	磁　器	陶　器	鉄製品	礫	石製品	木製品	骨	計
１　層	52	10	3					1			66
２　層	32	4			1	4	4	1	1		47
３ｂ層	9	2		1			1	0	4	6	23
計	93	16	3	1	1	4	5	2	5	6	136

第１表　SD1溝跡出土遺物一覧



図中番号	登録番号	出土地点				分類		法量				特徴・備考（調整・素材・産地・時期・分類）	写真図版
		基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重		
1	D-1		SD-1	1層	11	赤焼土器	坏	3.5	(12.5)		4.2	外面・内面ロクロ調整　底部回転糸切り	5−1
2	I-1		SD-1	2層	10	陶器	椀	3.4	(7.4)		(3.1)	灰釉　内外面目跡あり　美濃18C	5−2
3	I-2		SD-1	3層	29	陶器	鉢					無釉　在地？　13〜14C	5−3
4	J-1		SD-1	3b層	30	磁器	碗	(2.7)			5.2	青磁　外面：蓮弁紋？高台内鉄釉　内面：見込　無釉　中国龍泉窯系14C	5−4
5	K-1		SD-1	1層	18	石製品	石鉢	(17.2)	(14.9)	(11.7)	2250		5−6
6	K-2		SD-1	2層	10	石製品	砥石	(5.8)	3.3	2.2	45	砥面5面	5−7
7	K-3		SD-1	2層	17	礫石器	磨面のある礫	(8.8)	8.6	7.7	910	自然石利用	5−8
8	K-4		SD-1	3層		石製品	茶臼上臼	12.5	19.8		3450	孔径4.0cm　2つ孔が穿たれている	6−9

第７図　SD1溝跡出土遺物１



図中番号	登録番号	出土地点				分類		法量				特徴・備考（調整・素材・産地・時期・分類）	写真図版
		基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重		
1	L-1		SD-1	2層	10	木製品	板材	(8.4)	(6.5)	(1.8)			5－9
2	L-2		SD-1	3b層	19	木製品	漆器椀				7.0	外面：黒漆のち朱漆模様　内面：漆塗り　焦げ痕あり　変形につき法量不明	5－10
3	L-3		SD-1	3b層	19	木製品	板材	(8.5)	(3.6)	0.5		釘穴あり？	5－11
4	L-4		SD-1	3b層	19	木製品	板材	19.4	8.4	1.0		焦げ痕あり	6－1
5	N-1		SD-1	2層	10	金属製品	刀子	(3.2)	(1.1)	0.5			6－3
6	N-2		SD-1	2層	10	金属製品	釘？	(3.1)	(0.7)	(0.6)			6－4

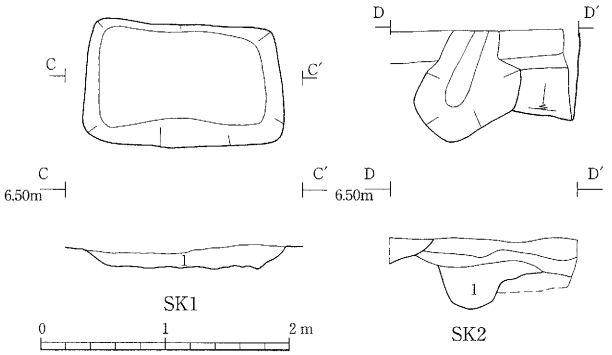
第８図　SD1溝跡出土遺物２

SD２溝跡　【位置・重複】調査区の東隅で溝跡の一部を検出した。【方向・幅】方向はほぼ南北方向である。検出部の全長は約2.0m、幅は検出面で1.3m以上、底面で0.5m以上である。【深さ・断面形】検出面からの深さは65cm以上である。断面形はゆるやかなＵ字形と推定される。【堆積土・出土遺物】堆積土は３層に分けられる。１層は黒褐色粘土質シルト、２層は褐灰色粘土質シルト、３層はオリーブ黒色粘土である。遺物は３層から土師器片が４点出土しており、ロクロを使用し内面黒色処理されたものが含まれている。

２）土坑

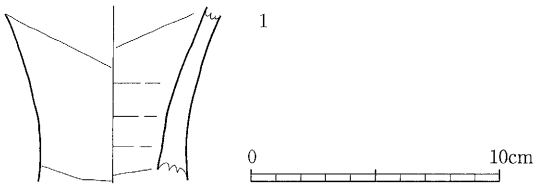
SK１土坑　【位置・重複】調査区中央東側で検出した。SD１溝跡を切っている。【平面形・大きさ】平面形は長方形で長軸160cm、短軸100cmを測る。【深さ・断面形】深さは18cmで、断面形は逆台形である。【堆積土・出土遺物】堆積土は黒褐色土の粘土質シルトである。遺物は土師器片３点、須恵器片３点、土師質土器片１点、陶器片１点、磁器片１点が出土している。この内、図化することができたのは古瀬戸の小型の瓶（または水注）の破片J－２（第９図１）である。

SK２土坑　【位置・重複】調査区中央東端で検出した。他の遺構との重複はないが、調査区断面の観察からSD１溝跡より古い遺構と考えられる。【平面形・大きさ】平面形は長方形で長軸100cm以上、短軸70cm以上である。【深さ・断面形】深さは18cmで、断面形はU字形である。【堆積土・出土遺物】堆積土は黒褐色土の粘土である。遺物は土師器片２点、須恵器片１点、使用痕のある礫１点が出土している。



遺構名	層位	土　色	土　質	備　考
SK1	1層	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	10YR3/4粘土質シルトの小ブロックを含む。
SK2	1層	2.5Y3/1　黒褐色	粘土	下面に基本層のⅡ層の砂を含む。

第９図　土坑実測図（1/60）



図中番号	登録番号	出土地点				分　類		法　量				特徴・備考（調整・素材・産地・時期・分類）	写真図版
		基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重		
1	J-2		SK-1	1層	4	磁器	瓶？					小型の瓶か水注の頸部　古瀬戸　13～15C	5－5

第10図　SK1土坑出土遺物

３）出土遺物

調査区上面の精査中に土師器片・須恵器片が出土している。摩滅が著しく調整痕跡の観察できないものが多いが、内面黒色処理されているものや、ロクロ調整の確認できる土師器片も見られる。

６．まとめ

①　今回の調査は遺跡の南端部で実施した。

②　調査を実施した深さ約2.4mまでの地層は大別３層に分けられた。

③　今回の調査では溝跡２条、土坑２基を確認した。

④　SD１溝跡は14世紀以降のものと見られ、遺跡の南側を画する堀跡と考えられる。約60m南には壇腰遺跡で確認された堀跡があり、館跡を囲んでいた二重水濠を形成する可能性がある。堀跡は少なくとも18世紀までは機能しており、その後人為的に埋め戻されたものと考えられる。

⑤　SD２溝跡は、出土遺物から古代以降の溝跡と考えられるが、詳細については不明である。

⑥　土坑は、SK１土坑はSD１溝跡を切っていることから比較的新しい時期、SK２土坑は平安時代以降の遺構と考えられる。

＜参考・引用文献＞

渡部弘美（2004）：「壇腰遺跡　発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第277集　仙台市教育委員会

紫桃正隆（1974）：『史料　仙台領内古城･館』第四巻　宝文堂

1　調査区全景（西より）

2　調査区全景（北西より）

図版１　前田館跡全景

1　南東壁断面①（北西より）

2　南東壁断面②（北西より）

3　南東壁断面③（北西より）

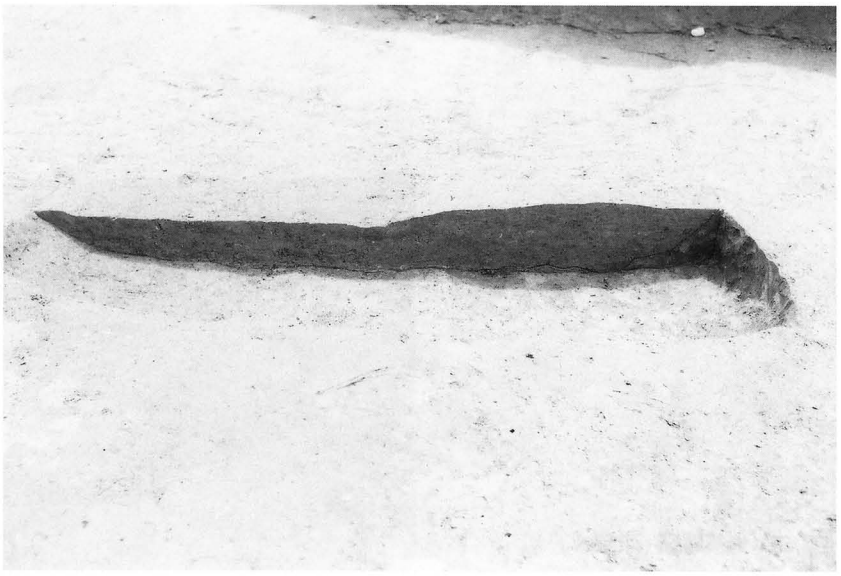
図版２　調査区南東壁断面

1　SD1遺構断面（北西より）

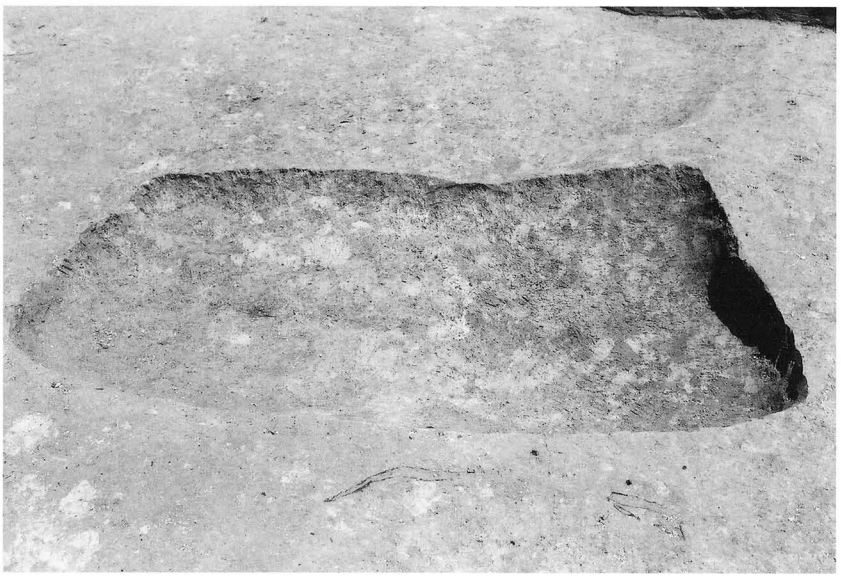
2　SD1溝跡（北西より）

3　SD1、2溝跡（南西より）

図版３　溝跡（SD１・２）



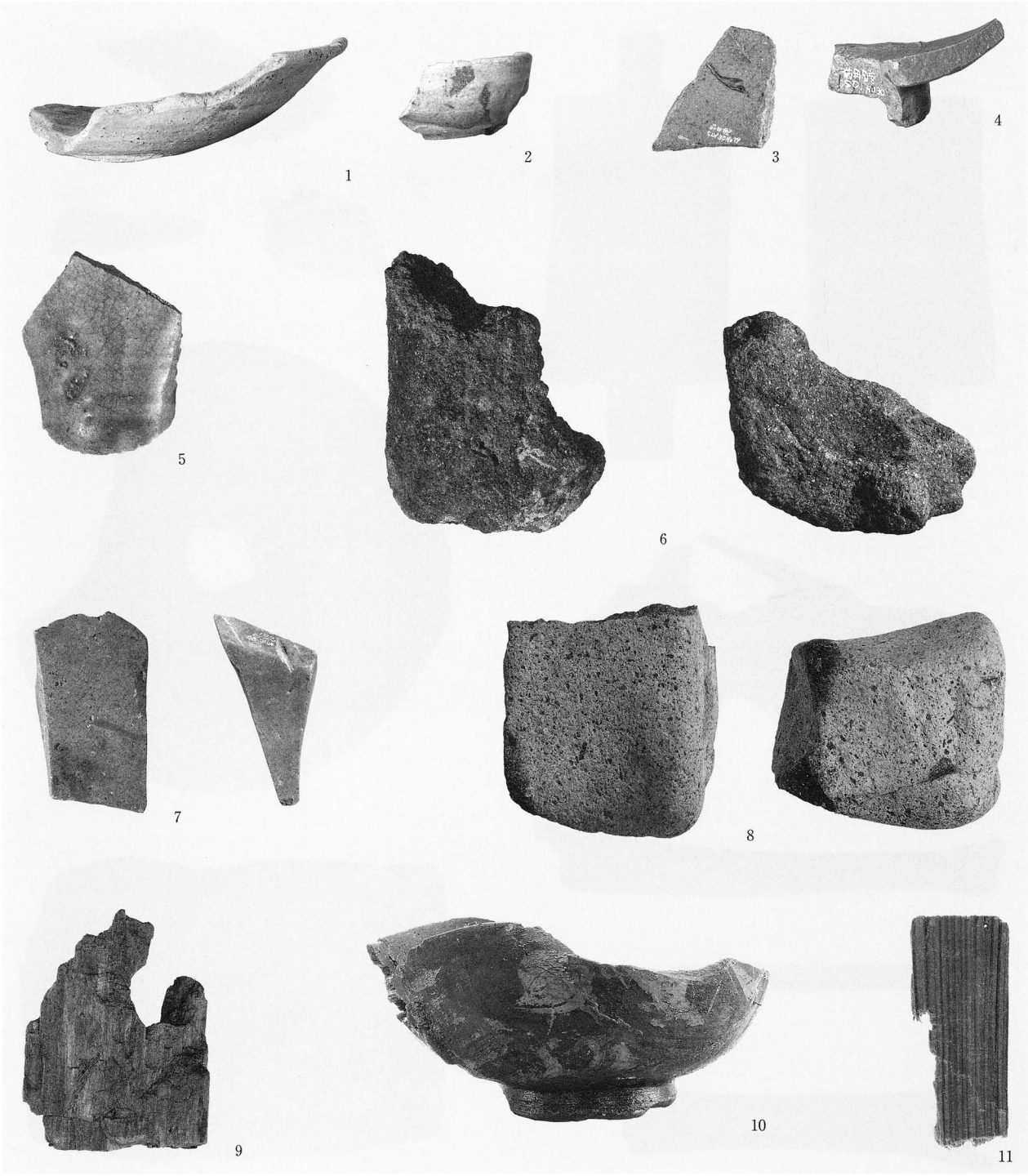
1　SK1土坑断面（北西より）



2　SK1土坑（北西より）

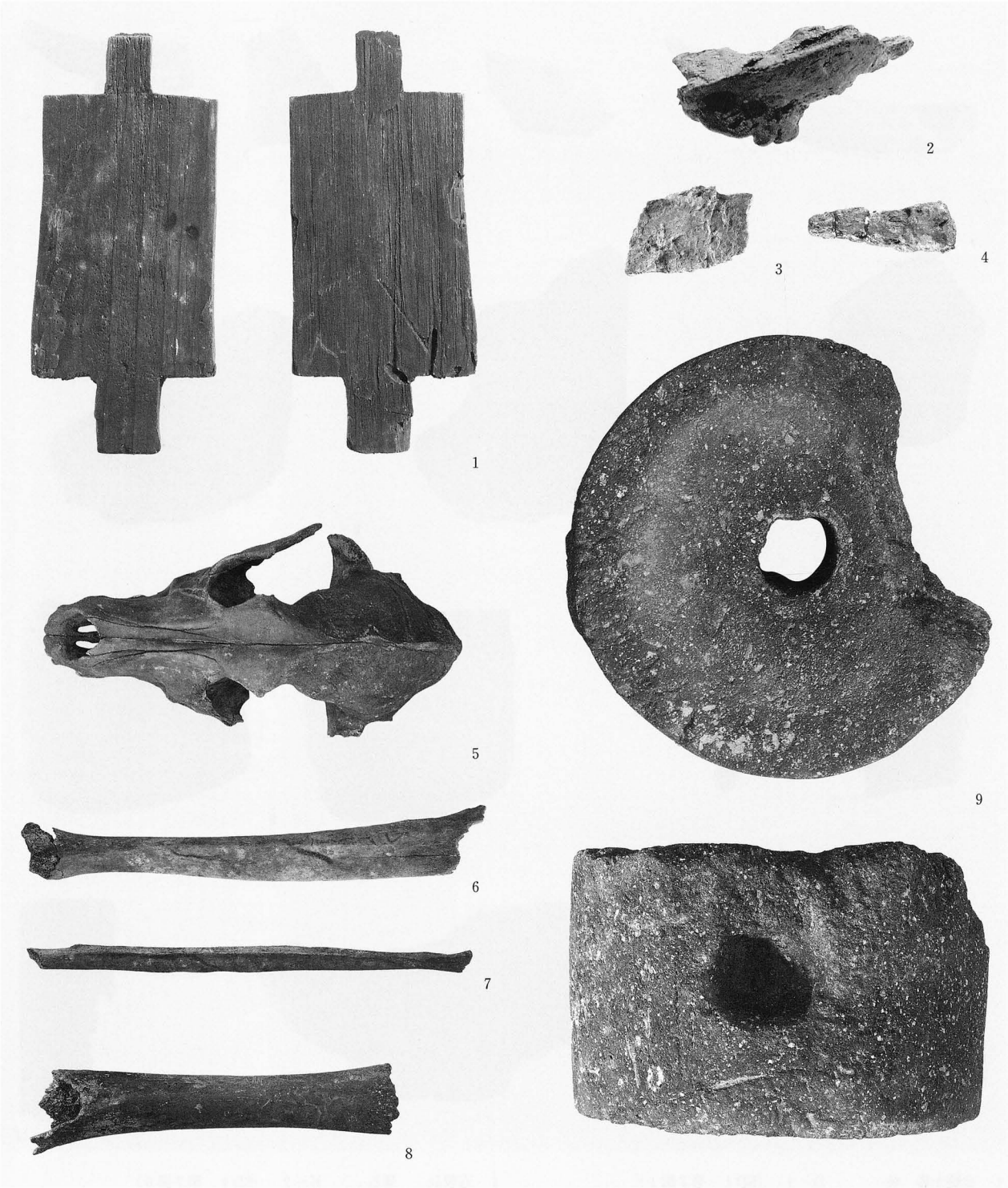
3　SK2土坑（南西より）

図版４　土坑（SK１・２）



1	赤焼土器	坏	D－1	(SD1	第7図1)
2	陶器	埦	I－1	(SD1	第7図2)
3	陶器	鉢	I－2	(SD1	第7図3)
4	磁器	碗	J－1	(SD1	第7図4)
5	磁器	瓶か水注	J－2	(SK1	第10図1)
6	石製品	石鉢	K－1	(SD1	第7図5)
7	石製品	砥石	K－2	(SD1	第7図6)
8	石製品	礫	K－3	(SD1	第7図7)
9	木製品	板材	L－1	(SD1	第8図1)
10	木製品	漆器椀	L－2	(SD1	第8図2)
11	木製品	材	L－3	(SD1	第8図3)

図版5　前田館跡出土遺物1



1	木製品	材	L－4	(SD 1	第8図12)
2	木製品	漆器椀	L－5		
3	金属製品	刀子	N－1	(SD 1	第8図5)
4	金属製品	釘？	N－2	(SD 1	第8図6)
5	獣骨		Q－1	(SD 1)	
6	骨		Q－2	(SD 1)	
7	骨		Q－3	(SD 1)	
8	骨		Q－4	(SD 1)	
9	石製品	石臼	K－4	(SD 1	第7図8)

図版6　前田館跡出土遺物2

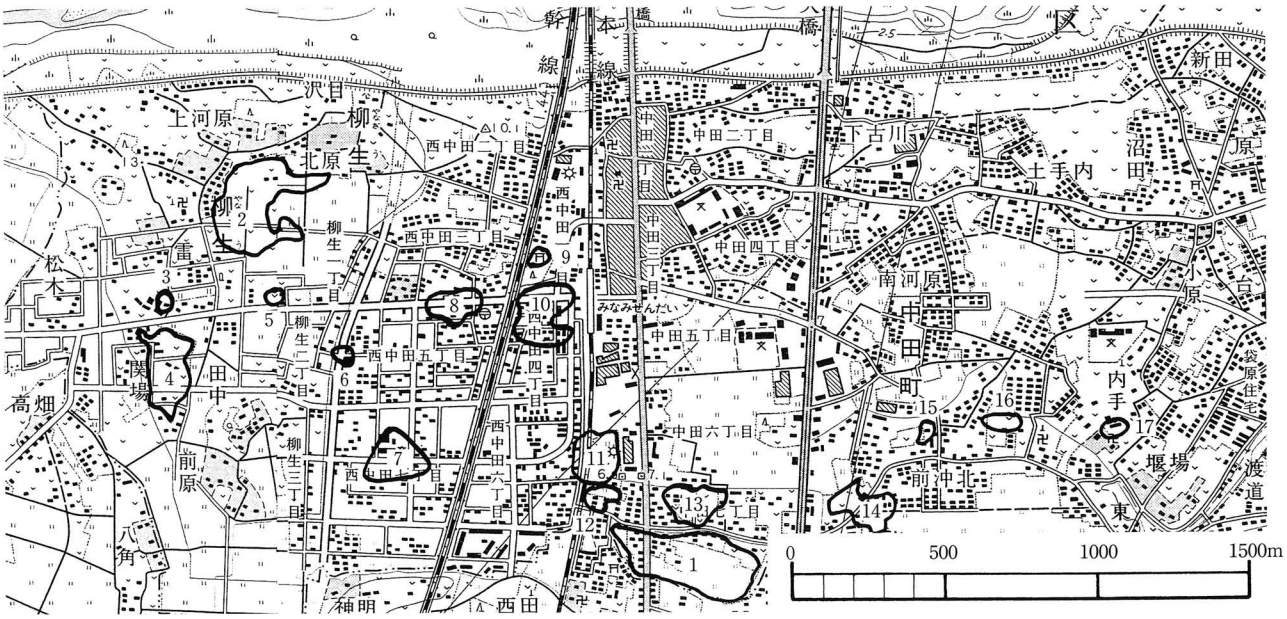
Ⅱ　中田南遺跡第３次発掘調査報告書

１．調査要項

遺　跡　名	中田南遺跡（宮城県遺跡番号01272）
調 査 地 点	仙台市太白区中田７丁目226－17、225－10、230－６・７
調 査 期 間	平成17年６月22日～６月30日
調査対象面積	63㎡
調 査 面 積	21㎡
調 査 原 因	個人住宅建築
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	文化財教諭　　浅野克樹　　三塚博之

２．調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成17年６月７日付けで石井浩秋氏より軽量鉄骨２階建て個人住宅の建築に伴う発掘届が提出されたことに基づいて調査を行った。当該区は中田南遺跡の南東部に位置し、平成４年度に行われた第１次調査のⅣ区拡張部分にあたり、Ⅳ層の上面で中世の堀跡と見られる遺構を確認していた場所である。この調査結果に基づき建物予定地に東西７ｍ・南北３ｍの調査区を設定し、重機により盛土部分からⅡ層までを掘り下げ、Ⅲ層上面（標高約6.5m）で手掘りによる遺構検出作業を行った。



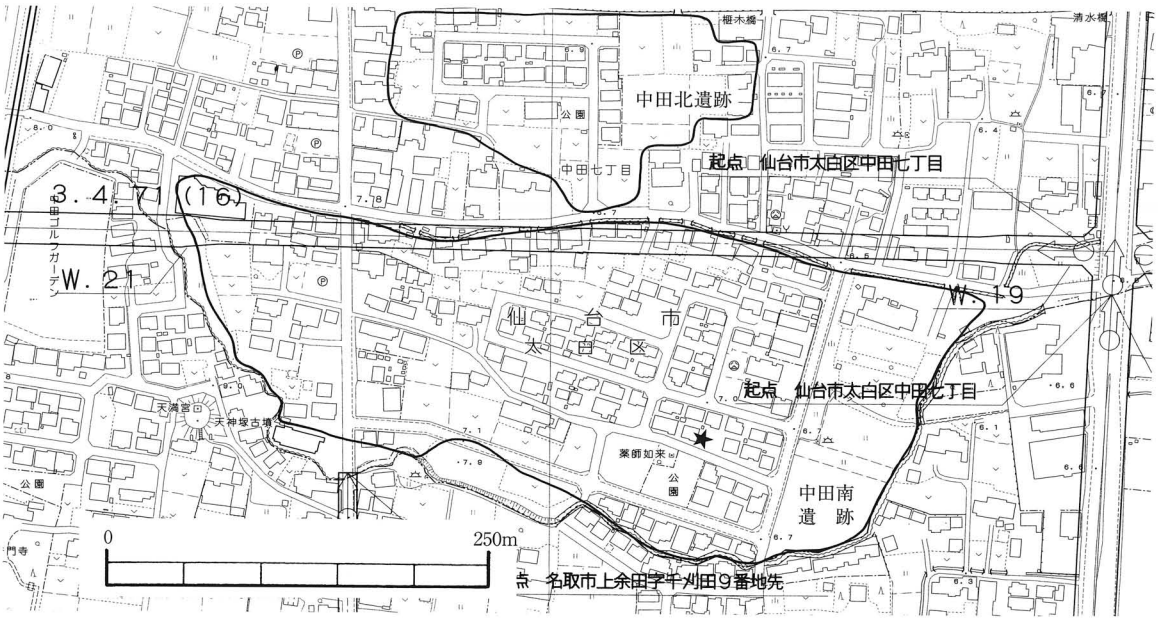
No.	遺跡名	種　別	立　地	年　代
1	中田南遺跡	集落・屋敷跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世
2	松木遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安・中世・近世
3	雷遺跡	散布地	自然堤防	平安
4	関場遺跡	散布地	自然堤防	古墳・奈良～平安
5	雷東遺跡	散布地	自然堤防	平安
6	谷地田遺跡	散布地	自然堤防	古墳・奈良～平安
7	栗遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安
8	安久遺跡	集落跡	自然堤防	奈良・平安
9	中田神社裏遺跡	散布地	自然堤防	古墳・平安
10	安久東遺跡	集落跡他	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安・近世
11	前田館跡	城館	自然堤防・後背湿地	中世
12	壇腰遺跡	散布地	自然堤防	奈良～平安
13	中田北遺跡	散布地	自然堤防	奈良～平安
14	後河原遺跡	官衙関係・水田跡	自然堤防	弥生・平安・中世・近世
15	前沖中遺跡	散布地	自然堤防	古墳・奈良～平安
16	前沖北遺跡	散布地	自然堤防	古墳・奈良～平安
17	内手遺跡	散布地	自然堤防	奈良～平安

第11図　遺跡の位置と周辺の遺跡

3．遺跡の位置と環境

中田南遺跡は、仙台市の南東部、JR南仙台駅の南0.8kmに位置し、遺跡の南側には名取市が接する。名取川やその支流によって形成された標高７～８ｍ前後の自然堤防上に立地している。遺跡の広がりは東西500m、南北200mである。周辺の遺跡には前田館跡、壇腰遺跡、中田北遺跡、上余田遺跡などがある。この他にも名取川下流域南岸部には多くの遺跡があり、古くより人類の生活が営まれてきた地域である。

発掘調査は、平成４年から行われており、古墳時代から中世にかけての遺構が多数確認されている。竪穴住居跡は古墳時代後期３軒・古墳時代末から奈良時代30軒前後、平安時代２軒、掘立柱建物跡は、古墳時代末から奈良時代２棟以上、平安時代４棟以上などが確認されている。他にも平安時代の鍛冶遺構、中世の井戸跡、屋敷を囲む堀跡、火葬墓などが発見されている。遺物では縄文時代晩期までさかのぼる土器も出土している。奈良時代の遺構からは、銅の鋳造用の土器などが出土しており、東日本において８世紀に銅鋳造が行われたことを示す貴重な発見がされている。また、中世の屋敷跡や堀跡、溝跡からは土師質土器皿や陶磁器なども出土している。



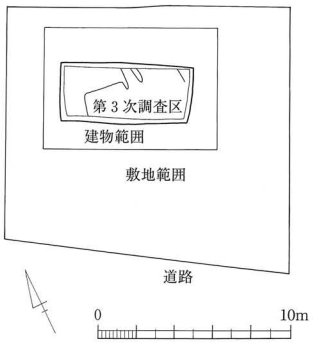
第12図　調査地点の位置

4．基本層序

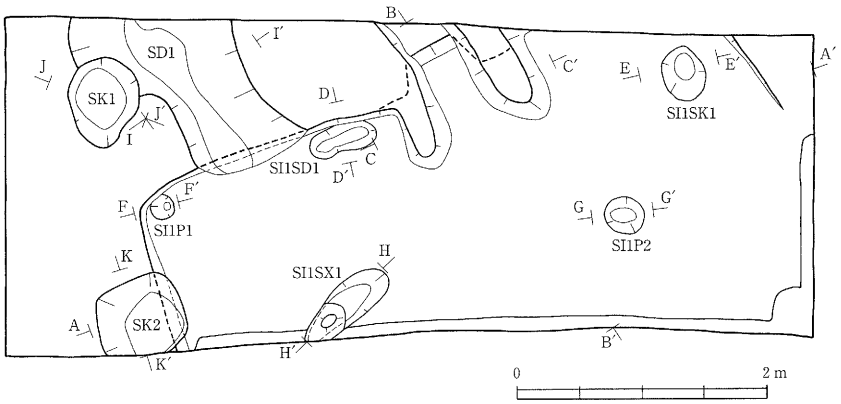
Ⅰ層：オリーブ黒色シルト　　第１次調査の埋め戻しの土である。

Ⅱ層：暗褐色シルト　　褐色土の小ブロックを含む。下面に乱れがみられる。第１次調査のⅢb層に相当すると思われる。

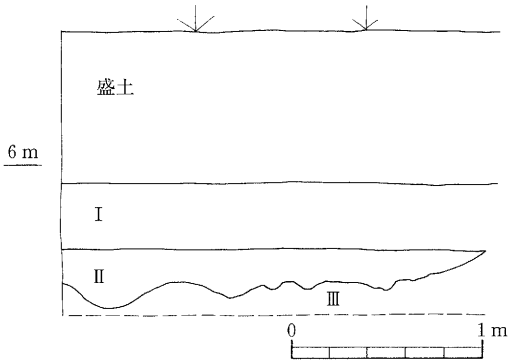
Ⅲ層：褐色砂質シルト　　自然堆積層。第１次調査のⅣ層に相当すると思われる。



第13図　調査区配置図



第14図　遺構実測図



第15図　北壁土層断面図

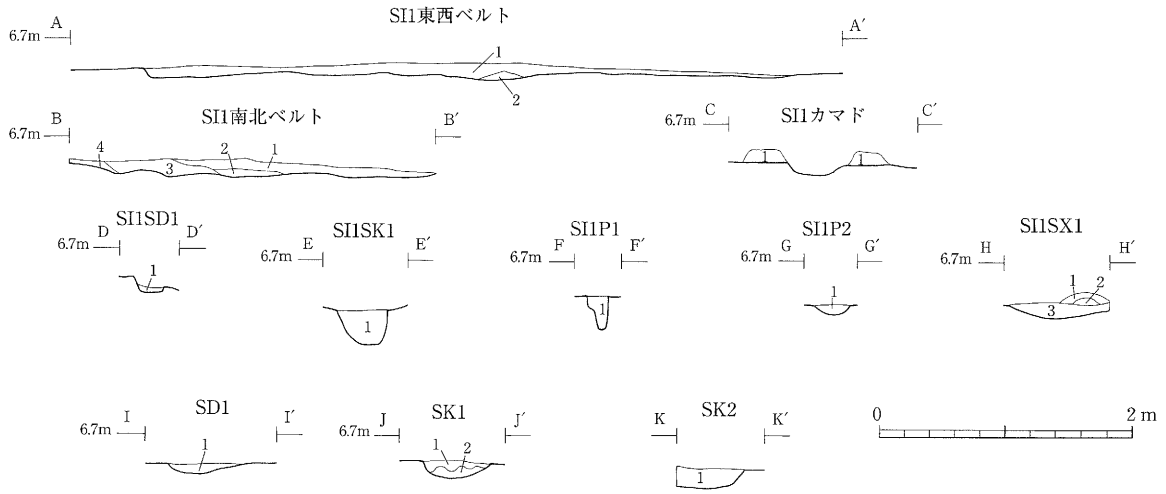
層位	土　色	土　質	備　考
Ⅰ	5Y3/2　オリーブ黒色	シルト	第１次調査の埋め戻しの土
Ⅱ	10YR3/3　暗褐色	シルト	褐色土の小ブロックを含む　下面に乱れがみられる 第１次調査のⅢb層に相当すると思われる
Ⅲ	10YR4/6　褐色	砂質シルト	自然堆積層　第１次調査のⅣ層に相当すると思われる

５．発見遺構と遺物

Ⅲ層上面で遺構の検出作業を行い、竪穴住居跡１軒・溝跡１条・土坑２基を検出した。

１）竪穴住居跡

SI１竪穴住居跡　調査区中央で北半を確認した。南半は調査区の外に延びている。北壁の東半が削平を受けているが東壁がかすかに検出されたため、平面形は方形もしくは長方形を呈するものと推察される。住居の北辺は約５m、南北軸長は検出部分で約2.7mである。第１次調査のⅣ区拡張区で検出した竪穴住居と同一である。全体的に削平が著しく、検出面から床面までの深さは０～10cmである。住居廃絶後の残存する堆積層は１層である。住居の中央部分に堅くしまった貼り床が見られたが湧水により精査中に消失し、範囲を記録することはできなかった。遺物としては、土師器片13点、須恵器片２点が出土している。カマドは北壁に造られている。中央よりやや東によって位置し、調査区外に延びているため確認できないが、幅約35cmの煙道が住居の外に延びている。煙道の方向は磁北とほぼ一致している。カマド本体は、両袖の下端部分が幅約10cm残っており、北壁からカマド袖部の先端まで約60cm、両袖の外側で約120cm・内側で30cmを測る。カマド内からは支脚に使用したと思われる長さ11.4cm、幅4.9cm、厚さ4.5cmの石が見つかっている。また、カマド西側の北壁で周溝の一部と見られる溝と住居の北東隅で土坑を１基検出している。溝の幅は、約20cmで、床面からの深さは約５cmである。平面形は南北軸約45cm、東西軸約30cmの楕円形を呈する。土坑の深さは約30cmで、断面形はU字形を呈する。柱跡は確認できなかった。ピットは住居の北西隅でP1、北東部でP2を、住居の西部調査区壁際では溝状の落ち込みに粘土が盛り上がったSX１を検出している。遺物はP２から、非ロクロ土師器甕片（C-１）を含む土師器片11点、須恵器片２点、SX１からは土師器片１点が出土している。



SI 1 セクション

層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR2/2　黒褐色	シルト	堆積土　暗褐色砂質シルトの小ブロックを含む
2	10YR3/3　暗褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色砂質シルトの小ブロックを含む
3	10YR3/1　黒褐色	シルト	焼土を多量に含む
4	5Y4/2　灰オリーブ色	シルト	焼土を少量含む

SI 1 カマド

層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂	全体に黒褐色粘土質シルトのブロックを含む 内側に焼土のブロックを少量含む

SI 1 SD 1

層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/2　黒褐色	シルト粘土	にぶい黄褐色砂質シルトのブロックを含む

SI 1 SK 1

層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/3　暗褐色	シルト	にぶい黄褐色砂質シルトの小ブロックを含む

SI 1 SX 1

層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	下層に焼土ブロックを含む
2	10YR3/1　黒褐色	シルト	上層に黄褐色土を少量含む
3	10YR3/3　暗褐色	シルト	しまりが強く、硬い

SI 1 P 1

層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色砂質シルトのブロックを含む

SI 1 P 2

層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	部分的に焼土を含む

SD 1

層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/2　黒褐色	シルト	褐色砂質シルトの小ブロックを多量含む

SK 1

層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/3　暗褐色	砂質シルト	褐色土のブロックをわずかに含む
2	10YR4/4　褐色	シルト質砂	暗褐色土のブロックをわずかに含む

SK 2

層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/2　黒褐色	シルト質砂	褐色土の小ブロックを多量に含む 炭化物を少量含む

第16図　遺構断面図

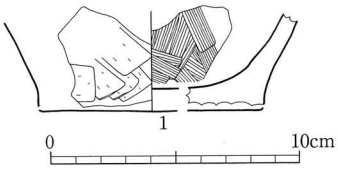
2）溝跡

SD 1 溝跡　調査区の北西部で溝跡の一部を検出した。検出された溝の全長は約1.5mで幅は上面で70～80cm・下面で20～70cmである。深さは８～20cmで、断面形は不定形である。堆積土は１層である。SI 1 竪穴住居跡・SK 1 土坑に切られている。遺物は坏、甕、坏と思われる土師器片10点と須恵器片１点が出土している。

3）土坑

SK 1 土坑　調査区の北西部で検出した。SD 1 溝跡を切っている。平面形は楕円形で長さ75cm、幅55cmを測る。深さは約15cmで、断面形はゆるやかなU字形を呈する。堆積土は２層である。遺物は甕、坏と思われる土師器片３点、坏と思われる須恵器片２点が出土している。

SK 2 土坑　調査区の南西部で検出した。遺構の南端は調査区外に延びているため全体の形状は不明であるが、平面形は方形を呈するものと思われる。規模は長さ70cm、幅65cmである。深さは約15cmで、断面形はゆるやかなU字形を呈する。堆積土は１層である。遺物は出土していない。



図中番号	登録番号	出土地点				分類		法量				特徴・備考（調整・素材・産地・時期・分類）	写真図版
		基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重		
1	C-1		SI1P2	1層		非ロクロ土師器	甕	(4.0)			(9.0)	外面：ヘラケズリ　底面剥離　内面：ヘラナデ	7-1

第17図　出土遺物

6．まとめ

① 本調査区は、平成４年度調査のⅥ区拡張部分にあたり、以前確認していた竪穴住居跡・溝跡１条・土坑２基と思われる遺構を調査した。

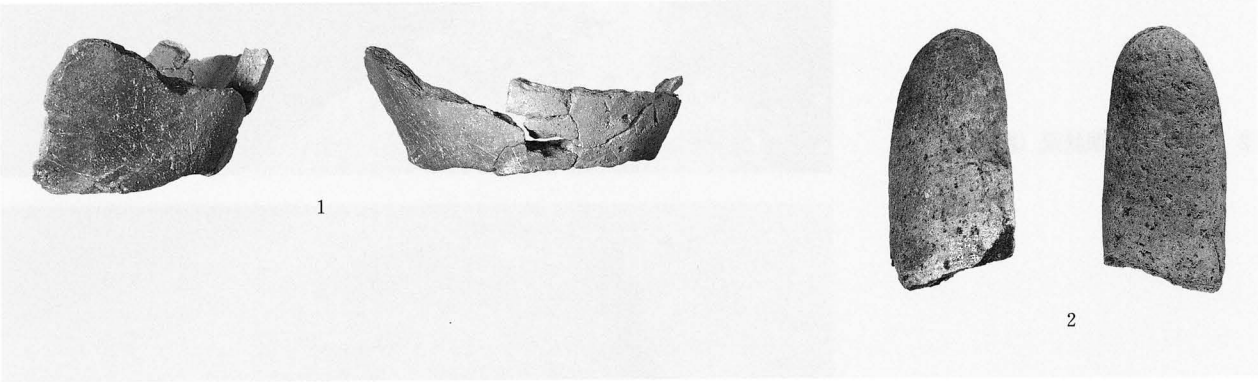
② SI１竪穴住居跡出土土器は、第1次調査の第Ⅲ群土器に相当すると考えられるので古墳時代末から奈良時代前半に位置づけられる。

③ SD１溝跡とSK１・２土坑はSI１竪穴住居跡を切っていることから古墳時代末から奈良時代前半以降の遺構と考えられる。

＜参考・引用文献＞

太田昭夫・熊谷裕行・佐藤淳（1994）「中田南遺跡第１次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第182集

太田昭夫・三塚靖（1995）「中田南遺跡第２次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第206集



1　非ロクロ土師器　甕　　C－１　SI１P２（第17図１）　　2　支脚　K－１SI１カマド

図版７　中田南遺跡第３次調査出土遺物

1　遺構検出状況（東より）

2　SI1床面完掘状況（南より）

3　SI1カマド完掘状況（南より）

図版８　遺構検出状況・SI１竪穴住居跡

1　SI1P2出土遺物（南より）

2　調査区完掘全景（南より）

3　調査区北壁土層断面（南より）

図版９　遺物出土状況・調査状況

Ⅲ　中田北遺跡発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名	中田北遺跡（宮城県遺跡番号01271）
調 査 地 点	仙台市太白区中田７丁目20
調 査 期 間	平成17年４月11日～４月13日
調査対象面積	320㎡
調 査 面 積	102㎡
調 査 原 因	共同住宅建築（２棟）
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主査　工藤哲司　　文化財教諭　三塚博之　浅野克樹　赤岡光騎

2　調査に至る経過と調査方法

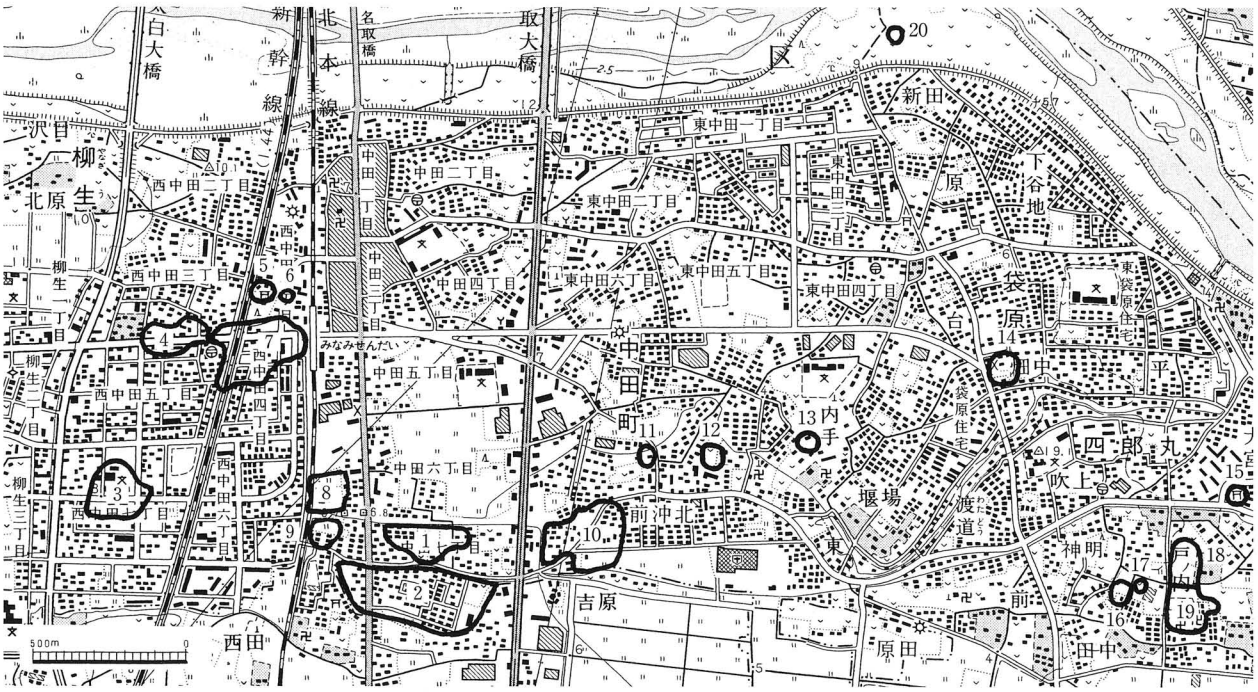
本調査は、平成17年４月４日付けで、安達一七夫・安達のぶえ氏より、共同住宅の建築に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成17年４月11日に着手した。２棟の建物にそれぞれ幅３ｍ・長さ15ｍのトレンチを設定して調査を行なった。最初に東側の建物（東トレンチ）を調査したところ、土坑１基とピットが３個検出されただけであった。西側建物にかかるトレンチ（西トレンチ）も、細い溝跡１条と土坑１基・ピット１個だけが検出されただけであったが、西区北部の西壁面で焼土と土師器の甕が伏せて立った状態で検出されたため、この部分の西側を幅２ｍで拡張したところ、竪穴住居跡が１軒発見された。検出された遺構について本調査を実施した。

3　遺跡の位置と環境

中田北遺跡は仙台市の南端、名取市との境に近く、JR南仙台駅の南東約１kmに位置する。付近一帯は名取川が形成した自然堤防と後背湿地・旧河道が複雑に入り組んだ地形となっており、遺跡の中心となる標高６ｍ前後の自然堤防の北側には旧河道が存在し、南側には後背湿地が広がっている。遺跡の一部は後背湿地に及んでいる。

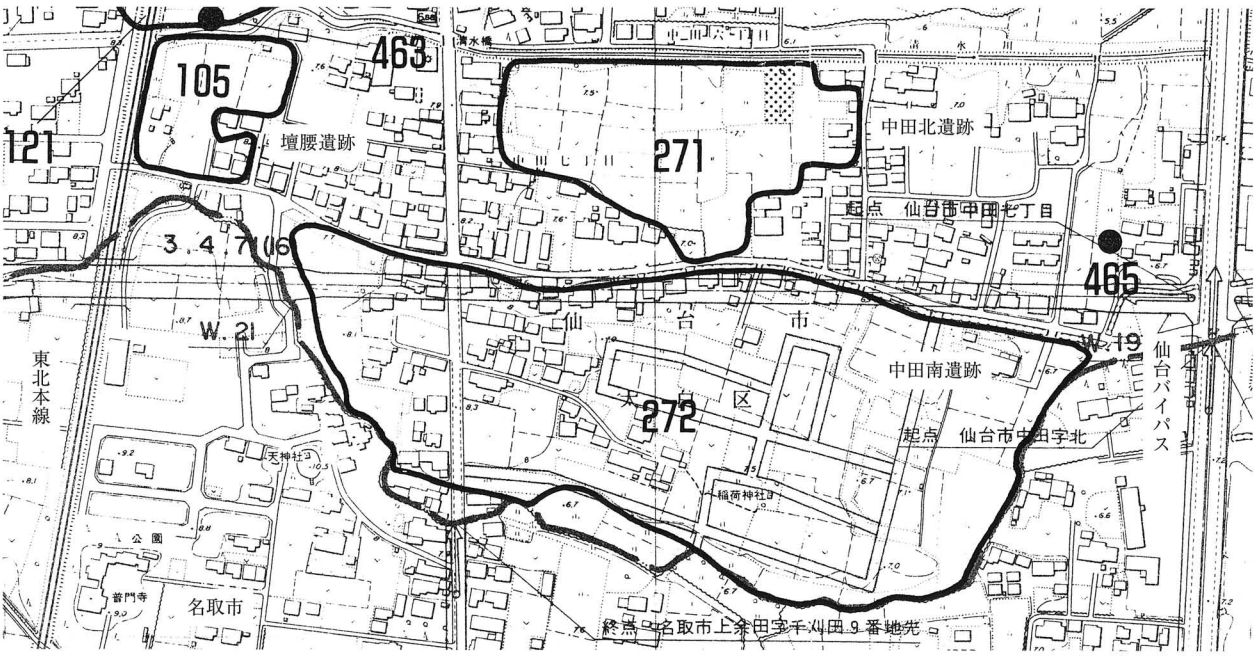
遺跡の北側を流れる名取川対岸の富沢地区は、自然堤防の形成が早く、縄文時代中期頃から集落が形成されているが、中田地区周辺の沖積地に遺跡が形成されるようになるのは、弥生時代になってからで、後河原遺跡や戸ノ内遺跡・安久東遺跡・中田南遺跡などで弥生土器が出土している。古墳時代になると戸ノ内遺跡と四郎丸館跡にかけての地域や安久東遺跡などに集落と方形周溝墓がつくられ、生活の様子が明らかになってくる。以後、古墳時代・奈良時代・平安時代を通して次第に多くの遺跡が形成され、遺跡の分散・拡大が認められる。また、後河原遺跡では４面に廂をもつ掘立柱建物跡を中心に数棟の建物群も検出され、農村とは異なる性格の集落も認められる。中世には安久東遺跡・中田南遺跡・四郎丸館跡に屋敷ないし城館が形成されている。

中田北遺跡はこれまでに数度の確認調査が行なわれているが、遺構・遺物は発見されていなかった。ただ、南東に近接する、中田南遺跡では、弥生土器・古墳時代中期の土器が出土し、古墳時代後期からは竪穴住居跡による集落が形成さる。以後古墳時代末から奈良・平安時代前半にかけて多数の竪穴住居跡が作られている。中世には大小の溝で囲まれた複数の区画があり、その区画の中で掘立柱建物跡や井戸跡・土坑が発見されている。区画溝には重複もみられ、13世紀から16世紀にかけて３時期の変遷が考えられている。

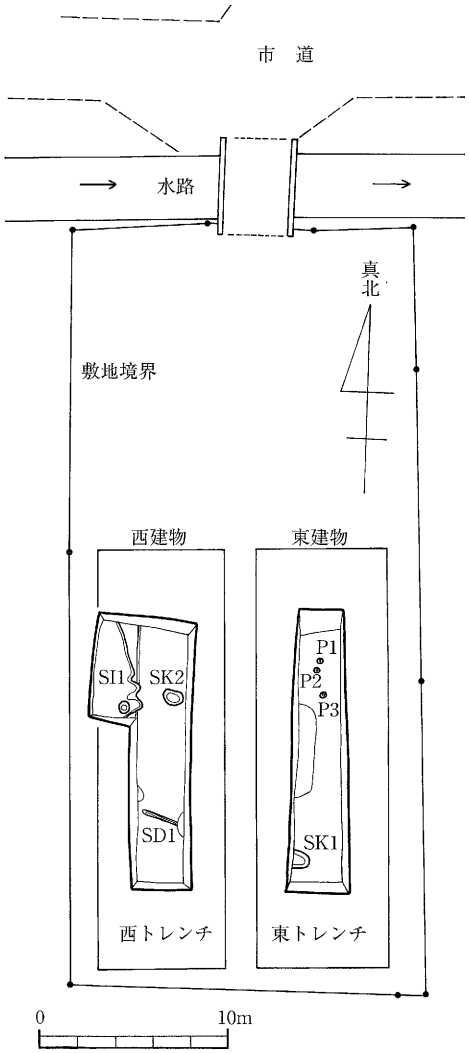


番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代	番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	中田北遺跡	散布地	自然堤防	古代	11	前沖中遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
2	中田南遺跡	集落・屋敷跡	自然堤防	弥生・古代～近世	12	前沖北遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
3	栗遺跡	集落	自然堤防	古墳	13	打手遺跡	散布地	自然堤防	古代
4	安久遺跡	集落	自然堤防	縄文～中世	14	中田畑中遺跡	集落・屋敷跡	自然堤防	古墳・古代
5	中田神社裏遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	15	城丸古墳	円墳	自然堤防	古墳
6	伊豆野権現古墳	古墳	自然堤防	古墳	16	神明遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
7	安久東遺跡	集落・城館	自然堤防	弥生・古代～近世	17	弁天囲古墳	円墳	自然堤防	古墳（後期？）
8	前田館跡	城館	自然堤防	中世	18	戸ノ内遺跡	集落・方形周溝墓	自然堤防	古墳・古代～中世
9	壇腰遺跡	集落	自然堤防	古代	19	四郎丸館跡	集落・方形周溝墓	自然堤防	古墳・古代～中世
10	後河原遺跡	官衙関係・水田跡	自然堤防	弥生・古代～近世	20	大塚山古墳	円墳	自然堤防	古墳

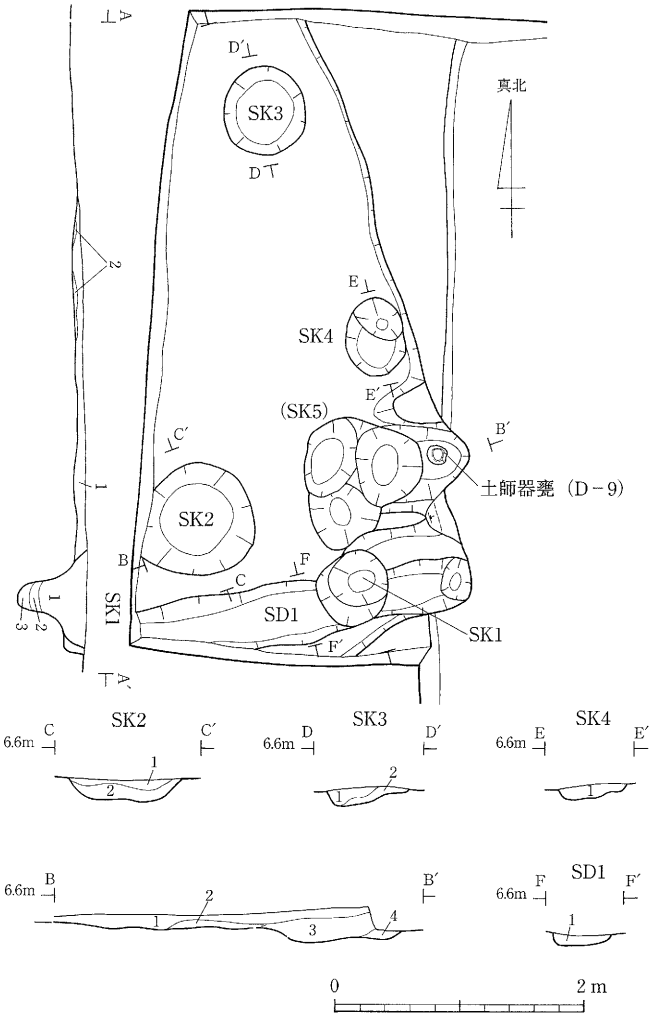
第18図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第19図　調査地区の位置



第20図　調査区・遺構配置図



SI 1

層No		土　色	土　性	備　考
SI 1	1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	黄褐色土粒・炭化物片・土器片を多く含む
	2	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	黄褐色土のブロックを多く含む
	3	10YR2/3　黒褐色	シルト質粘土	焼土・炭化物・灰・土器片を大量に含む
	4	10YR 4 /6　褐色	シルト	焼土ブロック・黄褐色土のブロックを含む
SK 1	1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	黄褐色土粒をわずかに含む
	2	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	土器片を含む
	3	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	褐色土粒をわずかに含む

層No		土　色	土　性	備　考
SK 2	1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	黄褐色土粒を少量含む
	2	10YR4/ 4　褐色	シルト質粘土	黄褐色土粒を含む。酸化鉄粒を少量含む
SK 3	1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄のブロックを含む
	2	10YR4/4　褐色	シルト	酸化鉄を多量に含む
SK 4	1	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	黄褐色土のブロックを含む
SD 1	1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色土粒を含む。酸化鉄粒を少量含む

第21図　SI1竪穴住居跡

4　基本層序

盛　土　　層厚25cm前後。残土等による盛土。

Ⅰａ層　　10YR3/4暗褐色のシルト層。層厚約15cm。近年の畑の耕作土。

Ⅰｂ層　　10YR3/3暗褐色の粘土質シルト層。層厚約25cm。近年の畑の耕作土上部。

Ⅱ　層　　10YR3/2黒褐色の粘土質シルト層。黄褐色土をわずかに含む。層厚約15cm。旧表土？　焼土・炭化物・褐色土粒をわずかに含む。

Ⅲａ層　　10YR4/6褐色のシルト層。層厚15cm。地山上部。南部では褐色の砂層となる。

Ⅲｂ層　　10YR5/6黄褐色のシルト質粘土層。地山下部。

5　発見遺構と出土遺物

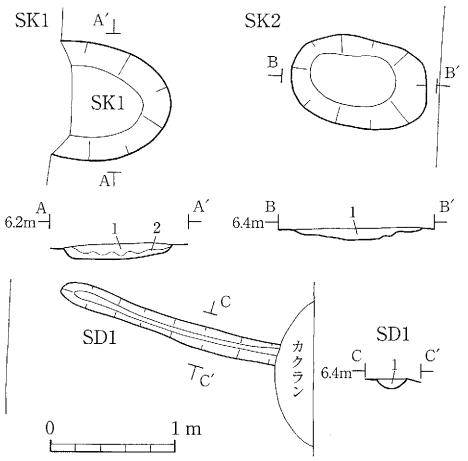
東西両トレンチ合わせて、Ⅲａ層上面で、溝跡１条・竪穴住居跡１軒・土坑２基・ピット４個が検出された。

1）溝跡

SD１溝跡　西トレンチの南部で検出された。西端は西壁際で立ち上がり、東側は撹乱に切られ、検出部の長さは約180cmである。幅は上面で22cm・深さは９cmで、断面形は舟底形である。堆積土は暗褐色のシルト質粘土で、明黄褐色シルトのブロックを含む。出土遺物はない。

2）竪穴住居跡

SI１竪穴住居跡　【位置・重複】西トレンチ北部で検出された。南辺・北辺・西辺は調査区の外にのびる。Ⅲ層上面で検出したが、堆積土がⅡ層に類似しているので、掘り込み面はⅡ層の可能性がある。【平面形・規模・方向】平面形は検出部の状況から方形ないし長方形を呈すると考えられる。大きさは、検出部で南北約510cm・東西約265cmを測る。方向は、東壁で真北から16°西に傾いている。【堆積土】堆積土は、４層に分けられた。遺構の深さは、検出面から床面までの残りの良いところで12cmである。１層は暗褐色の粘土シルトで、黄褐色土粒や炭片・土器片を含む。住居跡全面に分布している。２層は、褐色の粘土質シルトで黄褐色土のブロックを多く含む。３層は黒褐色のシルト質粘土層でカマド燃焼部の落ち込みに分布する。４層は焼土・黄褐色土を多量に含む褐色のシルトで、３層同様に燃焼部底面の焼土層である。【床面・壁面】床面はほぼ平坦である。壁面は、検出部分はほぼ直線的にのびる。立ち上がりは直角に近い。【柱穴・カマド・施設】柱穴は、床面では検出されなかった。カマドは東壁の南寄りに築かれている。南袖（右袖）と南壁との間は、50～70cmである。カマド本体は、幅は袖の外側で測って125cm・内側で50cm前後である。袖の長さは、右側が60cm・左側が45cmまで残る。幅は、左右とも基底部で30cmである。カマドの燃焼部から前庭部にかけて20～25cmの深さの穴が掘られており、穴の堆積土中から多量の土師器片が出土している。残存するカマドの奥部からは、倒立の状態で置かれた小型の甕が出土している。煙道は、住居の上面が削平を受けているためか検出されていない。その他の施設としては、土坑が４基検出されている。SK１土坑は、住居跡の東南部の堆積土（１層）上面から掘り込まれている。平面形は円形で、直径60cm前後、深さは55cmある。断面形は漏斗状で堆積土は３層に分けられる。SK２土坑は、カマドの前面に位置する。南北90cm・東西約90cmの円形で、深さは14cmを測り、断面形は舟底形を呈する。堆積土は２層に分けられる。SK３土坑は住居の東壁際の北壁よりに位置する。平面形は円形を呈し、南北72cm・東西65cmを測る。深さは14cmで、断面形は不整な舟底形を呈する。堆積土は２層に分けられる。SK４土坑はカマドの左袖の外側に位置する。平面形は楕円形を呈し、南北長軸63cm・東西短軸46cmを測る。深さは10cm前後で、北側が1段低くなっている。断面形は舟底形を呈する。黒褐色土１層である。【遺物出土状況】床面からの遺物は、少ないが、先に記したようにカマド内の堆積土（２・３層）から土師器片が多量に出土している。ここから出土した土師器は、甕の破片が多い。【出土遺物】土師器の杯７点（第23図１～７）・甕８点（第23図８～12・第24図１～３）と、須恵器の坏３点（第24図４～６）・高台付坏片１点（第24図７）・壺の体部破片１点（第24図８）がある。土師器の坏は、何れもロクロを使用して作られており、全て内面は黒色処理されている。底部は回転ヘラ切りのち手持ちヘラ削りされるもの（D-２）、回転糸切りのち手持ちヘラ削りされるもの（D-１・３）、切り離し技法不明で手持ちヘラ削りされる



SD１

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	明黄褐色土のブロックを含む。酸化鉄を含む。

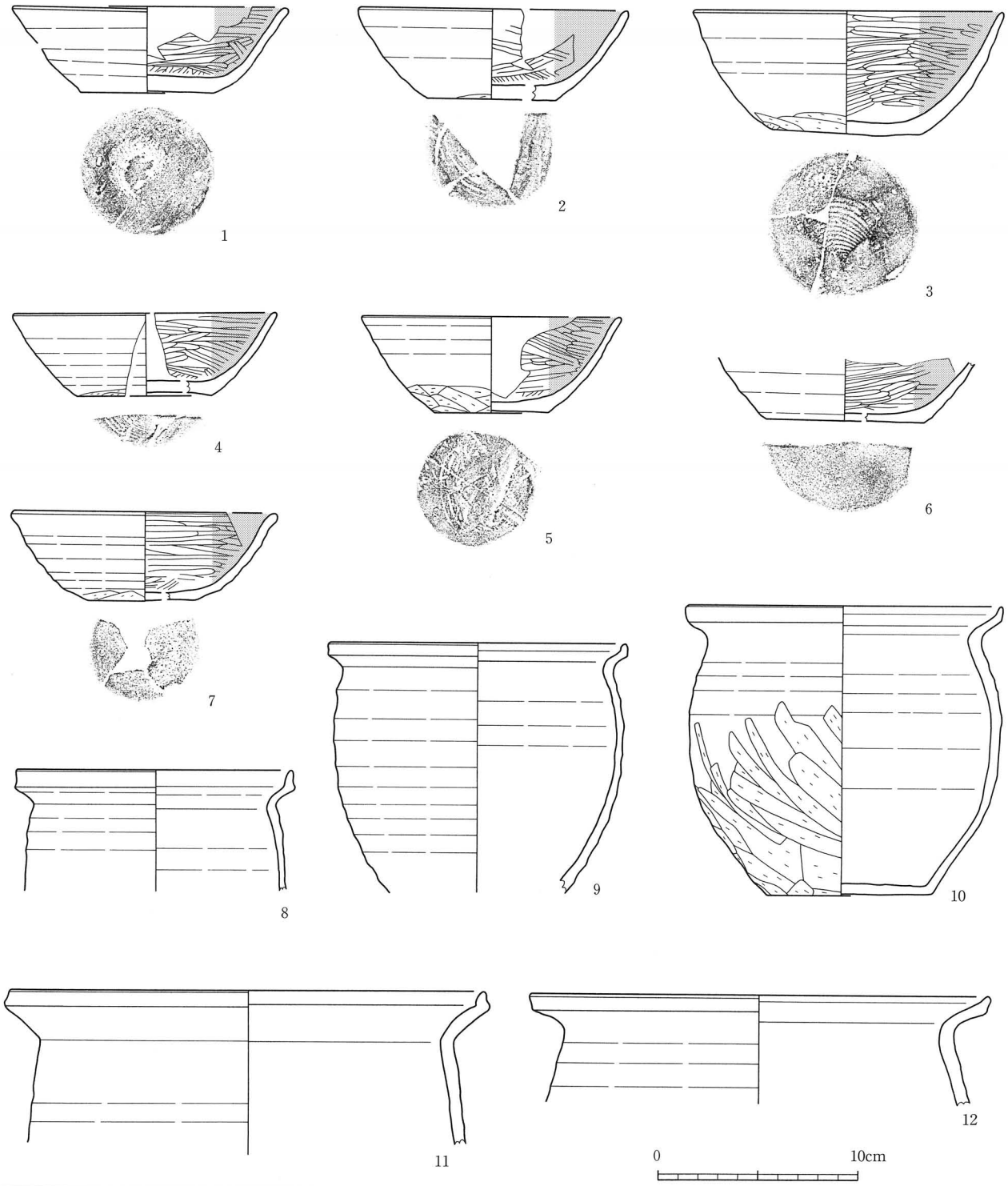
SK１

層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/2　黒褐色	シルト	酸化鉄を少量含む
2	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂	酸化鉄を多量含む

SK２

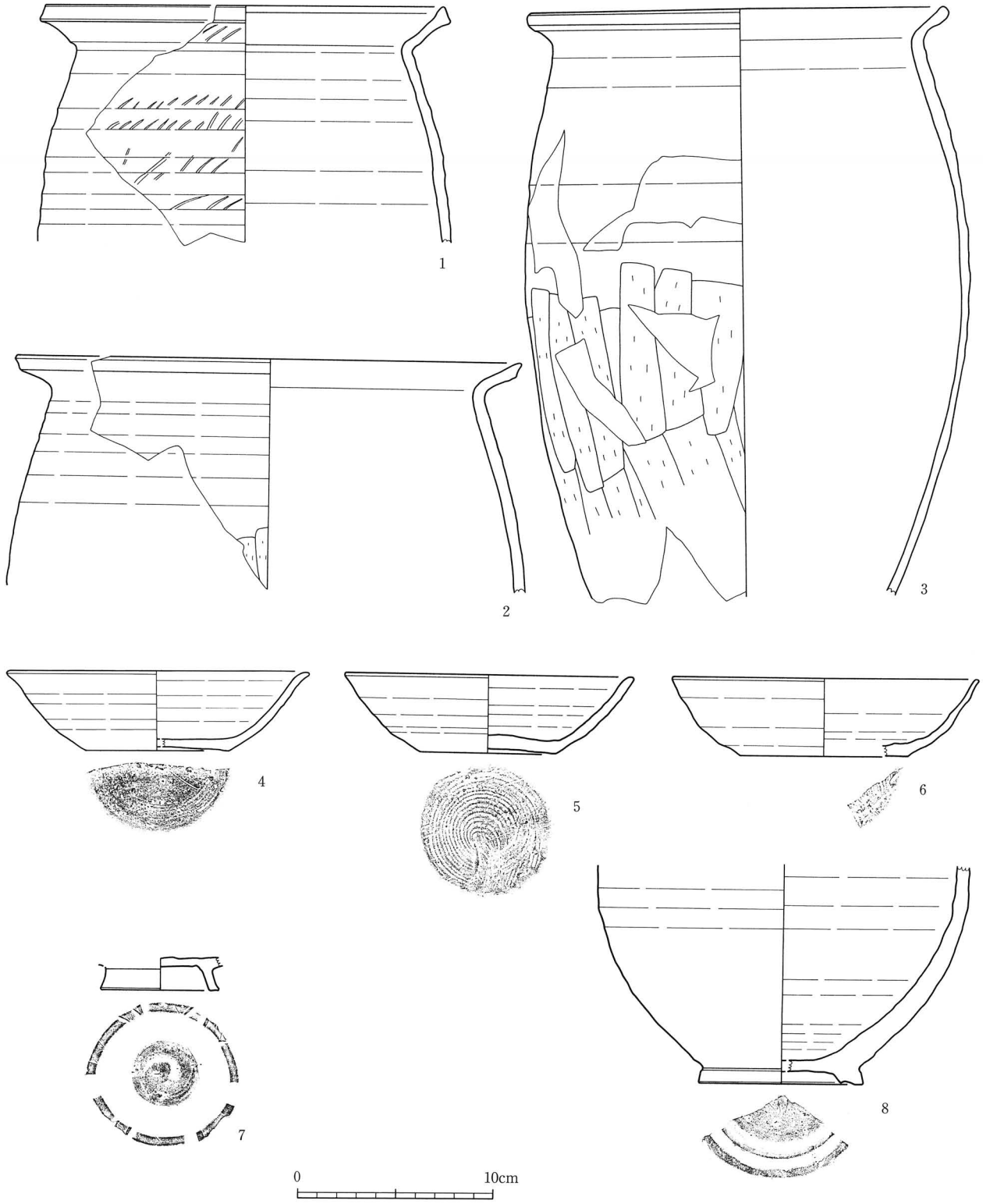
層No	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	10YR3/4暗褐色粘土のブロックを含む

第22図　土坑・溝跡



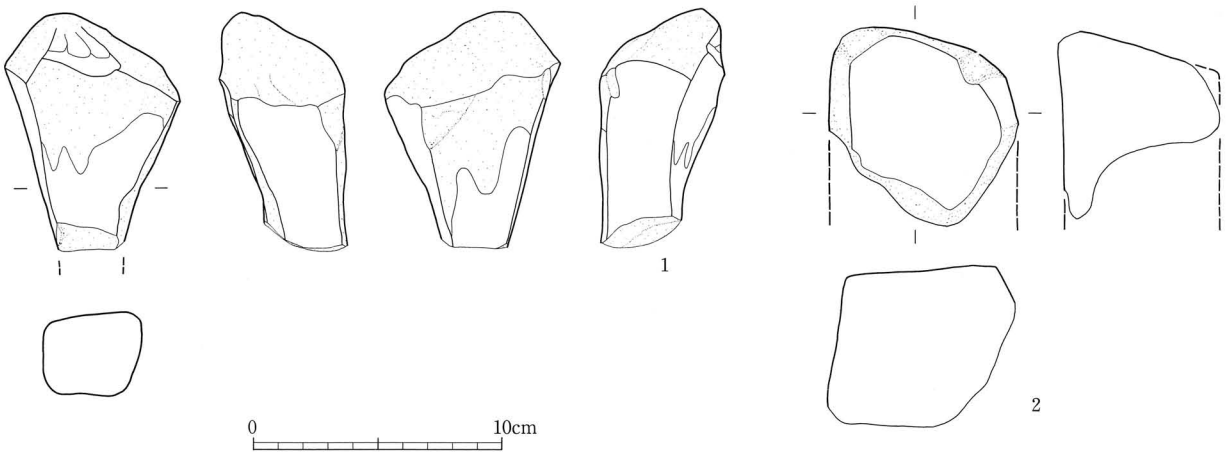
図中番号	登録番号	出土地点 基本層	遺構名	遺構層	取上No.	分類 種別	器種	法量 器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	特徴・備考（調整・素材・産地・時期・分類）	写真図版
1	D-2		SI-1	床面		ロクロ土師器	坏	4.3	(13.4)	6.5		外面：ロクロ調整、底部回転ヘラ切りのち手持ちヘラケズリ　内面：ヘラミガキ、黒色処理	12－1
2	D-1		SI-1	床面		ロクロ土師器	坏	4.5	(13.2)	(6.2)		外面：ロクロ調整、底部回転糸切りのち手持ちヘラケズリ　内面：ヘラミガキ、黒色処理	12－3
3	D-3		SI-1	床面		ロクロ土師器	坏	6.2	15.2	7.1		外面：ロクロ調整、ヘラケズリ、底部回転糸切りのち手持ちヘラケズリ　内面：ヘラミガキ、黒色処理	12－2
4	D-7		SI-1	1層		ロクロ土師器	坏	4.1	(12.8)	(6.4)		外面：ロクロ調整、ヘラケズリ、底部回転糸切り　内面：ヘラミガキ、黒色処理	
5	D-4		SI-1			ロクロ土師器	坏	4.8	(12.8)	5.6		外面：ロクロ調整、ヘラケズリ、底部ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ、黒色処理	
6	D-5		SI-1	カマド		ロクロ土師器	坏	(3.0)	(7.8)			外面：ロクロ調整、底部手持ちヘラケズリ　内面：ヘラミガキ、黒色処理	
7	D-6		SI-1	SK-1		ロクロ土師器	坏	4.5	(13.0)	(5.2)		外面：ロクロ調整、底部手持ちヘラケズリ　内面：ヘラミガキ、黒色処理	
8	D-13		SI-1	SK-1		ロクロ土師器	甕	6.1	(13.5)			外面：ロクロ調整　内面：ロクロ調整	
9	D-8		SI-1			ロクロ土師器	甕	12.5	(14.7)			外面：ロクロ調整　内面：ロクロ調整	12－4
10	D-9		SI-1	カマド		ロクロ土師器	甕	14.6	15.8	8.2		外面：ロクロ調整、ヘラケズリ、底部ナデ　内面：ロクロ調整	
11	D-15		SI-1	1層		ロクロ土師器	甕	(8.3)	23.5			外面：ロクロ調整　内面：ロクロ調整	
12	D-14		SI-1	カマド		ロクロ土師器	甕	(5.4)	22.8			外面：ロクロ調整　内面：ロクロ調整	

第23図　SI1竪穴住居跡出土土器1



図中番号	登録番号	出土地点 基本層	遺構名	遺構層	取上No.	分類 種別	器種	法量 器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	特徴・備考（調整・素材・産地・時期・分類）	写真図版
1	D-11		SI-1	SK-5		ロクロ土師器	甕	(10.2)	20.0			外面：ロクロ調整、ハケメのちロクロ調整　内面：ロクロ調整	
2	D-12		SI-1			ロクロ土師器	甕	(11.9)	(25.5)			外面：ロクロ調整　ヘラケズリ　内面：ロクロ調整	
3	D-10		SI-1	カマド		ロクロ土師器	甕	(30.3)	(21.3)			外面：ロクロ調整、ヘラケズリ　外面：ロクロ調整、ナデ	12−5
4	E-1		SI-1	1層		須恵器	坏	4.1	(15.3)	(7.1)		外面：ロクロ調整、底部回転ヘラケズリのち回転ヘラケズリ　内面：ロクロ調整	12−6
5	E-2		SI-1	カマド		須恵器	坏	4.0	14.5	6.8		外面：ロクロ調整、底部回転糸切り　内面：ロクロ調整	12−7
6	E-3		SI-1	SK-2		須恵器	坏	4.0	15.5	8.5		外面：ロクロ調整、底部回転糸切り　内面：ロクロ調整	
7	E-5		SI-1	1層		須恵器	坏	(17.7)		5.9		外面：ロクロ調整　内面：ロクロ調整　高台付き	
8	E-4		SI-1	1層		須恵器	壺	(11.3)		8.4		外面：ロクロ調整　内面：ロクロ調整　高台付	12−8

第24図　SI1竪穴住居跡出土土器 2



図中番号	登録番号	出土地点 基本層	遺構名	遺構層	取上No.	分類 種別	器種	法量 器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	特徴・備考（調整・素材・産地・時期・分類）	写真図版
1	K-1		SI-1	1層		石製品	砥石	(9.6)	7.0	4.1	310g	砥石4面	
2	K-2		SI-1	1層		石製品	砥石	(8.0)	7.6	6.3	356g	砥石1面	

第25図　SI1竪穴住居跡出土石製品

もの（D-4・5・6）、回転糸切り無調整のもの（D-7）が混在している。甕は小型のもの（第23図8～10）と大型のものがある。何れもロクロによる調整が行われている。須恵器の坏は、底部が回転ヘラ切りのち回転ヘラ削りされるもの（E-1）、回転糸切り無調整もの（E-2・3）、がある。土器以外には、砂岩製の砥石片が2点出土している。

3）土坑

SK1土坑　東トレンチの南部で検出され、西部は調査区の外にのびる。平面形は、検出部の状況から東西に長い楕円形を呈すると推定される。検出部の東西長軸91cm・南北短軸96cmを測る。深さは12cmで断面形は舟底形である。堆積土は2層に分けられ、上部が黒褐色のシルト、下部がにぶい黄褐色の砂層である。

SK2土坑　西トレンチ北部で検出された。平面形は楕円形を呈し、東西長軸110cm・南北短軸70cmを測る。検出面からの深さは10cmほどで断面形は不整な舟底形である。堆積土は暗褐色のシルト質粘土である。

4）ピット

ピットは4個検出された。いずれも掘り方の平面形は円形で、直径30cm以下の比較的小規模のもので、柱痕跡が検出されたものはない。堆積土は黄褐色土のブロックを含む褐色土ないし暗褐色土である。

6　まとめ

① Ⅲa層上面で、溝跡1条・竪穴住居跡1軒・土坑2基・ピット4個が検出された。

② 竪穴住居跡は、出土した土師器や須恵器の特徴が、多賀城跡の土器編年におけるD群土器に類似することから、9世紀後半ころの年代に相当するものと考えられる。

③ 溝跡・土坑・ピットについては、遺物が出土していないので、時期を特定できない。

④ 中田北遺跡での竪穴住居跡の発見は初めてであり、平安時代に集落が形成されていたことが明らかになった。

＜参考文献＞

仙台市教育委員会（1994）：「仙台市中田南遺跡」仙台市文化財調査報告書第182集

仙台市教育委員会（1995）：「仙台市中田南遺跡　第2次調査報告書」仙台市文化財調査報告書第206集

白鳥良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所

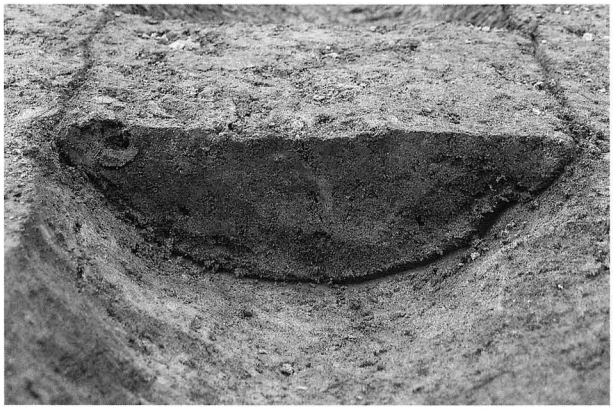
白鳥良一（1982）：「(2) 土器」『多賀城跡　政庁跡　本文編』宮城県多賀城跡調査研究所

1　東トレンチ全景（北から）

2　基本層序（東トレンチ東壁）

3　東トレンチ　SK1（東より）

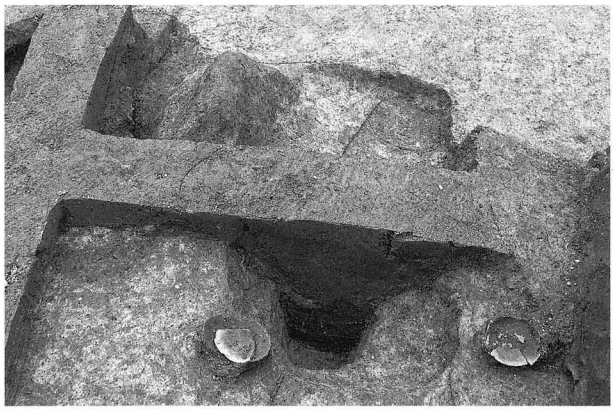
4　西トレンチ遺構検出状況（北から）



5　西トレンチSD1溝断面（西から）

6　SD1溝跡全景（北から）

7　西トレンチSI1竪穴住居跡断面（南から）

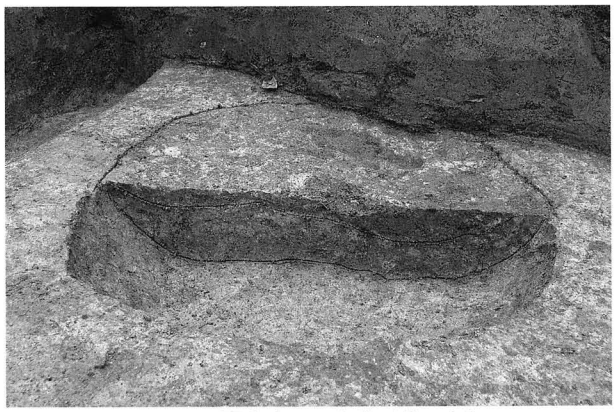


8　SI1竪穴内SK1土坑（西より）

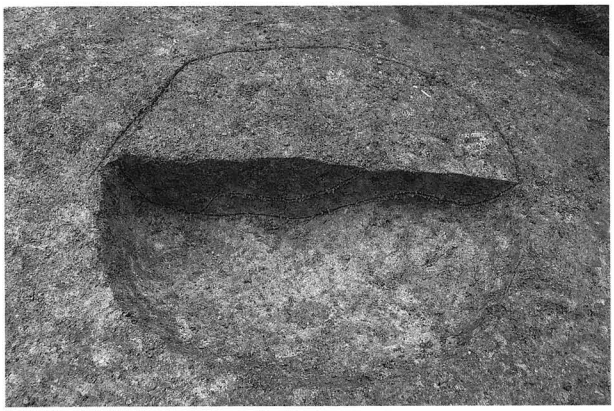
図版10　中田北遺跡の調査状況１

1　西トレンチSI1竪穴住居跡（南から）

2　SI1竪穴内SD1溝断面（西より）



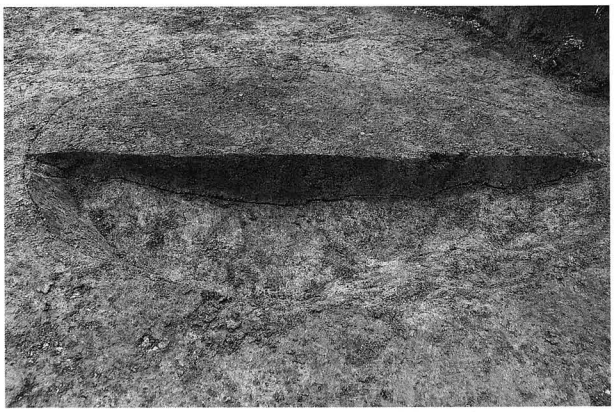
3　SI1竪穴内SK2土坑（北から）



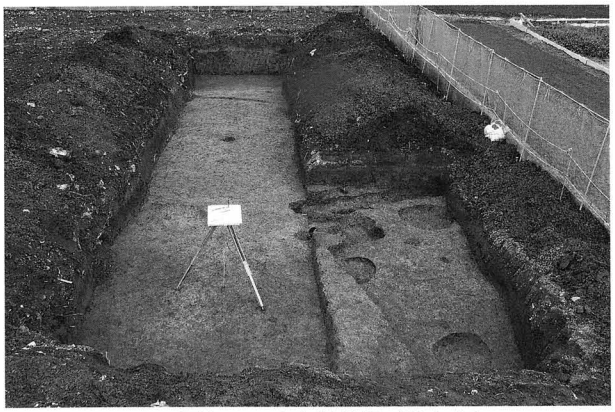
4　SI1竪穴内SK3土坑（北から）

5　SI1竪穴住居跡カマド（西から）

6　SI1竪穴住居跡完掘状況（南から）



7　西トレンチSK1土坑（南から）



8　西トレンチ完掘状況（北から）

図版11　中田北遺跡の調査状況２

1　土師器　坏　D－2　(SI 1 床　第23図 1)
2　土師器　坏　D－3　(SI 1 床　第23図 3)
3　土師器　甕　D－1　(SI 1 カマド　第23図 1)
4　土師器　甕　D－8　(SI 1　第23図 4)
5　土師器　甕　D－10　(SI 1 床　第24図 3)
6　須恵器　坏　E－1　(SI 1　第24図 4)
7　須恵器　坏　E－2　(SI 1 カマド　第24図 5)
8　須恵器　壺　E－4　(SI 1 1 層　第24図 8)

図版12　中田北遺跡出土遺物

Ⅳ　南目城跡発掘調査報告書

1．調査要項

遺　跡　名	南目城跡（宮城県遺跡番号01226）
調 査 地 点	仙台市宮城野区銀杏町508－2
調 査 期 間	平成17年4月25日
調査対象面積	88㎡
調 査 面 積	21㎡
調 査 原 因	個人住宅建築
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主査　工藤哲司　　文化財教諭　赤岡光騎

2．調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成17年3月11日付で、地権者熊谷浩幸氏より、基礎掘削GL-1500mmの鉄筋コンクリート造2階建て個人住宅建築に伴う発掘届が提出されたため行われた。

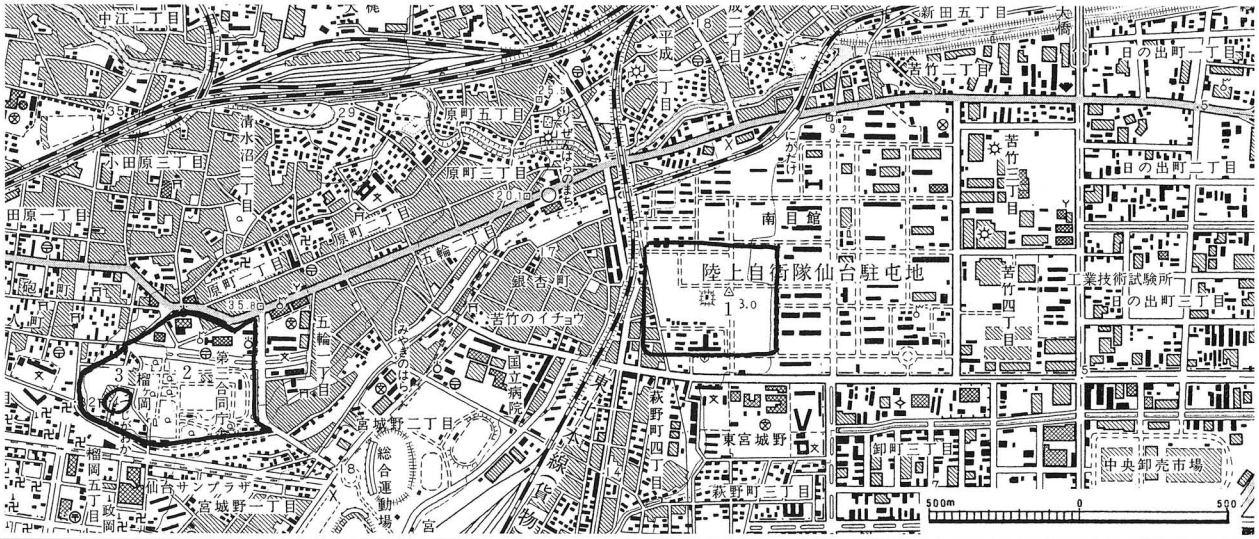
調査は、建物予定部分に東西5m×南北4mのトレンチを設定し、盛土（30cm）および表土Ⅰ層（30cm）を重機で掘り下げ、Ⅱ層上面で人力による遺構確認作業を行った。調査区東側のⅡ層で、調査区中央から調査区東壁外に延びる溝跡が検出された。溝の幅を確認するため調査区を北壁に沿って東側に約1m拡張した。

3．遺跡の位置と環境

南目城跡は、仙台市北東部、JR陸前原ノ町駅の南東約0.5kmの地点に、東西約500m×南北約450mの方形で、名取川水系広瀬川流域に形成された自然堤防上の微高地に位置している。遺跡の西側は下町段丘と海岸平野最奥部との境で、地質学上の長町－利府構造線上にあたる。標高は約13mである。

鎌倉時代には長町―利府構造線に沿う形で、奥大道と呼ばれる関東方面と陸奥の国を結ぶ交通路があったと考えられている。中世の仙台市付近には、この道に沿って、南から、大野田、郡山、南小泉といった集落跡が展開していた。南目城跡は、南小泉から陸奥国分寺を経て岩切へ抜ける道の途上にある。周囲には城館跡が多く、南目城跡の南西約4kmの地点には茂ヶ崎城、南へ約4kmの周辺には北目城、沖野城、今泉城、北東へ約2kmの地点には小鶴城などがある。

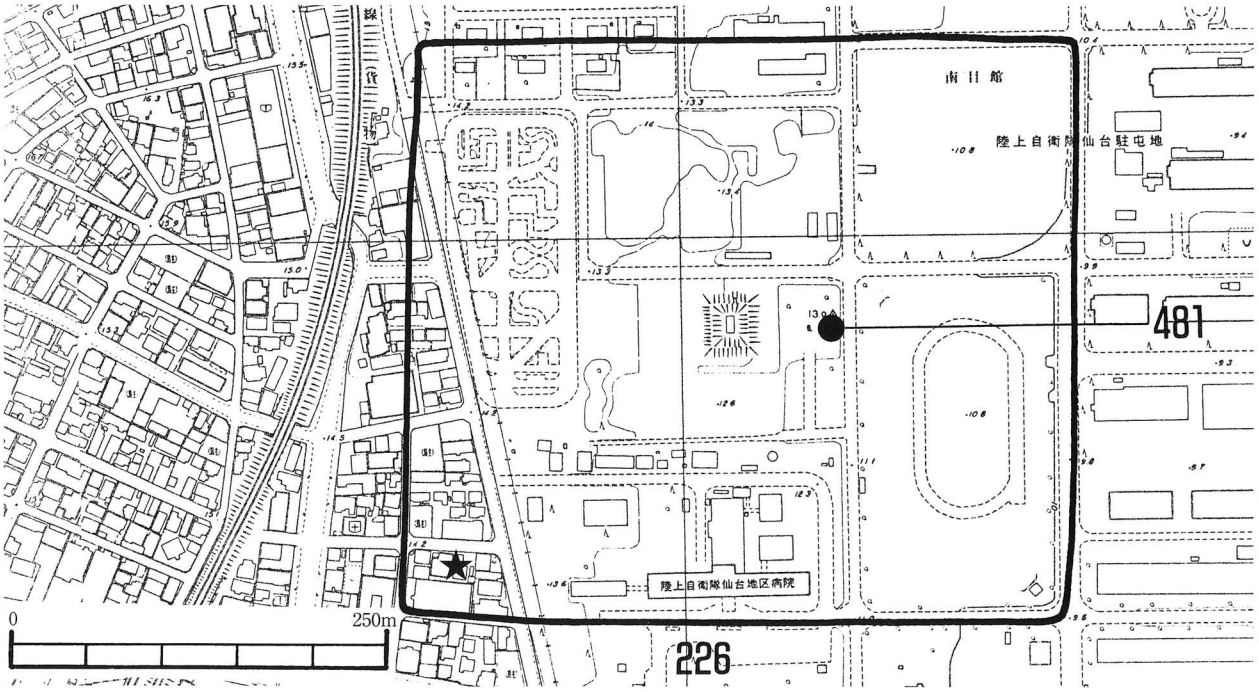
17世紀後半の延宝年間に作成された『仙台領古城書上』によると、南目城（南目館）の規模は、東西100間南北70間といわれ、伊達氏以前にこの地域を支配していた領主国分氏が千代本城（後の仙台城）を本拠としていた頃の支城の一つで、国分氏の一族である喜多目紀伊とその子孫が居住していたと伝えられている。南目城が歴史の舞台に登場するのは南北朝期で、観応の擾乱に関連して、足利直義方についた奥州探題吉良貞家と、尊氏派の奥州探題畠山国氏との争いによって、吉良氏側についた国分氏の守る南目城も戦いの場となり、正平7年（1352）に一度落城したという記録が残っている。のち再び国分氏が城を奪回し、以後約250年間、慶長元年（1596）、十八代盛重が政宗に討たれるまで、当時の宮城郡を領有する国分氏の居城となった。「宮城郡誌」によると、十一代盛行、十六代盛顕、十八代盛重がそれぞれ一時本城に住んだとされている。国分氏の没落とともに、この館も廃墟となったものと思われる。



番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	南目城跡	城館跡	自然堤防	中世
2	国分鞭館跡	城館跡	段丘	中世
3	天神社遺跡	散布地	段丘	縄文

第26図　遺跡の位置と周辺の遺跡

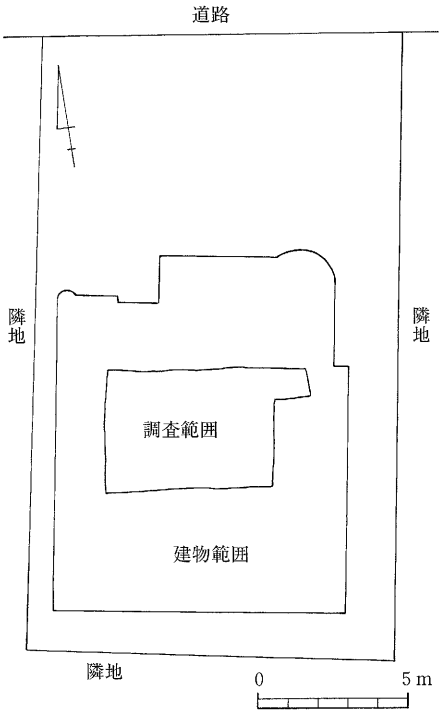
遺跡の周辺は、昭和17年（1942）陸軍造兵廠の建設に伴う造成が行われるまでは水田で、微高地にある館跡が水田の中に浮かんだように見えていたという。第二次世界大戦後は米軍の駐留地となっていた。昭和28年には、館にかかわる土塁と思われるところから、後に板碑であることが確認された大石が出土している。その後、陸上自衛隊の駐屯地となり、館跡の中心部にあたる板碑周辺は自衛隊の手により公園化されている。周辺では過去12回にわたって建物建て替え工事等に関わる確認調査が実施されたが、遺構・遺物等は発見されていない。本調査区は遺跡の南西、自衛隊敷地外の住宅地にあたる。



第27図　調査地点の位置

4．基本層序

約30cmの山砂盛土層の下に３層を確認した。Ⅰ層は層厚約30cmの暗褐色のシルト層で、砂及び小礫を多量に含んでいる。その下のⅡ層は層厚約120cmの黄褐色のシルト質砂層で、上部は褐色を呈している。遺構は全てこのⅡ層上面で検出した。Ⅲ層は黄褐色の砂礫層で、礫は径１～10cm程度、一部に砂層及び風化礫層を含んでいる。この地域の基盤となる自然堆積層と考えられる。



第28図　調査区配置図

5．発見遺構と出土遺物

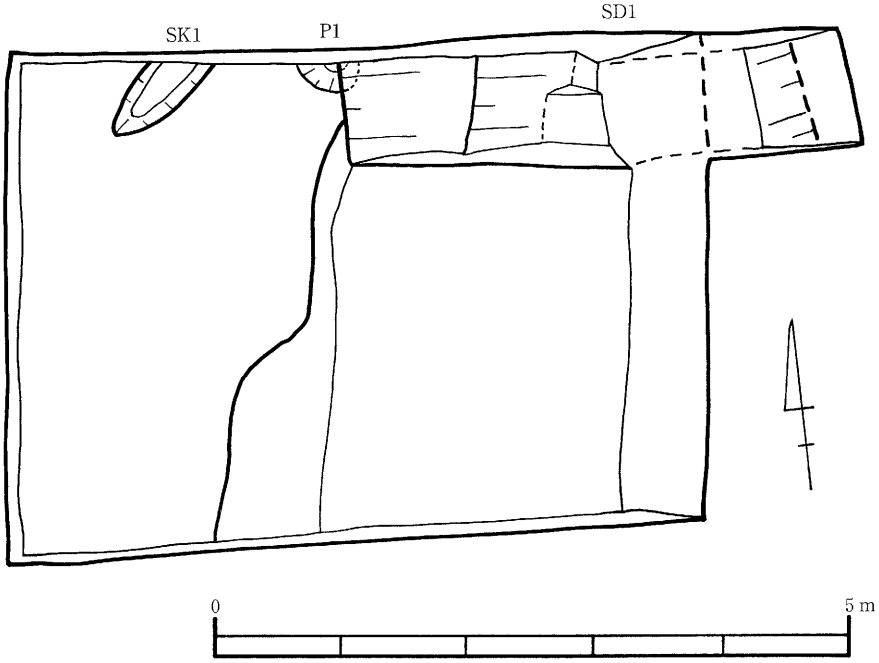
溝跡１条、土坑１基、ピット１個を検出した。

1）溝跡

SD１溝跡　調査区東寄りで、調査区を南北に縦断して検出された。幅は上端で約３ｍである。検出面からの深さ約200cmまで掘り下げたが、底面には至らなかった。断面形は逆台形ないしV字状を呈していると考えられる。堆積土は８層に分けられ、上部の２、３層は人為的な堆積土である。遺物は出土していない。

2）土坑

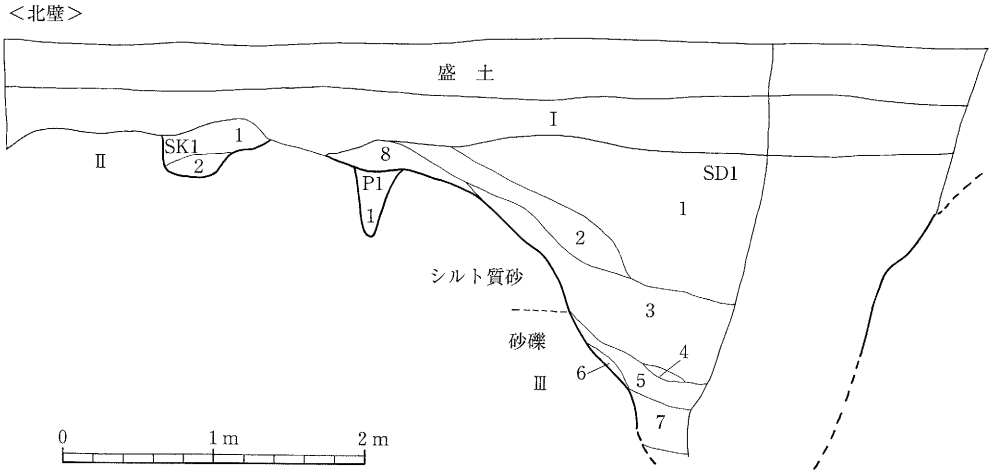
SK１土坑　調査区北壁の西側で検出された。検出部分の平面形は、東西長軸約40cm、南北短軸約30cmの楕円形であり、調査区外を北側にのびている。断面形は不整な舟底形で、検出面からの深さは約30cmである。堆積土は２層に分けられ、人為的な堆積土と考えられる。遺物は出土していない。



第29図　遺構実測図

3）ピット

調査区北壁、中央付近で１個確認された。直径約30cmの円形であり、深さは約50cmである。柱痕跡は検出されていない。堆積土は１層で褐色の砂を霜降り状に含んでいる。植物の根との関連が考えられる。遺物は出土していない。



第30図　遺構断面図

基本層

	土　色	土　質	備　考
盛土			山砂
Ⅰ層	10YR3/3　暗褐色	シルト	砂を及び小礫を多量に含む。
Ⅱ層	10YR5/6　黄褐色	シルト質砂	上部は褐色を呈す
Ⅲ層	10YR5/6　黄褐色	砂礫（地山）	礫は径１～10cm程度 一部砂層及び風化礫層を含む

SD1

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	径１～10cmの礫を多量に含む　しまり弱い
2	10YR4/6　褐色	シルト質粘土	礫および明黄褐色土のブロックを多量に含む
3	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	壁際に黄褐色土のブロックを縞状に含む
4	10YR3/2　黒褐色	粘土	礫は含まない
5	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	砂及び礫を多量に含む　壁際に黄褐色土を縞状に含む
6	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土を霜降り状に含む
7	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト質砂	礫を多量に含む　Ⅱ層の崩落土？
8	10YR3/3　暗褐色	シルト	小礫をわずかに含む

SK1

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/3　暗褐色	シルト	
2	10YR3/3　暗褐色	砂質シルト	褐色土粒及び黒褐色土のブロックを含む

P1

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/3　暗褐色	砂質シルト	褐色の砂を霜降り状に含む　根？

6．まとめ

① 本調査区は、南目城跡の南西部に位置する。

② 現地表下約80cmの基本層Ⅱ層上面から溝跡１条、土坑１基、ピット１個が発見された。

③ 溝跡は方向と規模から南目城跡に関係する堀跡の可能性が考えられる。遺物が発見されていないため、年代を特定することはできない。今後、追跡調査を要する。

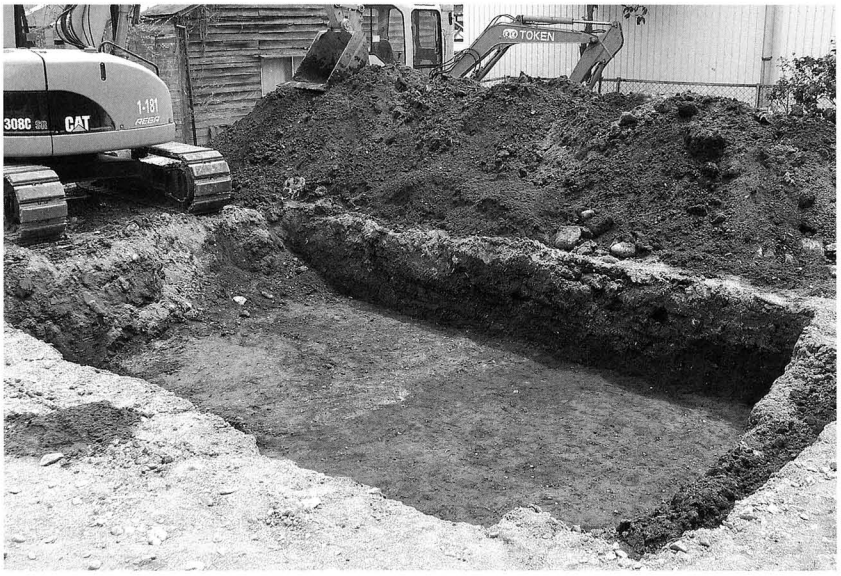
＜参考文献＞

仙台市　「９　分裂と競合の時代」『仙台の歴史』

仙台市　「第５章　留守氏と国分氏」『仙台市史　通史編２　古代中世』

渡部弘美ほか（2003）『国分寺東遺跡他　発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第266集

紫桃正隆　『みやぎの戦国時代　合戦と群雄』宝文堂



1　SD1溝跡検出状況（北西より）

2　調査区全景（東より）

3　SD1溝跡土層断面（南西より）

図版13　調査区全景

4　SK1土坑完掘状況（南より）

5　P1完掘状況（南より）

6　調査区拡張部
SD1溝跡土層断面（南より）

図版14　溝跡・その他の遺構

Ⅴ　大野田古墳群第10次発掘調査報告書

1．調査要項

遺　跡　名	大野田古墳群（宮城県遺跡番号01361）
調 査 地 点	仙台市太白区大野田字宮13番、14番の各一部
調 査 期 間	平成17年４月27日～４月28日
調査対象面積	198.6㎡
調 査 面 積	21㎡
調 査 原 因	個人住宅建築
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主査　工藤哲司　　文化財教諭　赤岡光騎

2．調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成17年４月12日付けで、地権者小林秀夫氏より、深さ３ｍの杭打ちを伴う木造２階建て個人住宅建築に伴う発掘届が提出されたため行われた。

調査は、建物予定部分に東西８ｍ×南北４ｍのトレンチを設定し、重機により盛土約75cmと旧水田耕作土であるⅠ層を約10cmを掘り下げた。Ⅱ、Ⅲ層がほとんど残存しなかったため、東西７ｍ×南北３ｍの範囲で標高約10.7ｍにあたるⅣ層上面で人力による遺構検出作業を行った。

Ⅳ層の調査後、さらに調査区の北東部を深掘りして下層遺構の有無を確認したところ、Ⅶ層で小溝の断面が検出されたので、Ⅶ層上面の検出作業を行い、発見遺構を調査した。

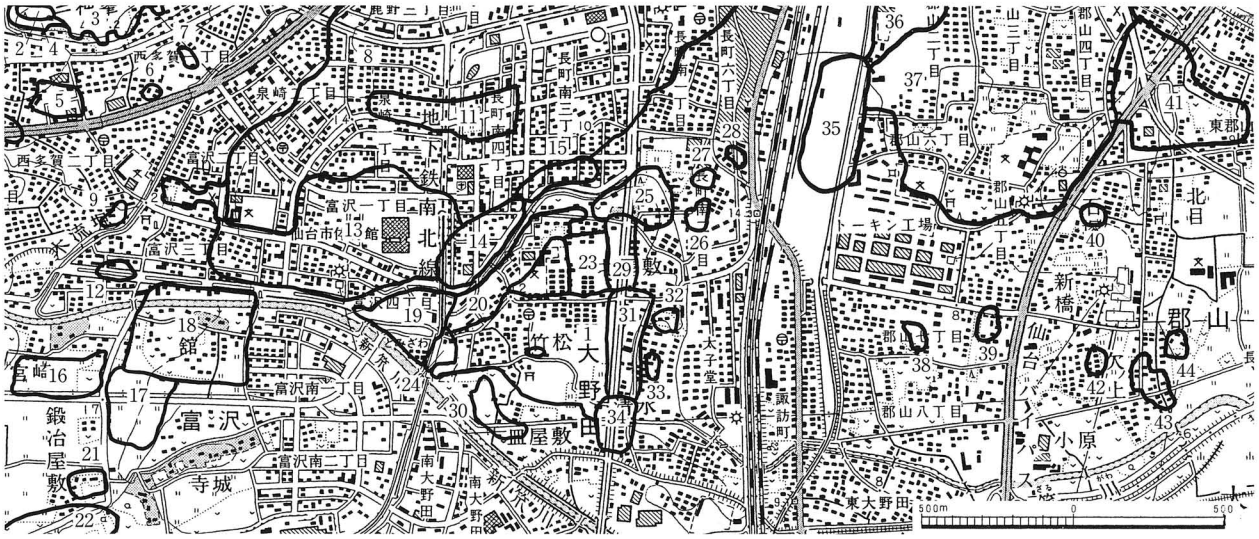
3．遺跡の位置と環境

大野田古墳群は、仙台市の南東部、太白区大野田に所在する遺跡で、範囲は東西600m、南北430mに及んでいる。遺跡は、北西側を青葉山丘陵に、北東側を広瀬川に、南側を名取川に囲まれた「郡山低地」と呼ばれる沖積地に立地している。付近一帯は名取川の支流の一つである笊川等の小河川が形成した自然堤防や旧河道・後背湿地などの沖積地特有の微地形が複雑に発達している。大野田古墳群は標高10m前後の後背湿地ないし自然堤防上に広がっている。近年、遺跡のほぼ全域で土地区画整理が実施されている。

大野田古墳群を含む郡山低地は、遺跡が数多く分布する地域である。富沢遺跡では約二万年前の後期旧石器時代の遺構が発見されている。その後縄文時代から中世・近世に至るまで多くの遺跡が形成されている。特に笊川が名取川と合流する地点にかけての約2.5kmの河川北岸には、富沢遺跡、山口遺跡、六反田遺跡、下ノ内遺跡、下ノ内浦遺跡、伊古田遺跡、王ノ壇遺跡、皿屋敷遺跡などの遺跡が連続して分布している。

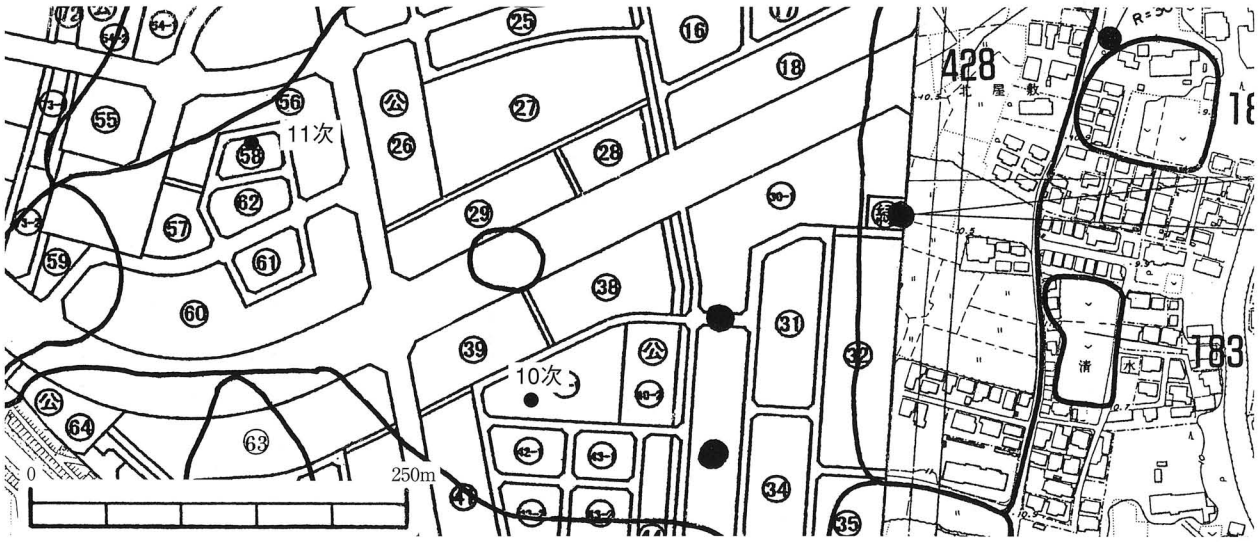
過去、大野田古墳群では多くの調査が連続して行われており、30基を超える古墳が確認・調査されている。そのほとんどは遺跡の東側に立地し、西および南側の検出例は少ない。古墳以外の遺構としては、古墳時代前期の竪穴住居跡、古墳時代の木棺墓、古墳時代中期以降から奈良時代以前の畑耕作にかかわる小溝状遺構群、平安時代の小溝状遺構群、中世の道路跡・掘立柱建物跡・堀跡・溝跡など、古墳時代以降の各時期の遺構が発見されている。

今回の調査地点は、遺跡の中心よりやや南に位置している。周辺地域の宅地造成に関わる道路建設に伴う発掘調査によって、調査区南側に隣接する道路部分の調査が行われ、小溝状遺構が検出されている。



No.	遺跡名	種　別	立　地	時　代	No.	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	大野田古墳群	円墳	自然堤防	古墳	23	袋前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古代
2	三神峯古墳群	円墳	丘陵	古墳	24	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古墳、古代
3	三神峯遺跡	集落跡	丘陵	縄文、平安	25	元袋遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	弥生、古墳、古代、中世、近世
4	富沢窯跡	散布地	丘陵斜面	古墳	26	新田遺跡	散布地	自然堤防	古代
5	原遺跡	散布地	丘陵麓	弥生、古代	27	長町南遺跡	散布地	自然堤防	古代
6	原東遺跡	散布地	丘陵麓	古墳、古代	28	長町六丁目遺跡	散布地	自然堤防	古代
7	裏町東遺跡	散布地	丘陵麓	平安	29	大野田遺跡	祭祀跡、集落跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代
8	富沢遺跡	包含地、水田跡	丘陵麓	旧石器、縄文、弥生、古墳、古代～近世	30	伊古田B遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
9	富沢上ノ台遺跡	散布地	自然堤防	縄文、古代	31	王ノ壇遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、中世
10	富沢清水遺跡	散布地	自然堤防	古代	32	北屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古代
11	泉崎浦遺跡	集落跡、水田跡、墓跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、近世	33	長町清水遺跡	散布地	自然堤防	古墳
12	堀ノ内遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代	34	皿屋敷遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	古代、中世
13	山口遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文、弥生、古墳、古代、中世	35	長町駅東遺跡	集落跡	自然堤防	弥生、古墳、奈良
14	下ノ内浦遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、中世	36	西台畑遺跡	集落跡、包含地	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、中世
15	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳、平安	37	郡山遺跡	官衙跡、寺院跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代
16	鍛冶屋敷A遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古代	38	的場遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
17	鍛冶屋敷前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古代	39	籠ノ瀬遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
18	富沢館跡	城館跡	自然堤防	中世	40	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
19	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、中世	41	北目城跡	城館跡、集落跡、水田跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、中世、近世
20	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、中世	42	欠ノ上Ⅰ遺跡	水田跡	後背湿地	古墳、古代、中世
21	鍛冶屋敷B遺跡	散布地	自然堤防	縄文、古代	43	欠ノ上Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
22	六本松遺跡	集落跡	自然堤防	古代	44	欠ノ上Ⅲ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代

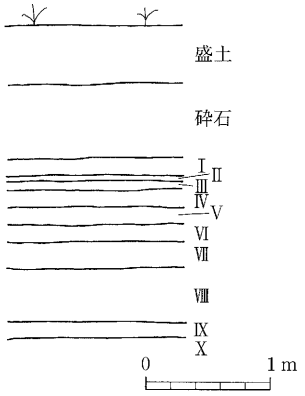
第31図　遺跡の位置と周辺の遺跡



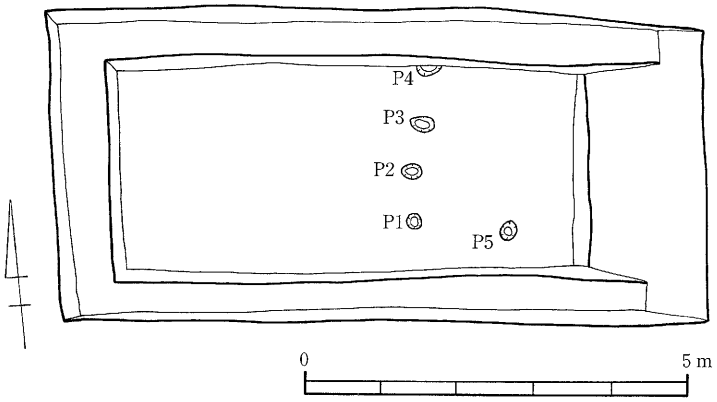
第32図　調査地点の位置

4．基本層序

約35cmの山砂の下に約45cmの砕石層があり、その下に近年の水田耕作土である灰オリーブ色の粘土層（Ⅰ層）がある。Ⅰ層は層厚約10cmである。Ⅱ層は層厚約３cmの黒褐色の粘土層である。Ⅲ層は層厚約５cmのにぶい黄褐色の粘土層である。Ⅳ層は層厚約10cmのにぶい黄褐色の粘土層で、灰白色火山灰をまばらに含んでいる、ピットの検出面である。Ⅴ層は層厚約10cmの褐色の粘土層で、マンガン粒を含んでいる。Ⅵ層は層厚約10～15cmの暗褐色の粘土層である。Ⅶ層は層厚約15cmの暗褐色の粘土層で、上面で小溝状遺構・ピットが検出されている。Ⅷ層は層厚約30cmの褐色の粘土層で、しまりはない。Ⅸ層は層厚約10cmの褐色のシルト質粘土層である。Ⅹ層は層厚15cm以上のにぶい黄褐色の粘土層で砂を含んでいる。



第34図　基本層断面略図



第35図　Ⅳ層検出遺構

土層No.	土　色	土　質	備　考
Ⅰ	7.5Y4/2　灰オリーブ	粘土	旧水田耕作土
Ⅱ	10YR2/2　黒褐色	粘土	
Ⅲ	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	
Ⅳ	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土	灰白色火山灰をまばらに含む
Ⅴ	10YR4/4　褐色	粘土	マンガン粒を含む
Ⅵ	10YR3/3　暗褐色	粘土	
Ⅶ	10YR3/4　暗褐色	粘土	
Ⅷ	10YR4/6　褐色	粘土	しまりなし
Ⅸ	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	

P１

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色土粒を霜降り状に含む

P２

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色土粒を霜降り状に含む

P３

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色土粒を霜降り状に含む

P４

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色土粒を霜降り状に含む

P５

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色土粒を霜降り状に含む

5．発見遺構と出土遺物

1）Ⅳ層上面検出遺構

ピット

計５個を検出した。平面形は円形を基調とし、大きさは直径20～30cm、検出面からの深さは４～８cmほどである。断面形はⅢ状で、壁は緩やかに立ち上がる。柱痕跡を検出できたものはない。Ｐ１～Ｐ４の４個はおよそ50cmの間隔で南北方向に列状に検出された。今回の調査においては組み合わせ等により建物などを復元するには至らなかった。遺物は出土していない。

2）Ⅶ層上面検出遺構

溝跡（小溝状遺構）８条、ピット４個を検出した。

①小溝状遺構群

Ⅶ層上面で検出された小溝状遺構群は、調査区壁面での断面観察から、そのほとんどがⅥ層からの掘り込みであることが確認できた。方向と切りあいから、南北方向のものを１群、東西方向のものを２群とした。１群が２群を切っている。

小溝状遺構１群　６条

調査区を南北方向に横切る形で、およそ105cm間隔で検出された。検出面での幅は約30cmである。堆積土はいずれも褐色のシルト質粘土で、暗褐色土のブロックを含む。溝下部10cm前後に黄褐色土のブロックが含まれる。SD１～３は南壁から中央部へ約105cmまで伸びていることを確認した。

小溝状遺構２群　２条

調査区を東西方向に横切る形で、およそ105cm間隔で検出された。幅は約30cmである。堆積土はいずれも褐色のシルト質粘土で、暗褐色のブロックを含む。１群よりも黄褐色土が含まれる割合が多い。１群に切られていることから、１群より古いことがわかる。

１群及び２群からの出土遺物はない。

②ピット

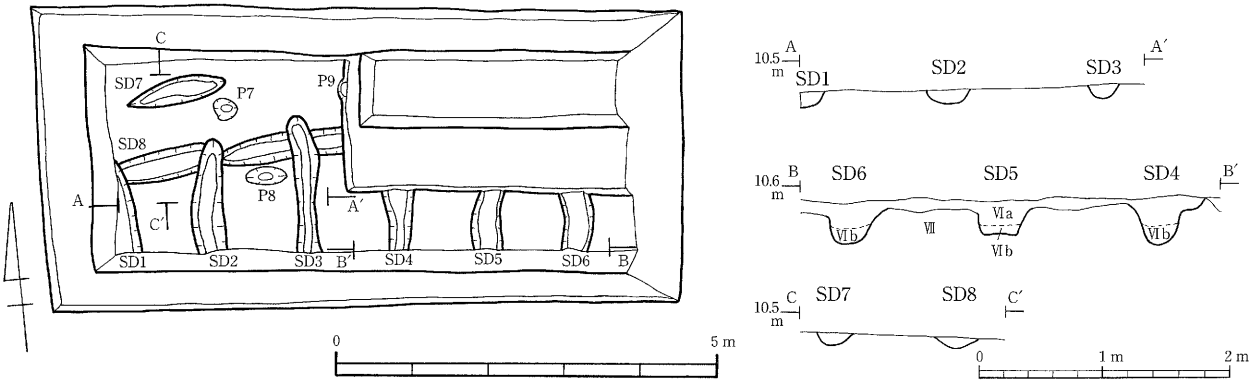
計４個を検出した。平面形は円形ないし楕円形を基調とし、大きさは直径20～30cm、検出面からの深さは14～60cmほどである。柱痕跡を検出できたものはない。遺物は出土していない。

６．まとめ

① 本調査区は、大野田古墳群の南西部に位置する。

② 基本層Ⅳ層上面からピット５個、Ⅶ層上面から小溝状遺構８条、ピット４個が発見された。

③ 小溝状遺構については、周辺での調査成果から、Ⅶ層の小溝状遺構の年代は古墳時代中期以降、奈良時代以前の畑跡に関連するものであると推定される。



第36図　Ⅶ層検出遺構実測図

P６

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/3　暗褐色	粘土	

P７

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	炭化物をわずかに含む

SD１～６（南北方向）

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	暗褐色土、黄褐色土のブロックを含む

SD７～８（東西方向）

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	暗褐色土、黄褐色土のブロックを含む

P８

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	粘土	炭化物を多量に含む

P９

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	粘性強くしまりなし

Ⅶ層及び小溝上部には黄褐色土のブロックは見られないが、溝下部10cm前後に黄褐色土のブロックが含まれる。

南北列よりも黄褐色土が含まれる割合が多い。

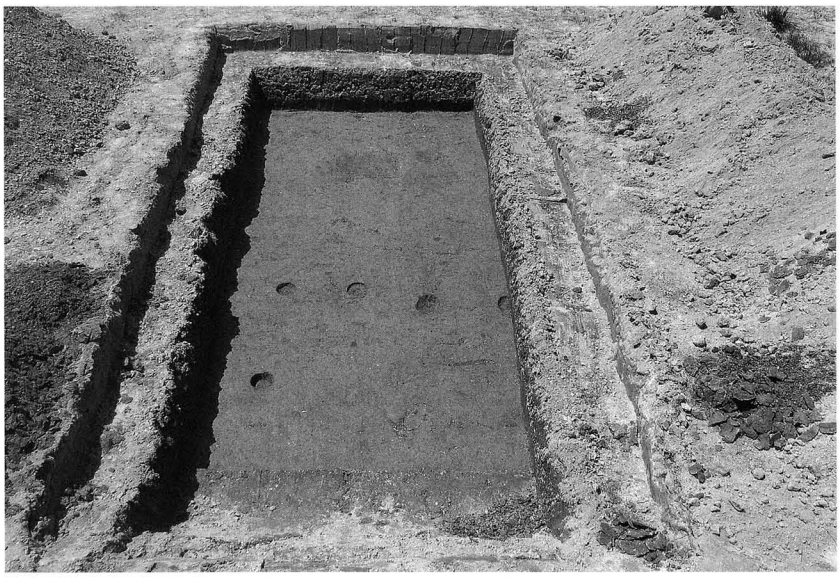
＜参考文献＞

渡邊誠ほか（2000）『大野田古墳群・王ノ壇遺跡・六反田遺跡』仙台市文化財調査報告書第243集

工藤哲司ほか（2002）「XIII　大野田古墳群　第６次発掘調査報告書」『国分寺東遺跡他』仙台市文化財調査報告書第266集

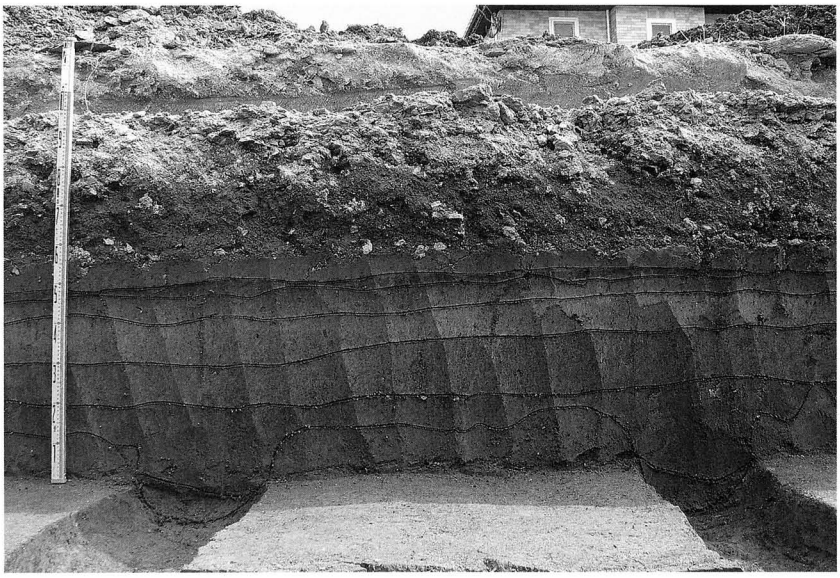
佐藤淳（2005）『大野田古墳群　第８次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第290集

佐藤淳（2005）『大野田古墳群　第９次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第291集



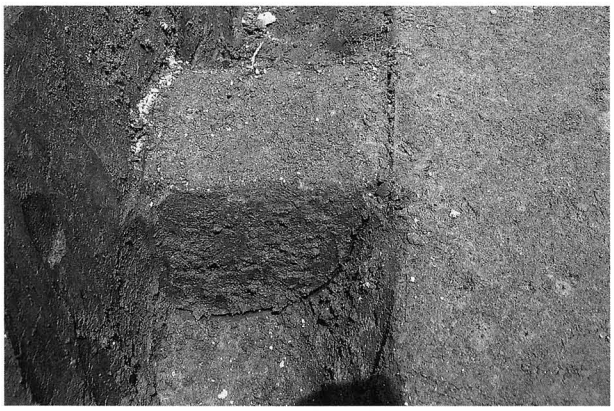
1　Ⅳ層ピット完掘状況（東より）

2　Ⅶ層遺構検出状況（東より）

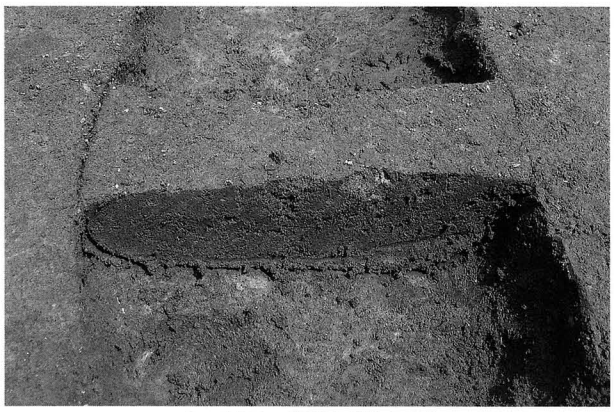


3　南壁東部土層断面

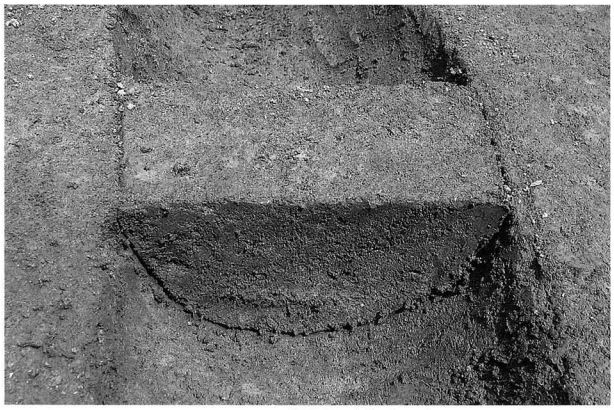
図版15　遺構検出状況



4　SD1　断面（南より）



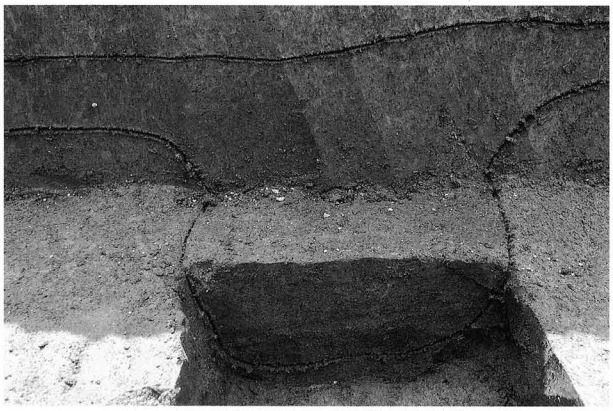
5　SD2　断面（南より）



6　SD3　断面（南より）

7　SD4断面（北より）

8　SD5　断面（北より）



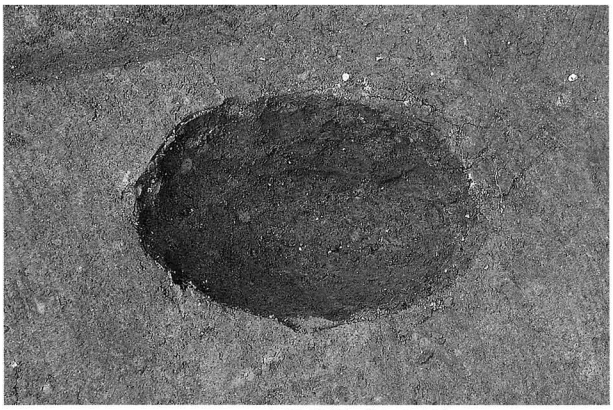
9　SD6　断面（北より）

10　SD7　断面（西より）

11　SD8　断面（西より）

図版16　小溝状遺構

12　P6　完掘状況（南より）



13　P7　完掘状況（南より）

14　P8　完掘状況（南より）

15　P9　完掘状況（南より）

16　北壁断面　西半

17　北壁断面　東半

18　Ⅶ層遺構完掘状況（東より）

図版17　遺構調査・完掘状況

Ⅵ　大野田古墳群第11次発掘調査報告書

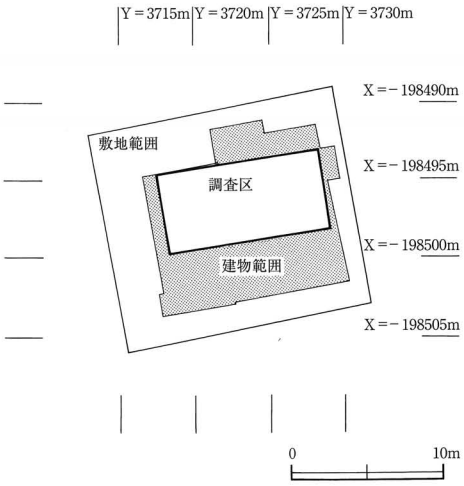
1．調査要項

遺　跡　名　　大野田古墳群（宮城県遺跡番号01361）
調 査 地 点　　仙台市太白区大野田字千刈田８－４、８－５、８－６
調 査 期 間　　平成17年６月１日～６月23日
調査対象面積　　110.82㎡
調 査 面 積　　47.5㎡
調 査 原 因　　個人住宅建築
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　　文化財教諭　門馬有希　今野秀治　　主任　荒井格

2．調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成17年２月24日付けで、地権者加賀美泰一郎氏より、深さ３ｍの杭打ちを伴う木造２階建て個人住宅建築の発掘届が提出されたため行われた。

調査は、建物予定部分に10ｍ×５ｍの調査区を設定し、重機によりⅠ層～Ⅳ層の除去を行い、標高約11.2ｍにあたるⅤ層上面で人力による遺構検出作業と遺構の掘り込みを行った。



第37図　調査区配置図

3．遺跡の位置と環境

大野田古墳群の地形・地質及び歴史的環境については、第10次発掘調査報告書を参照されたい。今回の調査地点は、仙台市営地下鉄富沢駅の東約150ｍの地点にあたり、標高は約11.9ｍである。

4．基本層序

基本層は14層を確認した。

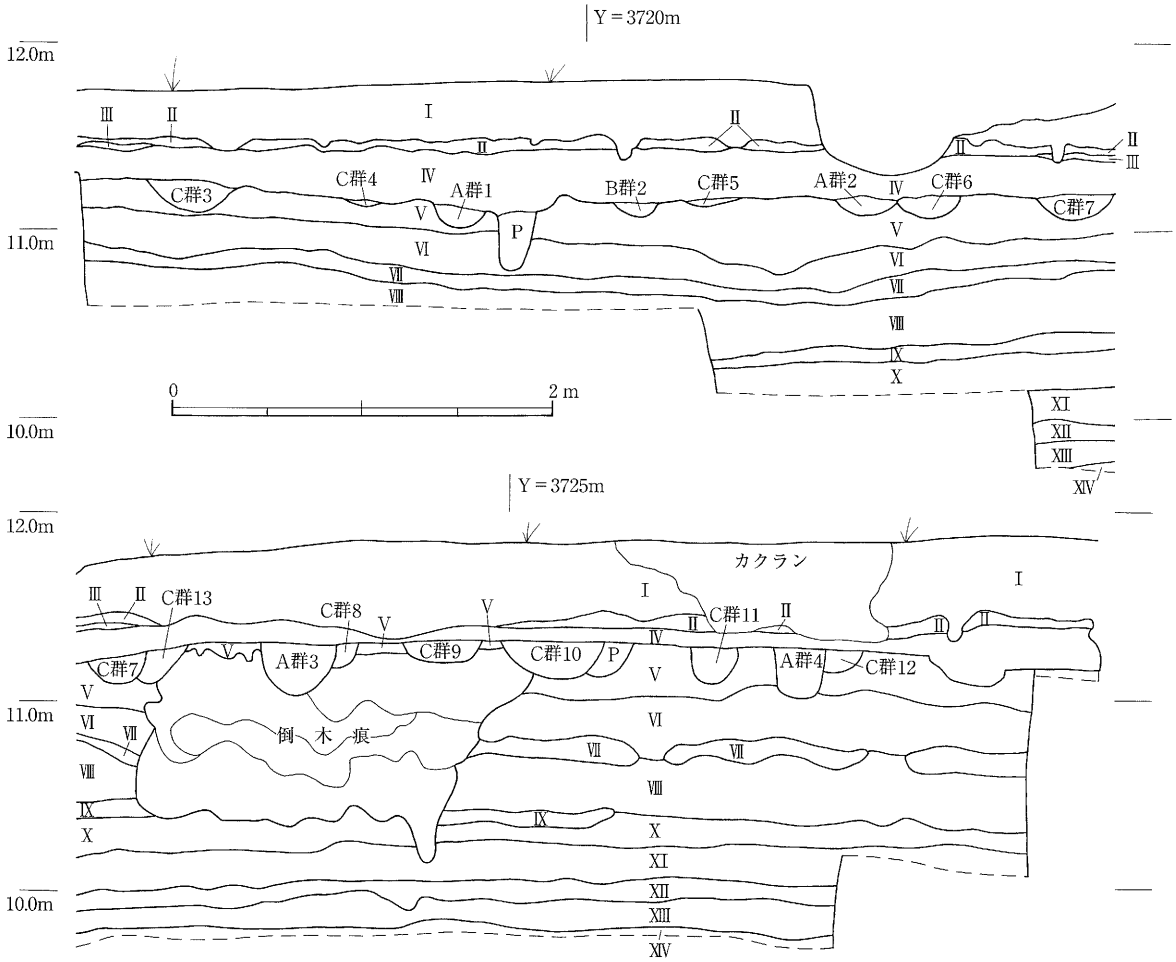
Ⅰ　層：黄褐色粘土質シルト。旧水田耕作土で層厚は約30cmである。
Ⅱ　層：暗褐色粘土質シルト。酸化鉄を多く含み、層厚は約５cmである。
Ⅲ　層：にぶい黄褐色シルト。マンガン粒と灰白色火山灰を斑状に含み、層厚は約５cmである。
Ⅳ　層：暗褐色粘土質シルト。上部に酸化鉄を多く含み、層厚は約20cmである。
Ⅴ　層：にぶい黄褐色シルト。マンガン粒を斑状に少量含み、層厚は約20cmである。遺構検出面である。
Ⅵ　層：にぶい黄褐色粘土質シルト。マンガン粒を斑状に少量含み、層厚は約15～20cmである。
Ⅶ　層：褐色シルト。酸化鉄を斑状に少量含み、層厚は約10cmである。
Ⅷ　層：にぶい黄褐色粘土質シルト。炭化物を粒状に多く含み、層厚は約30cmである。
Ⅸ　層：褐色シルト。炭化物を粒状に少量含み、層厚は約10cmである。
Ⅹ　層：暗褐色粘土質シルト。酸化鉄を斑状に少量含み、層厚は約20cmである。

Ⅹ Ⅰ層：にぶい黄褐色シルト。層厚は約20cmである。

Ⅹ Ⅱ層：暗褐色シルト質砂。マンガン粒を多く含み、層厚は約10cmである。

Ⅹ Ⅲ層：褐色砂質シルト。φ1～３mm程度の砂粒を含み、層厚は約10～15cmである。

Ⅹ Ⅳ層：褐色砂礫層。拳大前後の円礫、亜円礫からなり、層厚は約５cm以上である。



層No.	土　色	土　性	備　考
Ⅰ	2.5Y5/3　黄褐色	粘土質シルト	旧水田耕作土
Ⅱ	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄多く含む
Ⅲ	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	マンガン粒と灰白色火山灰を斑状に含む
Ⅳ	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	上部に酸化鉄多く含む
Ⅴ	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	マンガン粒斑状に少量含む
Ⅵ	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	マンガン粒斑状に少量含む
Ⅶ	10YR4/4　褐色	シルト	酸化鉄斑状に少量含む

層No.	土　色	土　性	備　考
Ⅷ	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物粒状に多く含む
Ⅸ	10YR4/4　褐色	シルト	炭化物粒状に少量含む
Ⅹ	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄斑状に少量含む
Ⅺ	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト	
Ⅻ	10YR3/3　暗褐色	シルト質砂	マンガン粒多く含む
XIII	10YR4/4　褐色	砂質シルト	φ1～３mm程度の砂粒含む
XIV	10YR4/4　褐色	砂礫層	拳大前後の円礫、亜円礫からなる

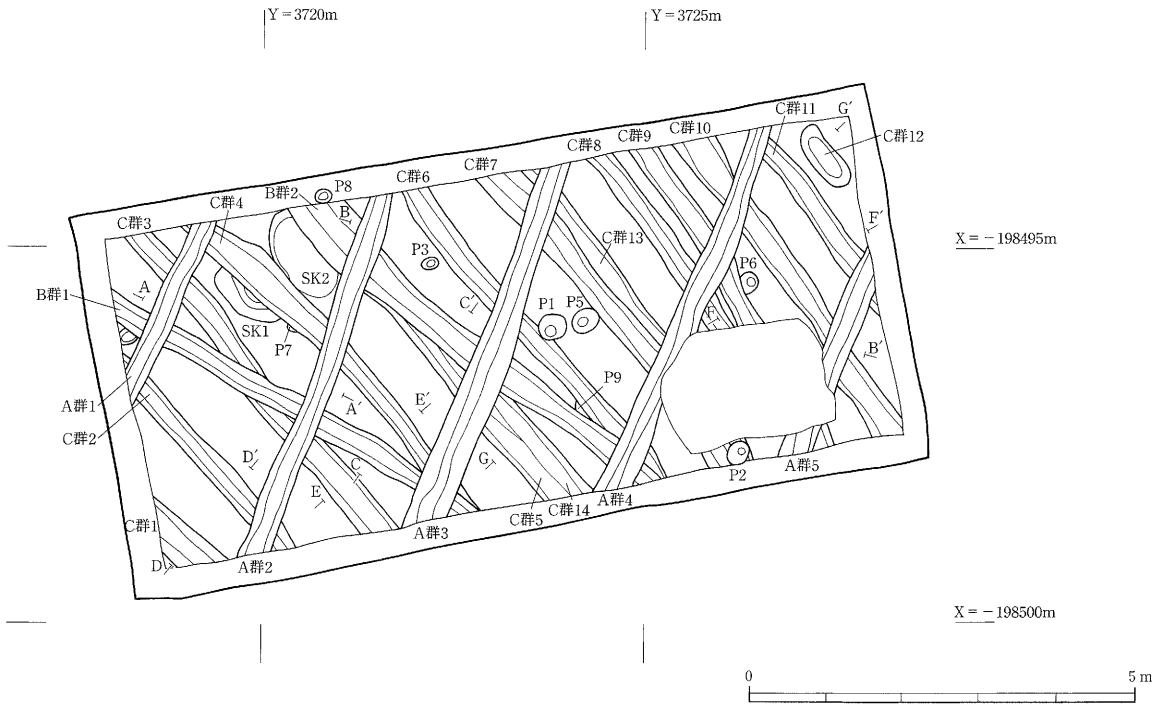
第38図　北壁土層断面図

５．発見遺構と出土遺物

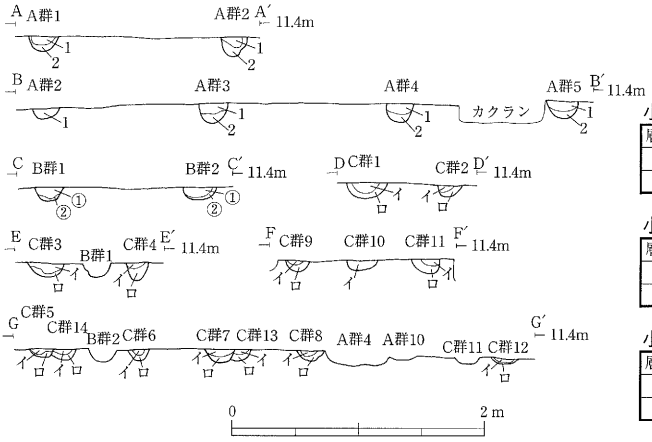
Ⅴ層上面から、小溝状遺構群３群、土坑２基、ピット９個が検出されている。

１）小溝状遺構群

小溝状遺構群A群　調査区全域にわたって北東から南西に伸びる小溝跡である。心々距離およそ2.1m前後で平行して５条検出された。A群はB群、C群を切っており小溝状遺構群中で最も新しい。小溝跡の規模は、検出長2.5～5.2m、上端幅32～40cm、下端幅28～36cm、深さ８～22cmで、中軸方向はN－21°－E前後を示す。堆積土は２層に分けられ、上層が褐色シルト質粘土を粒状に含む灰黄褐色シルト質粘土、下層が褐色シルト質粘土をブロック状に含む灰黄褐色シルト質粘土である。堆積土から出土した遺物は時期不明の土師器片２点である。



第39図　遺構配置図



小溝状遺構群A群

層No.	土　色	土　性	備　考
1	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	褐色シルト質粘土を粒状に含む
2	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	褐色シルト質粘土をブロック状に含む

小溝状遺構群B群

層No.	土　色	土　性	備　考
①	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土質シルトを粒状に含む
②	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む

小溝状遺構群C群

層No.	土　色	土　性	備　考
イ	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	褐色シルト質粘土を粒状に含む
ロ	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	灰黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む

第40図　小溝状遺構群断面図

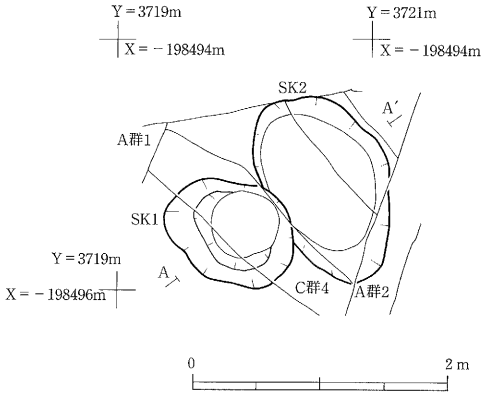
小溝状遺構群B群　調査区全域にわたって西北西から東南東に伸びる小溝跡である。心々距離およそ1.9m前後で平行して２条検出された。B群はA群に切られ、C群を切っている。小溝跡の規模は、検出長5.4～5.7m、上端幅36～42cm、下端幅30cm前後、深さ11～15cmで、中軸方向はN－59°－W前後を示す。堆積土は２層に分けられ、上層が灰黄褐色粘土質シルトを粒状に含む黒褐色粘土質シルト、下層が灰黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む黒褐色粘土質シルトである。堆積土から出土した遺物は時期不明の土師器片１点である。

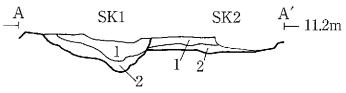
小溝状遺構群C群　調査区全域にわたって北西から南東に傾く小溝跡である。心々距離およそ1.1m前後で平行して14条検出された。A群・B群に切られている。またC群５とC群14、C群７とC群13、C群８とC群９については、重複もしくは近接した位置にあり、小時期変遷の可能性がある。小溝跡の規模は、検出長0.9～5.1m、上端幅32～61cm、下端幅23～55cm、深さ4～18cmで、中軸方向はN－34°－W前後を示す。堆積土は２層に分けられ、上層が褐色シルト質粘土を粒状に含む灰黄褐色粘土質シルト、下層が灰黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む褐色シルト質粘土である。堆積土から出土した遺物は時期不明の土師器片３点である。

2）土坑

SK１土坑　調査区の北西部に位置する。SK２土坑を切り、小溝状遺構群C群に切られる。平面形は不整楕円形を呈し、規模は、長径105cm、短径85cm、深さ32cmである。堆積土は２層に分けられ、上層が褐色シルト質粘土を粒状に含む灰黄褐色粘土質シルト、下層が褐色粘土質シルトをブロック状に含むにぶい黄褐色シルト質粘土である。遺物は出土していない。

SK２土坑　調査区の北西部に位置する。SK１土坑及び小溝状遺構群A群・B群・C群に切られる。平面形は不整楕円形を呈し、規模は、長径155cm、短径88cm、深さ11cmである。堆積土は２層に分けられ、上層が褐色シルト質粘土をブロック状に含む灰黄褐色粘土質シルト、下層が褐色粘土質シルトを粒状に含むにぶい黄褐色シルト質粘土である。遺物は出土していない。





SK1

層No.	土　色	土　性	備　考
1	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	褐色シルト質粘土を粒状に含む
2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色粘土質シルトをブロック状に含む

SK2

層No.	土　色	土　性	備　考
1	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	褐色シルト質粘土をブロック状に含む
2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色粘土質シルトを粒状に含む

第41図　SI1・SK2土坑平面、断面図

3）ピット

ピットは９個検出した。平面形は円形ないし楕円形を基調とする。規模は、長径20～50cm、短径16～41cm、深さ13～34cmである。堆積土は、灰黄褐色もしくは黒褐色のシルト系の土を主体とする単層で、柱痕跡は確認されなかった。遺物は出土していない。

6．まとめ

① 本調査区は、大野田古墳群の北西部に位置する。

② Ｖ層上面では、小溝状遺構群３群、土坑２基、ピット９個が検出された。

③ 土坑２基は、小溝状遺構群３群より古いものである。

④ 小溝状遺構群の新旧は、重複関係により、A群が最も新しく、次いでB群、C群となる。若干の土師器が出土しているものの時期決定資料は得られていないが、これまでの周辺での調査結果から古墳時代中期以降、奈良時代以前の時期と考えられる。

⑤ 遺物は、小溝状遺構群から時期不明の土師器片が数点出土しているが、図示できるような資料はなかった。

＜参考・引用文献＞

仙台市教育委員会（2000）『大野田古墳群・王ノ壇遺跡・六反田遺跡』仙台市文化財調査報告書第243集

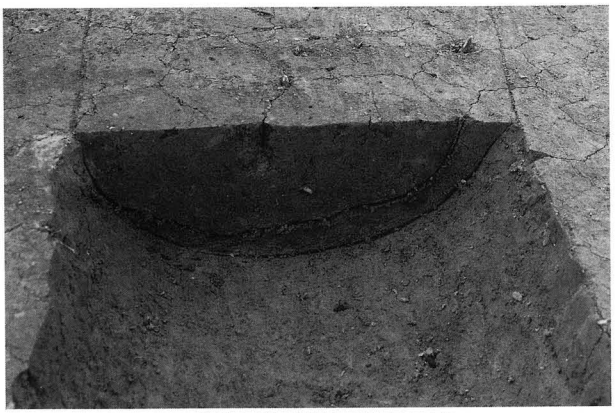
仙台市教育委員会（2005）『山田本町遺跡他』仙台市文化財調査報告書第287集

仙台市教育委員会（2005）『大野田古墳群　第８次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第290集

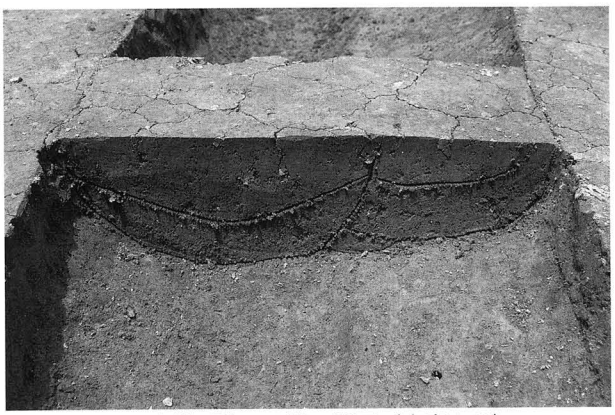
1　完掘全景（東より）

2　北壁断面（南より）

4　SK1、SK2土坑（南東より）



4　小溝B群2断面（南東より）



5　小溝C群7、C群13断面（南東より）

図版18　第11次調査区の状況

Ⅶ　元袋遺跡第５次発掘調査報告書

１．調査要項

遺　跡　名　　元袋遺跡（宮城県遺跡番号01179）

調 査 地 点　　仙台市太白区大野田字元袋19

調 査 期 間　　平成17年４月18日～４月28日

調査対象面積　　131.71㎡

調 査 面 積　　32㎡

調 査 原 因　　住宅造成

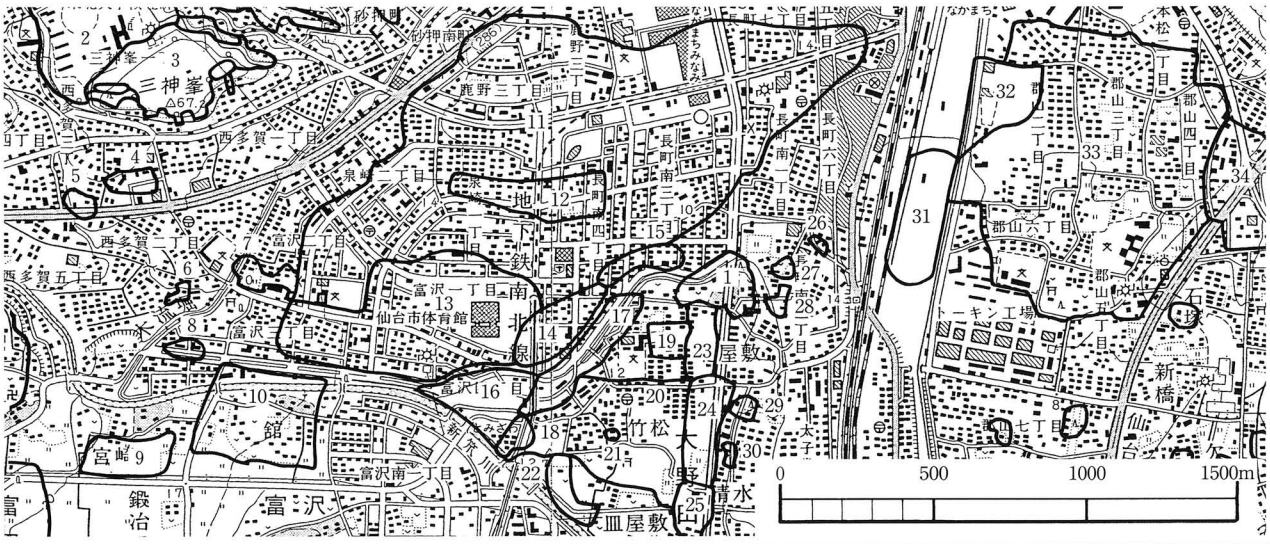
調 査 主 体　　仙台市教育委員会

調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係

担 当 職 員　　文化財教諭　　浅野克樹　　三塚博之

２．調査に至る経過と調査方法

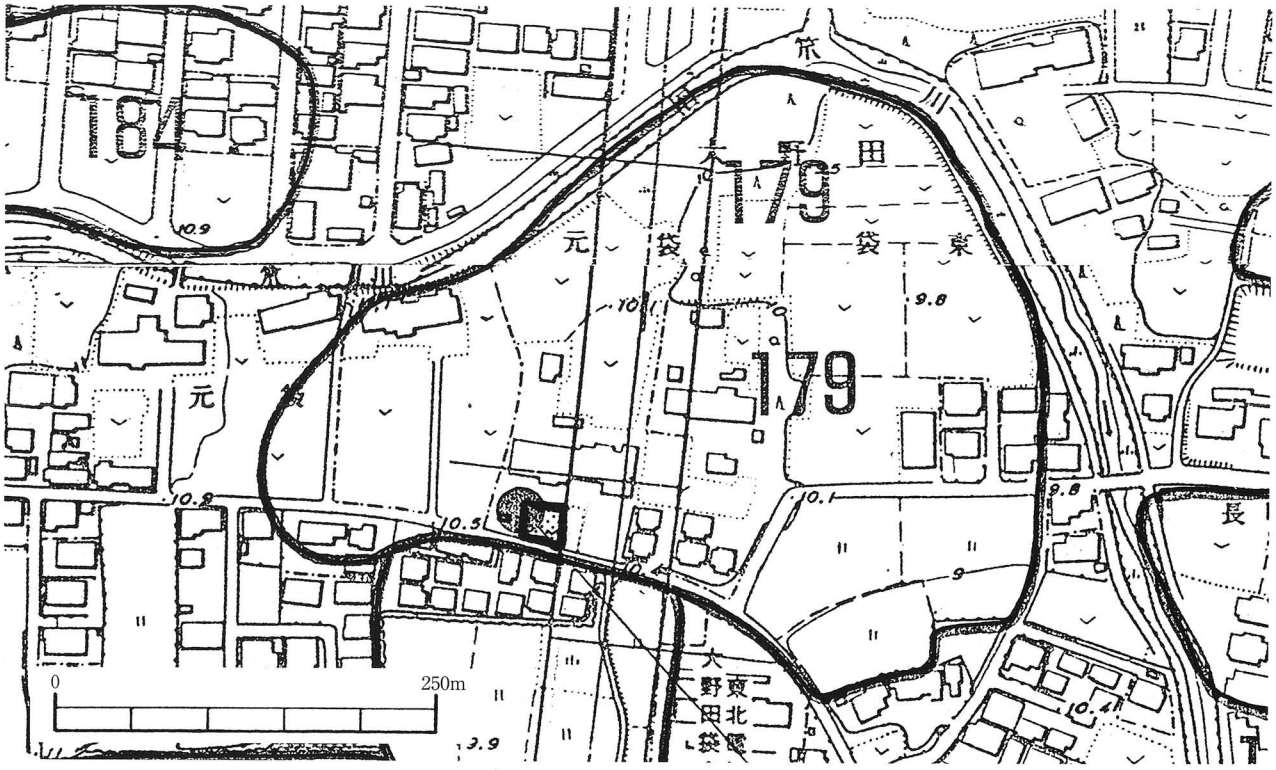
本調査は、平成17年４月４日付けで岩佐和則氏より仙台市太白区大野田字元袋19における木造２階建て店舗付個人住宅の建設に伴う発掘届が提出されたことに基づく。仙台市教育委員会では申請者と協議のうえ発掘調査を行う



No.	遺跡名	種　別	立　地	年　代	No.	遺跡名	種　別	立　地	年　代
1	元袋遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	弥生、古代、中世、近世	18	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古墳、古代
2	芦の口遺跡	集落跡	丘陵	縄文、弥生、古代	19	袋前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古代
3	三神峯遺跡	集落跡	丘陵	縄文、古代	20	大野田古墳群	円墳	自然堤防	古墳
4	西台窯跡	窯跡	丘陵麓	古代	21	春日社古墳	円墳	自然堤防	古墳
5	原遺跡	散布地	丘陵麓	弥生、古代	22	伊古田Ｂ遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古墳、古代
6	富沢上ノ台遺跡	散布地	自然堤防	縄文、古代	23	大野田遺跡	祭祀、集落跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代
7	富沢清水遺跡	散布地	丘陵麓	古代	24	王ノ壇遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、中世
8	堀ノ内遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代	25	皿屋敷遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	古代、中世
9	鍛冶屋敷Ａ遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古代	26	長町六丁目遺跡	散布地	自然堤防	古代
10	富沢館跡	城館跡	自然堤防	中世	27	長町南遺跡	散布地	自然堤防	古代
11	富沢遺跡	散布地、水田跡	後背湿地	旧石器、縄文、弥生、古墳、古代～近世	28	新田遺跡	散布地	自然堤防	古代
12	泉崎浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、近世	29	北屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古代
13	山口遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文、弥生、古墳、古代、中世	30	長町清水遺跡	散布地	自然堤防	古墳
14	下ノ内浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、中世	31	長町駅東遺跡	集落跡	自然堤防	弥生、古墳、古代
15	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代	32	西台畑遺跡	散布地、甕棺墓	自然堤防	縄文、弥生、古墳
16	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、中世	33	郡山遺跡	官衙跡、寺院跡、散布地	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代
17	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、近世	34	北目城跡	城館跡、集落跡、水田跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、近世

第42図　遺跡の位置と周辺の遺跡

こととした。当該地は、過去の近隣の調査結果より、奈良・平安・中世の遺構や江戸時代初め頃の屋敷跡に伴う堀の延長部が検出される可能性があることから、調査は建設予定地に東西４ｍ×南北８ｍ（32㎡）の調査区を設定した。重機により盛土・表土部分を掘り下げ、現地表下約１ｍで遺構を検出し、調査を行った。



第43図　調査地点の位置

３．遺跡の位置と環境

元袋遺跡はJR東北本線長町駅より東西へ約１km、地下鉄長町駅から南へ約600mの地点、仙台市太白区大野田字元袋、袋東地内に所在する。周辺は宮城野海岸平野に含まれ、河川に沿った自然堤防とその後背湿地からなっている。この自然堤防を形成した河川の一つが西の青葉山丘陵に源を持つ名取川の支流の笊川である。大野田地区は永く水田または畑として利用されてきたが、昭和30年代後半から市街地化が進み、周辺一帯の景観は変貌してきている。当遺跡は笊川が南に大きく流れを変える地点の南岸の自然堤防上に位置している。

元袋遺跡が所在する大野田、富沢周辺は仙台市内でも数多くの遺跡が分布する地域である。旧石器時代の遺跡としては笊川の北岸に位置する富沢遺跡が知られており、焚き火跡と考えられる炭化物の集中箇所、石器、樹木・種子をはじめとする植物遺体やシカの糞などが発見されている。縄文時代中期以降になると笊川流域の自然堤防上には数多くの遺跡が見られるようになる。笊川南岸では縄文時代中期、後期の竪穴住居跡が、また北岸では後期の配石遺構が発見されている。弥生時代以降、笊川北岸の後背湿地では水田が経営されるようになる。富沢遺跡では弥生時代中期から後期にかけての水田跡が重層的に発見されている。また下ノ内浦遺跡では石庖丁、太型蛤刃石斧を副葬した弥生時代の土壙墓が発見されている。古墳時代の中期から後期にかけて大野田地区には古墳群が形成される。これまで前方後円墳と円墳が発見されており、円筒埴輪、朝顔形埴輪などが出土している。また、前期から中期の竪穴住居跡も発見されており、集落があったことが判明している。奈良・平安時代になると遺跡の分布は全般的に拡大し、その数も増加する傾向にある。この時期のものとしては水田跡や集落跡が発見されている。中世から近世にかけては、屋敷跡や水田跡などが確認されている。

４．基本層序

Ⅰ層：灰色粘土質シルト

下層に酸化鉄を含む。旧水田耕作土と考えられる。

Ⅱ層：にぶい黄褐色砂質シルト

褐色シルトのブロックを含む。

Ⅲ層：褐色シルト

植物遺体を少量含む。旧畑作耕作土と考えられる。

Ⅳ層：暗褐色シルト

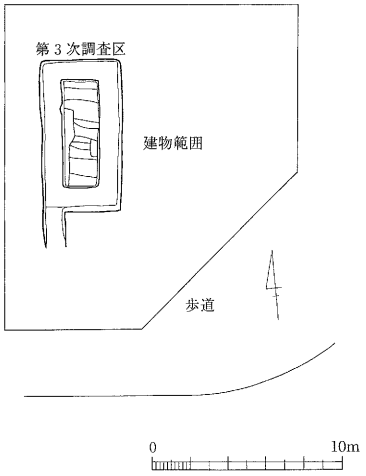
全体に炭化物を含む。旧畑作耕作土の可能性がある。

Ⅴ層：褐色シルト質粘土

調査区の北半でのみ確認している。

Ⅵ層：褐色シルト質粘土

調査区の南半でのみ確認している。炭化物を全面に含む。



第44図　調査区配置図

５．発見遺構と出土遺物

１）溝跡

SD１溝跡　調査区全体が東西にのびるSD１溝跡の中に位置する。平成７年に当該地の西で元袋遺跡第３次調査が実施されているが、その際に確認された中世から近世初めの屋敷跡に伴う堀跡（SD３）の延長部である可能性が高い。溝跡は２時期確認されており、元袋遺跡第３次調査の結果を参考に北側の新しい方をSD１a溝、南側の古い方をSD１b溝とした。溝の方向は、SD１a溝はE－18°－S、SD１b溝は、E－23°－Sである。深さはSD１a溝で120cmで堆積土は５層に分かれる。１層は灰色の粘土質シルト、２層は褐灰色の粘土、３層は灰黄褐色の粘土、４層は灰色のシルト、５層は暗灰黄色の砂質シルトである。全体に酸化鉄が含まれ下層はグライ化している。２，３層は人為的に埋め戻された土と考えられる。SD１b溝の深さは140cmで堆積土は５層に分かれている。１層はにぶい黄褐色の粘土、２層は灰黄褐色の粘土、３層はにぶい黄褐色の粘土、４層はにぶい黄褐色の粘土、５層はオリーブ黒色のシルトである。５層には植物遺体が多く含まれている。遺物は土師器・石臼・砥石などが出土している。

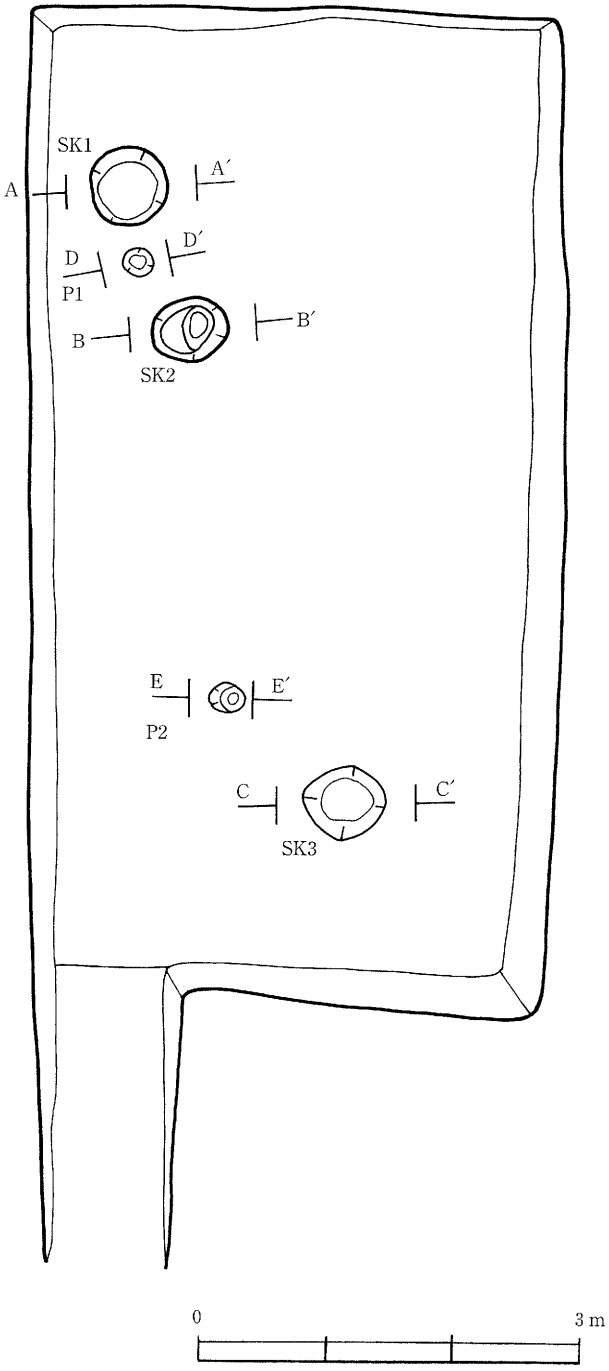
２）土坑

SD１溝跡の上面で土坑を３基検出している。

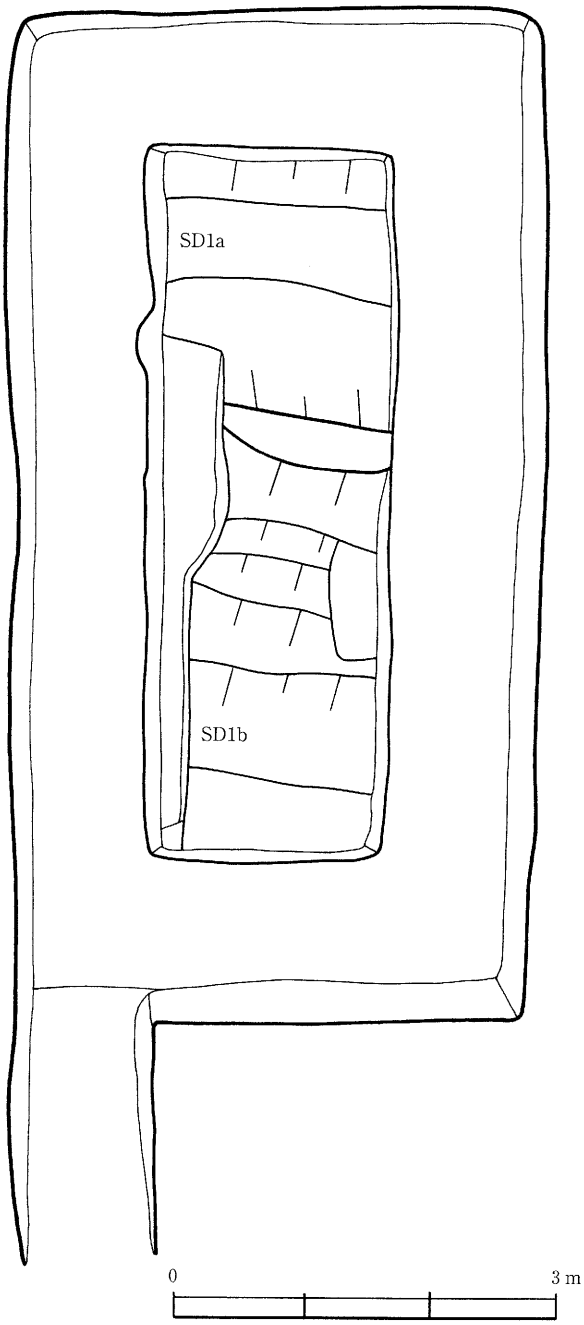
SK１土坑　平面形は円形で直径約70cm、深さは30cmで断面形はゆるやかなU字形を呈する。堆積土は褐色シルト質粘土で黄褐色粘土のブロック、酸化鉄粒を全体に含んでいる。出土遺物はない。

SK２土坑　平面形は楕円形で南北短軸50cm、東西長軸60cmを測る。断面形は東部の一部が深くなる不整なU字形をしており最深部で30cmを測る。堆積土は３層に分かれ１層が褐色シルト質粘土、２層が黄褐色粘土、３層が黄灰色粘土となっている。出土遺物はない。

SK３土坑　平面形は円形で直径70cmほどである。断面形はゆるやかなU字形を呈し深さは20cmを測る。堆積土は１層で、褐色シルト質粘土で、黄褐色粘土のブロックを含んでおり炭化物も少量含んでいる。出土遺物は縄文土器片が１点出土している。



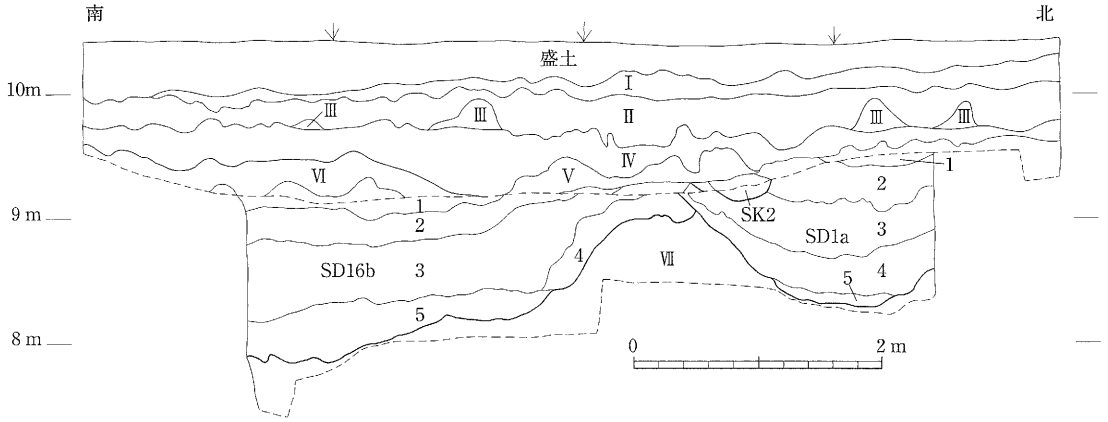
第45図　遺構実測図（溝跡堆積土上面）



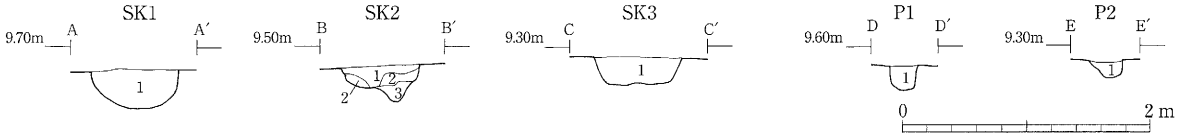
第46図　遺構実測図（SD１）

３）ピット

SD１溝跡の上面でピット２個を検出した。出土遺物はピット２から18世紀ぐらいと思われる瀬戸美濃の陶器片が出土している。



第47図　西壁断面図



基本層序

層位	土　色	土　質	備　考
Ⅰ	5Y4/1　灰色	粘土質シルト	下層に酸化鉄を含む　旧水田耕作土
Ⅱ	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質シルト	褐色シルトのブロックを含む　旧畑作耕作土
Ⅲ	10YR4/4　褐色	シルト	植物遺体を少量含む
Ⅳ	10YR3/4　暗褐色	シルト	全体に炭化物を含む　旧畑作耕作土？
Ⅴ	10YR4/6　褐色	シルト質粘土	調査区北半でのみ確認
Ⅵ	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	調査区南半でのみ確認　炭化物を全面に含む 褐色土、にぶい黄褐色土を含む
Ⅶ	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質シルト	明黄褐色砂質シルトを小ブロック状に含む。

SD1a

層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト	褐灰色粘土のブロックを含む
2	10YR5/1　褐灰色	粘土	人為的に埋め戻された土　灰黄褐色粘土の小ブロックを含む　全面に酸化鉄を含む
3	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	人為的に埋め戻された土　褐灰色粘土の大ブロックを多量に含む　全面に酸化鉄を含む
4	5Y5/1　灰色	シルト	全面に酸化鉄を含む
5	2.5Y5/2　暗灰黄色	砂質シルト	全面に酸化鉄を含む

SD1 b

層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄を微量に含む
2	10YR5/2　灰黄褐色	粘土	全面に酸化鉄を含む
3	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘土	全面に酸化鉄を含む　下層グライ化
4	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	にぶい黄褐色砂を含む　Ⅴ層に接する面は黒褐色に変色　全面に酸化鉄を含む
5	5Y3/2　オリーブ黒色	シルト	植物遺体を多量に含む　特に下層に多い　礫を多量に含む　全面グライ化

SK1

層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	黄褐色粘土のブロックを含む 酸化物粒を全面に含む

SK2

層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	黄褐色粘土のブロックを含む 酸化物粒を全面に含む
2	10YR5/6　黄褐色	粘土	１層の小ブロックを含む　酸化物粒を含む
3	2.5Y4/1　黄灰色	粘土	酸化物粒を全面に含む

SK3

層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	黄褐色粘土のブロックを全体に含む 炭化物を少量含む

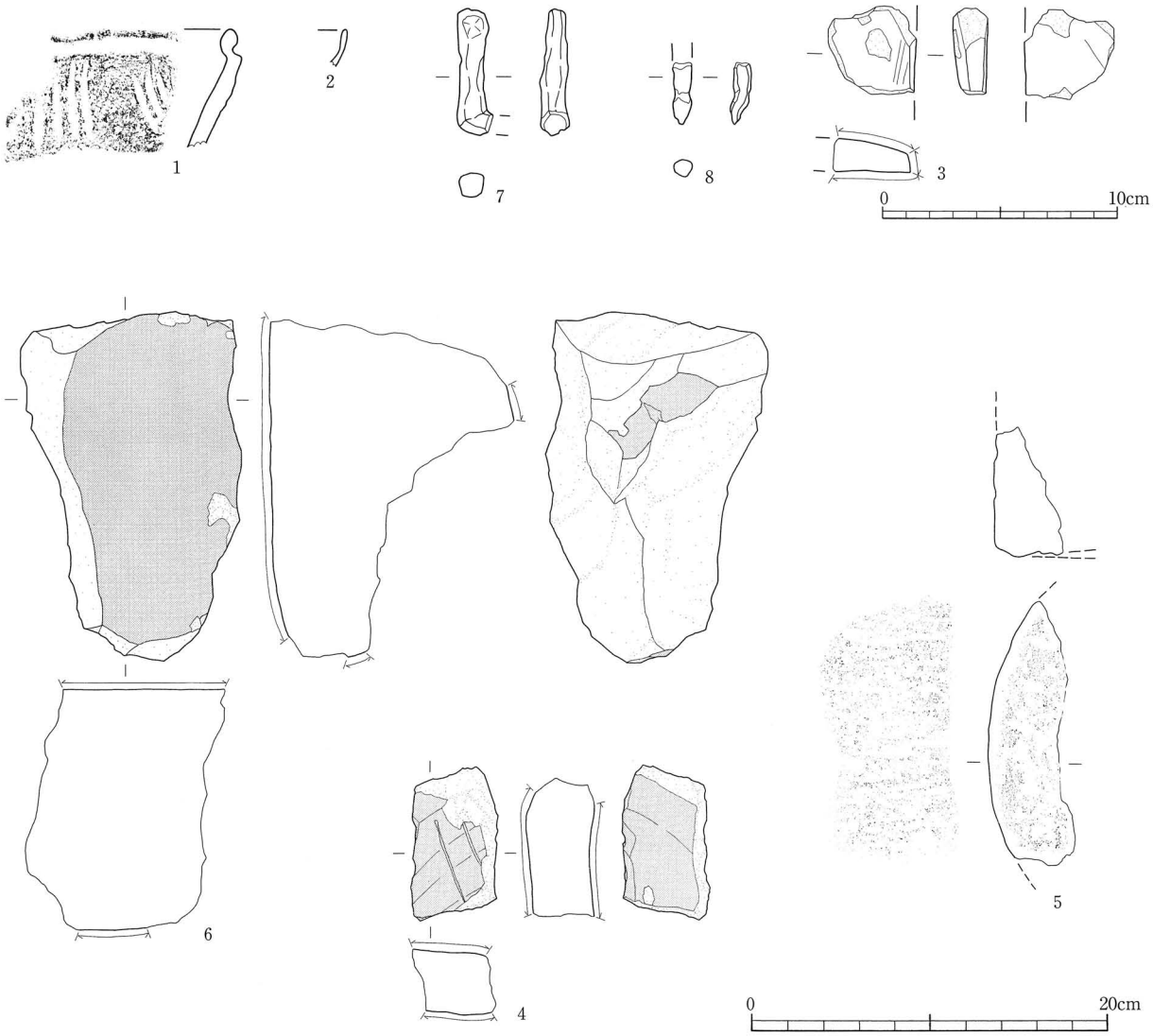
P1

層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	酸化物粒を少量含む

P2

層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	黄褐色粘土ブロックを含む 炭化物、酸化物粒を全面に含む

第48図　遺構断面図



図中番号	登録番号	出土地点				分類		法量				特徴・備考（調整・素材・産地・時期・分類）	写真図版
		基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重		
1	A-1		SK3	1層		縄文土器	鉢	(5.0)				沈線文　縄文晩期	22-1
2	I-1		P2	1層		陶器	埦	(1.5)				灰釉がけ　瀬戸美濃18C頃	22-2
3	K-1		SD1b			石製品	砥石	(3.7)	(3.7)	1.5	25	砥面3面	22-3
4	K-2		SD1b			礫石器	磨面のある礫	(8.7)	4.8	(3.8)	230		22-4
5	K-3		SD1b	5層		石製品	石臼	(7.2)			450	側面に縦のノミ痕	22-5
6	K-4		SD1b	5層		礫石器	磨面のある礫	19.6	(12.0)	13.6	3090	3面にすり面あり	22-6
7	N-1					金属製品	不明	(5.3)	1.1	1.2		上部に穴あり？L字状	22-7
8	N-2					金属製品	不明	(2.6)	(0.8)	(0.7)			22-8

第49図　出土遺物

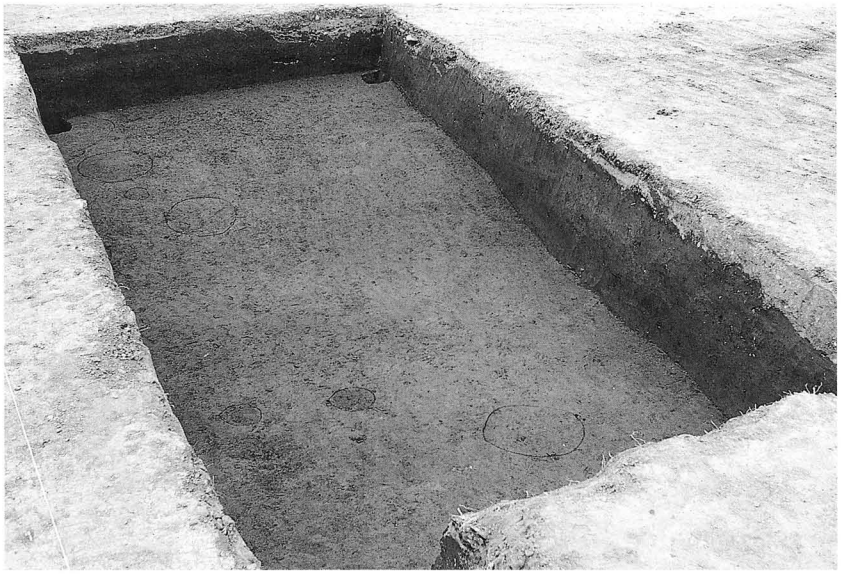
6．まとめ

① 今回の調査区は遺跡範囲の最南端で、3次調査の東側に当たる。

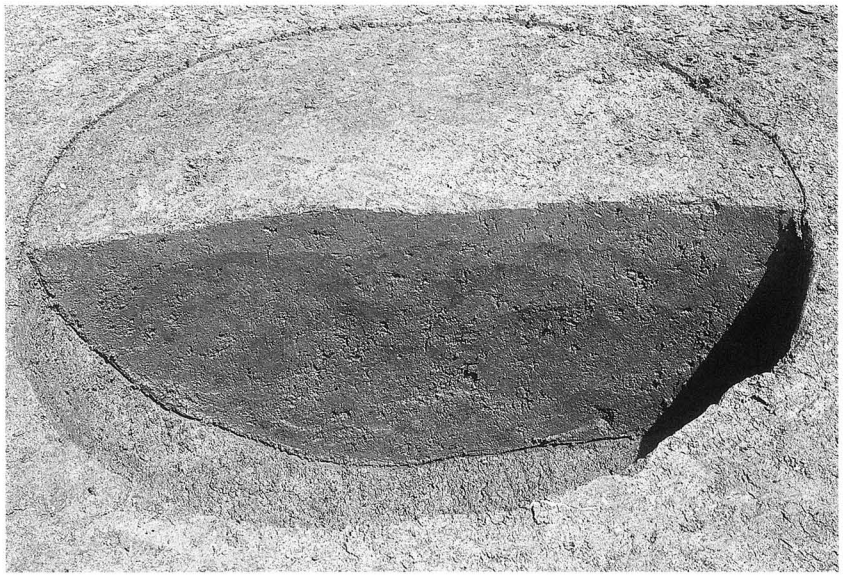
② 調査の結果、東西方向に伸びる溝跡1条、土坑3基、ピット2個を確認した。この溝跡については元袋遺跡第3次調査で検出された中世から近世初めの屋敷跡に伴う堀の延長部であると考えられる。土坑・ピットについては時期不明である。

＜参考・引用文献＞

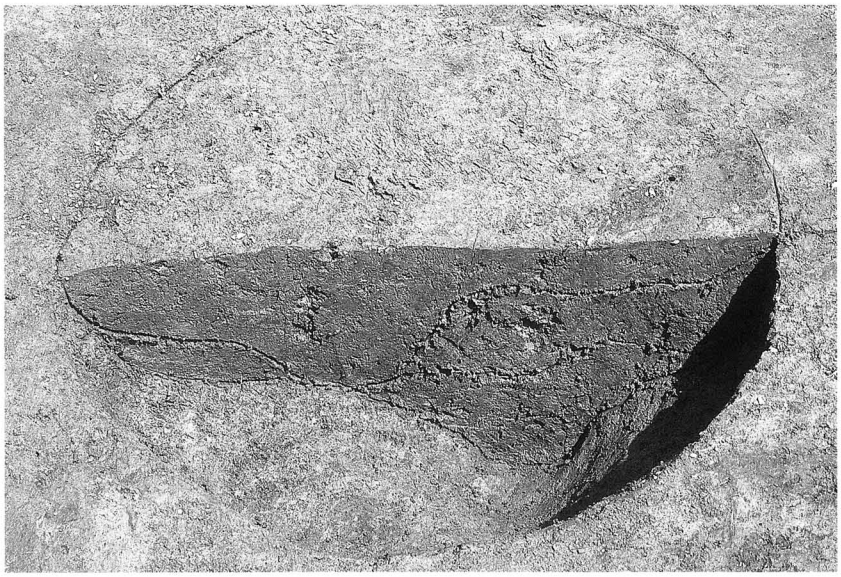
斎野裕彦・川名秀一（1994）「元袋遺跡第2次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第188集



1　遺構検出状況（南西より）

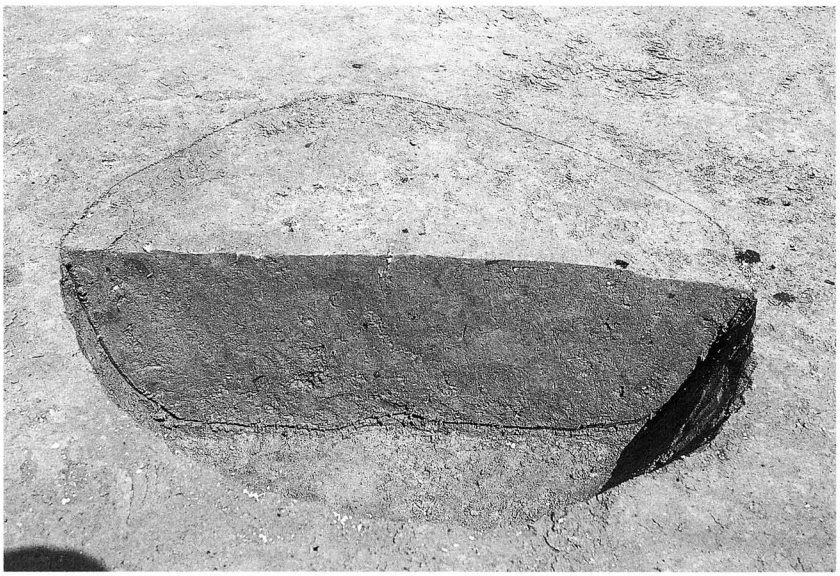


2　SK1断面（南より）

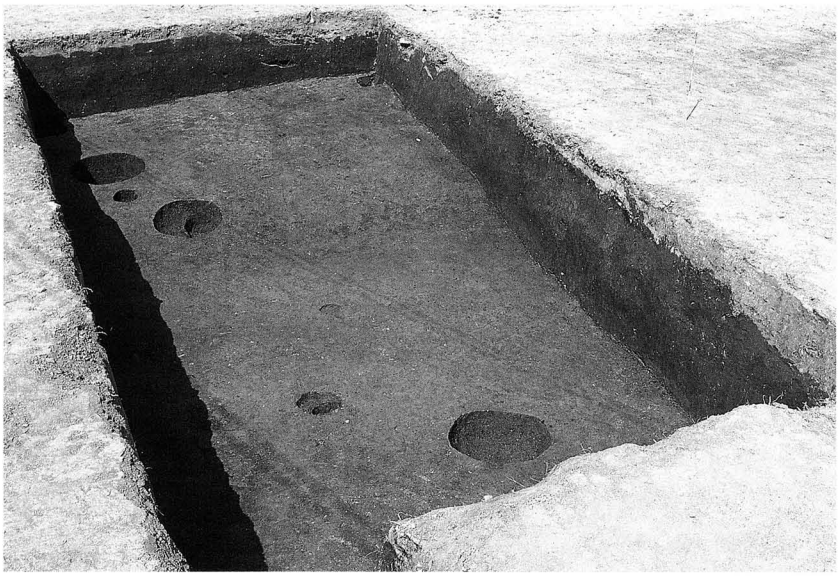


3　SK2断面（南より）

図版19　遺構検出状況・土坑



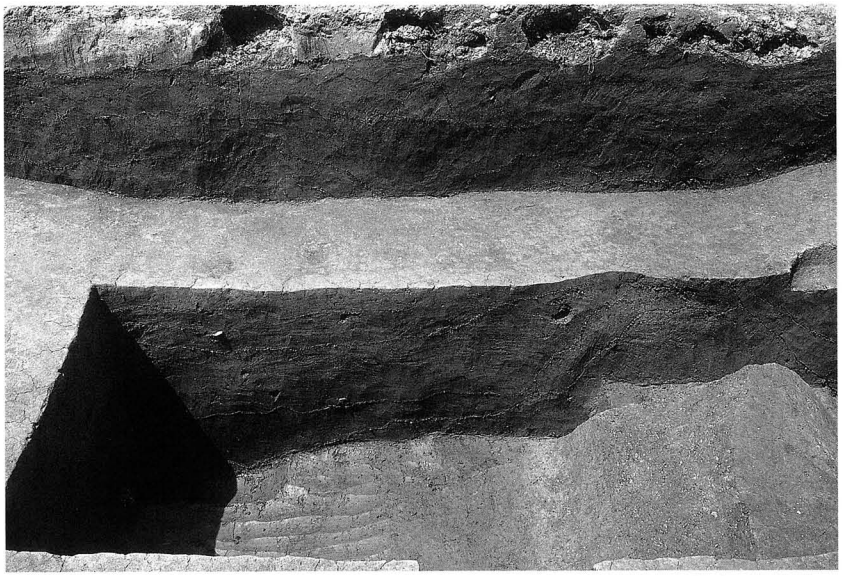
1　SK3土坑断面（南より）



2　土坑、ピット完掘状況（南西より）

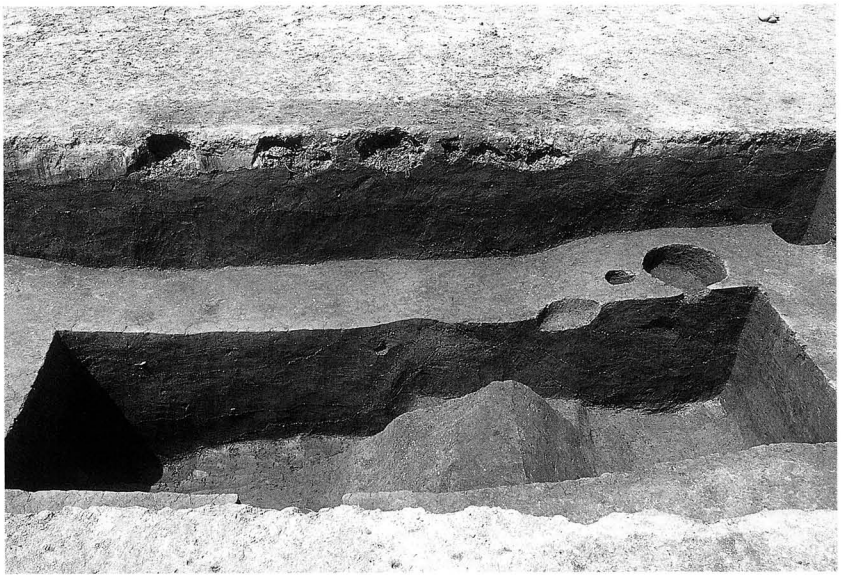
3　SD1a溝跡（東より）

図版20　土坑・溝跡



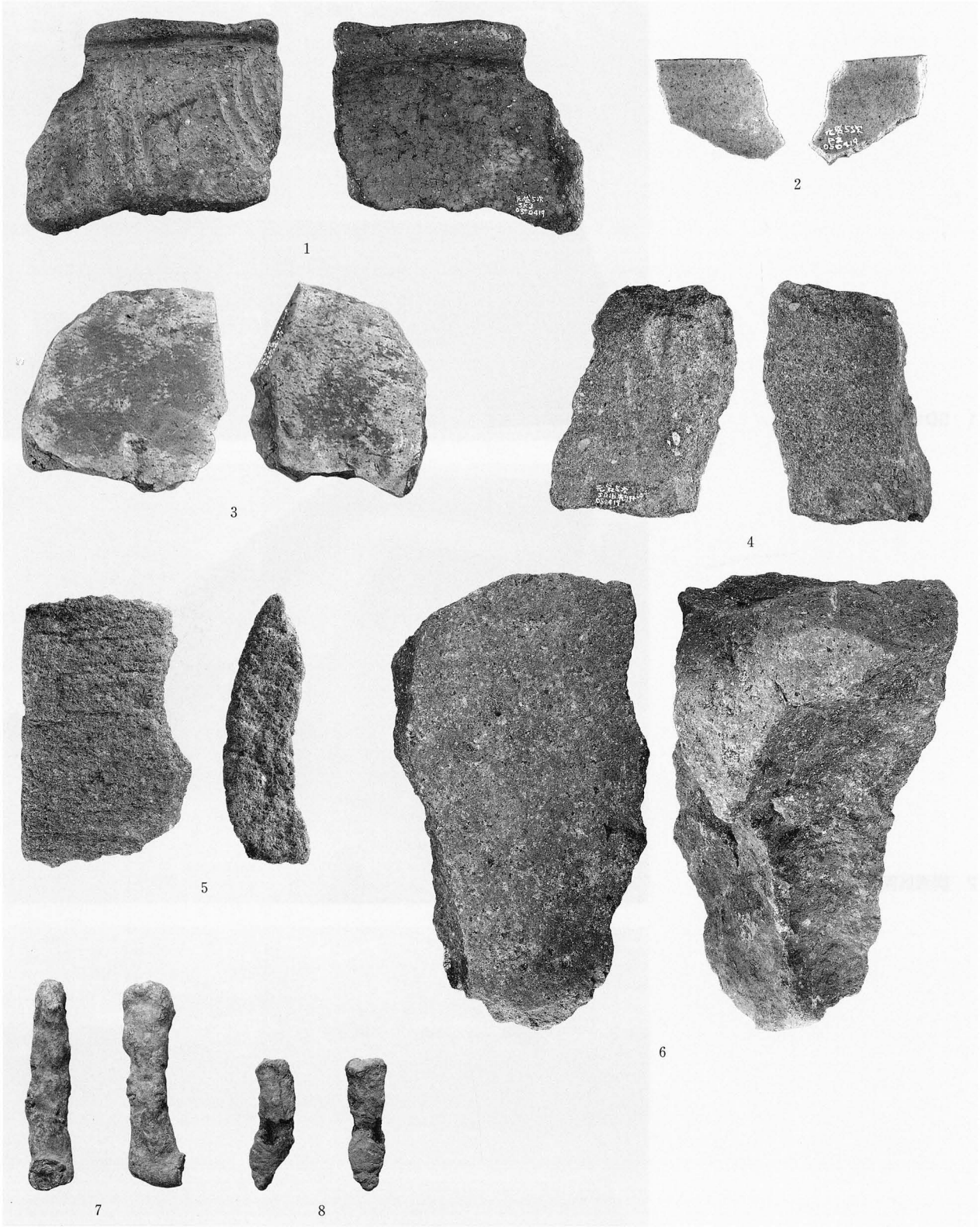
1　SD1b溝跡（東より）

2　調査区完掘全景（南面より）



3　調査区西壁断面（東より）

図版21　溝跡・完掘全景・土層断面



1	縄文土器	鉢	A－1	SK 3	1層	(第49図1)	5	石製品	石臼	K－3	SD 1 b	5層	(第49図5)
2	陶器	埦	I－1	P 2	1層	(第49図2)	6	礫石器	磨面のある礫	K－4	SD 1 b	5層	(第49図6)
3	石製品	砥石	K－1	SD 1 b		(第49図3)	7	鉄製品		N－1			(第49図7)
4	礫石器	磨面のある礫	K－2	SD 1 b		(第49図4)	8	鉄製品		N－2			(第49図8)

図版22　元袋遺跡第5次調査出土遺物

Ⅷ　鴻ノ巣遺跡第10次発掘調査報告書

1．調査要項

遺　跡　名　　鴻ノ巣遺跡（宮城県遺跡番号01034）

調 査 地 点　　仙台市宮城野区岩切三所北123－２、124－９

調 査 期 間　　平成17年５月13日

調査対象面積　　70㎡

調 査 面 積　　21㎡

調 査 原 因　　個人住宅建築

調 査 主 体　　仙台市教育委員会

調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係

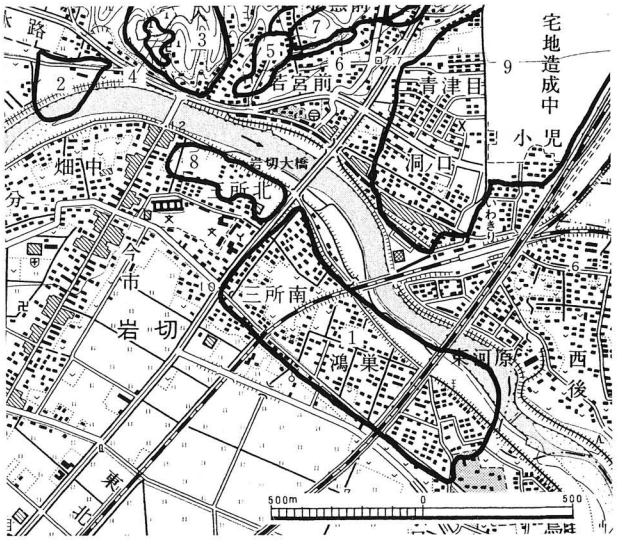
担 当 職 員　　主査　工藤哲司　　文化財教諭　浅野克樹　赤岡光騎

2．調査に至る経過と調査方法

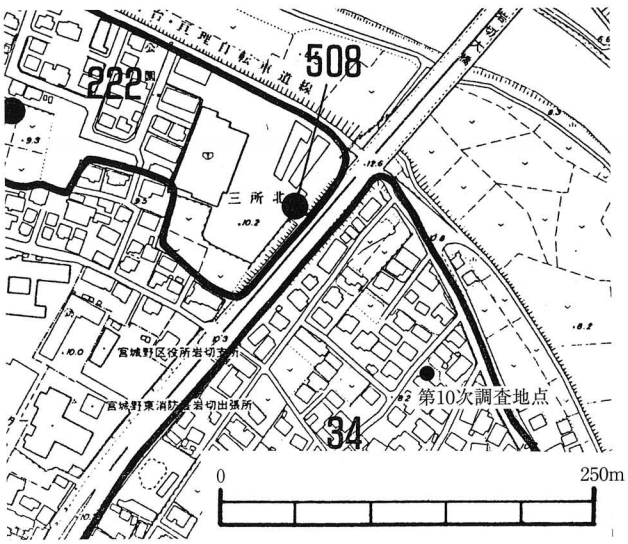
本調査は、平成17年４月27日付けで、地権者及川真弓氏より、深さ７ｍの柱状土壌改良を伴う住宅建築の発掘届が提出されたため行われた。

調査は、建物予定部分に東西７ｍ×南北３ｍのトレンチを設定し、重機により盛土約100cm、Ⅰ層（旧耕作土）約30cmを掘り下げ、標高8.3mにあたるⅡ層上面で人力による遺構検出作業を行った。

溝跡・土坑・井戸跡などが検出されたが、検出面から約70cm掘ったところで湧水が見られたため、それ以上の掘り下げは行わなかった。



第50図　遺跡の位置と周辺の遺跡

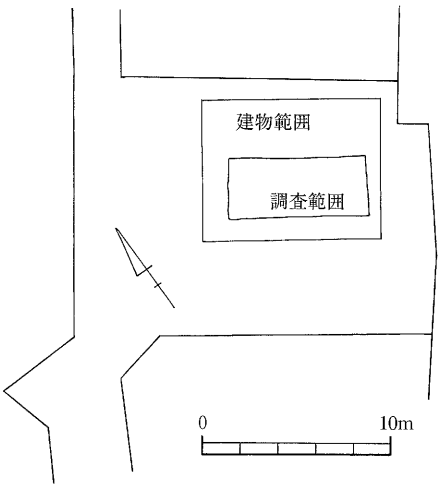


第51図　調査地点の位置

番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	鴻ノ巣遺跡	集落	自然堤防	古墳・古代・中世
2	新宿囲遺跡	包含地	自然堤防	古代
3	東光寺遺跡	城館・寺院	丘陵	中世
4	東光寺板碑群	板碑	丘陵	中世
5	若宮前遺跡	包含地	丘陵	中世
6	羽黒前遺跡	包含地	丘陵	中世・近世
7	羽黒前板碑群	板碑	丘陵	中世
8	今市遺跡	集落	自然堤防	古代・中世・近世
9	洞ノ口遺跡	城館	自然堤防	古墳・古代～近世

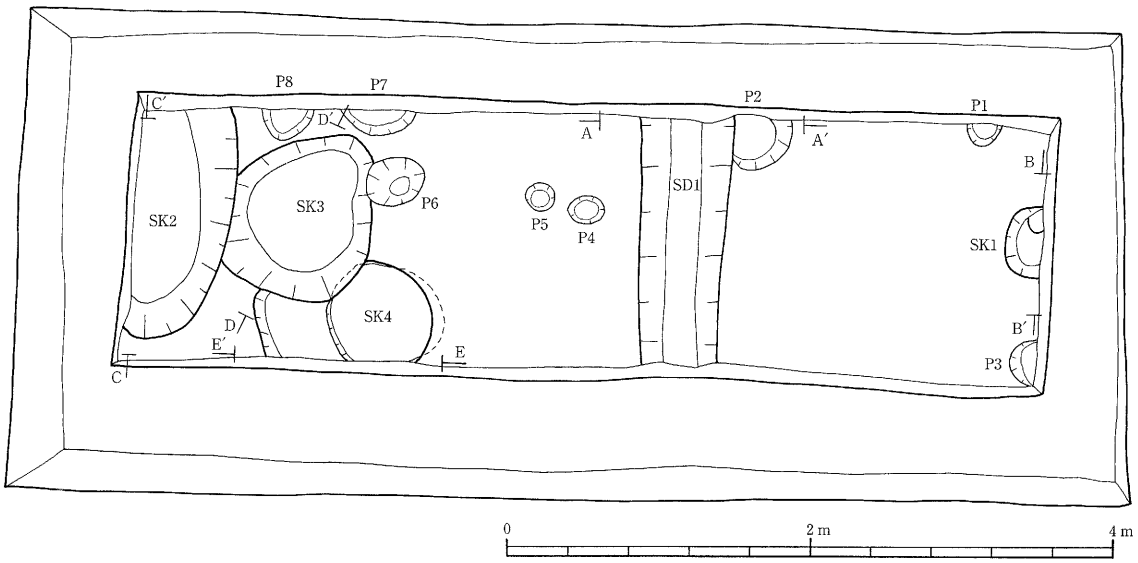
3．遺跡の位置と環境

鴻ノ巣遺跡は、仙台市北東部のJR岩切駅の南東約0.5kmに位置し、仙台市北部を流れる七北田川右岸に形成されている標高８ｍ前後の自然堤防に立地する。遺跡の北西約0.5kmには、標高100ｍ～40ｍの富谷丘陵の東端が迫り、岩切城跡や東光寺遺跡が立地している。遺跡の南西約1.5kmには、標高70ｍ～40ｍの七北田丘陵が迫り、燕沢遺跡が立地している。

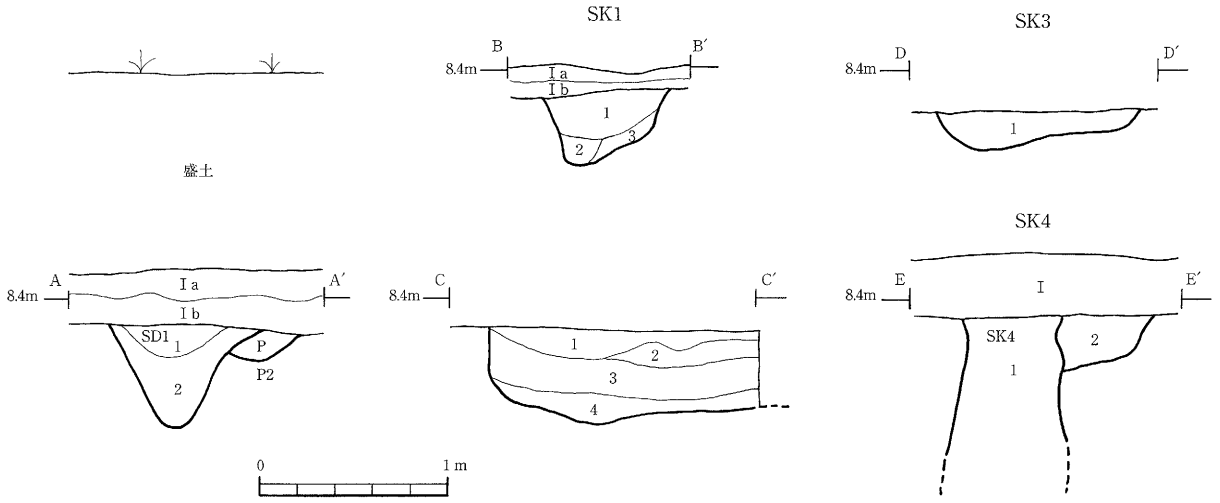


第52図　調査区配置図

周辺の沖積地では、多賀城市の山王遺跡で弥生時代中期以降の遺跡が発見されている。古墳時代前期になると、鴻ノ巣遺跡や今市遺跡でも遺物が発見されるようになる。古墳時代中期には鴻ノ巣遺跡に大規模な集落が形成され、第７次調査で、集落の一部が柵列とその外側を巡る溝に囲まれていることが確認されている。古墳時代後期から終末期になると、山王遺跡に集落が形成され、新田遺跡では祭祀に関係すると考えられる多数の土器がまとまって出土した遺構が発見されており、鴻ノ巣遺跡でも同期の土器が約60個体まとまって出土している。奈良時代になると、遺跡の北東約３kmの低丘陵に多賀城が造営され、以後周辺地域は陸奥国の中心として栄えることとなる。奈良時代から平安時代にかけては、鴻ノ巣遺跡や今市遺跡にも集落が形成されるが、七北田川左岸の新田遺跡・山王遺跡・市川橋遺跡で計画的な土地地割と道路が整備され、都市的な空間が広がっていたことと比較すると遺構・遺物はまばらで閑散としている。中世になると遺跡の北西の1.5kmに陸奥国留守職伊沢氏の居城岩切城が築かれ、陸奥国府周辺の所領を支配した。対岸の洞ノ口遺跡には城館が形成されている。また、岩切城の麓には留守氏の菩提寺として東光寺が建立され、霊場としての信仰を集め、磨崖仏や150基を越す板碑群がある。中世の文書には、岩切付近に「冠屋市場」と「河原宿五日市場」という２つの市場が存在したという記載があり、鴻ノ巣遺跡はこのどちらかにあたると考えられている。これまでの調査では、市の存在を証明するだけの遺構は発見されていないが、小規模ながら屋敷を囲むような溝跡や掘立柱建物跡、井戸跡など多数の遺構や多くの遺物が発見され、活発な歴史の舞台となっていたことを示している。



第53図　遺構実測図



第54図　遺構断面図

SD1

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	砂をわずかに含む
2	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	壁際に褐色土のブロックを含む　炭化物を含む

SK1

1	10YR3/4　暗褐色	シルト	褐色土のブロックをわずかに含む
2	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	
3	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	褐色土のブロックを多量に含む

SK2

1	10YR2/3　黒褐色	砂質シルト	炭化物をわずかに含む
2	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	褐色土のブロックを多量に含む
3	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	炭化物を多く含む
4	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	炭化物を縞状に含む

基本層

	土　色	土　質	備　考
盛土			盛土および攪乱
Ⅰa層	10YR5/2　灰黄褐色	砂質シルト	旧耕作土上部
Ⅰb層	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物を含む。暗褐色土をまばらに含む
Ⅱ層	10YR4/4　褐色	砂質シルト	Ⅰ層とⅡ層の境に部分的に暗褐色土が分布している

SK3

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/3　暗褐色	シルト	炭化物を多量に含む　下部に褐色土のブロックを含む

SK4

1	10YR3/3　暗褐色	シルト	砂をわずかに含む
2	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	壁際に褐色土のブロックを含む　炭化物を含む

ピット

P1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	褐色土のブロックを少量含む
P2	10YR3/3　暗褐色	シルト	褐色土のブロック、炭化物を含む
P3	10YR3/3　暗褐色	シルト	褐色土の小ブロックを多量に含む
P4	10YR2/3　黒褐色	シルト	褐色土のブロックをわずかに含む
P5	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	Ⅰ層に類似
P6	10YR3/4　暗褐色	シルト	褐色土、炭化物を多く含む
P7	10YR3/3　暗褐色	シルト	褐色土粒、炭化物を多量に含む
P8	10YR3/4　暗褐色	シルト	褐色土を多量に含む

4．基本層序

約100cmの盛土層があり、その下に約30cmの旧耕作土（Ⅰ層）がある。上部Ⅰa層は層厚約20cmの灰黄褐色の砂質シルト層で、近年の畑の耕作土であると考えられる。下部Ⅰb層は層厚約10cmのにぶい黄褐色の砂質シルト層で、炭化物、暗褐色土をまばらに含んでいる。Ⅱ層は褐色の砂質シルト層で、遺構検出面である。Ⅰ層とⅡ層の境に部分的に暗褐色土が分布している。

5．発見遺構と出土遺物

Ⅱ層上面で溝跡１条、土坑４基、ピット８個を検出した。

１）溝跡

SD１溝跡　調査区を南北方向に横切って検出された。幅は上端で約55cm、下端は約10cm、断面形はV字形で、検出面からの深さは約60cmである。堆積土は２層に分けられ、１層は人為的堆積と考えられる。遺物は出土していない。

2）土坑

SK１土坑　調査区東壁際で検出された。平面形は直径約50cmの円形と考えられるが、東側は調査区外へのびる。断面形は不整なＵ字形で、深さ約25cmである。壁面は、北側は急に、南側はゆるやかに立ち上がる。堆積土は３層に分けられ、各層とも人為的堆積と考えられる。遺物は出土していない。

SK２土坑　調査区西壁に沿って検出され、西部・北部ともに調査区外へ続いている。平面形は楕円形と推定される。検出部は東西40cm、南北150cmである。断面形は不整な舟底形で、深さ約40cmである。壁はやや急に立ち上がる。堆積土は４層に分けられる。３層から中世陶器片が出土している。

SK３土坑　調査区西部で検出された。SK２土坑に切られ、SK４土坑を切っている。平面形は楕円形を呈し、長軸約100cm、短軸約80cmである。断面形は不整な舟底形で深さ約20cmである。堆積土は１層である。遺物は出土していない。

SK４土坑（井戸跡）　調査区西部、南壁に接して検出された。平面形は直径約100cmの円形を呈している。２段の掘り込みとなっており、西側は深さ約30cmに舟底形に下がり、東側は深さ70cm以上の円筒形に下がっている。深さ70cm掘り下げた面で湧水があったため調査を中止した。この土坑は、掘り込みが深いこと及び壁面が垂直に立ち上がっていることから井戸跡と考えられる。堆積土は２層に分けられる。１層中から中世陶器片が出土している。

3）ピット

計８個を検出した。平面形は円形を基調とし、大きさは直径20～40cm、検出面からの深さは20～40cmほどである。柱痕跡を検出できたものはない。遺物は出土していない。

6．まとめ

① 本調査区は、鴻ノ巣遺跡の東部中央付近に位置する。

② 標高8.3mの基本層Ⅱ層上面から溝跡１条、土坑４基、ピット８個が発見された。

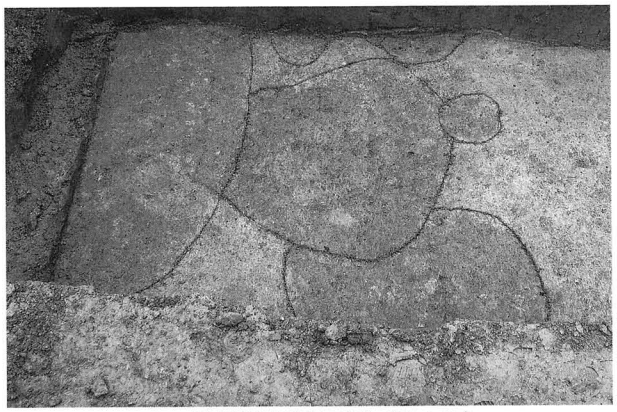
③ 土坑のうち１基は井戸跡の可能性がある。SK２・SK４土坑から中世陶器が出土しており、他の土坑や溝跡の堆積土及びピットの多くは、SK２・SK４土坑の堆積土と類似していることから、遺構の時期は中世を中心とするものと考えられる。

＜参考文献＞

工藤哲司　（2004）『鴻ノ巣遺跡　第７次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第280集

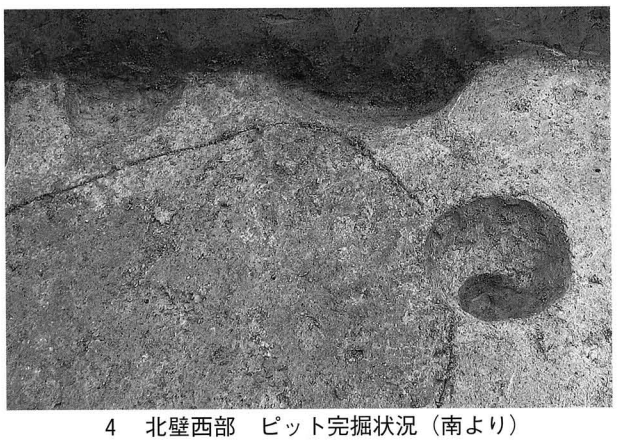
工藤哲司ほか（2005）「Ⅵ鴻ノ巣遺跡第８次発掘調査報告書」『山田本町遺跡ほか　発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第287集

1　遺構検出状況（西より）

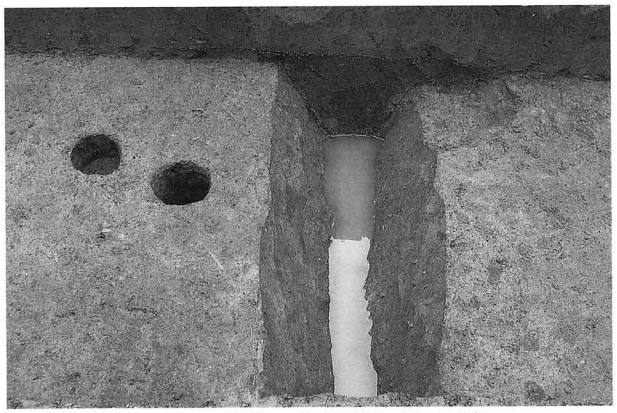


2　遺構検出状況西半（南より）

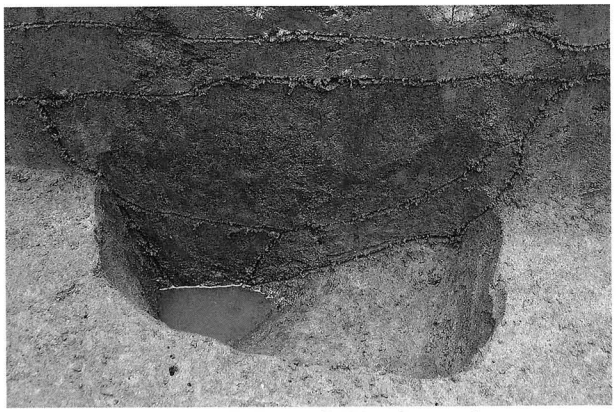
3　遺構検出状況中央（南より）



4　北壁西部　ピット完掘状況（南より）



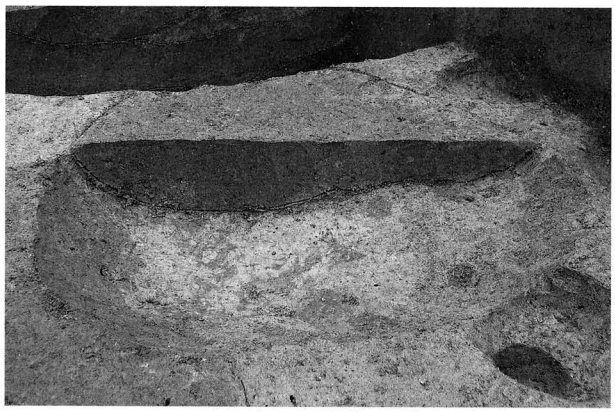
5　SD1溝跡　完掘状況（南より）



6　SK1土坑　調査状況（西より）

7　SK2土坑　調査状況（南東より）

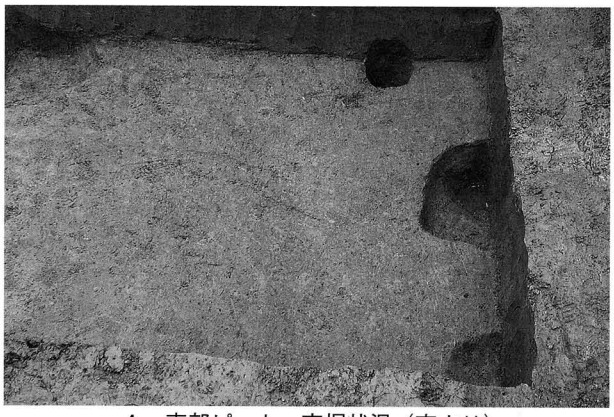
図版23　遺構検出・調査状況



1　SK3土坑　土層断面（東より）

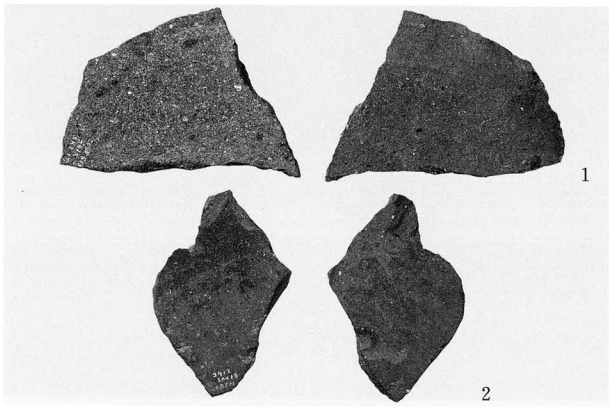
2　SK3土坑　完掘状況（南東より）

3　SK4土坑　完掘状況（北より）



4　東部ピット　完掘状況（南より）

5　北壁土層断面（南より）



7　出土遺物

6　完掘状況（西より）

図版24　土層断面・遺構完掘状況

Ⅸ　北目城跡第４次発掘調査報告書

１　調査要項

遺　跡　名　　遺跡（宮城県遺跡番号01029）
調 査 地 点　　仙台市太白区東郡山２丁目106－４・107－２
調 査 期 間　　平成17年６月７日～６月８日
調査対象面積　　84㎡
調 査 面 積　　24㎡
調 査 原 因　　個人住宅建築
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　　主査　工藤哲司　　文化財教諭　赤岡光騎

２　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成16年４月16日付けで、地権者鈴木一浩氏より、鋼管杭打ちを伴う基礎工法の住宅建築の発掘届が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は平成16年６月７日に着手し、遺構が検出されたので引続き調査を実施し、６月８日に調査を終了した。

確認調査は建物予定地に３ｍ×８ｍのトレンチを設定して行なった。遺構が検出されたが、敷地の制約のため、調査区の拡張は行なわず、当初設定したトレンチのみを調査した。検出遺構のうち、井戸跡については確認面から約180cmまで下げたところでは底面には到らなかったが、安全のため調査を打ち切った。

３　遺跡の位置と環境

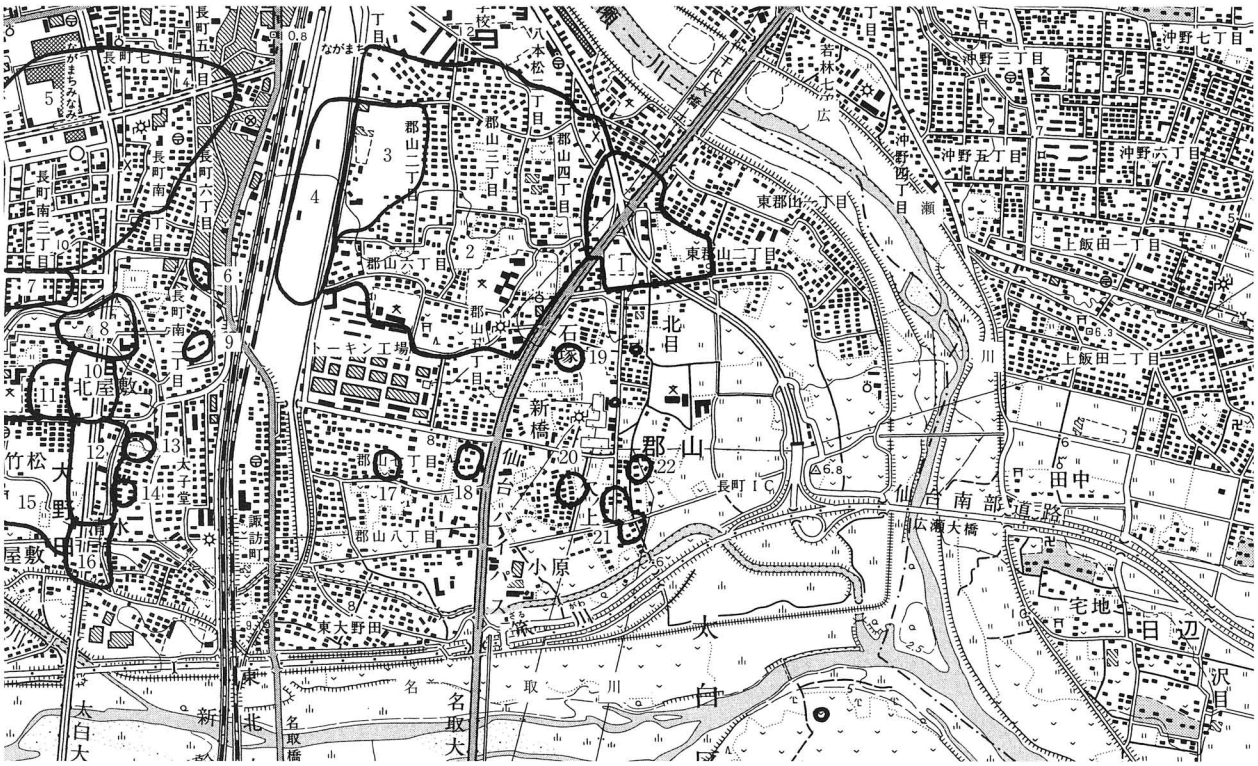
当該地は、仙台駅の南東約1.5kmに位置する。名取川と広瀬川に囲まれた郡山低地の東部にあたり、標高９ｍ前後の自然堤防を中心に立地している。遺跡の西隣には、飛鳥時代から奈良時代にかけての官衙跡として知られる郡山遺跡がある。

北目城跡は、平城形式の城館で、天正年中までは粟野氏の居城となっていた。関が原の戦いの際に伊達政宗が入城し、以来仙台城に移るまで居住したことが知られている。平成４・５年度に行われた都市計画道路建設に伴う調査の際には、「障子堀」を伴う17世紀前半の堀跡などの遺構のほか、その下層からは古代の遺構や弥生時代の水田跡、さらに下層から縄文時代後期後葉の竪穴住居跡も発見されている。遺物としては、陶器・磁器の他、漆器類・刀剣などが出土している。

４　基本層序

調査区内の基本層は、調査区壁面と井戸跡の掘削深度内の壁面観察をあわせ、以下の大別７層、細別９層に分けられた。

盛土層：礫・コンクリート片を含む。層厚は60cm前後である。
Ⅰａ層：10YR3/4暗褐色粘土質シルト。層厚は30cm。炭化物をわずかに含む。近年の畑耕作土層上部。
Ⅰｂ層：10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト。層厚は20cm。Ⅱ層起源の砂を含む。畑耕作土層下部。
Ⅱ　層：10YR5/4にぶい黄褐色シルト質砂。層厚は30～40cm。井戸跡・土坑の検出面。



番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代	番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	北目城跡	城館・水田・集落	自然堤防	縄文～中世・近世	12	王ノ壇遺跡	集落・屋敷	自然堤防	縄文～中世
2	郡山遺跡	官衙・水田・包含地	自然堤防	縄文～中世・近世	13	北屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古代
3	西台畑遺跡	集落・墓地・包含地	自然堤防	縄文・弥生・古代	14	長町清水遺跡	散布地	自然堤防	古墳
4	長町駅東遺跡	集落	自然堤防	弥生・古墳・古代	15	大野田古墳群	古墳・集落	自然堤防	縄文～中世
5	富沢遺跡	水田・包含地	後背湿地	旧石器～近世	16	皿屋敷遺跡	集落・屋敷	自然堤防	古代・中世
6	長町六丁目遺跡	散布地	自然堤防	古代	17	的場遺跡	散布地	自然堤防	古代
7	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	18	籠ノ瀬遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
8	元袋遺跡	集落・水田	自然堤防	弥生・古代～近世	19	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
9	新田遺跡	散布地	自然堤防	古代	20	欠ノ上Ⅰ遺跡	水田	後背湿地	古墳・古代
10	大野田遺跡	集落・祭祀	自然堤防	縄文・弥生～古代	21	欠ノ上Ⅱ遺跡	集落	自然堤防	古墳・古代
11	袋前遺跡	集落	自然堤防	縄文・古代	22	欠ノ上Ⅲ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代

第55図　遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅲａ層：10YR4/2灰黄褐色粘土。層厚は10cm。炭化物をわずかに含む。

Ⅲｂ層：10YR2/3黒褐色粘土。層厚は３～５cm。

Ⅳ　層：10YR6/3にぶい黄橙色シルト質粘土。層厚は60～70cm。層上部はにぶい黄橙色土が主体となり、土層の下１／３に黒色土の薄層を縞状に含む。

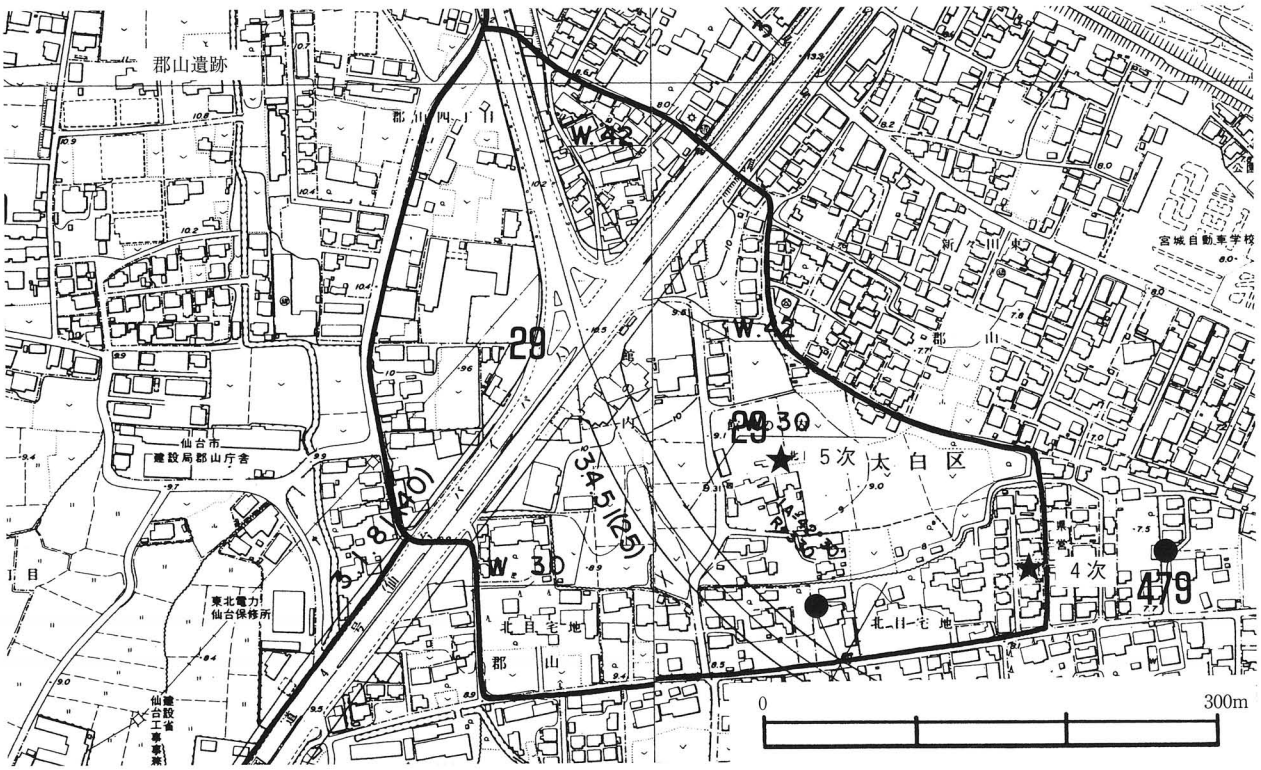
Ⅴ　層：黒色土と灰黄褐色土の互層。黒色土層中には植物遺体を含む。

Ⅵ　層：10YR4/1褐灰色粘土。層厚は30cm。

Ⅶ　層：2.5GY5/1オリーブ灰色砂質シルト。層厚は10cm以上。粘土分を含む。

5　発見遺構と出土遺物

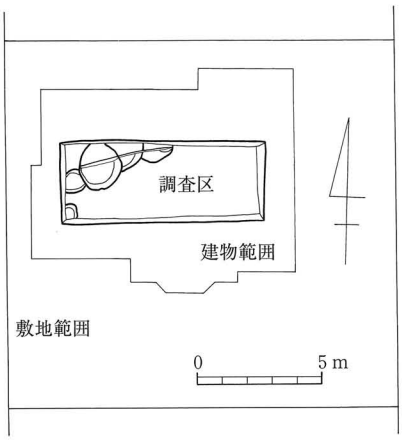
表土及び撹乱層を除去した面は、調査区西部はⅡ層が残存していたが、中央部は深い撹乱を受けているために、遺構検出面はⅣ層となった。また東部はⅢa層が検出面となった。調査区西半部で土坑が４基検出された。SK１・２・４・５土坑はⅡ層が検出面である。SK３土坑は、Ⅳ層で検出されているが、前記のような状況から、他の遺構同様に本来の掘り込み面はⅡ層より上位であると考えられる。



第56図　調査地点の位置

土　坑

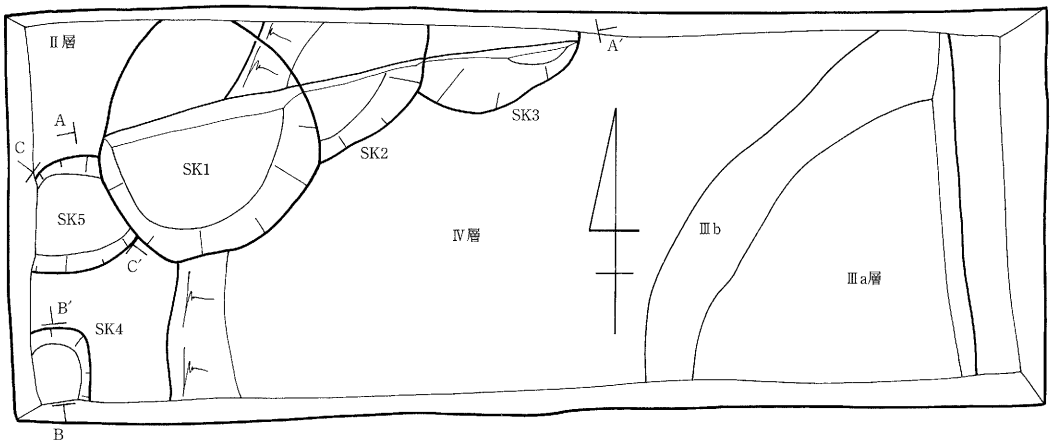
SK１土坑（井戸跡）　調査区西部の北壁際で検出され、一部は北壁の外にのびる。SK２・５土坑を切る。平面形は円形で、東西軸長175cm・南北軸長184cmを測る。検出面から深さ180cmまで掘り下げたが底面に達しなかった。調査部分は円筒状に掘られている。調査部分の堆積土は４層に分けられる。上部堆積土には礫が含まれている。下部堆積層（４層）には壁面の崩落土がブロック状に含まれ、層の下ほどグライ化が進んでいる。遺物は、４層中から木製の箱型の容器と考えられるものが出土したが、腐食が進み、取り上げることはできなかった。

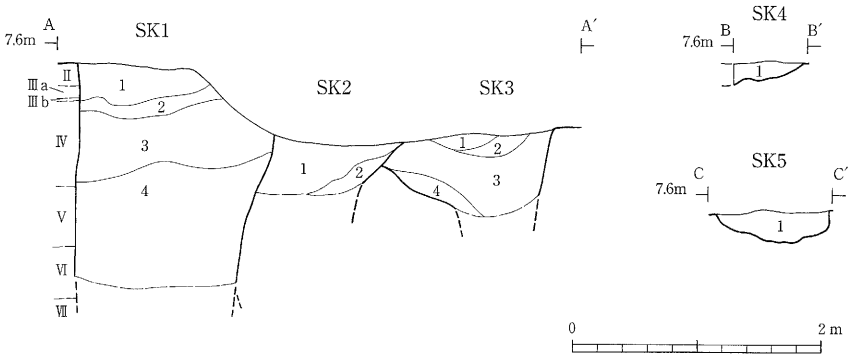


第57図　調査区配置図

SK２土坑（井戸跡）　SK１土坑の東側で検出された。SK３土坑を切り、SK１土坑に切られる。遺構の約半分が調査区の外側にのびるので正確な規模は不明であるが、平面形は円形で、直径が140cm以上あるものと考えられる。断面の位置では、検出面からの深さが１m程であるが、SK１土坑の壁面での観察結果では、SK１土坑同様に180cm以上の深さがある。断面形は、深い逆台形を呈する。堆積土は調査範囲で２層に分けられた。２層ともブロック状の堆積土からなることから、井戸の上部は埋め戻されていると観察される。遺物は出土していない。

SK３土坑（井戸跡）　SK２土坑の東側で検出された。SK２土坑に切られる。遺構の大半が調査区の外側にのびるので規模は不明であるが、平面形は円形を呈し、直径は130cm以上あると考えられる。断面の位置では、検出面からの深さが70cm程であるが、SK１・２土坑同様に深い遺構であると考えられる。堆積土は調査範囲で４層に分けられたが、各層ともブロック状の堆積土からなり、人為的に埋め戻されている遺構であると観察される。遺物は出土していない。





SK1

層No.	土　色	土　性	備　考
1	10YR4/2　灰黄褐色	砂	暗褐色土・明黄褐色土のブロック・礫を含む。
2	10YR3/4　暗褐色	粘土	炭化物を含む。褐色土粒を含む。
3	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土のブロック、大小の礫を含む。
4	10YR5/2　灰黄褐色	粘土	壁崩落土を含む。大小のブロック上の堆積土。

SK2

層No.	土　色	土　性	備　考
1	10YR5/2　灰黄褐色	粘土質	にぶい黄橙色の大型のブロックを多量に含む。
2	2.5GY5/1　オリーブ灰色	シルト質粘土	Ⅴ層起源の黒色土をブロック状に多く含む。

SK3

層No.	土　色	土　性	備　考
1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	褐色土・暗褐色土のブロックを多く含む。
2	10YR5/6　黄褐色	砂	
3	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	にぶい黄褐色土のブロックを多量に含む
4	10YR5/2　灰黄褐色	粘土	黄褐色土粒を多量に含む

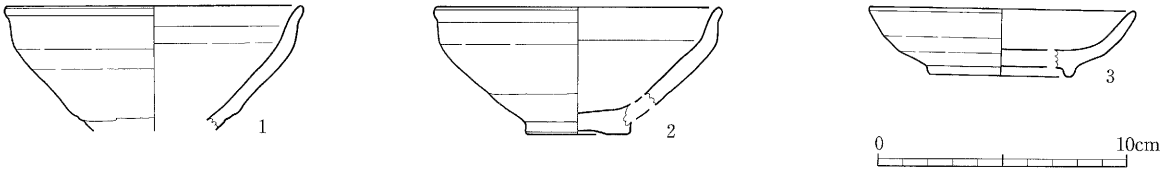
SK4

層No.	土　色	土　性	備　考
1	7.5YR2/1　黒色	シルト質粘土	黄褐色土を斑状に含む。炭化物・焼土を多量に含む。

SK5

層No.	土　色	土　性	備　考
1	10YR2/3　黒褐色	シルト質粘土	黄褐色土を斑状に含む。炭化物・焼土を多量に含む。

第58図　遺構実測図



図中番号	登録番号	出土地点 基本層	遺構名	遺構層	取上No.	分類 種別	器種	法量 器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	特徴・備考（調整・素材・産地・時期・分類）	写真図版
1	I-1		SK-5	1層		陶器	碗	(5.0)	(12.0)			鉄釉、天目茶碗　産地：瀬戸美濃　年代：16C後半？	
2	I-2		SK-5	1層		陶器	碗	(5.1)	(11.5)	4.2		鉄釉、天目茶碗、内反高台　産地：瀬戸美濃　年代：16C中頃	
3	I-3		SK-5	1層		陶器	皿	3.7	(10.7)	(5.8)		灰釉、丸皿　産地：瀬戸美濃　年代：16C中頃以降	

第59図　出土遺物実測図

SK４土坑　調査区の南西角で検出された。遺構は南と西方向にのびる。検出部の平面形は隅丸方形を呈する。検出部の大きさは、南北60cm・東西46cmを測る。深さは14cmで、断面形は舟底状を呈する。堆積土は黒色のシルト質粘土１層で、炭化物と焼土を多量に含んでいる。遺物は出土していない。

SK５土坑　調査区西壁中央で検出された。西側は調査区の外にのびる。東側はSK１土坑に切られている。平面形

は円形ないし隅丸方形を呈する。大きさは、南北91cm・残存東西78cmを測る。深さは26cmで、断面形は不整な舟底状を呈する。堆積土は、SK４と類似する黒色のシルト質粘土１層で、炭化物と焼土を多量に含む。遺物は陶器片３点（第59図１～３）が出土している。Ⅰ－１は瀬戸美濃産の鉄釉の天目茶碗で16世紀後半頃のものと見られる。Ⅰ－２は瀬戸美濃産の鉄釉内反り高台の天目茶碗で16世紀中頃のものと見られる。Ⅰ－３は瀬戸美濃産の灰釉の丸皿で16世紀中頃以降のものと見られる。

6　まとめ

①　Ⅱ層からⅣ層にかけて土坑が５基検出された。これらの遺構は、撹乱のため検出層位は異なるが、本来の検出面はⅡ層と考えられる。

②　５基の土坑のうち、SK１・２・３は、遺構の規模・形態・深さから、井戸跡と考えられるが、底面を検出することはできなかった。調査部分では井戸枠施設は検出されなかった。

③　井戸は、近接した位置で東から西に順次掘り直されている。

④　SK１井戸の年代は、SK５土坑より新しく16世紀以降と考えられる。

⑤　SK４・５土坑は類似した堆積土の土坑で、SK５土坑から出土した陶器によって16世紀頃の年代が考えられる。

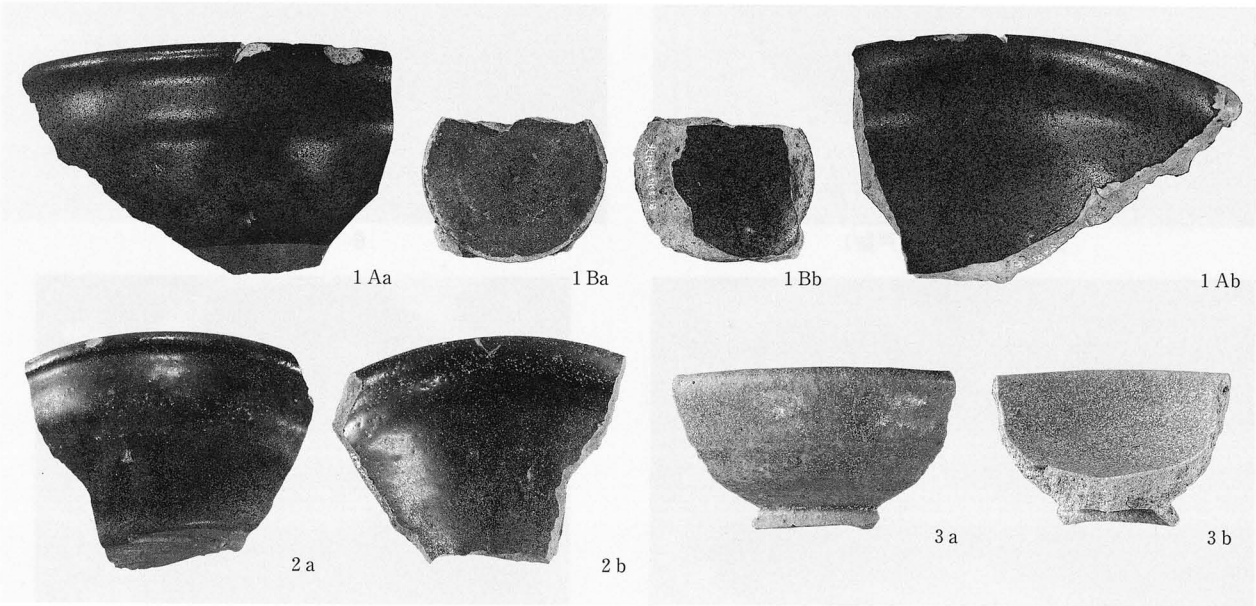
⑥　本調査では、中世北目城と同期ころの土坑と井戸跡が発見されたが、この場所が城館の内部に位置し、城と直接関係のある遺構であるかどうかは、今後の調査成果にかかる課題である。

＜参考文献＞

仙台市教育委員会（1993）：「Ⅲ－１－（６）　北目城跡」『年報15』仙台市文化財調査報告書第189集

仙台市教育委員会（1994）：「２－Ⅰ－（７）　北目城跡」『年報16』仙台市文化財調査報告書第204集

仙台市教育委員会（1999）：「Ⅵ　北目城跡（第２次調査）」『陸奥国分尼寺跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第238集

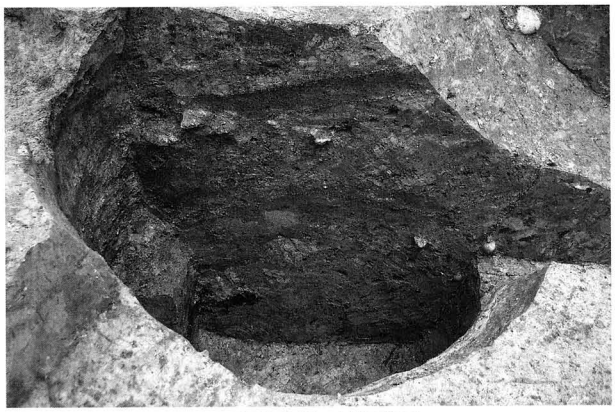


1　陶器　天目茶碗　Ⅰ－２　（SK５第59図３）
2　陶器　天目茶碗　Ⅰ－１　（SK５第59図１）
3　陶器　埦　Ⅰ－３　（SK５第59図３）

図版25　北目城跡第４次調査出土遺物

1　遺構検出状況

2　基本層上部



3　SK1土坑（井戸跡）

4　SK2土坑（井戸跡）

5　SK3土坑（井戸跡）

6　SK4土坑

7　SK5土坑

8　完掘全景

図版26　北目城跡第４次調査

X　北目城跡第５次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　北目城跡（宮城県遺跡番号01029）
調 査 地 点　　仙台市太白区東郡山２－548－13
調 査 期 間　　平成17年10月12日～10月13日
調査対象面積　　61㎡
調 査 面 積　　８㎡
調 査 原 因　　個人住宅建築
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　　主査　工藤哲司　　文化財教諭　赤岡光騎

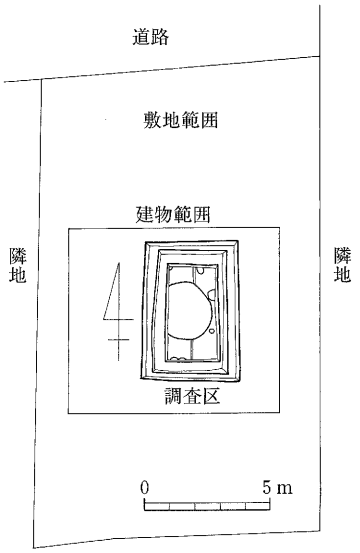
2　調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成16年10月４日付けで、地権者山木秀一氏より、杭打ちを伴う基礎工法の住宅建築の発掘届が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成17年10月12日に着手した。建物予定地に６ｍ×４ｍのトレンチを設定して調査を行なったところ、駐車場の整地層及び盛土層が約100cmあったので、現地表面から約110cm下げた面でトレンチを４ｍ×２ｍに縮小し、旧耕作土の残りを除去して調査を実施した。整地層の可能性がある層（Ⅱ層）が部分的に残っていたが、遺構の検出作業はその下のⅢ層面で行った。Ⅲ層面で井戸跡とピットが検出されたので、確認遺構を引続き調査した。調査区外にも遺構が延びている可能性があったが、敷地の制約があったので調査区の拡張は行なわず、当初設定したトレンチのみを調査した。

3　遺跡の位置と環境

北目城跡は仙台駅の南東約1.5kmの名取川と広瀬川に囲まれた郡山低地の東部にあたり、標高９ｍ前後の自然堤防を中心に立地している。遺跡の西隣には、飛鳥時代から奈良時代にかけての官衙跡である郡山遺跡がある。

北目城跡は、平城形式の城館で、天正年中までは粟野氏の居城となっていた。関が原の戦いの際に伊達政宗が入城し、以来仙台城に移るまで居住した。平成４・５年度に行われた調査の際には、「障子堀」を伴う17世紀前半の堀跡などの遺構が検出され、陶器・磁器の他、漆器類・刀剣などが出土している。

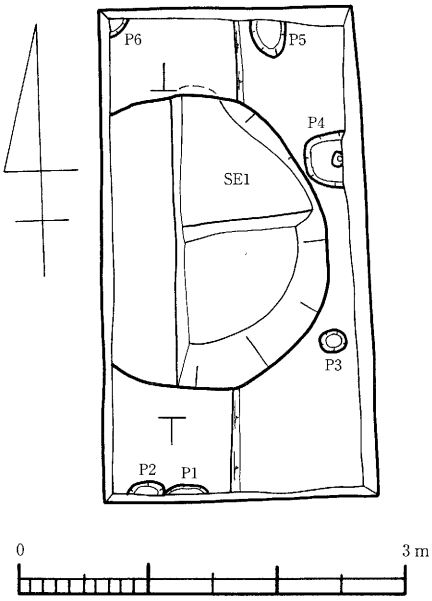


第60図　調査区配置図

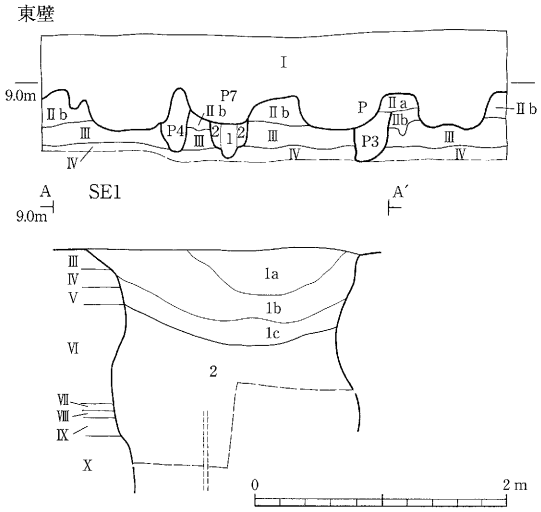
4　基本層序

山砂及び砂礫からなる盛土層が約100cmある。Ⅰ層は層厚30～40cmの暗褐色の粘土質シルト層で、近年の畑の耕作土である。Ⅰ層の下面は、天地返しによる南北方向の溝状の落ち込みが等間隔に存在する。その下のⅡ層は２層に分けられる。Ⅱa層は層厚15cmの褐色シルト質粘土層で、黄褐

色土粒を多量に含む。Ⅱb層は褐色のシルト質粘土層で、暗褐色土のブロックを多量に含む。Ⅱ層は性地層の可能性がある。遺構を検出したⅢ層は、にぶい黄褐色の粘土層で、Ⅲ層以下は自然堆積層が厚く堆積する。（第62図参照）



第61図　遺構平面図



第62図　調査区・遺構断面図

SE１井戸跡

層No.	土　色	土質	備　考
1a	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	粗砂、炭化物薄層、粘土塊、褐色土ブロックを含む
1b	10YR3/4　暗褐色	粘土	褐色土粒、炭片、焼土粒を霜降り状に含む。
1c	10YR4/3　暗褐色	粘土	炭化物の薄層を３枚挟む。黄褐色土を霜降り状に含む
2	10YR2/3　黒褐色	粘土	にぶい黄橙色粘土、黄褐色粗砂、炭化物、樹枝片を含む。下部はグライ化している。

基本層序

層No.	土　色	土質	備　考
盛土			山砂・砂及び砕石
Ⅰ層	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	畑耕作土
Ⅱa層	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	黄褐色土粒を多く含む　整地層？
Ⅱb層	10YR4/6　褐色	シルト質粘土	暗褐色土のブロックを大量に含む　整地層？
Ⅲ層	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄、マンガン粒を含む　Ⅲ層以下は自然堆積層
Ⅳ層	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土	
Ⅴ層	10YR2/3　黒褐色	粘土	
Ⅵ層	2.5Y6/3　にぶい黄褐色	粘土	下部は浅黄色粘土に変化　分層可能
Ⅶ層	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	
Ⅷ層	2.5Y7/3　浅黄色	粘土	
Ⅸ層	10YR2/3　黒褐色	粘土	炭化物粒を含む
Ⅹ層	10YR6/3　にぶい黄橙色	粘土	下部は砂層に変化

5　発見遺構と出土遺物

Ⅲ層面において、井戸跡１基と柱穴を含むピット７個が検出された。

１）井戸跡

SE１井戸跡　調査区中央で検出された。西側は一部調査区の外にのびる。平面形は円形で、南北軸は直径2.3mを測る。検出面から175cmまで下げたが底面には至らなかった。断面形は、概ね円筒形を呈するが、壁面の崩落による凹凸がある。堆積土は大別２層、細別４層に分けられる。１層は65～75cmあり、３層に細分される。自然堆積層と観察される。２層は１m以上ある人為堆積土と観察される黒褐色の土層で、にぶい黄褐色粘土、黄褐色粗砂、炭化物等を含む。また、骨片を起源とする白色の物質粒をまばらに含み、下部はグライ化している。

調査範囲では井戸枠は検出されなかったが、井戸のほぼ中央で、２層の途中から垂直に落ちる直径2.5cm程の空穴が検出された。この穴は、掘削した底面から、さらに160cmの深さがあることが確認された。調査した深さにこの穴の井戸の深さを加えると、井戸の深さは335cm以上あるものと考えられる。なお、この空穴については、所謂「息継ぎ穴」と考えられ、井戸を埋める際に、節を取り除いた竹材を据えて土を入れたものと理解される。

井戸跡からの出土遺物は、１層から中国産染付けの破片１点（図版27－１）と無釉陶器小片１点、２層から中国産染付けの破片１点（図版27－２）と鉄製品辺１点がある。中国産の染付けは１・２層のものとも16世紀頃のものと見られる。

２）ピット

調査区の断面で確認されたものを含めて７個のピットが検出された。

Ｐ１　調査区の南壁にかかる。Ｐ２を切る。検出部は直径25cmの半円形を呈する。検出面からの深さは14cmであるが、Ⅱ層からの深さは30cm以上ある。堆積土は黄褐色土のブロックを含むにぶい黄褐色土である。検出部分で柱痕跡は検出されなかった。

Ｐ２　調査区の南壁際で検出された。Ｐ１に切られる。直径25cmの円形を呈する。検出面からの深さは18cmである。堆積土は黄褐色土を含むにぶい黄褐色土である。検出部分で柱痕跡は検出されなかった。

Ｐ３　調査区の南東部の東壁にかかって検出された。東壁面での掘り方の直径は約35cmで、柱痕跡の直径は13cmである。東壁面での深さは約40cmである。堆積土は黒褐色土のブロックを多量含むにぶい褐色土である。

Ｐ４　調査区北部の東壁際で検出された。検出部は楕円形を呈し、検出部の東西残存長軸35cm、南北短軸約40cmを測る。直径12cmの柱痕跡が検出されている。東壁面での深さは約50cmある。堆積土は掘り方が褐色土のブロックを含むにぶい黄褐色土、柱痕跡が灰黄褐色土である。

Ｐ５　調査区北壁際で検出された。検出部は楕円形を呈し、検出部の南北残存長軸30cmの、東西短軸約25cmを測る。堆積土は暗褐色土で灰黄褐色のブロックを含む。

Ｐ６　調査区北西角で検出された。検出部は半径18cmの扇形を呈す。堆積土はにぶい黄褐色土で灰黄褐色のブロックを多量に含む。

Ｐ７　調査区東壁際で断面だけが検出された。断面部の幅は約40cmで、幅13cmの柱痕跡も認められる。堆積土は掘り方が褐色土、柱痕跡がにぶい黄褐色土で、両層とも暗黄褐色のブロックを含む。

ピットからの出土遺物はない。

６　まとめ

①本調査区は、北目城跡の東部中央の付近に位置する。

②基本層Ⅱ層が掘り込み面と考えられる井戸跡１基とピット７個が検出された。

③井戸跡は、出土遺物から16世紀以降に埋められたと考えられるが、詳細な時期は不明である。

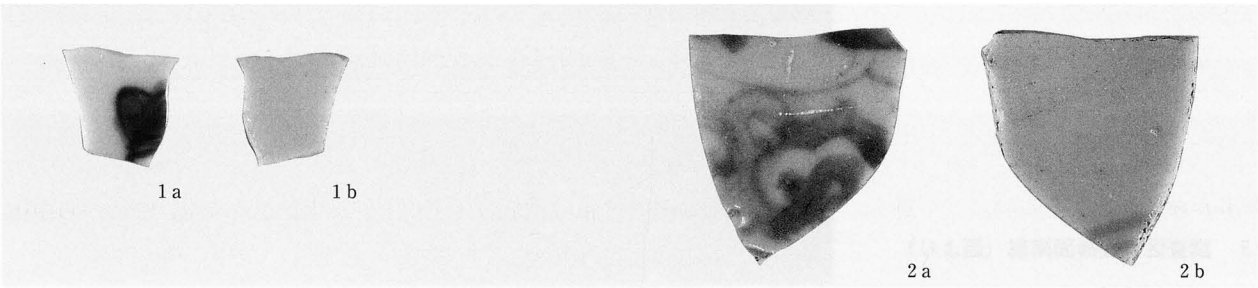
④ピットの中には柱痕跡の確認されるものが含まれているので、周辺に掘立柱建物跡が存在したと考えられるが、柱穴からの出土遺物がなく、遺構の詳細な時期は不明である。

⑤本調査区周辺には、中世ないし近世に属する可能性のある遺構が存在することが明らかになった。

＜参考文献＞

仙台市教育委員会（1993）：「Ⅲ－１－(6)　北目城跡」『年報15』仙台市文化財調査報告書第189集

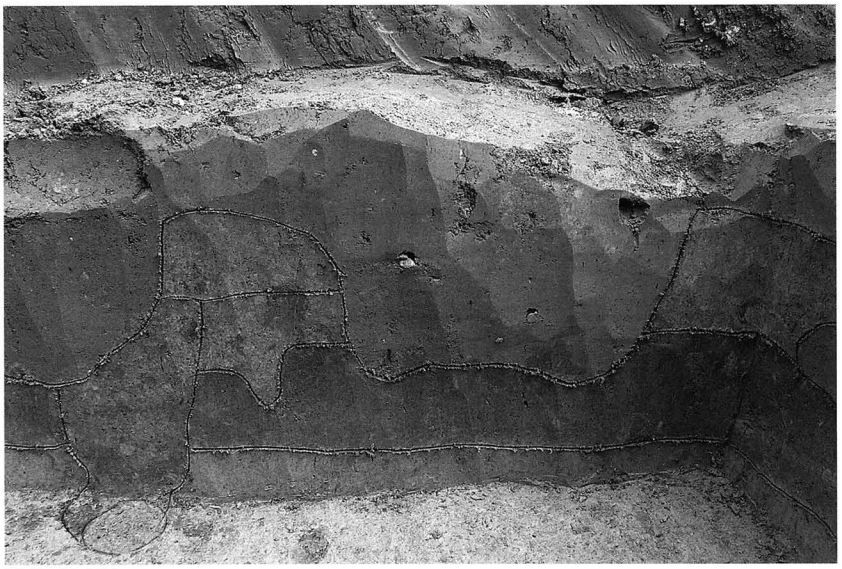
仙台市教育委員会（1994）：「２－Ⅰ－(7)　北目城跡」『年報16』仙台市文化財調査報告書第204集



1　磁器　染付埦　SE１　１層　　2　磁器　染付埦　SE１　２層

図版27　北目城跡第５次調査出土遺物

1　遺構検出状況（南より）



2　調査区東壁断面中央部（西より）

3　調査区東壁断面南部（西より）

図版28　遺構検出状況と基本層序

1　遺構完掘状況（北から）

2　SE１井戸跡（東から）

3　井戸跡検出の息継ぎ穴（北から）

図版29　完掘状況と井戸跡

XI　南小泉遺跡第44次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点　　仙台市若林区遠見塚１丁目22番
調 査 期 間　　平成17年３月１日～３月３日
調査対象面積　　29㎡
調 査 面 積　　18㎡
調 査 原 因　　防火水槽建築（仙台市消防局警防部計防課）
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　　主査　工藤哲司　　文化財教諭　今野秀治

2　調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成16年12月14日付けで、仙台市消防局長より公園内に直径約６ｍ・深さ５ｍの掘削を伴う防火水槽の建築の発掘通知が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成17年３月１日に実施した。建築予定地に３ｍ×５ｍのトレンチを設定して調査を行なったところ、調査区内から多数の遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。敷地の制約があったが、調査区の東側を掘削予定範囲に沿うように円形に拡張して調査を行った。

番号	遺跡名	種　別	立　地	時　　代	番号	遺跡名	種　別	立　地	時　　代
1	南小泉遺跡	集落	自然堤防	縄文～近世	9	砂押Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
2	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳（前期）	10	砂押Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
3	若林城跡	城館	自然堤防	近世	11	神柵遺跡	官衙関係	自然堤防	古代
4	養種園遺跡	城館	自然堤防	古代・中世・近世	12	中柵西遺跡	散布地	自然堤防	弥生・古墳・古代
5	保春院前遺跡	集落	自然堤防	古代・中世・近世	13	沖野城跡	城館	自然堤防	中世
6	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳（後期）	14	仙台東郊条里跡	条里遺構	後背湿地	古代
7	蛇塚古墳	円墳？	自然堤防	古墳（後期？）	15	中在家遺跡	包含地	後背湿地	不明
8	猫塚古墳	円墳？	自然堤防	古墳（後期？）	16	中在家南遺跡	集落・墓地	自然堤防	弥生～中世

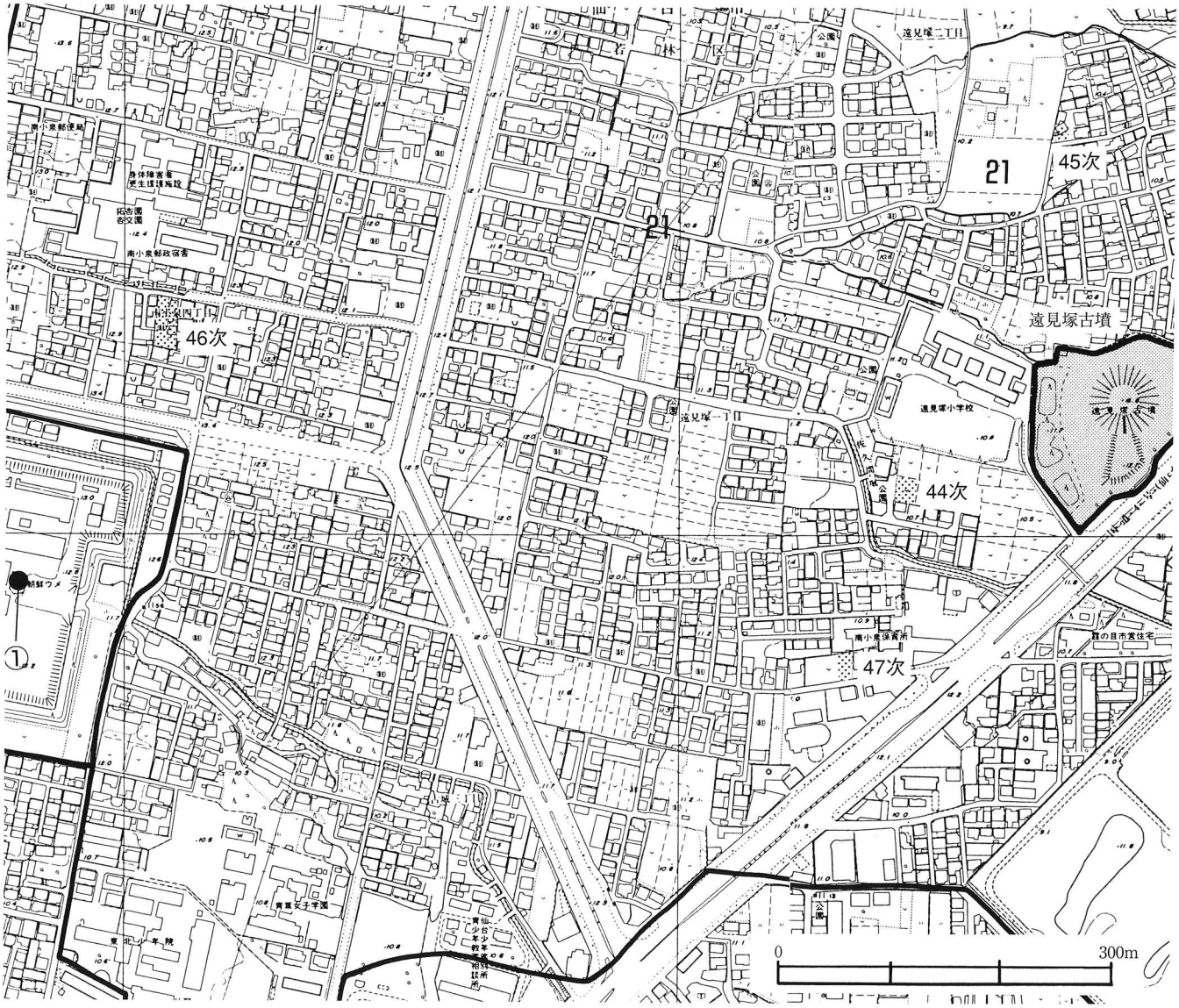
第63図　遺跡の位置と周辺の遺跡

3　遺跡の位置と環境

仙台市の東部は、北から七北田川・名取―広瀬川・阿武隈川の３河川が形成した「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野が広がり、河川の流域には扇状地・自然堤防・後背湿地・旧河道からなる複雑な地形を形成している。仙台湾と呼ばれる海岸部には３列の浜堤や潟湖性の低地が認められる。南小泉遺跡は、七北田川と名取―広瀬川に挟まれた沖積平野の発達した自然堤防上に立地している。標高は10m前後である。

南小泉遺跡は、仙台市内でも大きな遺跡のひとつで、東西約２km・南北約１kmの範囲に広がる。これまでの調査では、最古の時期としては縄文時代の遺物包含層が確認されている。その後は、弥生時代前期の土器や、弥生時代中期の土器棺墓、古墳時代全期と奈良・平安時代の集落跡、中・近世の屋敷跡など各時代の遺構・遺物が発見されている。

周辺の遺跡は、東方約１kmの中在家南遺跡からは、弥生時代中期から古墳時代を中心とする木製品が多量に出土した河川跡や、古墳時代前期の方形周溝墓群などが発見されている。また南小泉遺跡内には、全長110mの前期の前方後円墳である遠見塚古墳がある。西に隣接する若林城跡の中では、埴輪を有する古墳が発見されている。北西側には後期の円墳である法領塚古墳などがある。奈良時代になると、遺跡の北西１kmには陸奥国分寺・国分尼



第64図　第44・45・46・47次調査区の位置

寺が建立される。近世には伊達政宗の晩年の居城として若林城が造営される。この地域は、縄文時代以来遺跡が形成され、特に古墳時代以降は陸奥国の中心地域として栄えていたことがうかがわれる。

4　基本層序

盛　土　山砂による盛土層。層厚約５cm。公園造成の際の整地層。

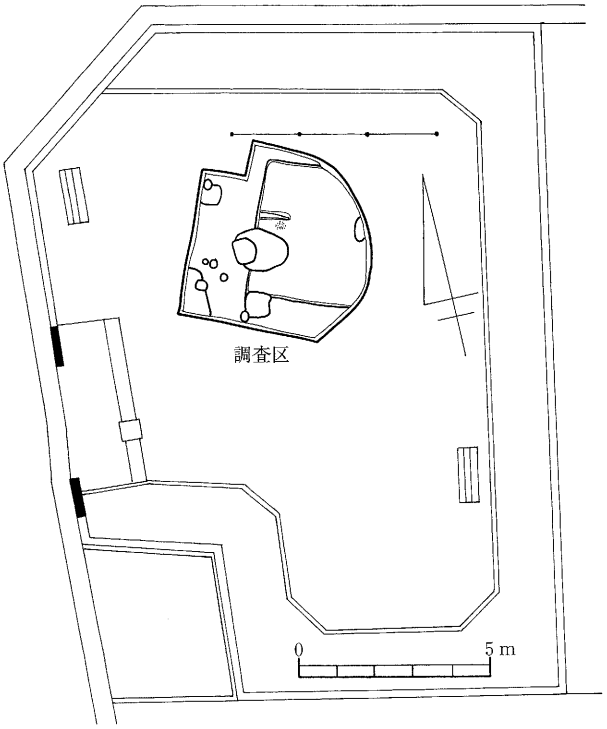
Ⅰ　層　10YR3/3暗褐色のシルト層。層厚約20cm。公園造成前の畑の耕作土。

Ⅱ　層　10YR4/6褐色のシルト層。黄褐色土をわずかに含む。層厚約15cm。畑の耕作土。

Ⅲ　層　10YR5/6黄褐色の粘土層。褐色土をわずかに含む。地山。

5　発見遺構と出土遺物

Ⅲ層上面で、掘立柱建物跡１棟・竪穴住居跡１軒・土坑３基・ピット７個が検出された。



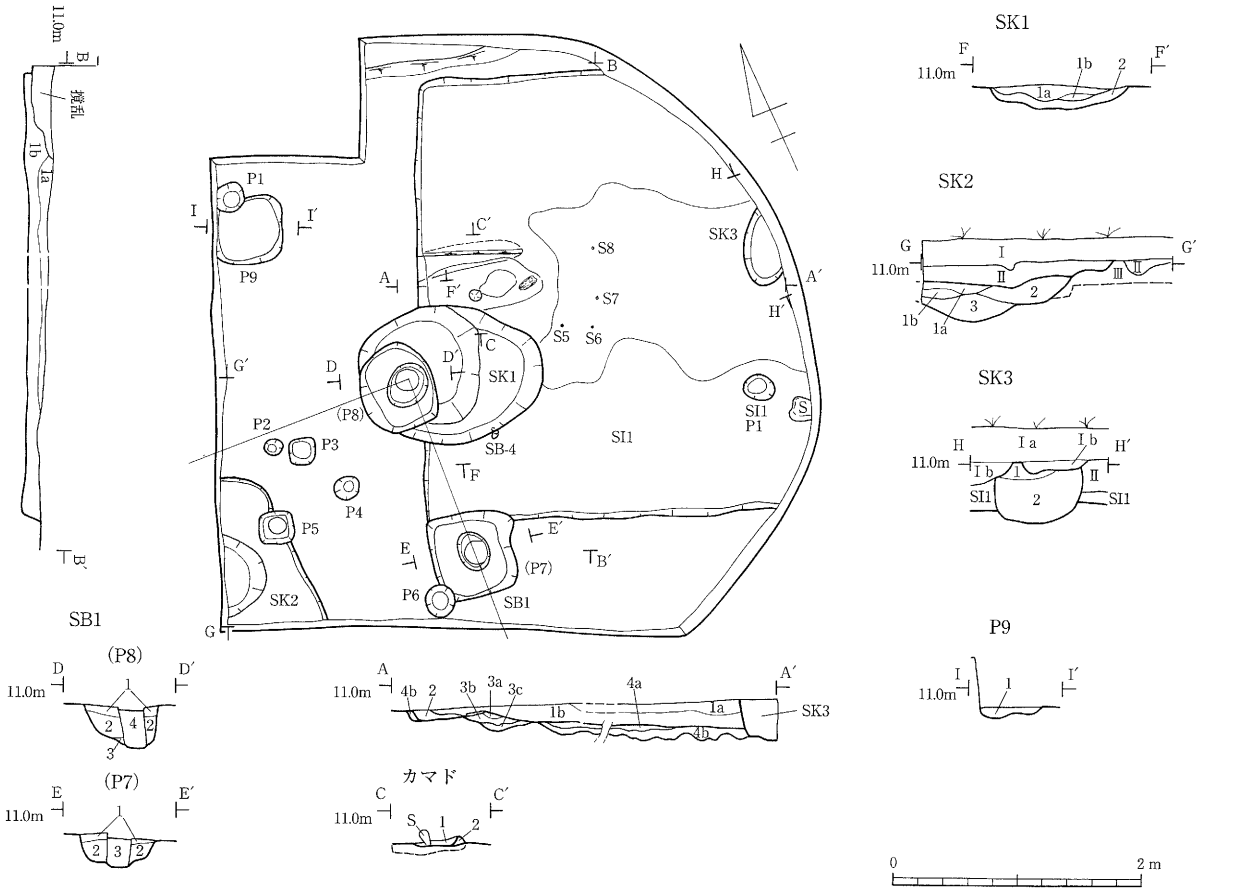
第65図　調査区配置図

１）掘立柱建物跡

SB１掘立柱建物跡　調査区の南西部で、柱穴が南北に並んで２基（Ｐ７・８）発見された。建物の西辺の北端部にあたると考えられる。SI１竪穴住居跡を切るSK１土坑を切っており、Ｐ７の南西角はＰ６に切られている。南北の柱間隔は柱痕跡の中央で計測して150cmである。東西の間隔は180cm以上である。柱穴掘り方は方形で、Ｐ７が東西65cm・南北68cm・深さ約20cm、Ｐ８が東西60cm・南北70cm・深さ20cmを測る。柱痕跡は直径18cm前後の円形である。柱痕跡の部分の柱穴底面は、３～５cm下がっている。堆積土は、掘り方が暗褐色土や黄褐色土のブロックを含む黒褐色の粘土質シルトないしシルト質粘土・粘土層で、柱痕跡が黄褐色土を含む褐色の粘土質シルトである。Ｐ７から土師器の小片20点・Ｐ８から土師器の小片21点が出土している。

２）竪穴住居跡

SI１竪穴住居跡　【位置・重複】調査区東半で検出された。東部は調査区の外にのびる。西辺中央付近をSK１土坑に切られる。また南辺の西端をSB１掘立柱建物跡のＰ７に切られている。【平面形・規模・方向】平面形は検出部の状況から方形ないし長方形を呈すると考えられる。大きさは、南北全長353cm・東西検出部長300cmを測る。【堆積土】堆積土は、大別４層、細別８層に分けられた。遺構の深さは、検出面から床面までの残りの良いところで20cm前後である。1a層は暗褐色のシルトで黄褐色土粒を霜降り状に含み、住居跡の中央部の上部に分布する。1b層は、暗褐色のシルトで黄褐色土を粒状およびブロック状に含み、住居跡の全面の下部に分布する。２層は暗褐色のシルト層でカマドの奥壁部に分布する。3a層は住居廃絶時のカマド燃焼部底面の焼土層である。3b層は灰・炭化物・焼土粒を含むカマド内の堆積層である。3c層は初期のカマド燃焼部底面の焼土層である。4a層はカマドの前面から東壁に向って幅140cm前後の帯状に施設された貼り床層である。厚さは３cm前後で硬く締まっている。4b層は掘り方の埋め土である。【床面・壁面】床面はほぼ平坦である。壁面は、各辺とも残存部はほぼ直線的にのび



SI 1

層No.	土　色	土質	備　考
1 a	10YR3/3　暗褐色	シルト	黄褐色土粒を霜降り状に含む。土器片を多く含む。
1 b	10YR3/4　暗褐色	シルト	黄褐色土粒及びブロックをまばらに含む
2	5 Y3/2　暗赤褐色	シルト	焼土粒を多く含む
3 a	7.5YR4/4　褐色	焼土	カマド底面の焼け面
3 b	10YR4/6　褐色	シルト	灰・炭化物・焼土粒を含む
3 c	5 YR4/4　にぶい赤褐色	焼土	カマド底面の焼け面
4	10YR6/4　にぶい黄橙色	シルト質粘土	締まり強い。　貼床層
5	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土粒をわずかに含む。　掘り方埋め土
A	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土粒をわずかに含む。　カマド袖の構築土
P1 1	10YR3/4　暗褐色	シルト	黄褐色土粒をわずかに含む。

SB 1

層No.	土　色	土質	備　考
P7 1	10YR3/2　黒褐色	シルト	暗褐色土をブロック状に含む
2	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	暗褐色土・黄褐色土ブロック状に含む。
3	10YR3/2　黒褐色	粘土	暗褐色土・黄褐色土をわずかに含む。
4	10YR4/4　褐色	シルト	黄褐色土をわずかに含む。　柱痕跡
P8 1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	黄褐色土をわずかに含む。
2	10YR2/3　黒褐色	粘土	黄褐色土のブロック状に含む。
3	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	黄褐色土をわずかに含む。　柱痕跡

SK 1

層No.	土　色	土質	備　考
1 a	10YR3/4　暗褐色	粘土	黒色土・黄褐色土のブロックをわずかに含む。
1 b	10YR2/3　黒褐色	粘土	黒色土をブロック状に大量に含む。
2	10YR4/4　褐色	粘土	下面は浅黄橙色を呈する。

SK 2

層No.	土　色	土質	備　考
1 a	10YR4/ 4　褐色	シルト質粘土	明黄褐色土をわずかに含む。
1 a	10YR4/ 4　褐色	シルト質粘土	明黄褐色土を多量に含む。
2	10YR5/8　黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土粒をわずかに含む。
3	10YR4/6　褐色	粘土	暗褐色土粒をわずかに含む。

SK 3

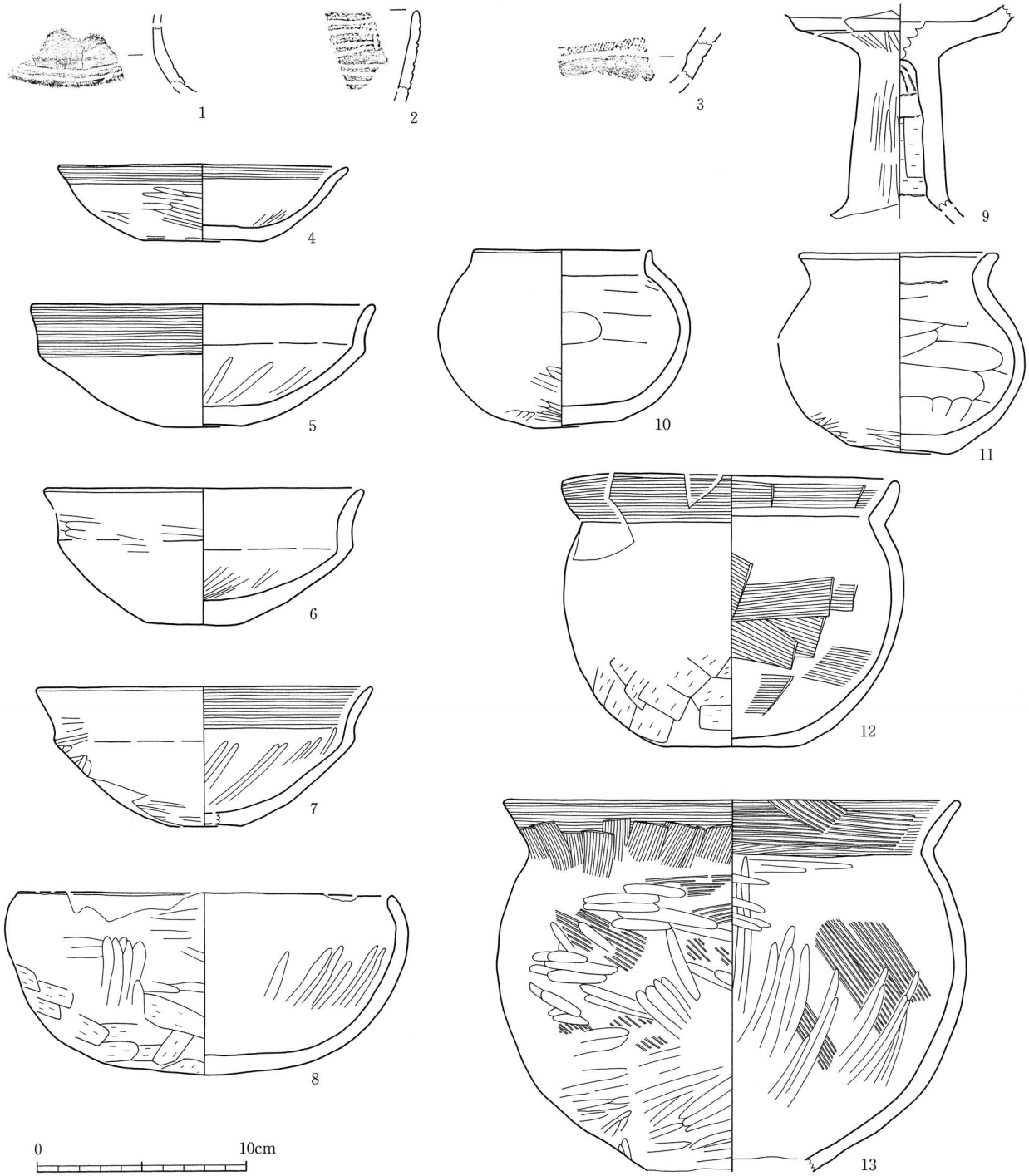
層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR3/3　暗褐色	シルト	黄褐色土粒をわずかに含む。
2	10YR3/4　暗褐色	シルト	黄褐色土及びⅡ層起源の黒褐色土を多量に含む。

ピット

層No.	土　色	土質	備　考
P1 1	10YR3/3　暗褐色	シルト	黄褐色土粒を含む
P2 1	10YR3/4　暗褐色	シルト	黄褐色土粒を多く含む。
P3 1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを多量に含む。
2	10YR3/3　暗褐色	シルト	黄褐色土粒を霜降り状に含む。　柱痕跡
P4 1	10YR3/4　暗褐色	シルト	黄褐色土粒を多量に含む。
P5 1	10YR3/3　暗褐色	シルト	黄褐色土のブロックを含む
2	10YR4/ 4　褐色	シルト	柱痕跡
P6 1	10YR3/4　暗褐色	シルト	黄褐色土粒を多量に含む。
P9 1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	黒色土・黄褐色土を小ブロック含む。

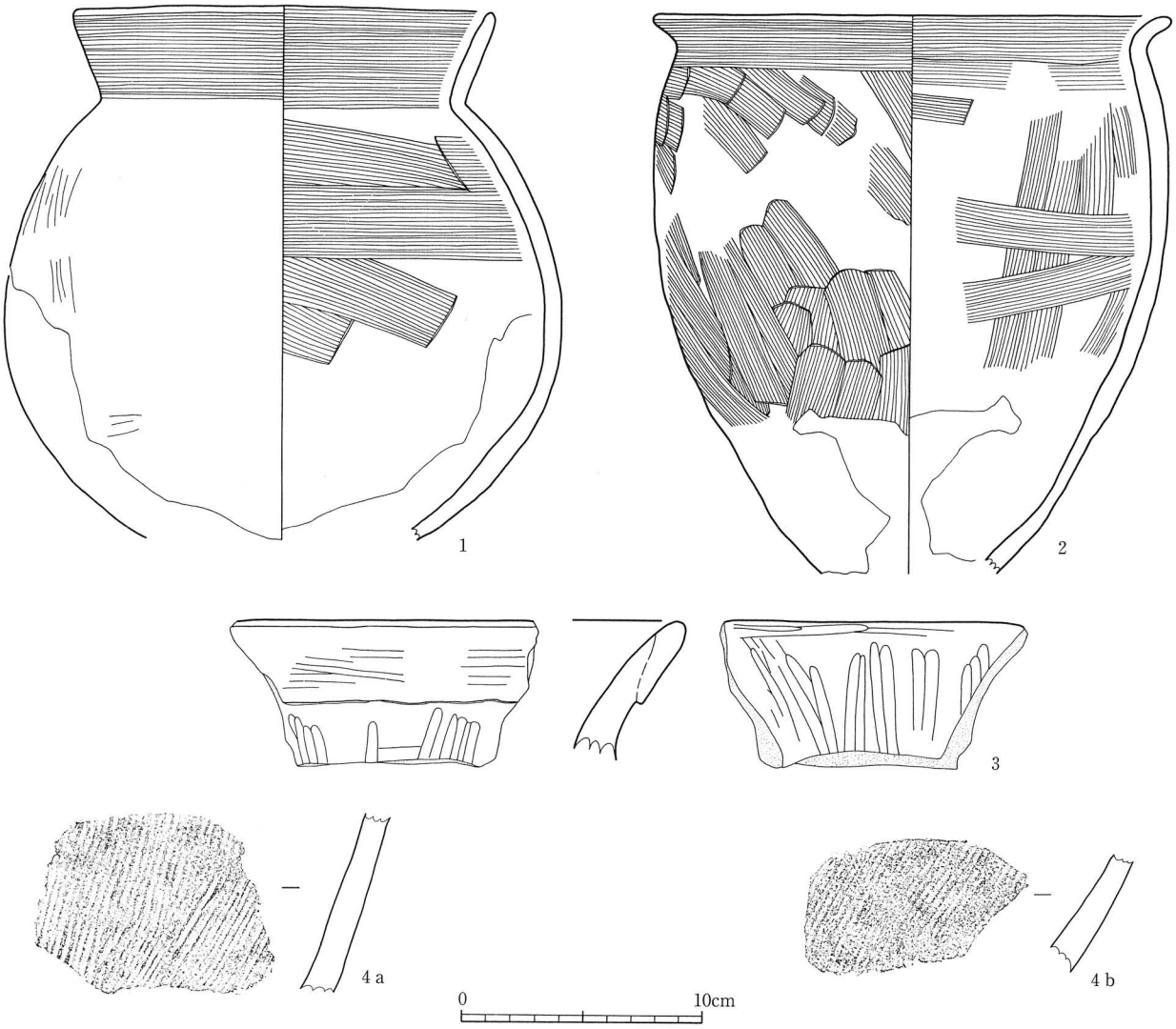
第66図　遺構実測図

る。立ち上がりは直角に近い。【柱穴・カマド・施設】柱穴は、床面では検出されなかった。カマドは西壁の中央に築かれている。カマド本体は、左袖はSK１土坑に切られているが、右袖は幅15cmで西壁面から長さ80cmほどのびることが確認された。右袖の南側が35cmの幅で焼けている。カマドの奥壁から50cmの所の焼土面の中央に支脚と考えられる棒状の立石が検出された。この石材の東側が強く焼けている。煙道は、住居の上面が削平を受けているためか検出されていない。この他の施設としては、住居の東南部で直径20cm・深さ28cmのピットが１個検出されている。【掘り方】掘り方の深さは３～10cmで、掘り方の底面には大小の凹凸がある。掘り方埋め土（4b層）は、



図中番号	登録番号	出土地点 基本層	遺構名	遺構層	取上No.	分類 種別	器種	法量 器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	特徴・備考（調整・素材・産地・時期・分類）	写真図版
1	B-3		SI-1	1層		弥生土器	壺					外面：平行沈線	
2	B-1		SI-1	1層		弥生土器	鉢					外面：波型文	
3	B-2		SK-2			弥生土器	高坏？					外面：沈線あり	
4	C-5		SI-1	1層		非ロクロ土師器	坏	4.7	(13.8)	5.6		外面：口縁ヨコナデ、体部ナデのちヘラミガキ　内面：口縁ヨコナデ、体部ヘラミガキ	
5	C-3		SI-1	床面		非ロクロ土師器	坏	5.9	16.2	3.9		外面：口縁ヨコナデ、体部摩滅、底部ヘラケズリ　内面：口縁摩滅、体部ヘラミガキ	33－1
6	C-2		SI-1	床面		非ロクロ土師器	坏	6.6	(15.6)	(4.8)		外面：口縁ヘラミガキ、体部摩滅　内面：口縁摩滅、体部ヘラミガキ	33－2
7	C-2		SI-1	床面		非ロクロ土師器	坏	6.7	(16.0)	(3.5)		外面：口縁ヨコナデのちヘラミガキ、体部ヘラケズリのちヘラミガキ 内面：ヨコナデ、体部ヘラナデのちヘラミガキ	
8	C-4		SI-1	床面		非ロクロ土師器	坏	8.8	17.8			外面：口縁ヘラミガキ、体部ヘラケズリ　内面：口縁摩滅、体部ヘラミガキ	33－3
9	C-12		SI-1	1層		非ロクロ土師器	高坏	(10.2)				外面：脚部ヘラミガキ　内面：坏部ヘラミガキ　脚部：ヘラケズリ	
10	C-6		SI-1	床面		非ロクロ土師器	鉢	8.6	8.8	4.0		外面：口縁摩滅、体部下端ヘラケズリのちヘラミガキ　内面：口縁摩滅、体部ナデ	33－4
11	C-7		SI-1	床面		非ロクロ土師器	鉢	9.7	(9.5)	4.7		外面：口縁摩滅体部下端ヘラケズリのちヘラミガキ　内面：口縁ヘラナデのちナデ、体部ナデ	33－5
12	C-8		SI-1	床面		非ロクロ土師器	甕	13.2	(16.0)	6.5		外面：口縁ヨコナデ体部ヘラナデ、底部ヘラケズリ　内面：ヘラナデ	33－6
13	C-9		SI-1	床面		非ロクロ土師器	甕	18.2	21.6			外面：口縁ヘラナデ、体部ハケメのちヘラミガキ　内面：口縁ヨコナデのちハケメ、体部ハケメのちヘラミガキ	33－7

第67図　弥生土器・土師器１

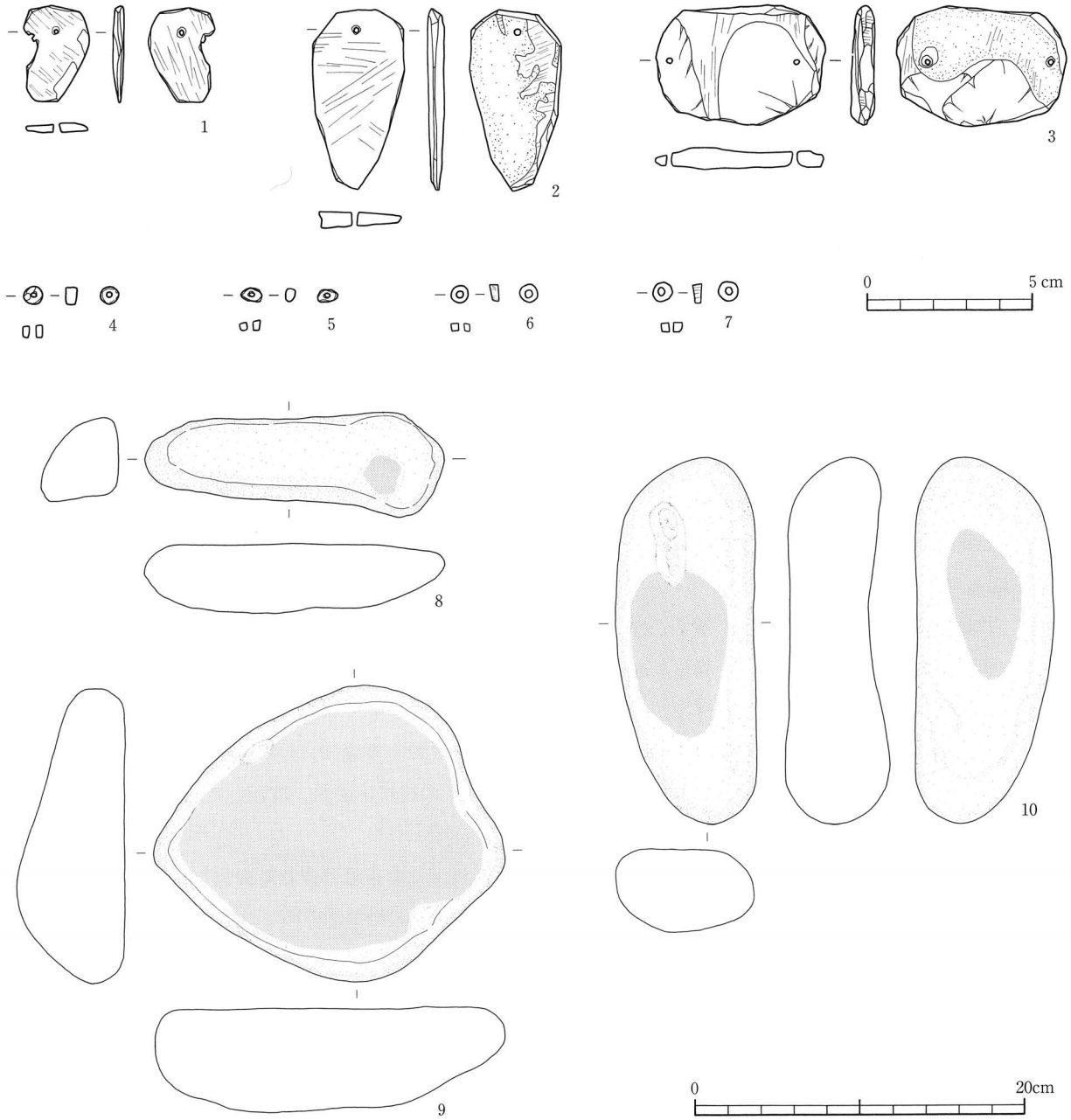


図中番号	登録番号	出土地点 基本層	遺構名	遺構層	取上No.	分類 種別	器種	法量 器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	特徴・備考（調整・素材・産地・時期・分類）	写真図版
1	C-10		SI-1	床面		非ロクロ土師器	甕	(22.4)	17.2			外面：口縁ヨコナデ、体部ヘラミガキ　内面：口縁ヨコナデ、体部ヘラナデ	34－1
2	C-11		SI-1	床面		非ロクロ土師器	甕	(23.5)	21.2			外面：口縁ヨコナデ、体部ヘラナデ　内面：口縁ヨコナデ、体部ヘラナデ	34－2
3	C-13		SI-1			非ロクロ土師器	壺					外面：口縁ヘラミガキ　内面：口縁ヘラミガキ	
4	E-1		SI-1	1層		須恵器	甕					外面：タタキ目　内面：ナデ	34－3

第68図　出土土師器２・須恵器

基本層Ⅲ層を起源とする明黄褐色土のブロック状の粘土質シルト層で、暗褐色土をわずかに含んでいる。【遺物出土状況】床面からの遺物は、土師器がカマド右袖から住居跡北西角にかけての西壁際からまとまって出土している。ここから出土した土師器は、完形もしくは完形に近い甕・壺・坏などが10個体である。また、カマド前面の床面から４点の臼玉と、南西角付近の床面から有孔円板１点と剣形１点の石製模造品（Ｋ６・８～12）が出土している。【出土遺物】カマド右袖側の床面からまとまって出土した土師器には、杯４点（第67図５～８）・鉢２点（第67図10・11）・甕４点（第67図12・13第68図1・２）がある。坏は口縁部の幅が比較的広く、強く外反し底部が平底化したもの３点（Ｃ－１～３）と、やや大型で半球形の体部に内弯する口縁がつくもの（Ｃ－４）がある。鉢には球形の体部に短く直立する口縁がつくもの（Ｃ－６）と球形の体部に外反する口縁のつくもの（Ｃ－７）がある。甕は体部が球形のもの（Ｃ－８～10）と長胴のもの（Ｃ－11）がある。

また、住居の掘り方の埋め土中からは折り返し口縁の大型壺の口縁部片（Ｃ－13）が、堆積土１層中からは土師



図中番号	登録番号	出土地点 基本層	遺構名	遺構層	取上No.	分類 種別	器種	法量 器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	特徴・備考（調整・素材・産地・時期・分類）	写真図版
1	K-7		SI-1	1層		石製模造品	剣	2.9	2.0	0.4	2.0		
2	K-8		SI-1	床面		石製模造品	剣	5.5	2.8	0.5	9.0		34－6
3	K-6		SI-1	床面		石製模造品	円板	3.6	5.1	0.7	19.0		36－7
4	K-9		SI-1	床面		石製模造品	白玉	0.6	0.6	0.4			36－8
5	K-10		SI-1	床面		石製模造品	白玉	0.4	0.7	0.4			36－9
6	K-11		SI-1	床面		石製模造品	白玉	0.5	0.6	0.3			36－10
7	K-12		SI-1	床面		石製模造品	白玉	0.6	0.6	0.3			36－11
8	K-4		SI-1	床面		礫石器	磨石	18.1	6.3	4.5	720		36－5
9	K-5		SI-1			礫石器	磨石	21.2	17.9	6.5	3225		36－4
10	K-3		SI-1	カマド		礫石器	凹・磨石	12.3	8.3	6.2	1880		

第69図　石製模造品・石器

器坏（C－5）と高杯脚部（C－12）のほか、須恵器の甕の体部破片（E－1）も出土している。

土器・石製模造品以外には、床面から磨り面のある礫3点（第69図8～9）と堆積土1層中から湯の倉産と見られる黒曜石製の剥片2点（図版34－12・13）が出土している。

3）土坑

SK１土坑　調査区中央で検出された。SI１竪穴住居跡を切り、SB１掘立柱建物跡に切られる。平面形は楕円形を呈し、東西長軸145cm・南北短軸110cmを測る。断面形は舟底形で、深さは20cmほどである。西半が数cm低くなっている。堆積土は２層に分けられ、上部が暗褐色ないし黒褐色の粘土層で、下部は褐色の粘土層である。両層から土師器の破片が多数出土している。破片にロクロを使用したものは認められない。

SK２土坑　調査区南西角で検出された。Ｐ５に切られる。検出部で南北127cm・東西77cmを測る。断面形は舟底形で、検出面からの深さは30cmほどで中央部が円形に一段深く掘られている。堆積土は大別３層に分けられ、１層が褐色粘土、２層が黄褐色シルト質粘土、３層が褐色粘土層である。堆積土中から土師器片18点がと弥生土器片３点が出土している。

SK３土坑　調査区東辺中央で検出された。東部は調査区の外にのびる。掘り込み面はⅡ層面である。平面形は検出部で楕円形を呈し、南北検出長軸60cm・東西検出短軸28cmを測る。断面形はU字形で、２層上面からの深さは50cmである。堆積土は２層に分けられ、１層が暗褐色シルト層、２層が黄褐土色と黒褐色土のブロックを多量に含むシルト層である。堆積土中から土師器片11点が出土している。

4）ピット

Ｐ１　平面形は直径23cmの円形で、深さ15cm。堆積土は黄褐色土粒を含む暗褐色シルト。

Ｐ２　平面形は直径14cmの円形で、深さ７cm。堆積土は黄褐色土粒を多く含む暗褐色シルト。

Ｐ３　平面形は１辺21cmの方形で、深さ13cm。堆積土は黄褐色土のブロックを含む暗褐色シルト。

Ｐ４　平面形は直径20cmの円形で、深さ14cm。堆積土は黄褐色土粒を多量に含む暗褐色シルト。

Ｐ５　平面形は１辺21cmの方形で、深さ44cm。直径12cmの円形の柱痕跡検出。堆積土は掘り方が黄褐色土のブロックを含む暗褐色シルト。柱痕跡は褐色シルト。

Ｐ６　平面形は直径24cmの円形で、深さ38cm。堆積土は黄褐色土粒を多量に含む暗褐色シルト。

Ｐ７　平面形は１辺55cmの方形で、深さ８cm。堆積土は黒褐色土と黄褐色土の小ブロックを含む暗褐色シルト。

6　まとめ

①竪穴住居跡は、カマドが敷設されていること、石製模造品が出土していること、堆積土中に須恵器が含まれること、口縁部の幅が広く外反する坏が含まれること、内面黒色処理された坏が含まれないことを勘案すると、仙台市鴻ノ巣遺跡第７次発掘調査報告書におけるⅢ期とⅣ期の中間期とした時期に相当し、年代は５世紀後半と考えられる。

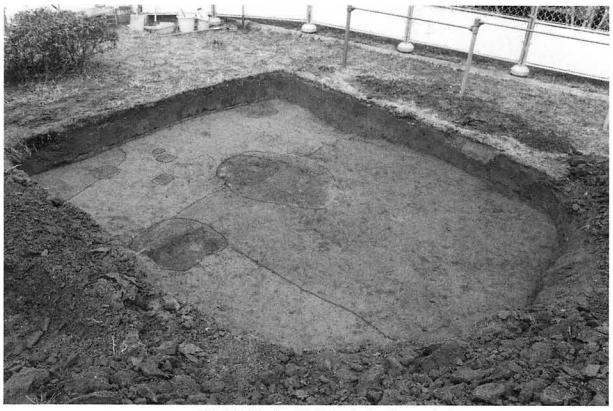
②掘立柱建物跡は、竪穴住居跡と比べると黒色系の土壌が堆積していることから、住居の埋没後さらに黒色系の土壌が堆積してから掘り込まれたものと考えられる。時期を決定する資料は、出土していないが、掘り方と柱痕跡の規模から考えて奈良または平安時代のものと推定される。

③土坑は、SK１土坑は重複関係から５世紀後半以降古代の間、SK２土坑は時期不明、SK３土坑はⅡ層上面から掘り込まれていることから比較的新しい時期の遺構と考えられる。

④上記のとおり、本調査においては、周辺での調査状況と同様に多数の遺構が広がっており、５世紀後半の住居跡や古代の掘立柱建物跡などが検出された。

＜参考文献＞

仙台市教育委員会（2004）：「鴻ノ巣遺跡第７次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第280集



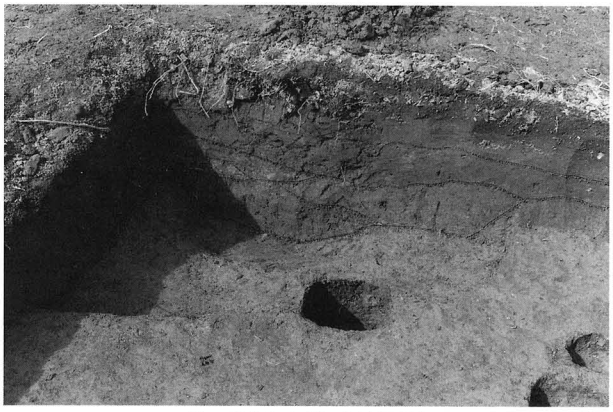
1　遺構検出状況（南東から）

2　SB１掘立柱建物跡（南から）

3　SB１ピット７断面（南東から）

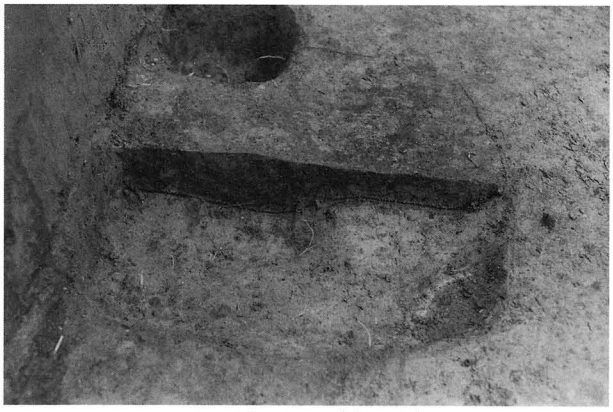
4　SB１ピット８断面（南から）

5　SK１土坑（南から）



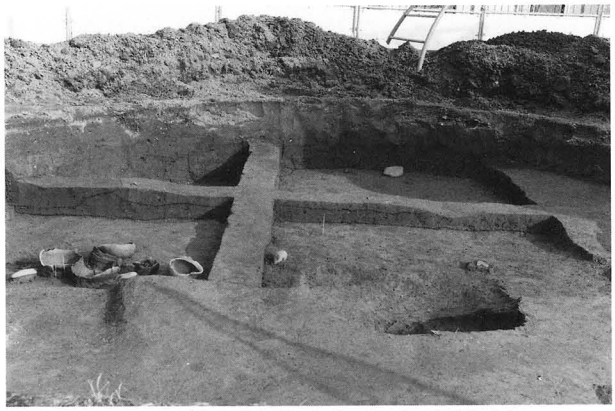
6　SK２土坑（東から）

7　SK３土坑（西から）



8　ピット９（南から）

図版30　遺構検出状況・掘立柱跡建物跡・土坑他



1　SI 1 竪穴住居跡南北ベルト（西から）

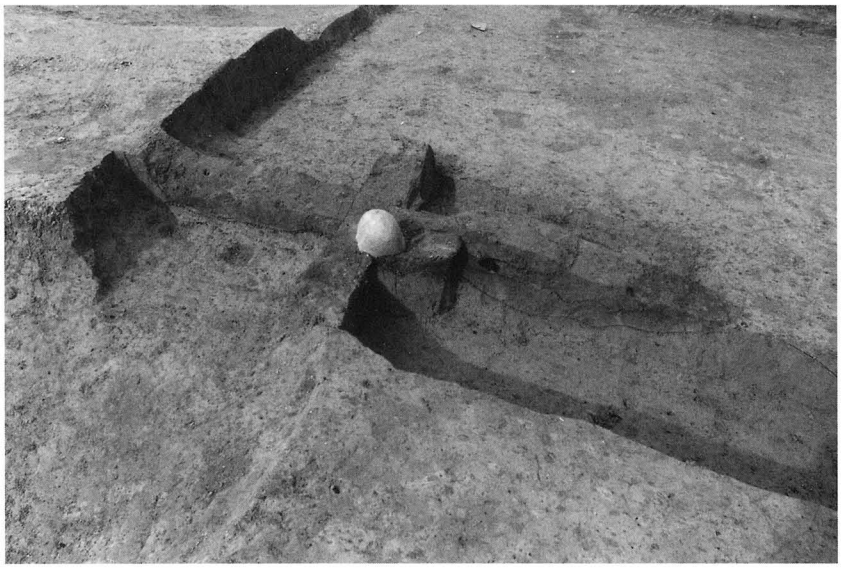
2　SI 1 竪穴住居跡東西ベルト（南から）

3　住居跡床面検出状況（南から）

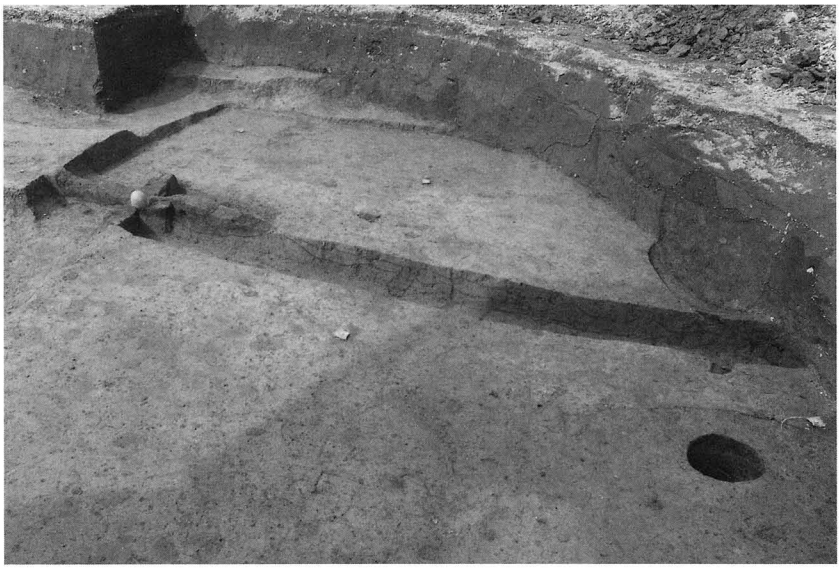
4　カマド右袖付近の土器出土状況（東から）

5　床面からの石製模造品出土状況

図版31　SI 1 竪穴住居跡 1



1　カマド部土層断面（南から）



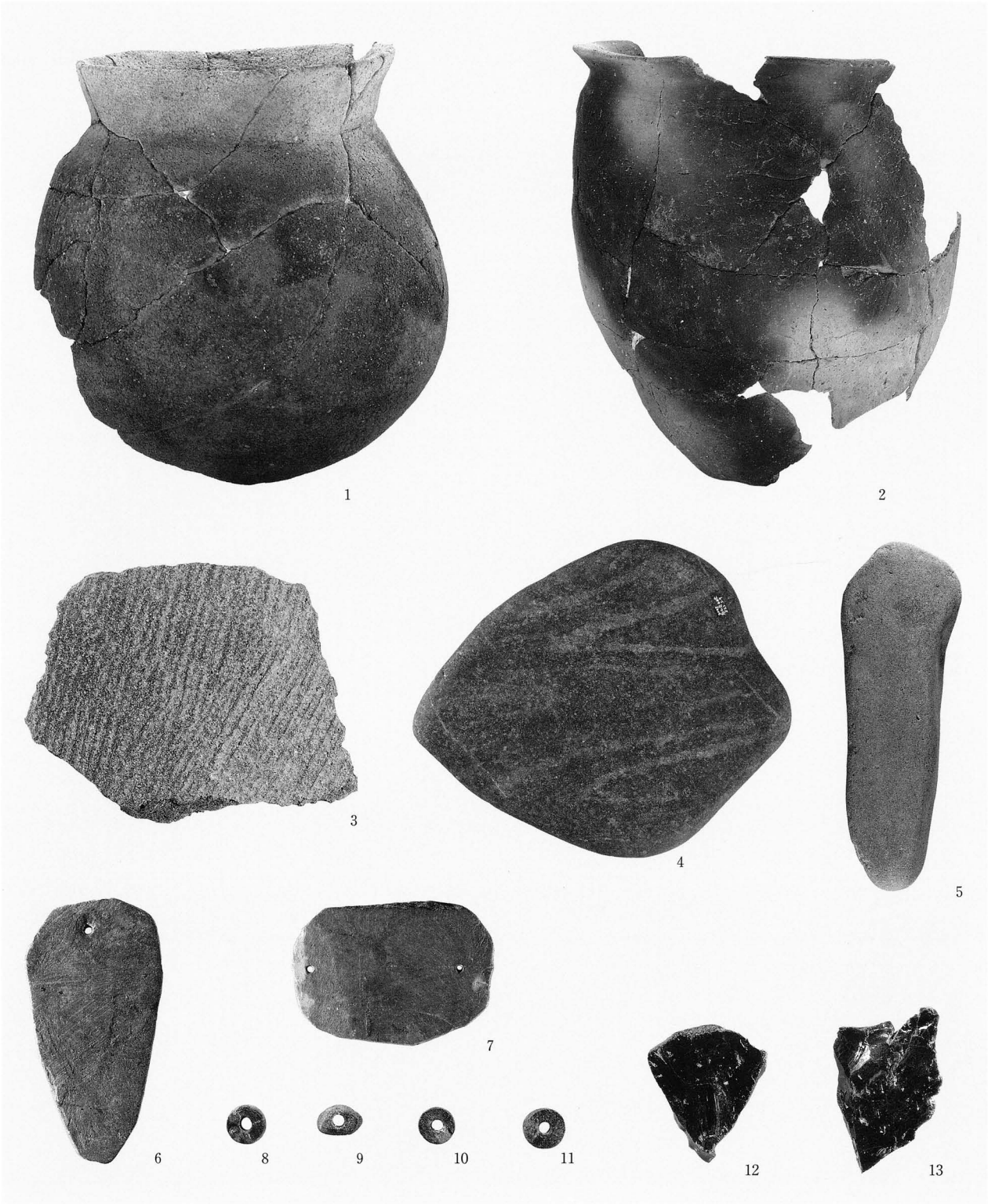
2　貼床・掘り方土層断面（南から）

3　調査区完掘全景（東から）

図版32　SI 1 竪穴住居跡 2 ・完掘全景

1　土師器　坏　C－3　SI 1 床（第67図 5 ）
2　土師器　坏　C－2　SI 1 床（第67図 6 ）
3　土師器　坏　C－4　SI 1 床（第67図 8 ）
4　土師器　鉢　C－6　SI 1 床（第67図10）
5　土師器　鉢　C－7　SI 1 床（第67図11）
6　土師器　甕　C－8　SI 1 床（第67図12）
7　土師器　甕　C－9　SI 1 床（第67図13）

図版33　南小泉第44次調査出土遺物 1



1	土師器	甕	C－10	SI１床（第68図１）
2	土師器	甕	C－11	SI１床（第68図２）
3	須恵器	甕	E－１	SI１床（第68図３）
4	石製品	磨石	K－５	SI１床（第68図４）
5	石製品	磨石	K－３	SI１床（第68図８）
6	石製模造品	剣形	K－8	SI１床（第68図２）
7	石製模造品	円盤	K－６	SI１床（第68図３）
8	石製模造品	臼玉	K－９	SI１床（第68図４）
9	石製模造品	臼玉	K－10	SI１床（第68図５）
10	石製模造品	臼玉	K－11	SI１床（第68図６）
11	石製模造品	臼玉	K－12	SI１床（第68図７）
12	黒曜石	剥片	K－１	SI１床
13	黒曜石	剥片	K－２	SI１床

図版34　南小泉第44次調査出土遺物２

XII　南小泉遺跡第45次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点　　仙台市若林区遠見塚２丁目291－10・11番
調 査 期 間　　平成17年６月16日～６月17日
調査対象面積　　76㎡
調 査 面 積　　32㎡
調 査 原 因　　個人住宅建築
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　　主査　工藤哲司　　文化財教諭　赤岡光騎

2　調査に至る経過と調査方法

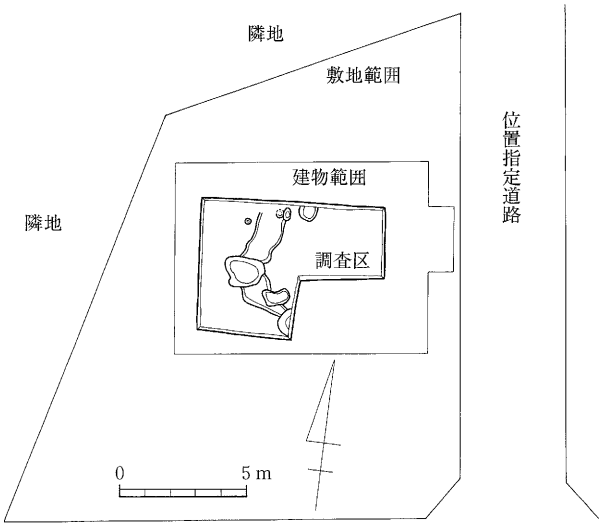
本調査は、平成17年５月23日付けで、石森克明氏より長さ３ｍの杭打ちを伴う住宅建築の発掘届が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成17年６月16日に実施した。建築予定地に３ｍ×7.5ｍのトレンチを設定して調査を行なったところ、調査区西半部から遺構と一括遺物が検出された。一括遺物を含む土層は南側にのびる可能性があるため、調査区の南西部を幅2.5ｍ・長さ４ｍの範囲で拡張し、引き続き本調査を実施した。

3　遺跡の位置と環境

南小泉遺跡第44次調査で記述したとおり、当該地は仙台市の東部は、標高10ｍ前後の沖積平野の自然堤防に立地している。縄文時代以降遺跡が形成され、古墳時代から奈良・平安時代にかけて集落跡や中・近世の屋敷跡など各時代の遺構・遺物が発見されている。周辺には古墳や集落・寺院などがあり、古くから栄えていた地域である。

4　基本層序

盛　土　山砂の盛土層。層厚は20cm前後。
Ⅰ　層　10YR3/4暗褐色の粘土質シルト層。層厚約30cm。畑の耕作土。
Ⅱ　層　10YR4/4褐色の砂質シルト層。地山。下層に移行するにしたがって砂層に変化。



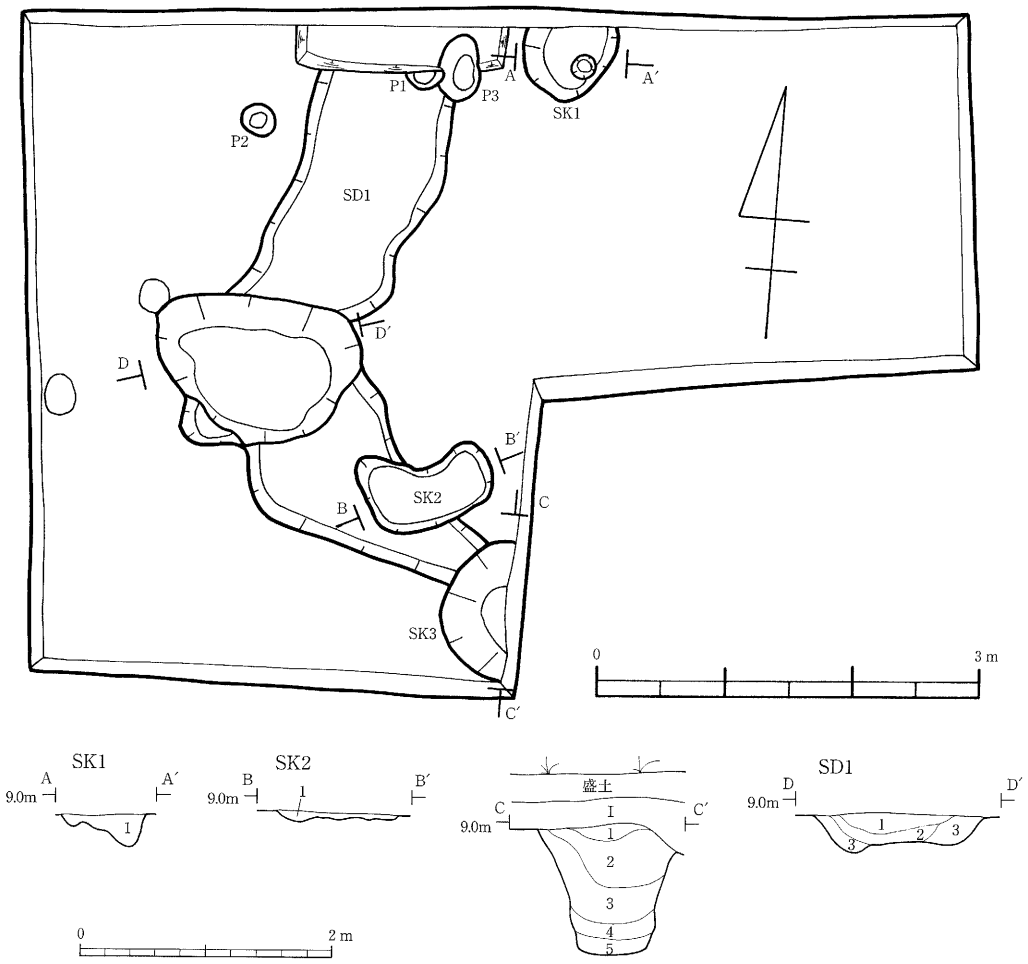
第70図　調査区と遺構配置

5　発見遺構と出土遺物

Ⅱ層上面で、溝跡１条・土坑３基・ピット３個が検出された。

１）溝跡

SD１溝跡　調査区の西部でＬ字状に折れて南北方向



SD 1

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	溝の角付近に分布。土師器多数出土。
2	10YR5/4　暗褐色	砂質シルト	1層の下部にのみ分布。土師器片をわずかに含む。
3	10YR5/6　黄褐色	砂質シルト	にぶい黄橙色土を粒状に含む。

SK 1

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR4/6　暗褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色土のブロックを含む。土師器片出土。

SK 2

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR5/6　黄褐色	シルト	にぶい黄褐色土のブロックを含む。

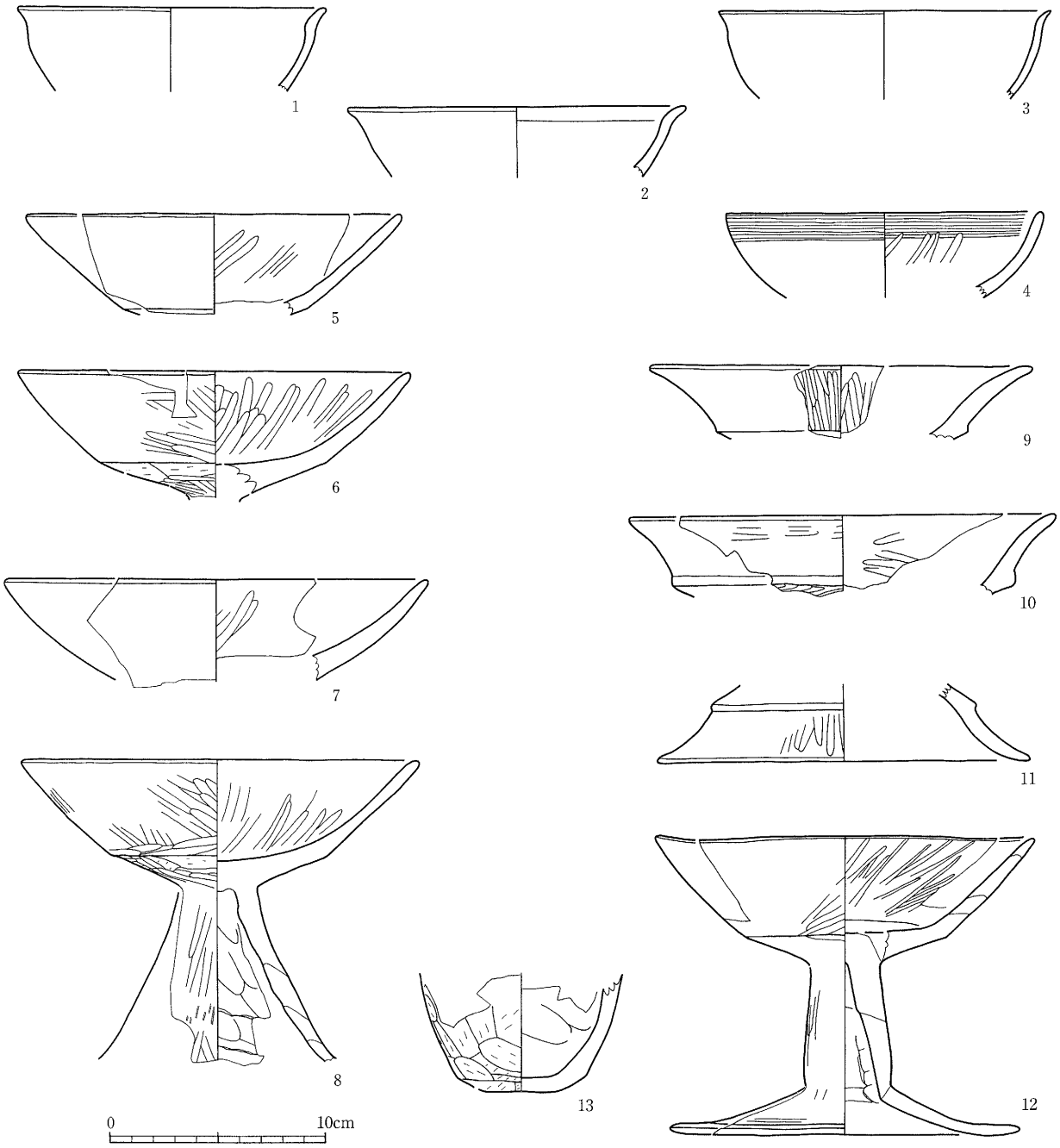
SK 3

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR3/3　暗褐色	シルト	マンガン粒・酸化鉄を少量含む。自然堆積
2	10YR3/4　暗褐色	シルト	黄褐色シルトのブロックを多量に含む。人為堆積
3	10YR4/4　褐色	シルト	暗褐色土・黄褐色土のブロックを多く含む。人為堆積
4	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	壁から崩落した褐色土のブロックを含む。自然堆積
5	10YR4/6　褐色	砂	暗褐色土を縞状に含む。壁崩落土。自然堆積

第71図　遺構実測図

から東西方向に検出された。SK２・３土坑、Ｐ１・３に切られている。幅は上端で110cm、底面で90cm前後であるが、東西方向の部分の東端はこれより狭くなっている。深さは、８cm前後であるが、角の部分が東西約160cm・南北約120cmの範囲が不整な円形に一段下がっており、検出面から30cmほどの深さがある。断面形は浅いＵ字形を呈する。堆積土は、角の部分で３層に分けられた。１層が10YR4/3のにぶい黄褐色の砂質シルトで、溝の角の部分にのみ分布し、土層中からロクロ使用以前の土師器が多数出土した。２層は10YR5/4のにぶい黄褐色の砂質シルトで、１層の下部に分布する。土師器片をわずかに含む。３層は10YR5/6の黄褐色の砂質シルトでにぶい黄褐色土を粒状に含む。角部以外の溝跡には３層が堆積する。角部分の不整円形の落ち込みについては、溝跡より新しい時期の遺構の可能性もある。

１層出土の土師器は、坏４点（第72図１～４）と高杯８点（第72図５～12）、壺または鉢１点（第72図13）の13点を実測した。坏は半球形の体部に短く外反する口縁が付き内面の体部と口縁部の境が軽く屈曲するもの（Ｃ－２・10・11）と体部から口縁部まで丸味をもって立ち上がるもの（Ｃ－12）がある。高杯は、杯部の外面が底部と体部の境に軽い角が付いて体部から口縁にかけて内弯気味に立ち上がるもの（Ｃ－１・３～６）と外面の口縁部と



図中番号	登録番号	出土地点 基本層	遺構名	遺構層	取上No.	分類 種別	器種	法量 器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	特徴・備考（調整・素材・産地・時期・分類）	写真図版
1	C-11		SD-1	1層	11	非ロクロ土師器	坏	(3.9)	(14.2)			内外面：摩滅	
2	C-2		SD-1	1層	2	非ロクロ土師器	坏	(3.4)	(15.6)			内外面：摩滅	
3	C-10		SD-1	1層	11	非ロクロ土師器	坏	(4.0)	(15.4)			内外面：摩滅	
4	C-12		SD-1	1層	11	非ロクロ土師器	坏	(4.0)	(14.8)			外面：口縁ヨコナデ　内面：口縁ヨコナデ、体部ヘラミガキ	
5	C-5		SD-1	1層	6	非ロクロ土師器	高坏	(4.7)	17.2			外面：ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ	
6	C-3		SD-1	1層	3·8·11	非ロクロ土師器	高坏	(5.7)	18.2			外面：ヘラミガキ、ヘラケズリのちヘラミガキ　内面：ヘラミガキ	
7	C-6		SD-1	1層	7	非ロクロ土師器	高坏	(4.7)	19.5			外面：不明　内面：ヘラミガキ	
8	C-1		SD-1	1層	1	非ロクロ土師器	高杯	14.0	18.2			外面：坏部ヘラミガキ、ヘラケズリのちヘラミガキ、脚部ハケメのちヘラミガキ 内面：坏部ヘラミガキ、脚部ナデ	
9	C-8		SD-1	1層	9	非ロクロ土師器	高杯	(3.4)	17.6			外面：ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ	
10	C-7		SD-1	1層	8	非ロクロ土師器	高坏	(3.7)	19.7			外面：ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ	
11	C-9		SD-1	1層	11	非ロクロ土師器	高坏	(3.6)		(17.8)		外面：ヘラミガキ　内面：不明	
12	C-4		SD-1	1層	4·5	非ロクロ土師器	高杯	13.9	(17.6)	(16.3)		外面：坏部ヘラミガキ、ヘラケズリのちヘラミガキ、脚部ハケメのちヘラミガキ 内面：坏部ヘラミガキ、脚部ナデ	
13	C-13		SD-1	1層	11	非ロクロ土師器	壺または鉢	(4.5)		3.2		外面：ヘラケズリ　内面：ナデ	

第72図　出土遺物

体部の境に段がついて体部から口縁部にかけて軽く外反するもの（C－7・8）がある。C－9はC－7・8に比べて内面調整が荒いので脚部として復元したが、前者と似た形態を呈しているので、杯部の可能性もある。

2）土坑

SK1土坑　調査区中央の北壁付近で検出され、調査区の北側にのびる。重複はない。平面形は円形ないし楕円形を呈し、東西長軸72cm・南北検出部軸長62cmを測る。断面形は不整な舟底形で東側が深くなっている。深さは25cmほどである。堆積土は褐色の砂質シルト1層である。遺物は土師器の細片が1点出土しているだけである。

SK2土坑　拡張部の東部で検出された。SD1溝跡を切る。三日月形に湾曲した土坑で、長軸110cm・短軸56cmを測る。深さは3～8cmと浅く底面には凹凸がある。堆積土は黄褐色のシルト1層で、にぶい黄褐色土のブロックを含む。出土遺物はない。

SK3土坑　拡張部の東壁で検出され、東部は調査区の外にのびる。SD1溝跡を切る。検出部の状況から平面形は形を呈するものと考えられる。検出部の南北径は110cmを測る。断面形は逆台形で、深さは106cmである。堆積土は5層に分けられ、上部3層は人為的堆積土層、下部2層は自然堆積土層と観察される。出土遺物はない。

3）ピット

P1　平面形は直径14cmの円形で、深さ6cm。堆積土はにぶい黄褐色土のブロックを含む暗褐色砂質シルト。

P2　平面形は長軸52cm・短軸32cmの楕円形で深さ30cm。堆積土はにぶい黄褐色土を含む暗褐色砂質シルト。

P3　平面形は直径22cmの円形で、深さ14cm。堆積土は暗褐色土のブロックを含む褐色粘土質シルト。

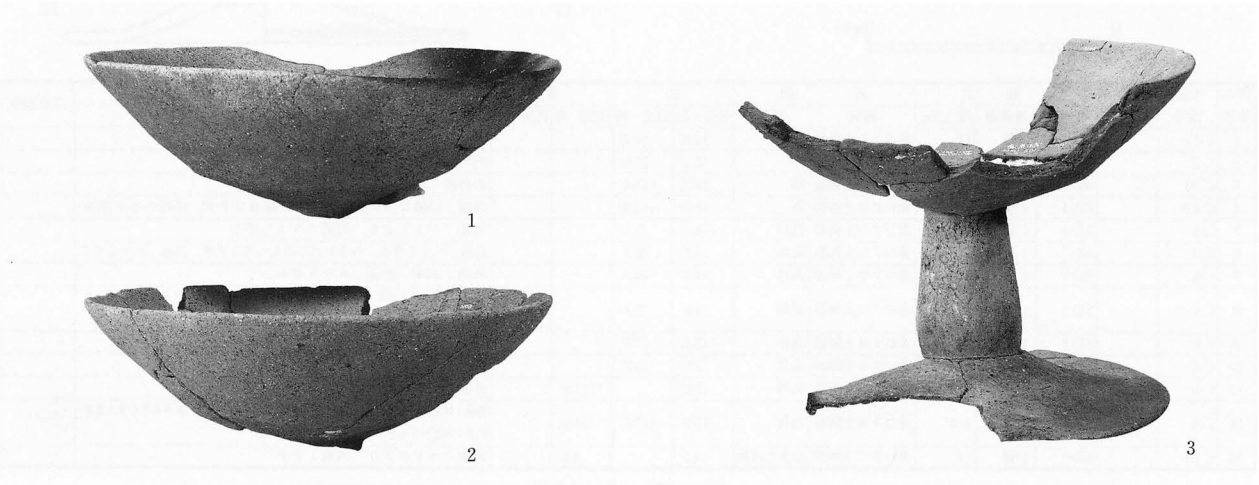
6　まとめ

①今回の調査地点は、耕作等による撹乱が浅く、溝跡1条と土坑3基・ピット3個の遺構が検出された。

②SD1溝跡の1層から出土した土師器は、その形態的特長から仙台市鴻ノ巣遺跡第7次発掘調査報告書の出土土器の分類ではⅡ期前後に相当し、南小泉遺跡第26次調査SI5竪穴住居跡とほぼ同期の5世紀後半ころと考えられる。他の土坑やピットの年代は、時期を推定できる遺物がなく、所属時期は不明である。

＜参考文献＞

仙台市教育委員会（2004）：「鴻ノ巣遺跡第7次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第280集



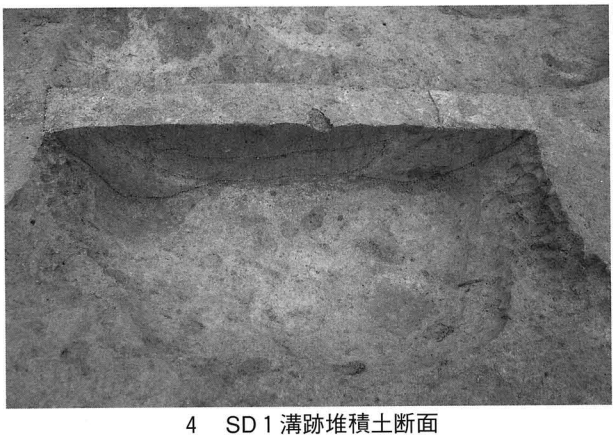
1　土師器　高坏　C－3　SD1　1層（第72図6）
2　土師器　高坏　C－1　SD1　1層（第72図8）
3　土師器　高坏　C－1　SD1　1層（第72図12）

図版35　南小泉遺跡第45次調査出土遺物

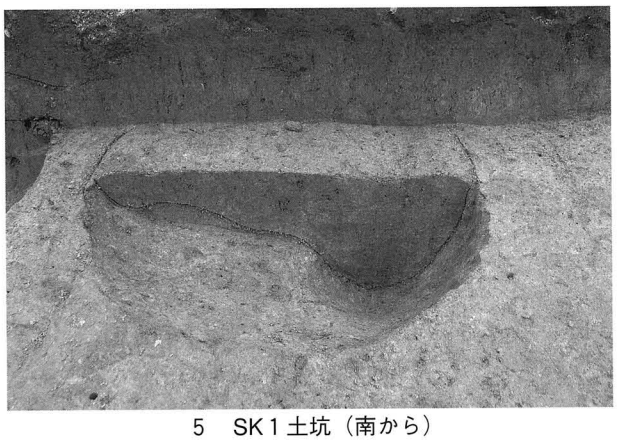
1　遺構検出状況（西から）

2　SD１溝跡遺物出土状況１（東から）

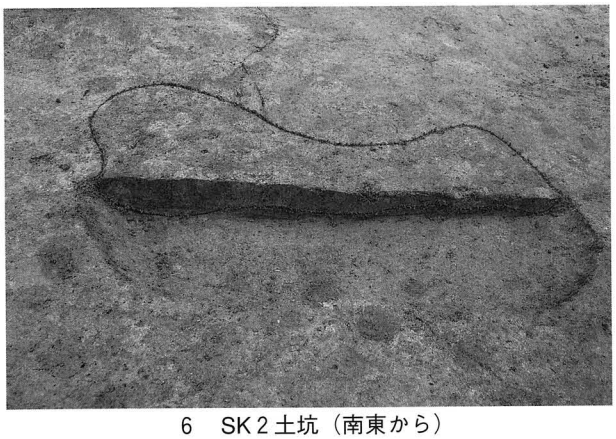
3　SD１溝跡遺物出土状況２（南西から）



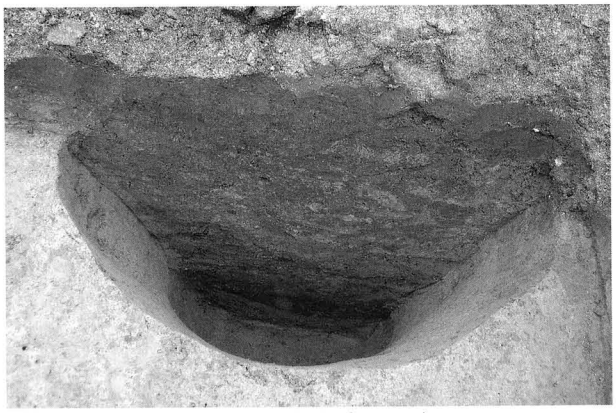
4　SD１溝跡堆積土断面



5　SK１土坑（南から）



6　SK２土坑（南東から）



7　SK３土坑（西から）

8　遺構完掘状況（西から）

図版36　南小泉遺跡第45次調査の状況

XIII　南小泉遺跡第46次発掘調査報告書

1．調査要項

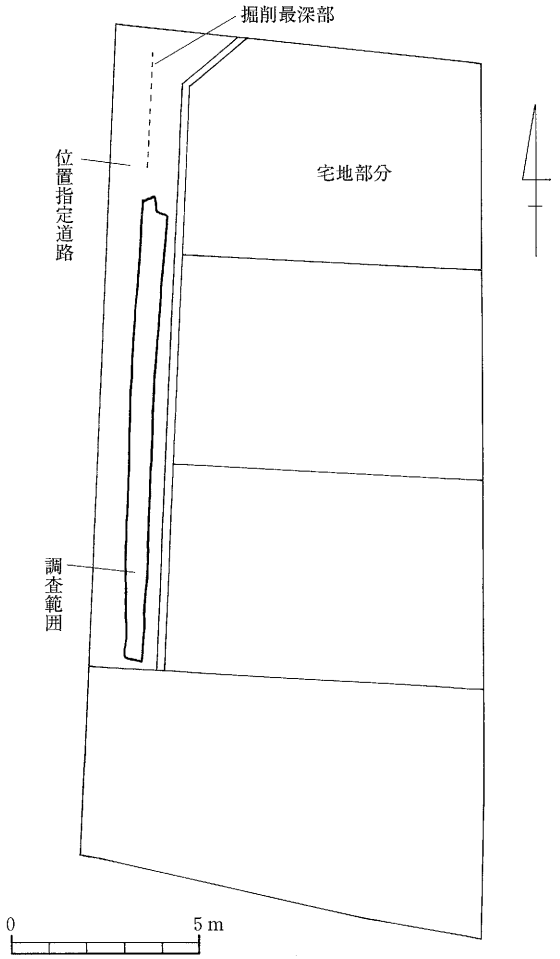
遺　跡　名	南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点	仙台市若林区南小泉４丁目50－１　他１筆
調 査 期 間	平成17年11月28日～11月29日
調査対象面積	70㎡
調 査 面 積	36㎡
調 査 原 因	宅地造成に伴うガス・上下水道等施設設置工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主査　工藤哲司　　文化財教諭　赤岡光騎

2．調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成17年11月７日付で地権者ミハル・エステートマネージメント有限会社代表取締役 飯塚淑美氏より、宅地造成に伴うガス・上下水道等施設設置工事の発掘届が提出されたため行われた。

調査は、管路敷設予定地のうち、北側のコンクリート片等の入った撹乱が及んでいる部分を除いて、東西1.5ｍ×南北24.5ｍのトレンチを設定し、重機により盛土及びⅠ～Ⅱ層（深さ約60cm）を除去し、Ⅲ層上面を人力で精査した。

溝跡が検出されたため、調査区西半の下水管埋設による削平の可能性のある部分（幅約60cm）を掘り下げて調査を行った。



第73図　調査区配置図

3．遺跡の位置と環境

遺跡の環境については、第44次発掘調査報告書を参照されたい。今回の調査地点は、遺跡の南西部にあたり、標高は12.3ｍである。

4．基本層序

約20cmの盛土層の下に大別３層・細別４層を確認した。Ⅰ層は近年の畑耕作土で、上部約25cmのⅠa層と下部約25cmのⅠb層に分けられる。Ⅰa層は褐色の粘土質シルト層である。Ⅰb層は褐色のシルト質粘土層で、炭化物、土器片、黄褐色土ブロック、にぶい黄褐色土ブロックを含んでいる。Ⅱ層は層厚約５cmの褐色のシルト

質粘土層で、酸化鉄集積層である。もとは基本層Ⅲ層であると考えられる。Ⅲ層は黄褐色のシルト質粘土層で、地山である。

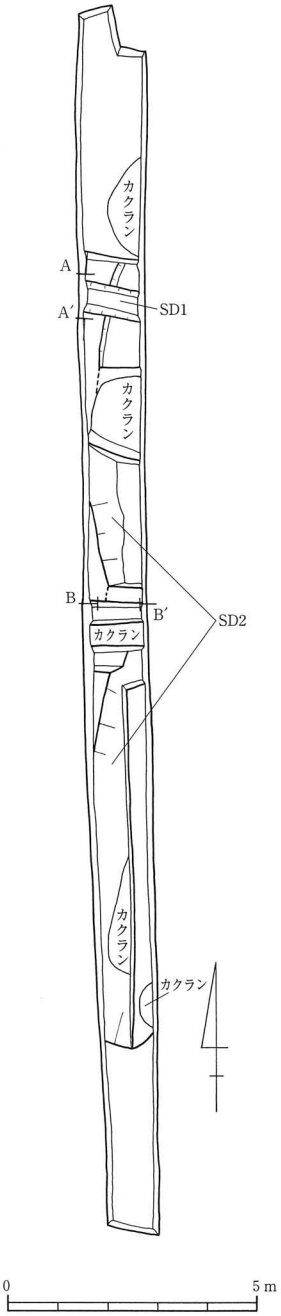
5．発見遺構と出土遺物

検出された遺構は、溝跡２条である。

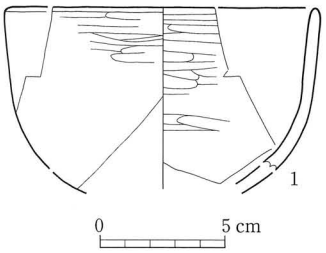
１）溝跡

SD１溝跡　調査区北側に、調査区を東西方向に横切って検出された。SD２を切っている。検出部の幅は上端で約50cm、断面形は浅いＵ字形で、深さは約20cmである。堆積土は２層に分けられる。１層から国分寺下層式と見られる非ロクロ土師器坏（Ｃ－１）のほか、非ロクロ土師器片１点、須恵器片２点が出土している。

SD２溝跡　調査区南側から縦に、中心軸はやや北東寄りに傾いて検出された。東側は調査区外に延びている。検出部の上面幅は断面実測位置で約75cm・底面幅は約25cmほどである。壁はゆるやかに立ち上がっており、本来の幅は少なくとも１m以上あると推定される。堆積土は５層に分けられ、粗砂、炭化物、土器片、焼土を含んでいる。調査区南端から約7mの地点で壁が立ち上がっていることから、溝跡は東方向に折れて調査区外に延びていると推定される。遺物は堆積土３層を中心として、坏７個体分、高坏１個体分、鉢３個体分、甑１個体分のそれぞれ非ロクロ土師器片のほか、鉄製品（刃子）１点が出土している。他に、図化できない非ロクロ土師器片が大小合わせて40点以上、須恵器片が３点出土している。Ｃ－２は、内外面が摩滅しており調整は不明である。浅身で底部が平底気味の坏である。Ｃ－３は体部外面の中央部に沈線を有する坏で、内面に対応する段等はみられない。丸味をもつ体部から、そのまま内弯気味に立ち上がり、沈線を境として上下に傾きの変化はない。調整は、内外面ともにヘラミガキである。Ｃ－４は、平底風の丸底の坏で、底部から丸味を持って立ち上がり、口縁部がわずかに外反している。外面は、口縁部～体部上半がヨコナデ、体部下半がナデ、底部に近い部分がヘラケズリで、内面はヘラナデのちヘラミガキ・黒色処理である。Ｃ－10は、体部外面の中央部に段を有する丸底風の平底の坏で、段の上は内

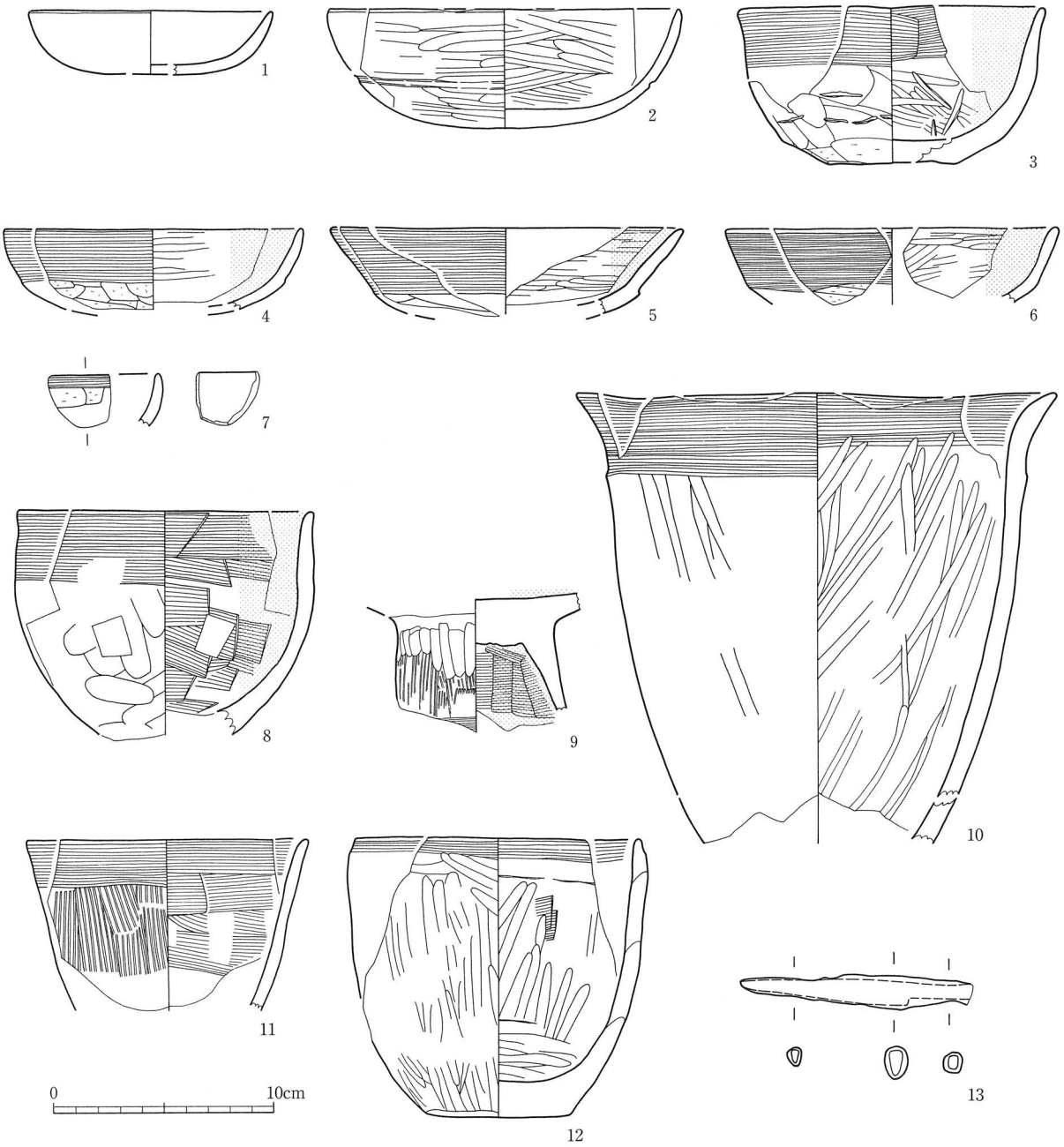


第74図　遺構平面図



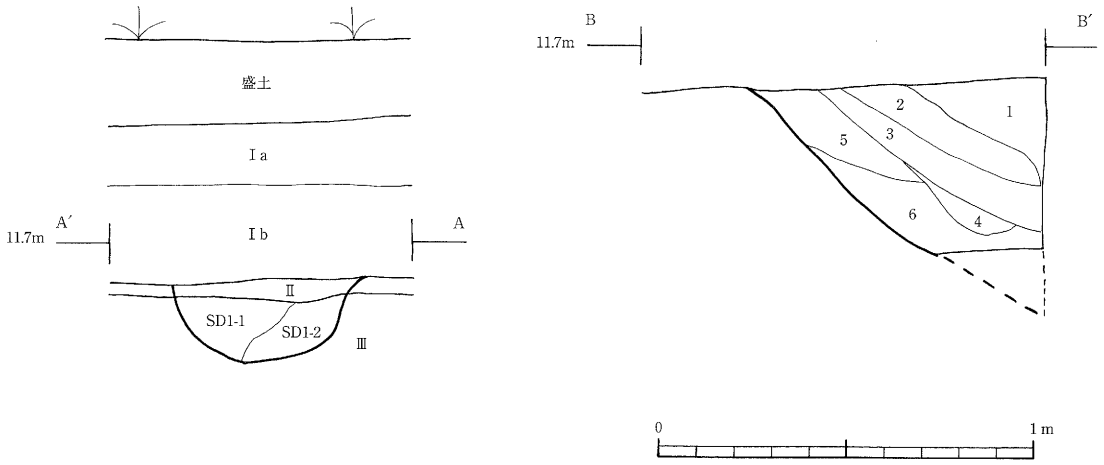
図中番号	登録番号	出土地点 基本層	遺構名	遺構層	取上No.	分類 種別	器種	法量 器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	特徴・備考（調整・素材・産地・時期・分類）	写真図版
1	C-1		SD-1			土師器	坏	(6.5)	(12.6)			内外面　ヘラミガキ	－

第75図　SD1溝跡出土遺物



図中番号	登録番号	出土地点 基本層	遺構名	遺構層	取上No.	分類 種別	器種	法量 器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	特徴・備考（調整・素材・産地・時期・分類）	写真図版
1	C－2		SD－2			土師器	坏	(2.9)	(11.0)			内外面　摩滅	
2	C－3		SD－2			土師器	坏	5.5	(16.0)			内外面　ヘラミガキ　口縁部と体部の境に沈線	39－1
3	C－4		SD－2			土師器	坏	7.2	13.9		5.9	外面：ヨコナデ、ナデ・ヘラケズリ　内面：ヘラナデのちヘラミガキ　黒色処理	39－2
4	C－10		SD－2			土師器	坏	(3.7)	13.5			外面：ヨコナデ・ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ　黒色処理	39－3
5	C－11		SD－2			土師器	坏	(3.9)	(14.8)			外面：ヨコナデ・ナデ　内面：ヘラミガキ、黒色処理	39－6
6	C－12		SD－2			土師器	坏	(3.4)	(15.0)			外面：ヨコナデ、ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ、黒色処理	39－4
7	C－13		SD－2			土師器	坏	(2.4)				外面：ヨコナデ、ヘラケズリ　内面：ナデ？　関東系？	39－5
8	C－6		SD－2			土師器	鉢	(10.2)	(13.4)			外面：ヨコナデ・ヘラナデ・ナデ　内面：ヘラナデ　黒色処理	39－12
9	C－5		SD－2			土師器	高坏		(6.3)			外面：ハケメのちヘラミガキ，ヨコナデ　内面：ヘラナデ　黒色処理	
10	C－8		SD－2			土師器	甑	(20.5)	21.6			外面：ナデ　内面：ヨコナデ、ヘラミガキ	39－7
11	C－9		SD－2			土師器	鉢	(7.8)	(12.7)			外面：ヨコナデ、ハケメ　内面：ヨコナデ、ヘラナデ	39－8
12	C－7		SD－2			土師器	鉢	12.7	12.9		6.5	外面：ヨコナデ　ヘラミガキ　内面：ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ	39－9
13	N－1		SD－2			鉄製品	刃子	(10.6)	1.6	1.1			39－11

第76図　SD2溝跡出土遺物実測図



基本層

土層No.	土　　色	土質	備　　考
盛土			山砂及び礫混じりの暗褐色土
Ⅰa	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	畑耕作土上部
Ⅰb	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	炭化物、土器片、黄褐色ブロック、にぶい黄褐色土ブロックを含む
Ⅱ	7.5YR4/6　褐色	シルト質粘土	酸化鉄集積層　もとは基本層Ⅲ層
Ⅲ	10YR5/6　黄褐色	シルト質粘土	地山

SD 1

土層No.	土　　色	土質	備　　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	
2	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	褐色土を霜降り状に含む

SD 2

1	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト質粘土	マンガン粒をわずかに含む。炭化物をわずかに含む
2	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	粗砂を多く含む。土器片・炭化物を含む
3	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	焼土・灰を多量に含む。しまりなし。土器片を多量に含む
4	7.5YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	焼土を多く含む。
5	10YR4/6　褐色	シルト質粘土	粗砂を多く含む。炭化物、土器片を含む
6	7.5YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	炭化物片を多量に含む。土器片を含む

第77図　遺構断面図

弯気味に立ち上がる。内面に対応する段等は見られない。調整は、段の上がヨコナデ、下がヘラケズリで、内面はヘラミガキ・黒色処理である。C－11は、体部外面の中央部に段を有する丸底風の平底の坏で、底部から丸味を持って立ち上がり、段の上はほぼ直線的に外傾して立ち上がる。調整は、段の上がヨコナデ、下がナデ、内面はヘラミガキ・黒色処理である。C－12は、丸底風の平底の坏で、体部から内弯気味に立ち上がっている。調整は、外面の口縁部はヨコナデ、体部～底部はヘラケズリで、内面はヘラミガキ・黒色処理である。C－13は、体部から内弯気味に丸味を持って立ち上がる坏である。調整は、外面の口縁部はヨコナデ、体部はヘラケズリ、内面はナデと考えられる。小片ではあるが、他の坏とは調整が異なっており、関東系土師器である可能性も考えられる。C－5は、高坏の脚部である。中空で、ほぼ円筒形に立ち上がっている。調整は、外面がハケメのちヘラミガキ、底部に近い部分はヨコナデで、内面はヘラナデ・黒色処理である。C－6は、体部下半は丸味を持って立ち上がり、中央部からは直線的に内弯気味に外傾し、口縁部はわずかに外反している鉢である。調整は、外面の口縁部～体部上部はヨコナデ、体部中央部～下半はヘラナデ・ナデで、内面はヘラナデ・黒色処理である。C－7は、底部から丸味を持って立ち上がり、中央部からは直線的にやや外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに内反している。調整は、外面の口縁部はヨコナデ、体部はヘラミガキ、内面は上半の一部にヘラナデが残るが全体にヘラミガキである。C－9は体部からほぼ直線的に外傾して立ち上がり、口縁部がわずかに外反している鉢である。調整は、口縁部が内外面ともにヨコナデ、体部外面がハケメ、内面がヘラナデである。C－8は、体部が長く伸びる長胴形の甑で、口縁部は小さく外反している。調整は、口縁部が内外面ともにヨコナデ、体部外面はナデ、内面はヘラミガキである。他に、残存長10.6cmを測る刃子が1点出土している。これらの出土品は、その多くに仙台市中田南遺跡出土品の分類（太田：1994）による第Ⅲ群土器に類例が見られる。Ⅲ群土器は、「土師器編年の栗囲式の後半から国分寺下層式の前半にかけての段階にあたる、年代としては7世紀末～8世紀前半（古墳時代末期～奈良時代前半）に相当する」

（太田：同）と考えられている。本調査区から出土した土師器の時期についても同様に、７世紀末～８世紀前半と位置づけておきたい。遺構の年代についても、他の時代の遺物が出土しておらず、ほぼ同じ形式の土師器が相当数まとまって出土していることから、遺物の年代にあたる７世紀末～８世紀前半に相当すると考えられる。

６．まとめ

①本調査区は、南小泉遺跡の南西部に位置する。

②現地表下約60cmの基本層Ⅲ層上面から溝跡２条（SD１・SD２）が発見された。

③SD１溝跡は、切り合いからSD２よりは新しいが、堆積土からの出土遺物が数点あるのみで、詳細な時期は不明である。

④SD２溝跡は、まとまった出土遺物から、古墳時代末期～奈良時代前半のものと推定される。

＜参考・引用文献＞

佐藤　洋（1987）『六反田遺跡Ⅲ』　仙台市文化財調査報告書第102集

渡部　紀（1988）『下ノ内浦遺跡』　仙台市文化財調査報告書第115集

中富　洋（1991）『山口遺跡　第９次・10次発掘調査報告書』　仙台市文化財調査報告書第151集

太田昭夫（1994）『仙台市　中田南遺跡』　仙台市文化財調査報告書第182集

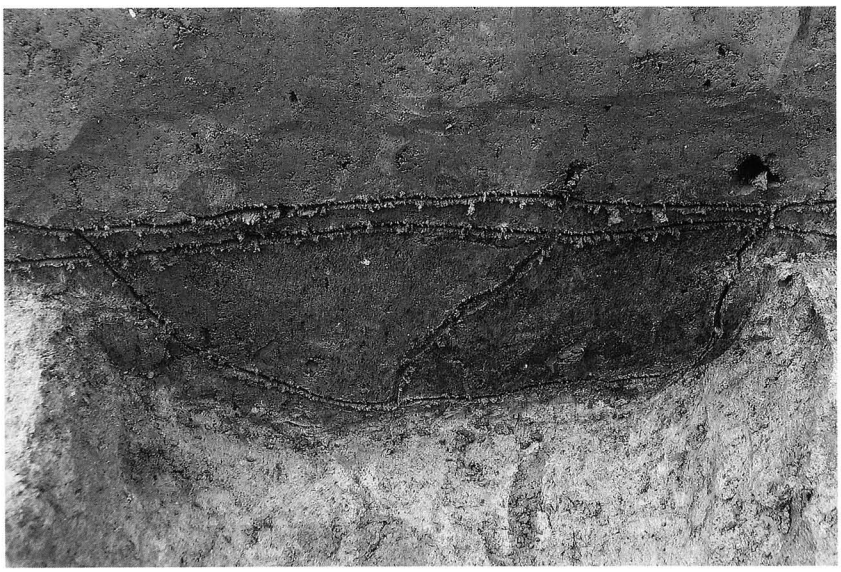
小川淳一　高橋綾子（2000）『王ノ壇遺跡』　仙台市文化財調査報告書第249集

佐藤敏幸・益子剛・菅原優子（2001）『赤井遺跡Ⅰ』　矢本町文化財調査報告書第14集

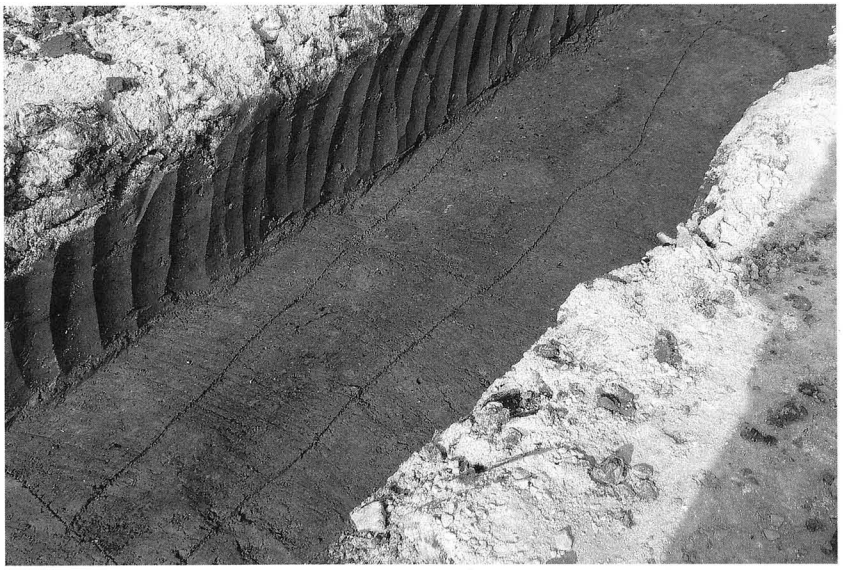
村田晃一ほか（2005）『東北古代土器集成－古墳後期～奈良・集落編－』　東北古代土器研究会　宮城・福島支部

工藤哲司ほか（2005）「Ⅸ　南小泉遺跡第41次発掘調査報告書」『山田本町遺跡ほか　発掘調査報告書』　仙台市文化財調査報告書第287集

1　SD１溝跡・完掘状況（北より）



2　SD１溝跡断面（東より）



3　SD２溝跡検出状況（南東より）

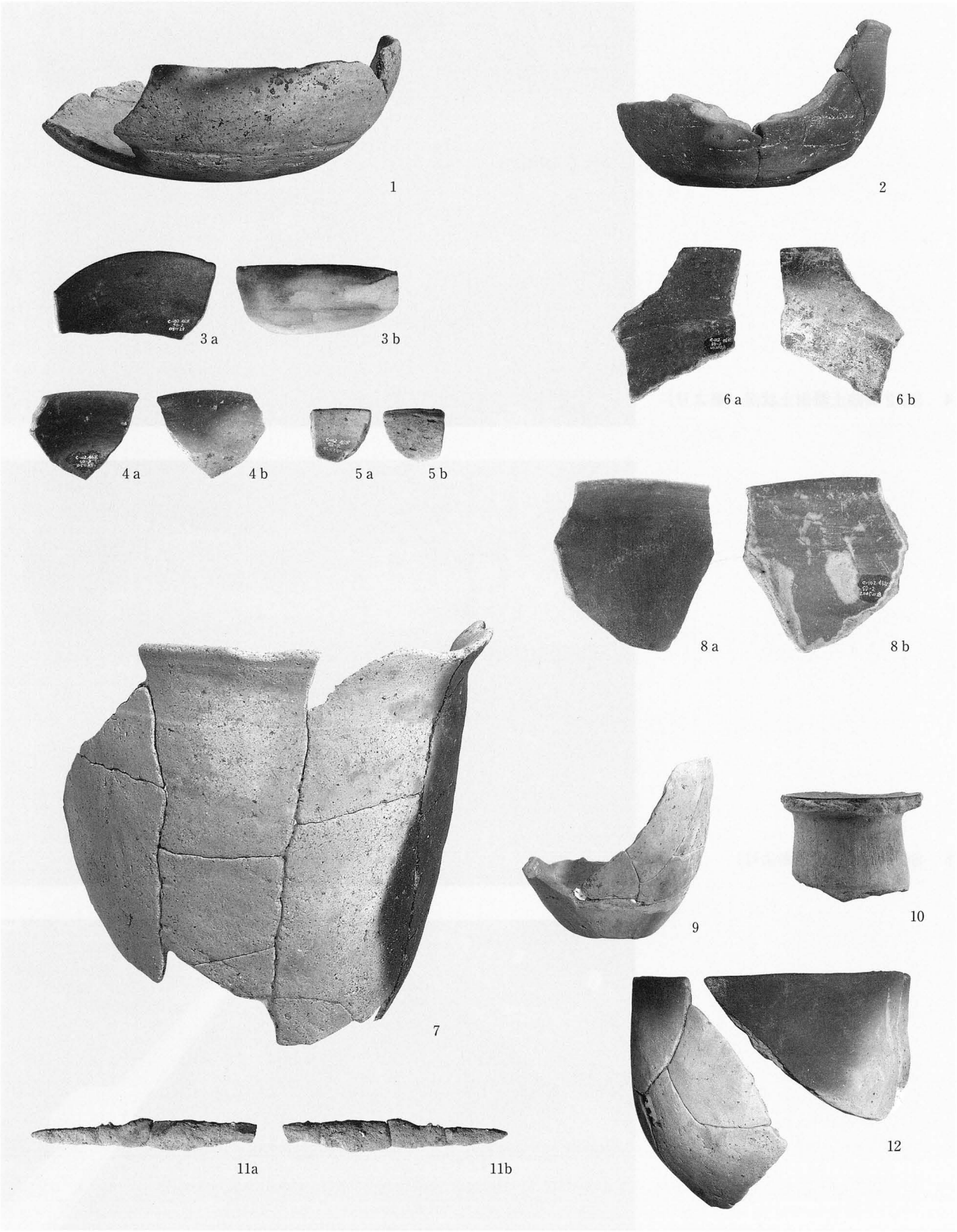
図版37　調査状況１

4　SD 2 溝跡土器出土状況（東より）

5　SD 2 溝跡断面（南より）

6　完掘全景（南より）

図版38　調査状況 2



1	土師器	坏	C－3	SD 2	（第76図 2）	7	土師器	甑	C－8	SD 2	（第76図10）
2	土師器	坏	C－4	SD 2	（第76図 3）	8	土師器	鉢	C－9	SD 2	（第76図11）
3	土師器	坏	C－10	SD 2	（第76図 4）	9	土師器	鉢	C－7	SD 2	（第76図12）
4	土師器	坏	C－12	SD 2	（第76図 6）	10	土師器	高坏	C－5	SD 2	（第76図 9）
5	土師器	坏	C－13	SD 2	（第76図 7）	11	鉄製品	刃子	N－1	SD 2	（第76図13）
6	土師器	坏	C－11	SD 2	（第76図 5）	12	土師器	鉢	C－6	SD 2	（第76図 8）

図版39　南小泉遺跡第46次調査出土遺物

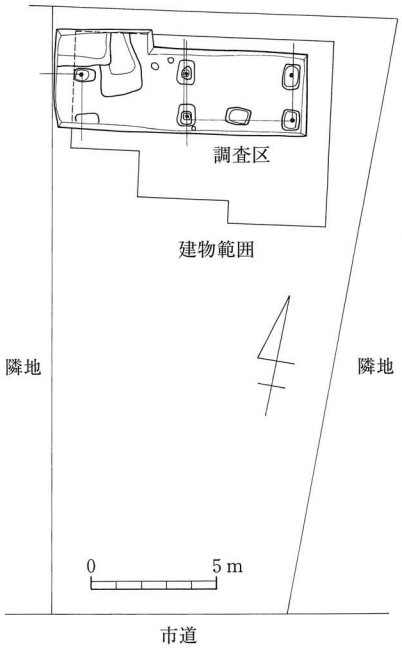
XIV　南小泉遺跡第47次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点　　仙台市若林区遠見塚１丁目37－１
調 査 期 間　　平成17年12月13日～12月15日
調査対象面積　　64㎡
調 査 面 積　　32㎡
調 査 原 因　　個人住宅建築
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　　主査　工藤哲司　　文化財教諭　赤岡光騎

2　調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成17年12月２日付けで、地権者阿部順二氏より、柱状土壌改良の基礎工法による住宅建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成17年12月13日に実施した。建物予定地に３ｍ×８ｍのトレンチを設定して調査を行なったところ、掘立柱建物跡と竪穴住居跡または土坑が検出されたので、一部調査区を拡張し、引き続き本調査を実施した。



第78図　調査区配置図

3　遺跡の位置と環境

遺跡の位置と環境は、第XI章南小泉遺跡第44次発掘調査報告の記載のとおりである。今回の調査地点は、南小泉遺跡の中央南部にあたり、周辺では古墳時代や古代の竪穴住居跡、中世の屋敷跡等の遺構が検出されている。

4　基本層序

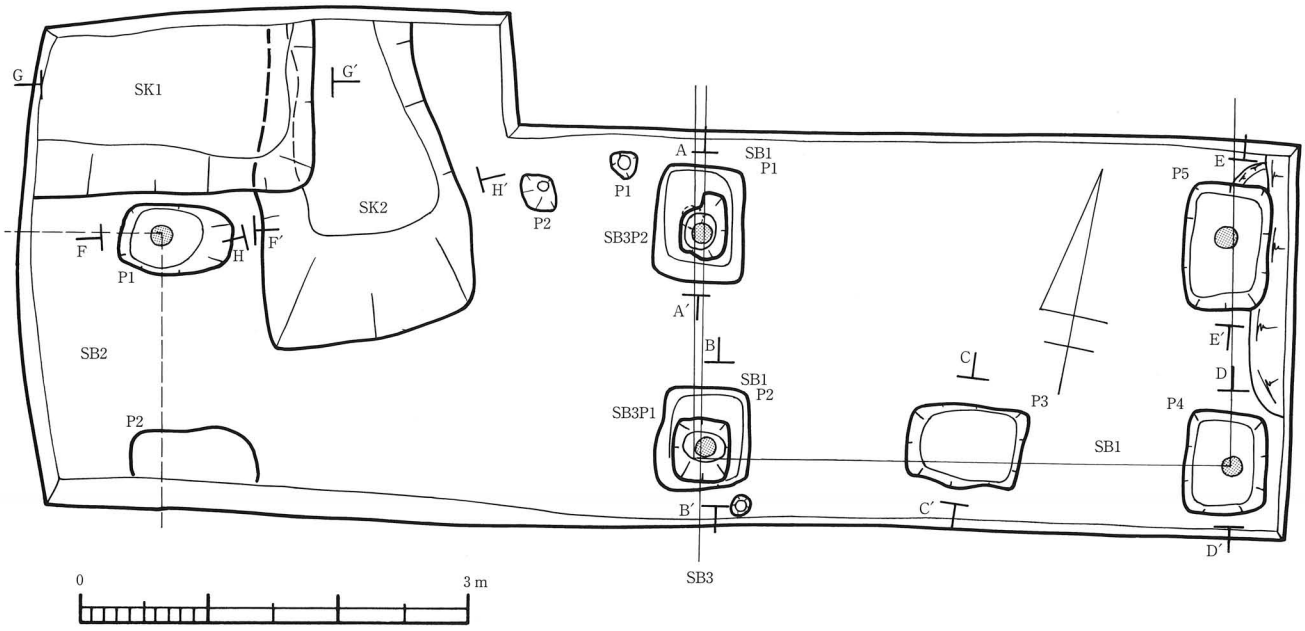
現表土Ⅰ層は厚さが約100cmあり、３層に細分される。Ⅰa層は厚さ約20cmの暗褐色の粘土質シルト層で、現在の畑耕作土である。Ⅰb層は厚さ約40cmの明黄褐色の山砂による盛土層で、褐色粘土のブロックを含む。Ⅰc層は厚さ約40cmの暗褐色の粘土質シルトで、盛土以前の耕作土層である。Ⅱ層は明黄褐色のシルト層で、砂を多く含む。層厚は50cm前後である。Ⅲ層は明黄褐色の砂層である。Ⅱ層上面で遺構が検出されている。

5　発見遺構と出土遺物

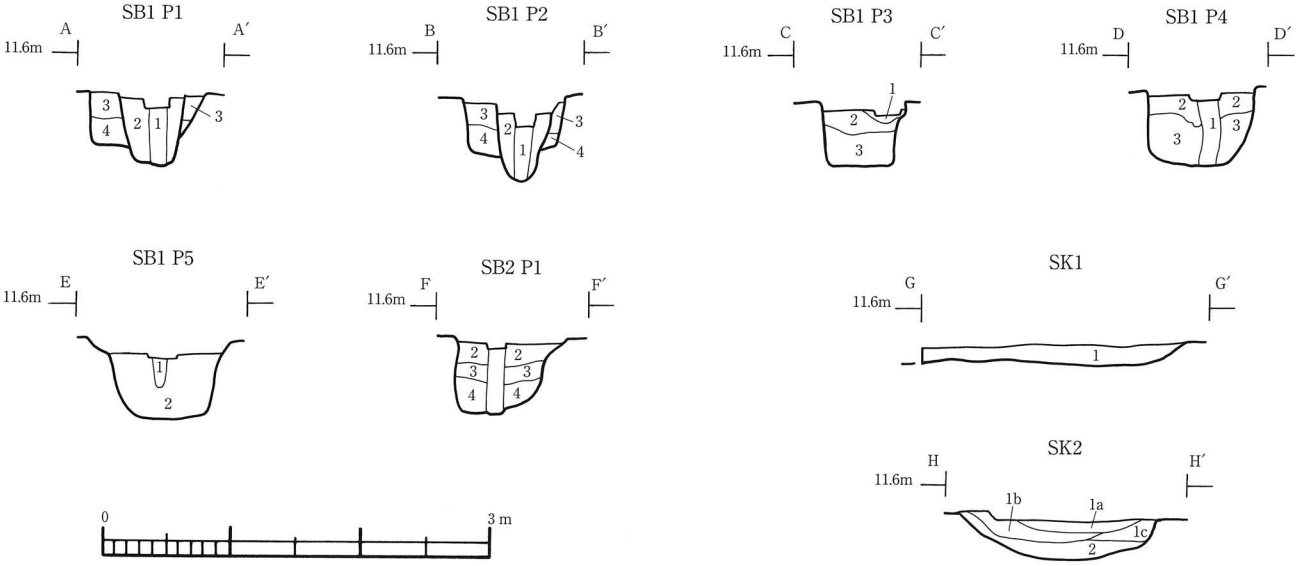
Ⅱ層で、掘立柱建物跡３棟、土坑２基、ピット３個が検出された。

１）掘立柱建物跡

SB１掘立柱建物跡　【位置・重複】調査区東部で５個の柱穴が検出された。建物の北部は調査区の北側にのび



第79図　遺構配置図



SB１－Ｐ１（SB３－Ｐ１と重複）

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	SB３－Ｐ１柱痕跡
2	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	SB３－Ｐ１掘り方　褐色土粒をわずかに含む
3	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	SB１－Ｐ１掘り方　暗褐色土・明黄褐色土を含む
4	10YR5/6　黄褐色	シルト	SB１－Ｐ１掘り方　暗褐色土を縞状に含む

SB１－Ｐ２（SB３－Ｐ２と重複）

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	SB３－Ｐ２柱痕跡　下部に黄褐色土のブロックを含む
2	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	SB３－Ｐ２掘り方　褐色土粒を多く含む
3	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	SB１－Ｐ２掘り方　褐色土粒を部分的に含む
4	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	SB１－Ｐ２掘り方　暗褐色土のブロックを多く含む

SB１－Ｐ３

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを含む
2	10YR5/6　黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土のブロックを多量に霜降り状に含む
3	10YR6/6　明黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土のブロックを含む。下部に砂を含む

SB１－Ｐ４

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	下部に黄褐色土のブロックを含む
2	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	褐色土粒をわずかに含む
3	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土のブロックをわずかに斑状に含む

SB１－Ｐ５

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	黄褐色粒をわずかに含む
2	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	暗褐色土・明黄褐色土のブロックを多量に含む

SB２－Ｐ１

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	柱痕跡　底部ににぶい黄褐色土を含む
2	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	掘り方　炭化物・土器片を含む
3	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	掘り方　褐色土のブロックを多量に含む
4	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	掘り方　褐色土のブロックを含む

SK１

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを下部に含む

SK２

層No.	土　色	土質	備　考
1ａ	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	褐色土粒を霜降り状に含む
1ｂ	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色土をわずかに含む
1ｃ	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	暗褐色土のブロックを多量に含む
2	10YR5/6　黄褐色	シルト	にぶい黄褐色土粒・暗褐色土粒を含む。土器片を含む。

第80図　遺構断面図

ている。SB３掘立柱建物跡に西列を切られている。【規模・配置・方向】検出部の規模は、東西２間約420cm、南北２間以上で、検出部の柱間寸法は東列約180cm、西列は180cm前後と推定される。方向はＮ－11°－Ｗである。【柱穴・柱痕跡】柱穴は隅丸長方形を基調とし、長軸が80～100cm・短軸が61～71cmを測る。検出面からの深さは44～63cmである。柱穴の方向は、東西両列は南北方向に長軸を置き、南列の中央は長軸を東西方向に配置する。柱痕跡は底面で確認されたものを含めて３個検出されている。柱痕跡は円形で、直径は15～18cmを測る。【堆積土】掘り方の堆積土は、Ⅱ層起源の明黄褐色土を基調としているが、Ｐ２・Ｐ４柱穴の上部には黄褐色土粒をわずかに含む暗褐色のシルト質粘土が厚く堆積している。このことから、掘立柱建物の建築当時の地表面に暗褐色土層が存在したことが推定される。【出土遺物】堆積土中から土師器片・須恵器片・鉄滓片が少量出土している。土師器の中にはロクロ使用のものが含まれている。

SB２掘立柱建物跡　【位置・重複】調査区西部で２個の柱穴が検出された。２個のうち調査区南西の１個は、プランを確認しただけである。検出部分では他の遺構と重複はない。建物は調査区の南西側にのびていると考えられる。【規模・配置・方向】検出部の規模は、東西１間以上、南北１間以上である。Ｐ２を調査していないので柱間寸法は不明であるが、柱穴の大きさと距離から180cm前後と推定される。方向はＮ－11°－Ｗ前後と推定される。【柱穴・柱痕跡】柱穴は隅丸長方形を基調とする。Ｐ１で長軸が83cm・短軸が52cmを測る。検出面からの深さは60cmである。柱痕跡は直径13cmの円形で、柱穴の底面は２cmほど窪んでいる。【堆積土】掘り方の堆積土は、明黄褐色土のブロックを含む暗褐色土を基調としている。【出土遺物】遺物は、掘り方堆積土中から土師器片・須恵器片が少数出土している。

SB３掘立柱建物跡　【位置・重複】調査区中央部でSB１掘立柱建物跡の西側柱列の柱穴を切る２個の柱穴が検出された。当初ＳＢ１掘立柱建物跡の建て替えと考えられたが、SB１の西側柱列以外の３個の柱穴では新しい時期の柱穴が検出されなかったので別の建物と判断した。【規模・配置・方向】検出部は、南北１間分で、南北両方にのびているものと考えられる。検出部の柱間寸法は170cmである。方向はＮ－10°－Ｗ前後と推定される。【柱穴・柱痕跡】柱穴は隅丸方形を基調とする。Ｐ１が東西46cm・南北48cmを測る。Ｐ２が東西約45cm前後・南北49cmを測る。検出面からの深さは57～66cmで、SB１掘立柱建物跡の柱穴より10～20cm深く掘られている。柱痕跡は直径13cmの円形である。【堆積土】掘り方の堆積土は、暗褐色土を基調としている。【出土遺物】遺物は、掘り方から土師器片・須恵器片が数点出土している。

２）土坑

SK１土坑　調査区北西角で検出された。西及び北方向にのびる。SK２土坑を切る。平面形は検出部で方形ないし長方形を呈し、検出部の東西軸長212cm・南北軸長132cmを測る。断面形は浅いＵ字形を呈し、深さは16cmほどである。堆積土は暗褐色のシルト質粘土１層である。遺物は土師器の細片が出土している。

SK２土坑　調査区の西部で検出された。北側は調査区外にのびる。SK１土坑に西辺の一部を切られる。平面形は長方形を呈し、溝状にのびる。検出部の南北長軸251cm・東西幅162cmを測る。断面形は浅い舟底形を呈し、深さは30cmほどである。堆積土は大別２層、細別４層に分けられる。遺物は２層から土師器片が出土している。

6　まとめ

①本調査区は、南小泉遺跡の中央南部に位置する。

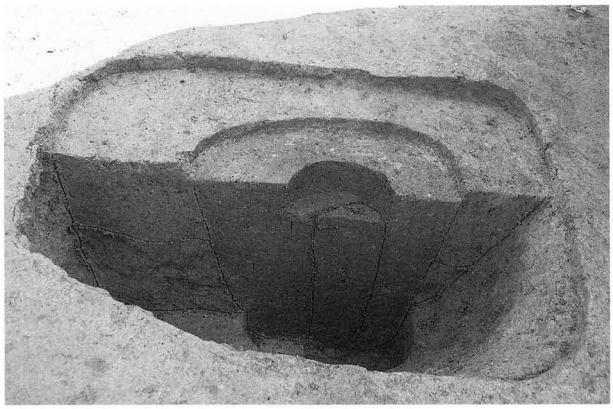
②掘立柱建物跡３棟と土坑２基などの遺構が検出された。掘立柱建物跡は、時期を決定できる資料はないが、ＳＢ１掘立柱建物跡の掘り方からのロクロ使用の土師器片が出土していることから、平安時代の遺構と考えられる。他の建物跡も柱穴の形状等から平安時代に属するものと推定される。

1　遺構検出状況（西から）

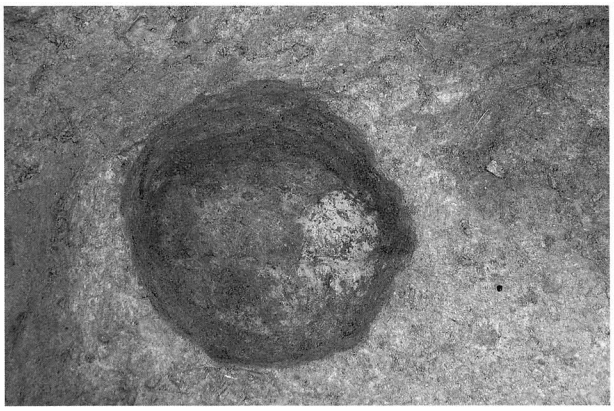
2　北壁東部上層断面（南から）

3　SB１掘立柱建物跡検出状況
（北西から）

図版40　遺構検出状況



1　SB１－Ｐ１・SB３－Ｐ２断面（西から）



2　SB１－Ｐ１・SB３－Ｐ２底面（東から）

3　SB１－Ｐ２・SB３－Ｐ１断面（西から）

4　SB１－Ｐ３断面（西から）

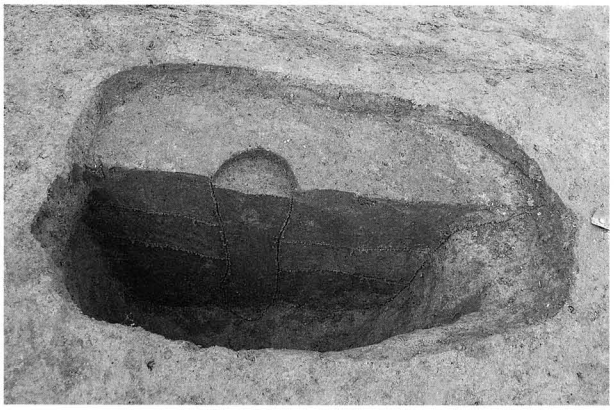
5　SB１－Ｐ４断面（西から）

6　SB１－Ｐ５断面（西から）

7　SB１－Ｐ５底面検出柱痕跡（西から）

8　SB１掘立柱建物跡完掘全景（南東から）

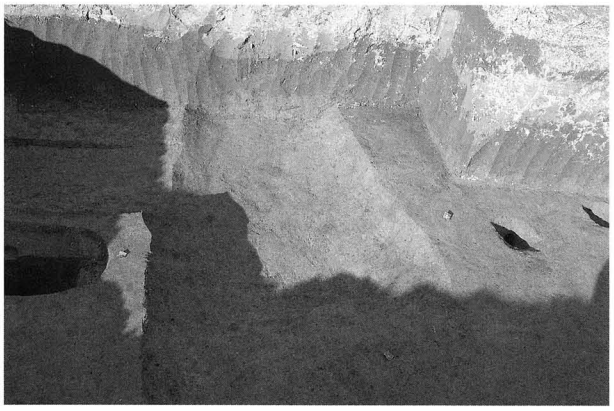
図版41　SB１３掘立柱建物跡



1　SB２－Ｐ１断面（南から）

2　SB２－Ｐ２検出状況（北西から）

3　SK１土坑（南東から）



4　SK２土坑（南から）

5　完掘全景（西より）

図版42　SB２掘立柱建物跡土坑全景

XV　袋前遺跡第２次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名	袋前遺跡（宮城県遺跡番号01439）
調査地点	仙台市太白区大野田字袋前23の一部
調査期間	平成17年９月26日
調査対象面積	61㎡
調査面積	10㎡
調査原因	柱状土壌改良を伴う個人住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主査　工藤哲司　　文化財教諭　赤岡光騎

2　調査に至る経過と調査方法

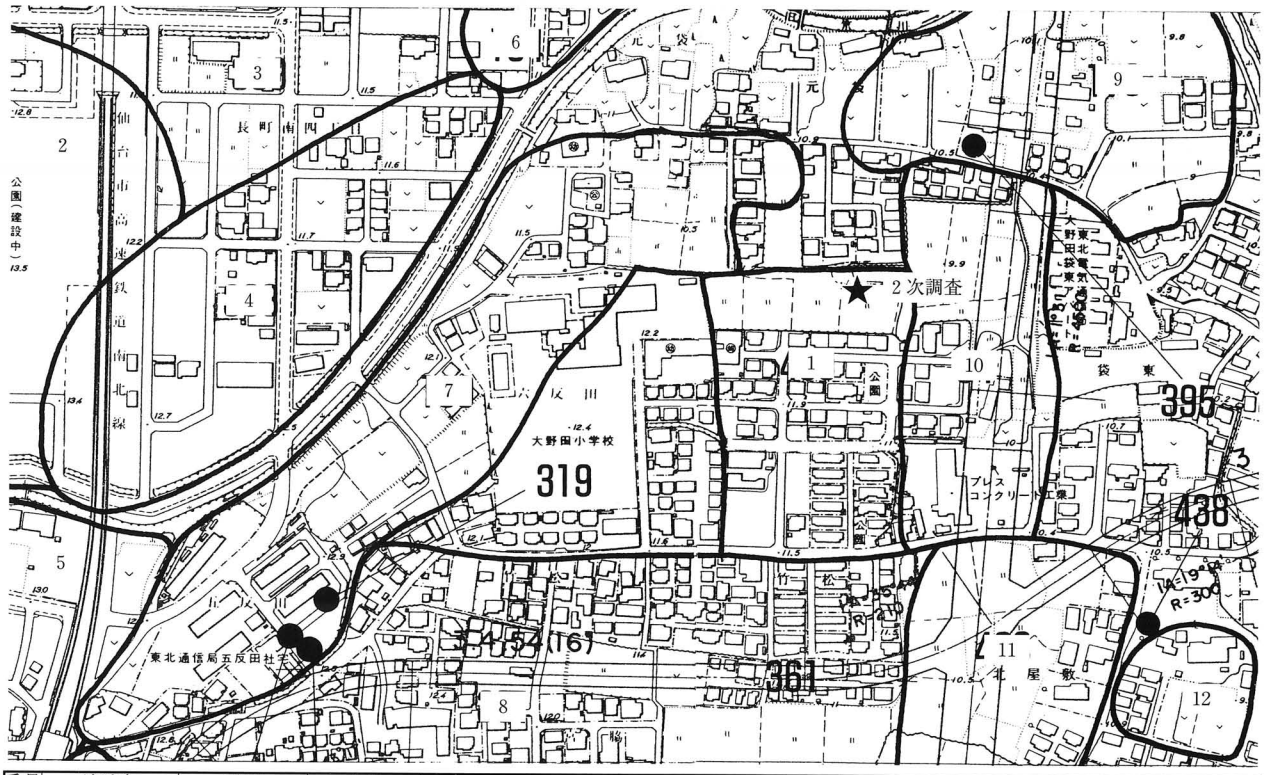
本調査は、平成16年９月５日付けで、相澤武雄氏より、深さ４ｍの柱状土壌改良を伴う個人住宅建築の発掘届が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成17年９月26日に実施した。建築予定地に東西7.5ｍ・南北４ｍのトレンチを設定して調査を行なったところ、盛土と表土層が合わせて1.5ｍの深さがあったので、実質の調査区は東西５ｍ・南北２ｍの範囲となった。Ⅳ層上面で遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。

なお、袋前遺跡の調査次数については、平成10年度から継続して行われている富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う一連の発掘調査を第1次調査とし、本調査を第２次調査とした。

3　遺跡の位置と環境

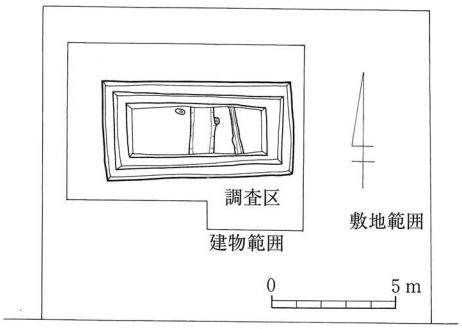
袋前遺跡は、仙台市の南部の郡山低地と呼ばれる地域にあり、南を名取川・北西から南東を広瀬川・北東から南西を大年寺丘陵に囲まれている。遺跡の近くは名取川の支流の一つである笊川が流れ、この河川が複雑な微地形を形成している。特に大野田周辺の自然堤防は、古い時代に形成され、縄文時代以来多くの遺跡が密に存在している。調査区付近の標高は10ｍ前後である。

富沢遺跡では、地表から約５ｍ下層から旧石器時代の焚き火跡や石器製作に関係する生活跡と森林が発見されている。縄文時代は、早期には下ノ内遺跡で竪穴住居跡・落とし穴、中期には六反田遺跡・下ノ内遺跡で竪穴住居跡、後期には六反田遺跡で竪穴住居跡、大野田遺跡で環状配石遺構、下ノ内浦遺跡で配石墓が発見され、この辺りの自然堤防上では縄文時代早期以来、活発な人間活動が行われたことが窺われる。弥生時代には自然堤防上の下ノ内遺跡や下ノ内浦遺跡では後期の竪穴遺構や土壙墓・壺棺が、後背湿地の富沢遺跡では中期から後期の水田跡が重層的に発見されている。古墳時代は、各遺跡に前期から後期の竪穴住居跡が散在しており、大野田古墳群では中期末から後期の前方後円墳や円墳があるほか、石棺墓・木棺墓なども発見されている。奈良・平安時代には、各遺跡で竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。また、袋前遺跡・大野田古墳群・六反田遺跡に跨って溝で囲まれた方形区画の中に大型の柱穴の建物群が存在することが明らかになってきた（平成16年度宮城県遺跡調査成果発表要旨・宮城県考古学会）。中世には王ノ壇遺跡に堀に囲まれた大規模な屋敷が形成され、多数の掘立柱建物跡のほか井戸跡・塚墓・火葬墓・土壙墓などがあり、近くには道路遺構も発見されている。

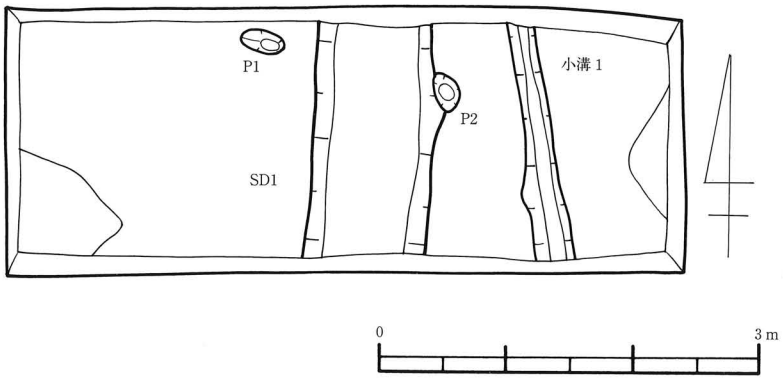


番号	遺跡名	種別	立地	時代と主な遺構
1	袋前遺跡	集落	自然堤防	古墳：竪穴住居跡、古代：掘立柱建物跡・畑跡
2	山口遺跡	集落・水田跡	自然堤防・後背湿地	縄文：早期土坑・中期埋設土器、弥生後期水田跡、古代：竪穴住居跡、中世：掘立柱建物跡・井戸跡
3	富沢遺跡	集落・水田跡	後背湿地	旧石器：焚き火跡、縄文：早期落し穴、弥生～近世水田跡、中世：屋敷跡、近世：墓跡
4	下ノ内浦遺跡	集落・畑跡	自然堤防	縄文：早期竪穴住居跡・落し穴・後期配石遺構（墓跡）、弥生：後期竪穴遺構・土坑墓・壺棺、近世：掘立柱建物跡
5	下ノ内遺跡	集落	自然堤防	縄文：中期竪穴住居跡、弥生：後期土坑、古墳：竪穴住居跡、古代：竪穴住居跡
6	袋東遺跡	散布地	自然堤防	
7	六反田遺跡	集落・墳墓	自然堤防	縄文：中期・後期竪穴住居跡、古代：竪穴住居跡
8	大野田古墳群	集落・古墳・畑跡	自然堤防	縄文：後期包含層、古墳：中～後期前方後円墳・円墳、古代：掘立柱建物跡・竪穴住居跡・畑跡、中世：ピット列
9	元袋遺跡	集落	自然堤防	弥生：水田跡、古代：竪穴住居跡・掘立柱建物跡、中世：堀跡
10	大野田遺跡	集落	自然堤防・後背湿地	縄文：後期環状集石群・掘立柱建物跡・土坑、古墳：竪穴住居跡、古代：竪穴住居跡・畑跡
11	王ノ壇遺跡	集落・屋敷・道路	自然堤防・後背湿地	縄文：後期竪穴遺構・埋設土器・土坑・古代：畑跡、中世：屋敷跡（掘立柱建物跡・塚墓・火葬墓・土壙墓・井戸）
12	北屋敷遺跡	散布地	自然堤防	

第81図　調査区の位置と周辺の遺跡（1/5000）



第82図　調査区配置図



第83図　遺構平面図

4　基本層序

盛　土　山砂・砕石・残土による盛土層。層厚約140cm。

Ⅰａ層　7.5YR3/2オリーブ黒色の粘土層。層厚約20cm。酸化鉄を斑状に含む。旧水田耕作土層。

Ⅰｂ層　2.5YR4/3オリーブ褐色の粘土層。層厚５～10cm。Ⅰａ層水田の床土の酸化鉄集積層。

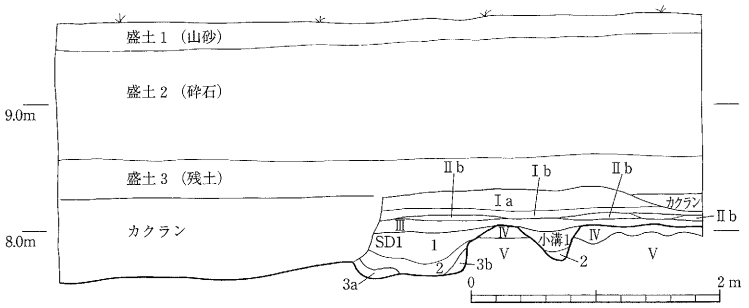
Ⅱａ層　10YR3/3暗褐色のシルト質粘土層。層厚約５cm。

Ⅱａ層　10YR4/3にぶい黄褐色のシルト質粘土層。層厚約５cm。酸化鉄を多量に含む。

Ⅲ　層　10YR4/2灰黄褐色のシルト質粘土層。層厚５～10cm。マンガン粒をまばらに含む。

Ⅳ　層　10YR4/3にぶい黄褐色のシルト質粘土層。層厚約10cm。マンガン粒をわずかに含む。褐色土粒を含む。

Ⅴ　層　10YR4/4褐色のシルト質粘土層。この層は数十cmあり細分も可能であるが、基本的には無遺物層で、遺構も検出されていない。



SD１

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	褐色土のブロックを多く含む。
2	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	
3ａ	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	褐色土の大型のブロック状に含む。
3ｂ	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色土粒を多量に含む

小溝状遺構

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	
2	10YR3/4　黒褐色	シルト質粘土	褐色土のブロックを含む。

第84図　調査区・遺構断面図

調査区の西半部は、Ⅰａ層からⅤ層の上部に及ぶ撹乱を受け、遺構は残存していなかった。

5　発見遺構と出土遺物

Ⅳ層上面で、溝跡１条と小溝状遺構１条・ピット２個が検出された。

１）溝跡

SD１溝跡　調査区の中央を南北に横断する。上面幅90～95cm・底面幅65～70cm・深さは35cm前後で断面形はＵ字形を呈するが、上部は広がっている。堆積土は３層に分けられる。１層は褐色土のブロックを多く含む暗褐色のシルト質粘土、２層は暗褐色のシルト質粘土、３層は壁面からの崩落土を含む暗褐色土ないしにぶい黄褐色土である。遺物は鉄滓が１点出土しているだけである。

２）小溝状遺構

SD１溝跡の東側で１条が検出された。上面で幅20～30cm・底面幅６～12cm・深さは20cm前後で断面形は舟底形を呈する。方向は、SD１溝跡よりも北側が西に振れている。堆積土は上下２層に分けられる。１層は暗褐色のシルト質粘土で、２層は褐色土のブロックを含む黒褐色のシルト質粘土である。出土遺物はない。

この遺構は、周辺で検出されている小溝状遺構群と規模・堆積状況が類似していることから畑に関係する遺構と考えられる。

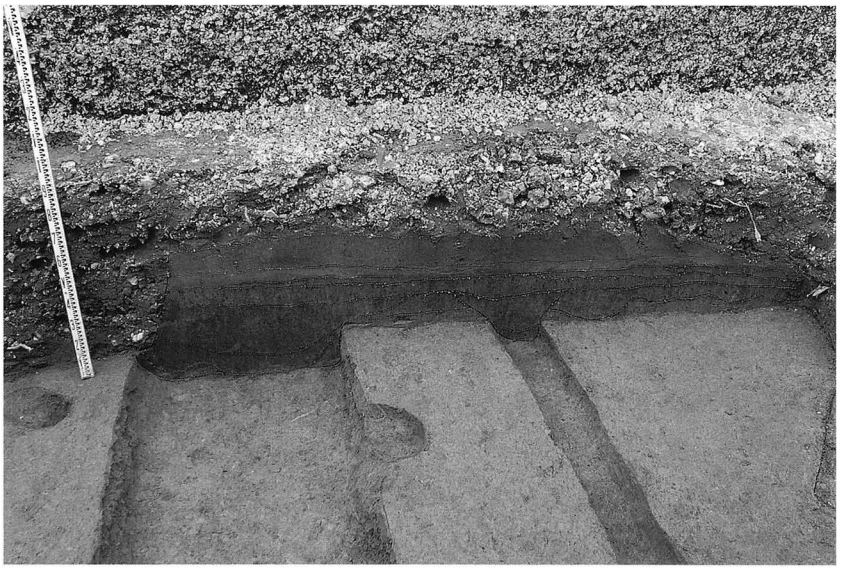
6　まとめ

①今回の調査地点では、Ⅳ層上面で、溝跡１条と小溝状遺構１条などの遺構が検出された。

②SD１溝跡は、袋前遺跡周辺で検出されている方形区画溝とその内部で検出されている建物の方向とほぼ一致している。

③Ⅳ層で検出された遺構については、出土した遺物によって年代を特定できないが、富沢駅周辺土地区画整理事業にともなう周辺部での調査で、古墳時代から平安時代の遺構が多数検出されていることから、この年代の遺構と判断される。

1　遺構検出状況（東から）



2　基本層序と遺構断面（南から）

3　完掘全景（南西から）

図版43　袋前遺跡の調査状況

XVI　富沢遺跡第135次発掘調査報告書

1．調査要項

遺　跡　名	富沢遺跡（宮城県遺跡登録番号01369）
所　在　地	仙台市太白区鹿野三丁目22－１他
調査原因	共同住宅建築工事
調査対象面積	2198.5㎡
調査面積	368㎡（実調査面積246㎡）
調査期間	平成17年７月11日～11月８日
	１区：９月29日～11月８日
	２区：７月11日～８月24日
	３区：８月22日～10月６日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課
担当職員	主査　佐藤甲二　文化財教諭　三塚博之　浅野克樹

2．調査に至る経緯と調査方法

平成17年４月14日付けで、有限会社秋保温泉タクシー代表取締役千葉昌幸氏より共同住宅建設に伴う協議書が提出された。協議により、まず遺跡にかかる部分の確認調査を実施し、遺構が広がることが明らかになった場合は隣接地の試掘調査を行うこととし、その結果必要な部分の本調査を行うこととした。

調査地点は、富沢遺跡の中央付近の北端部に位置しており、遺跡の拡大も予想された。５月17日～18日に建物予定部分の３ヶ所にトレンチを設定して調査を実施し、水田耕作土と見られる土層を検出した。遺跡隣接地の３区でも水田耕作土と見られる土層を検出したことから、６月27日にさらに北側で試掘調査を実施し、遺跡が北に広がっていることを確認した。

これを受けて平成17年７月11日より建物予定部分に３ヵ所の調査区を設定し調査を行った。調査区の名称は、南から「１区・２区・３区」とし、工事との関係で２区・３区・１区の順番で調査を実施した。調査区の面積はそれぞれ１区：東西８ｍ×南北11ｍ＝88㎡、２区：東西14ｍ×南北８ｍ＝112㎡、３区：東西14ｍ×南北12ｍ＝168㎡である。重機により盛土層を約120cm掘り下げた後、安全面を考慮して調査区を１ｍずつ縮小したため、実際の調査は１区54㎡、２区72㎡、３区120㎡の範囲で実施した。調査は１層の除去から開始し、本調査区の南西約50ｍで行われた第79次調査区、第79次調査区の南で行われた第93次調査区、南東約300ｍで行われた第104次調査区等の調査結果をもとに水田跡の検出を層ごとに行った。

測量は、水田跡平面図は1/50平板測量、個別遺構は1/20実測、断面図は1/20実測とした。

写真記録は35mmカメラでモノクロームとカラースライドで撮影した。実測は必要に応じて随時行った。

3．遺跡の位置と環境

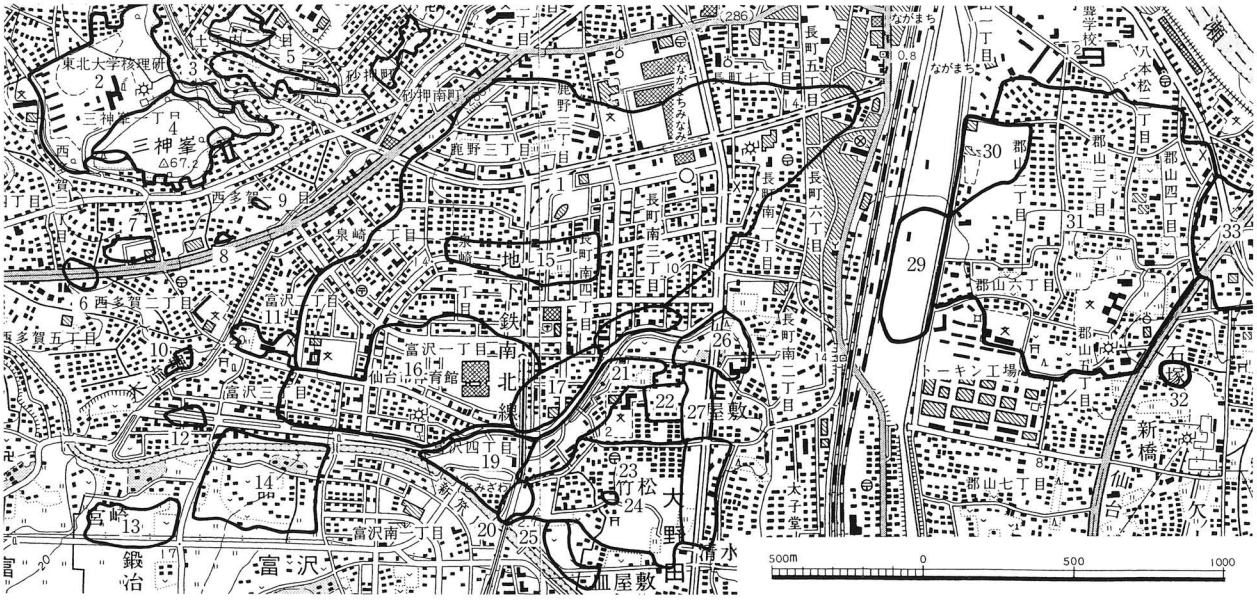
富沢遺跡は仙台市の南東部に位置し、仙台市太白区長町南・富沢・泉崎等に所在する。遺跡は名取川と広瀬川によって挟まれた沖積地（郡山低地）の西側にあり、北西を丘陵、他を自然堤防によって囲まれた後背湿地を中心に立地している。遺跡の範囲は東西２km・南北１kmに及び、登録面積は約90haである。この一帯は30年程前までは

主に水田として利用されていたが、現在は土地区画整理事業により盛土がなされており、大部分は住宅地になっている。盛土以前の旧地形は北西から南東方向に緩やかに傾斜していた。現在の標高は9～16mである。

高速鉄道（仙台市営地下鉄）の建設に伴う試掘及び調査で水田跡の存在が確認され、昭和58年（1983）に「富沢水田遺跡」として登録された。その後居住域等の発見によって昭和62年（1987）に「富沢遺跡」と改称されている。平成2年には北東部において遺跡範囲の拡大が行われている。

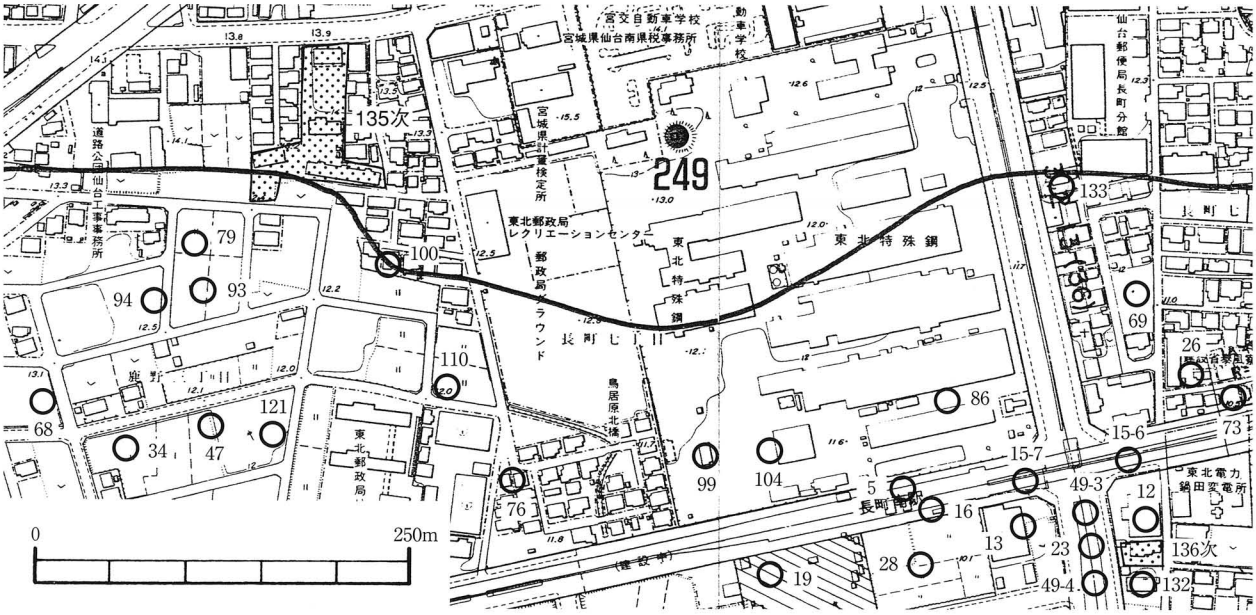
これまで100次を超す発掘調査が行われており、弥生時代から近世・現代までの水田跡が重層して検出されている。数地点では弥生時代の水田跡のさらに下層から縄文時代の遺構や遺物が発見されている。また、昭和62年（1987）～63年（1988）に実施された第30次調査においては、縄文時代の遺構面の下層から後期旧石器時代の森林跡と焚火跡等の生活跡が発見され、国内外の注目を集めた。現在、第30次調査地点には「地底の森ミュージアム（正式名称は仙台市富沢遺跡保存館）」が建築され、遺跡の保存と活用を行っている。その後の調査でも、第30次調査区周辺の数地点において旧石器時代の樹木群が検出されており、森林跡が富沢遺跡の北部を中心に広範に広がることがわかってきている。

なお、富沢遺跡と山口遺跡の地形・地質および歴史的環境に関しては、富沢遺跡第15次調査報告書（斎野他：1987）、富沢遺跡第30次調査報告書（太田他：1991）に詳しい記載があるので、それらを参照されたい。

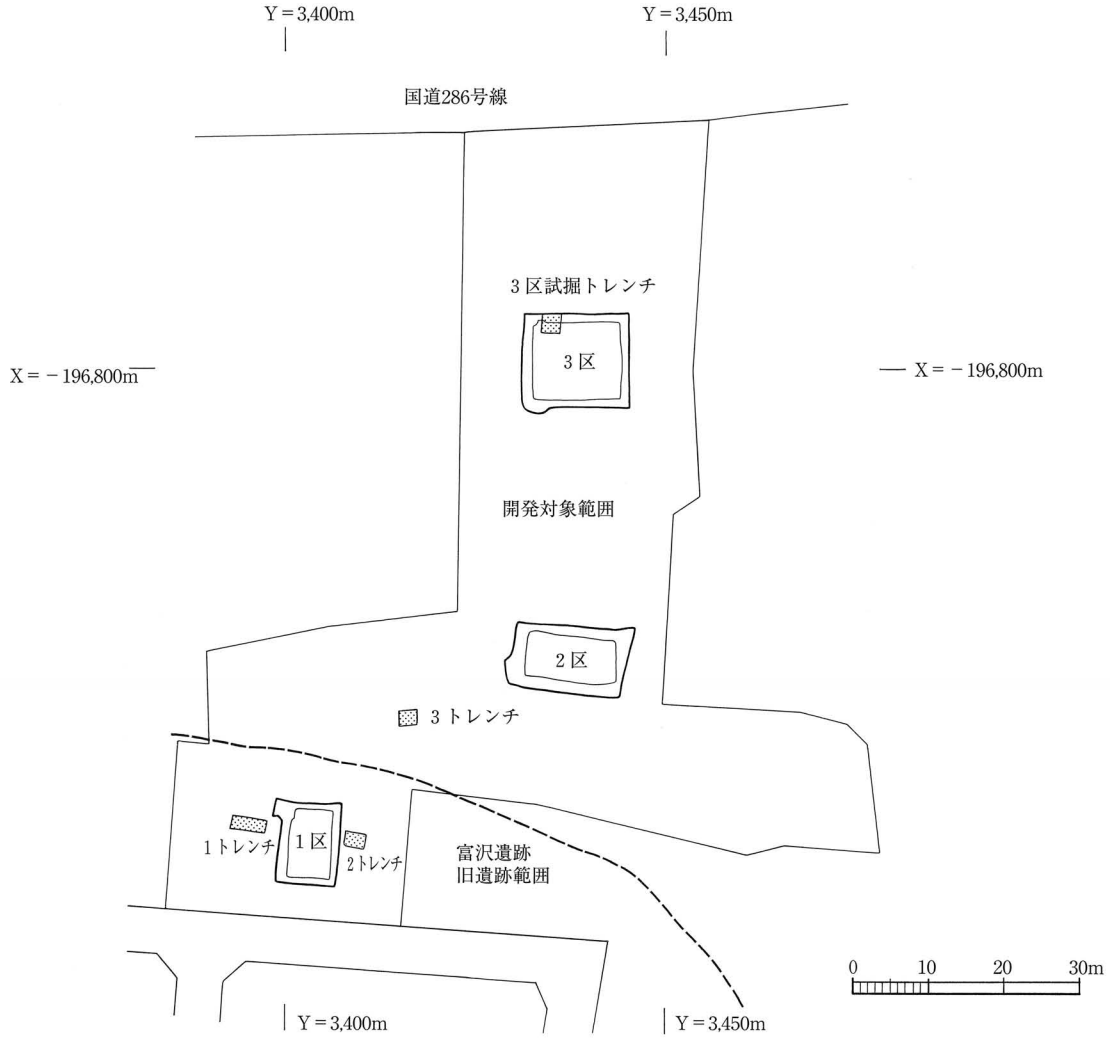


番号	遺跡名	種　別	立　地	時　　代	番号	遺跡名	種　別	立　地	時　　代
1	富沢遺跡	包含地、水田跡	後背湿地	旧石器、縄文、弥生、古墳、古代～近世	17	下ノ内浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、中世
2	芦ノ口遺跡	集落跡	丘陵	縄文、弥生、古代	18	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
3	土手内横穴墓群A地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳	19	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、中世
4	三神峯遺跡	集落跡	丘陵	縄文、古代	20	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古墳、古代
5	土手内横穴墓群B地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳	21	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、近世
	土手内窯跡	窯跡	丘陵南斜面	古墳、古代	22	袋前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古代
6	西台窯跡	窯跡	丘陵麓	古代	23	大野田古墳群	円墳	自然堤防	古墳
7	原遺跡	散布地	丘陵麓	古代	24	春日社古墳	円墳	自然堤防	古墳
8	原東遺跡	散布地	丘陵麓	弥生、古代	25	伊古田Ｂ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
9	裏町東遺跡	散布地	丘陵麓	古墳、古代	26	元袋遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	弥生、古代、中世、近世
10	富沢上ノ台遺跡	散布地	自然堤防	古代	27	大野田遺跡	祭祀、集落跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代
11	富沢清水遺跡	散布地	丘陵麓	縄文、古代	28	王ノ壇遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、中世
12	堀ノ内遺跡	散布地	自然堤防	古代	29	長町駅東遺跡	集落跡	自然堤防	弥生、古墳、古代
13	鍛冶屋敷A遺跡	集落跡	自然堤防	古墳、古代	30	西台畑遺跡	包含地、甕棺墓	自然堤防	縄文、弥生、古墳
14	富沢館跡	城館跡	自然堤防	中世	31	郡山遺跡	官衙跡、寺院跡、包含地	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代
15	泉崎浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、近世	32	北目城跡	城館跡、集落跡、水田跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、近世
16	山口遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文、弥生、古墳、古代、中世	33	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代

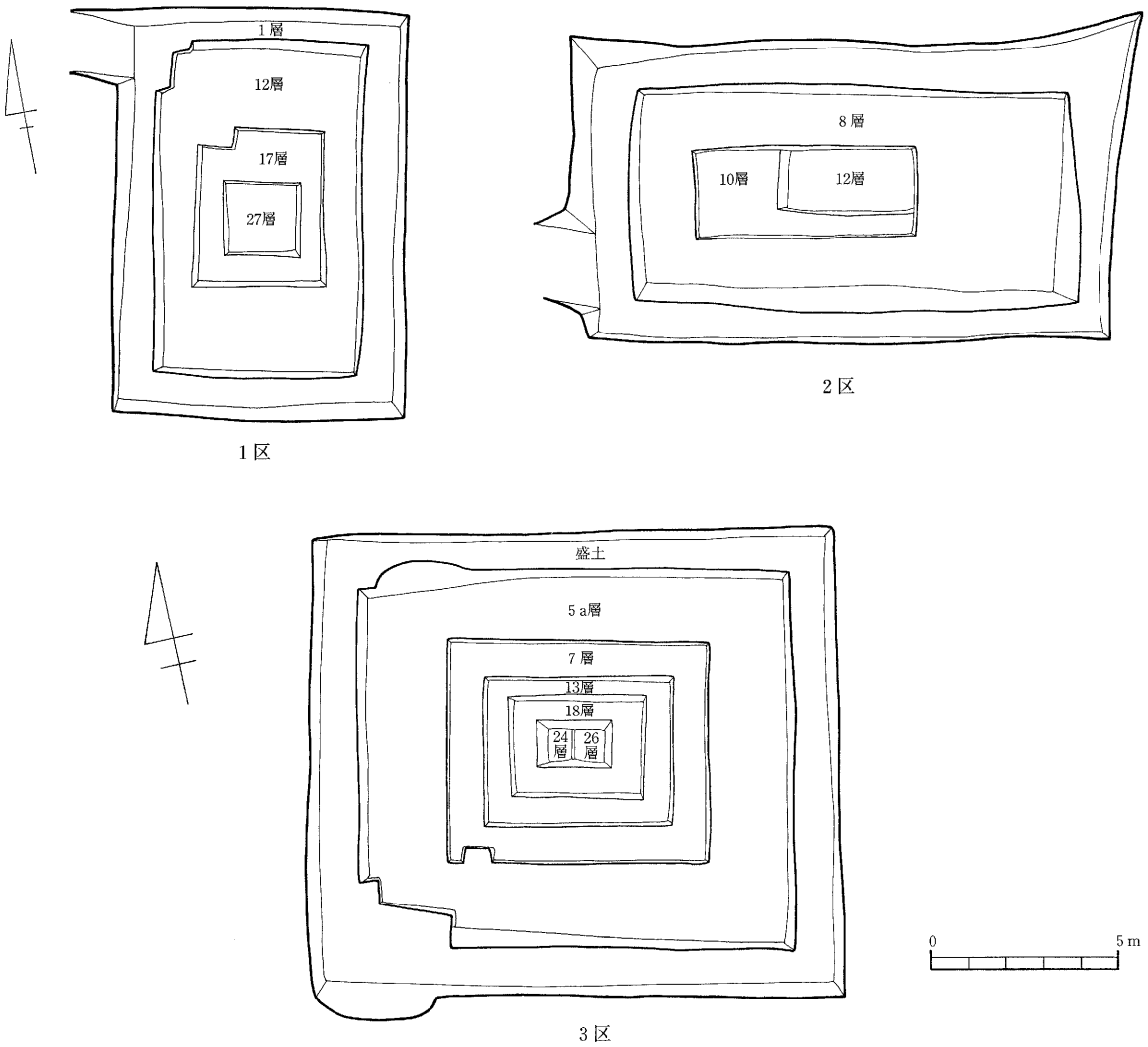
第85図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1/25000）



第86図　開発範囲と調査地点の位置



第87図　開発範囲と調査区配置図



第88図　調査区実測図

4．基本層序

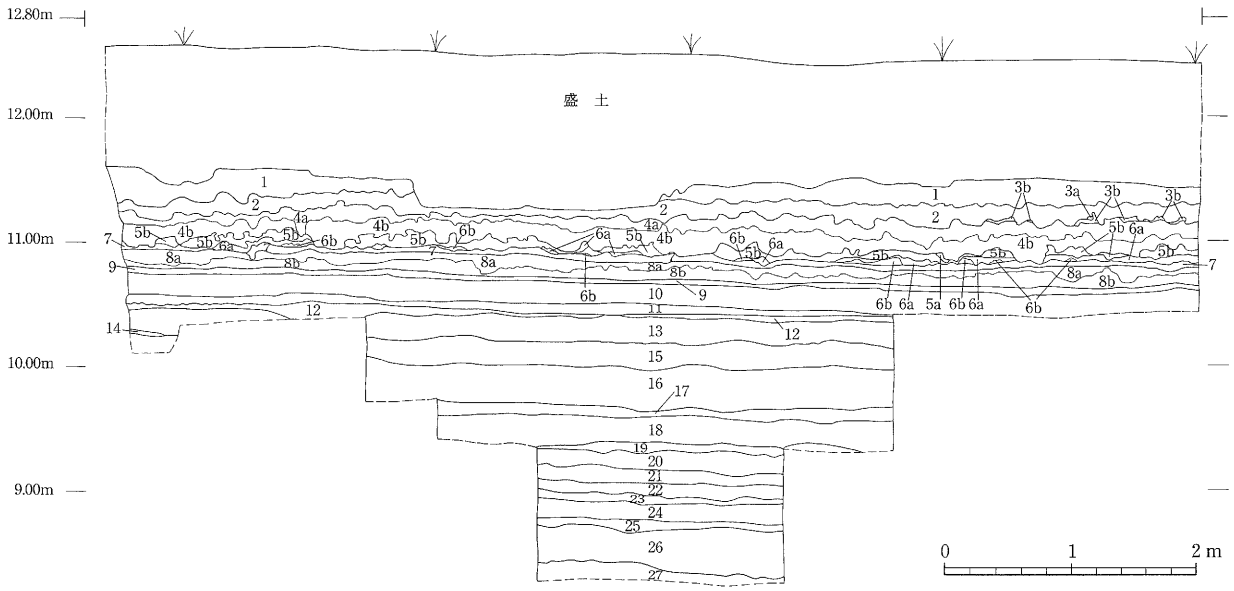
土地区画整理事業の際の盛土が100～120cmあり、その下に旧表土の水田耕作土（Ⅰ層）がある。調査区で確認した基本層は1区大別27層・細別32層、2区大別12層・細別15層、3区大別26層・細別30層である。2区と3区の基本層序はほぼ対応している。1区は9層までほぼ対応しているが、10層以下についてはかなり異なったものとなっている。対応すると見られる層で比較すると、1区は2・3区に比べ標高が50～100cm低くなっていることから、地形の違いが堆積状況や土地利用等に影響を与えていると考えられる。

1）1区

1　層　灰オリーブ色粘土。層厚は0～30cm。土地区画整理前の現代の水田耕作土である。

2　層　オリーブ黒色粘土。層厚は5～18cm。下面にゆるやかな乱れが見られる。近世以降の水田耕作土の可能性がある。

3a層　灰色粘土。2層水田跡の耕作に伴う掘削によって削平が著しく、調査区の南側でのみ確認した。自然堆積層で層厚は0～3cmである。



層位	土　色	土質	備　考
1層	7.5Y4/2　灰オリーブ色	粘土	下面に酸化鉄の層が見られる。旧水田耕作土。
2層	5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	下層の土を巻き込んでいる。近代の水田耕作土。
3a層	10Y6/1　灰色	粘土	調査区の南側でのみ見られた。
3b層	10YR1.7/1　黒色	粘土	
4a層	2.5Y3/1　黒褐色	粘土	下面に乱れが見られる。 灰白色火山灰のブロックを多量に含む。 平安時代の水田耕作土。
4b層	2.5Y2/1　黒色	粘土	下層の土を巻き込んでいる。 灰白色火山灰のブロックを少量含む。 全体に植物遺体を含む。 平安時代以前の水田耕作土。
5a層	5Y5/2　灰オリーブ色	粘土	上の層の影響で残存状況は極めて悪い。
5b層	10YR1.7/1　黒色	粘土	全体に植物遺体を含む。水田耕作土。
6a層	5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	全体に植物遺体を含む。水田耕作土。
6b層	5Y5/2　灰オリーブ色 5Y2/1　黒色	粘土 粘土	調査区の東壁でかすかに確認した。
7層	5Y2/1　黒色	粘土	全体に植物遺体を含む。
8a層	2.5Y4/1　黄灰色	粘土	全体に植物遺体を含む。水田耕作土。
8b層	2.5Y5/3　黄褐色 2.5Y2/1　黒色	粘土 粘土	全体に植物遺体を多量に含む。
9層	10YR3/1　黒褐色 10YR1.7/1　黒色	粘土 粘土	全体に植物遺体を多量に含む。
10層	2.5Y5/3　黄褐色 2.5Y2/1　黒色	粘土 粘土	全体に植物遺体を多量に含む。
11層	2.5Y4/1　黄灰色	粘土	全体に植物遺体を含む。一部砂を含む。 弥生時代の水田耕作土。

層位	土　色	土質	備　考
12層	5Y4/2　灰オリーブ色 10YR2/1　黒色	泥炭 泥炭	全体に植物遺体を含む。
13層	10YR3/1　黒褐色 2.5Y4/2　暗灰黄色	泥炭 泥炭	全体に植物遺体を多量に含む。
14層	5Y5/2　灰オリーブ色	砂	調査区北東隅の側溝でのみ確認。
15層	2.5Y4/2　暗灰黄色 10YR3/1　黒褐色	泥炭 泥炭	全体に植物遺体を多量に含む。
16層	10YR1.7/1　黒色 10YR2/1　黒色	泥炭 泥炭	全体に植物遺体を多量に含む。
17層	2.5Y4/2　暗灰黄色 2.5Y3/1　黒褐色	泥炭 泥炭	全体に植物遺体を多量に含む。
18層	10YR1.7/1　黒色	泥炭	全体に植物遺体を多量に含む。
19層	5Y4/2　灰オリーブ色 2.5Y3/1　黒褐色	泥炭 泥炭	全体に植物遺体を含む。
20層	2.5Y2/1　黒色	泥炭	全体に植物遺体を含む。
21層	5Y4/2　灰オリーブ色 2.5Y3/1　黒褐色	泥炭 泥炭	全体に植物遺体を含む。
22層	2.5Y2/1　黒色	泥炭	全体に植物遺体を含む。
23層	5Y3/2　オリーブ黒色	泥炭	
24層	2.5Y4/2　暗灰黄色 2.5Y3/1　黒褐色	泥炭 泥炭	全体に植物遺体を含む。
25層	10YR2/1　黒色	泥炭	全体に植物遺体を含む。
26層	2.5Y2/1　黒色 2.5Y3/1　黒褐色	泥炭 泥炭	全体に植物遺体を含む。
27層	5Y5/2　灰オリーブ色	粘土	2.5Y6/2灰黄色粘土と互層

第89図　1区東壁断面図

3b層　黒色粘土。2層による撹拌が著しい。自然堆積層で層厚は0～4cmである。

4a層　黒褐色粘土。層厚は2～20cm。灰白色火山灰のブロックを含み、下面に乱れが見られる。平安時代の水田耕作土である。

4b層　黒色粘土。層厚は0～25cm。1区でのみ確認した。下層の土を巻き込んでおり、灰白色火山灰降下以前の水田耕作土と考えられる。

5a層　灰オリーブ色粘土。1区では削平が著しくほとんど確認することはできなかった。自然堆積層で層厚は0～5cmである。

5b層　黒色粘土。層厚は0～15cm。植物遺体を含み、下面に乱れが見られる。水田耕作土。なお、5b層の母材層と見られる5c層は1区では確認できなかったが、これが後の掘削によるものか、堆積の違いによるものかは不明である。

6 a層　オリーブ黒色粘土。層厚は0～8cm。植物遺体を含む。水田耕作土。

6 b層　灰オリーブ色粘土と黒色粘土の互層。6a層の削平が著しく、調査区の東壁でかすかに確認したのみである。自然堆積土で層厚は0～5cmである。

7　層　黒色粘土。植物遺体を含む。自然堆積土で層厚は0～7cmである。

8 a層　黄灰色粘土。層厚は2～16cm。植物遺体を含む。弥生時代の水田耕作土の可能性がある。石器が1点出土している。

8 b層　黄褐色粘土と黒色粘土の互層。植物遺体を含む。自然堆積土で層厚は2～16cmである。石器が2点出土している。

9　層　黒褐色粘土と黒色粘土の互層。層厚は2～5cm。植物遺体を含む。

10　層　黄褐色粘土と黒色粘土の互層。層厚は15～20cm。植物遺体を含む。

11　層　黄灰色粘土。層厚は4～11cm。植物遺体を含む。一部砂を含む。弥生時代の水田耕作土。

12　層　灰オリーブ色泥炭と黒色泥炭の互層。層厚は3～11cm。植物遺体を含む。

13　層　黒褐色泥炭と暗灰黄色泥炭の互層。層厚は13～20cm。植物遺体を含む。

14　層　灰オリーブ色砂。層厚0～4cm。調査区北東の側溝でのみ確認した。確認調査では1区の東隣の2トレンチで確認した（層厚10cm前後）が、西隣の1トレンチでは確認していない。2区・3区の10層に対応する層と考えられる。

15　層　暗灰黄色泥炭と暗褐色泥炭の互層。層厚15～25cm。植物遺体を含む。

16　層　黒色泥炭。層厚28～35cm。植物遺体を含む。

17　層　暗灰黄色泥炭と暗褐色泥炭の互層。層厚5～12cm。植物遺体を含む。

18　層　黒色泥炭。層厚18～26cm。植物遺体を含む。

19　層　灰オリーブ色泥炭と黒褐色泥炭の互層。層厚5～10cm。植物遺体を含む。

20　層　黒色泥炭。層厚9～20cm。植物遺体を含む。

21　層　灰オリーブ色泥炭と黒褐色泥炭の互層。層厚9～14cm。植物遺体を含む。

22　層　黒色泥炭。層厚8～12cm。植物遺体を含む。

23　層　オリーブ黒色泥炭。層厚4～8cm。植物遺体を含む。

24　層　暗灰黄色泥炭と黒褐色泥炭の互層。層厚11～16cm。植物遺体を含む。

25　層　黒色泥炭。層厚5～10cm。植物遺体を含む。

26　層　黒色泥炭と黒褐色泥炭の互層。層厚24～38cm。植物遺体を含む。

27　層　灰オリーブ色粘土。層厚15cm以上。一部に砂を含む。

2）2区

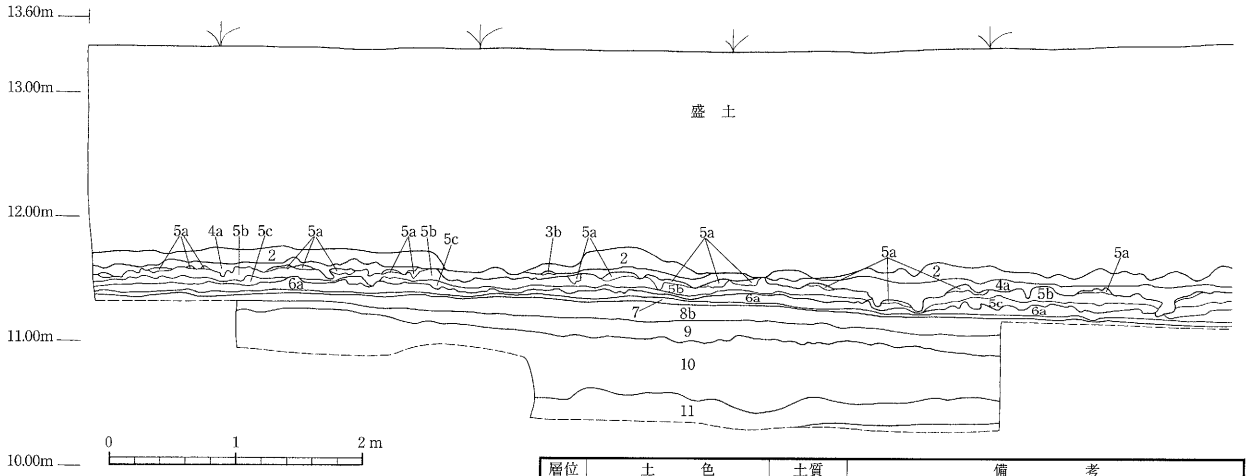
1　層　灰オリーブ色粘土。土地区画整理前の現代の水田耕作土である。2区では後の削平を受け、ほとんど確認することができなかった。

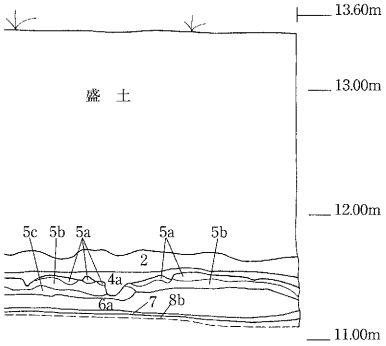
2　層　オリーブ黒色粘土。層厚は0～15cm。下面にゆるやかな乱れが見られる。近世以降の水田耕作土の可能性がある。

3 a層　灰色粘土。層厚は0～8cm。自然流路部分の堆積土。

3 b層　黒色粘土。層厚は0～4cm。調査区の南半でのみ確認。

4 a層　オリーブ黒色粘土。層厚は2～20cm。灰白色火山灰のブロックを含み、下面に乱れが見られる。平安時代の水田耕作土である。





層位	土　　色	土質	備　　考
1層	7.5Y4/2　灰オリーブ色	粘土	
2層	5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	下面にゆるやかな乱れが見られる。
3a層	7.5Y6/1　灰色	粘土	自然流路部分でのみ見られた。
3b層	10YR1.7/1　黒色	粘土	
4a層	10Y3/1　オリーブ黒色	粘土	下面に乱れが見られる。灰白色火山灰のブロックを含む。 平安時代の水田土壌。
5a層	7.5Y6/2　灰オリーブ色	シルト質粘土	上の層の影響で残存状況は悪い。
5b層	10YR1.7/1　黒色	粘土	下面に乱れが見られる。植物遺体を少量含む。
5c層	2.5Y3/2　黒褐色	粘土	
6a層	2.5Y4/1　黄灰色	粘土	植物遺体を含む。
7層	5Y2/1　黒色	粘土	植物遺体を含む。
8b層	5Y5/2　灰オリーブ色	粘土	植物遺体を含む。 一部10YR1.7/1黒色粘土と互層の部分あり。
9層	5Y2/1　黒色 5Y4/3　暗オリーブ色	粘土 粘土	植物遺体を含む。 下層に砂を含む。
10層	5Y4/2　灰オリーブ色	砂	植物遺体を含む。礫を含む。 間に5Y4/3暗オリーブ粘土質シルトの層を含む。
11層	5Y3/2　オリーブ黒色 5Y2/1　黒色	泥炭 泥炭	植物遺体を含む。
12層	5Y2/1　黒色	泥炭	植物遺体を含む。

第90図　2区北壁断面図

5 a 層　灰オリーブ色シルト質粘土。層厚は0～5cm。上層の削平を受け残存状況は悪い。

5 b 層　黒色粘土。層厚は0～15cm。下面に乱れが見られる。植物遺体を少量含む。水田耕作土。

5 c 層　黒褐色粘土　層厚は0～10cm。2・3区で確認した。5b水田層の母材層と考えられる。

6 a 層　黄灰色粘土。層厚は0～8cm。植物遺体を含む。水田耕作土。

7　層　黒色粘土。層厚は0～7cm。植物遺体を含む。

8 b 層　灰オリーブ色粘土。層厚は2～16cm。植物遺体を含む。

9　層　黒色粘土と暗オリーブ色粘土の互層。層厚は4～20cm。植物遺体を含む。層下部に砂を含む。

10　層　暗オリーブ色砂。層厚は35～60cm。植物遺体を含む。2区では、調査区の西側で厚く礫が堆積している部分が見られた。

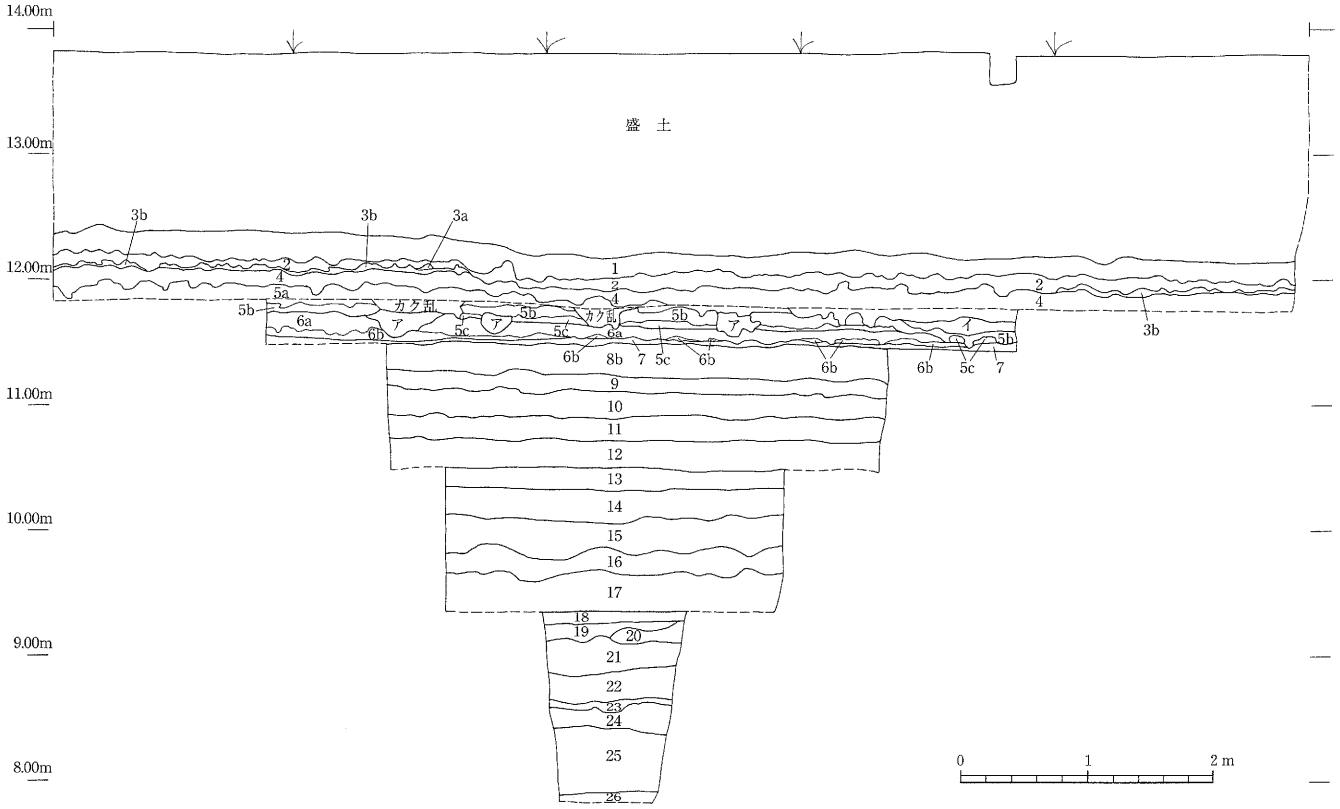
11　層　オリーブ黒色泥炭と黒色泥炭の互層。層厚は25cm以上。植物遺体を含む。

12　層　黒色泥炭。層厚は6cm以上。植物遺体を含む。

3）3区

1　層　オリーブ黒色砂質シルト。層厚は10～23cm。土地区画整理前の現代の水田耕作土である。

2　層　オリーブ黒色粘土。層厚は3～16cm。下面にゆるやかな乱れが見られる。近世以降の水田耕作土の可能性がある。



層位	土　色	土質	備　考
1層	5Y3/1　オリーブ黒色	砂質シルト	下面に乱れ。酸化鉄の層が見られる。旧水田耕作土
2層	5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	下面に乱れが見られる。
3a層	10Y6/1　灰色	粘土	自然流路部分でのみ見られた。
3b層	10YR1.7/1　黒色	粘土	
4a層	10Y3/1　オリーブ黒色	粘土	火山灰のブロックを含む。下層の土を巻き込む。平安時代の水田層。
5a層	7.5Y6/2　灰オリーブ色 10YR1.7/1　黒色	粘土 粘土	一部砂の層を含む。
5b層	10YR1.7/1　黒色	粘土	下面に乱れが見られる。植物遺体を少量含む。
5c層	2.5Y3/1　黒褐色	粘土	
6a層	5Y4/1　灰色	粘土	植物遺体を含む。下層の土を巻き上げている。
6b層	5Y5/2　灰オリーブ色 5Y2/1　黒色	粘土 粘土	
7層	5Y2/1　黒色	粘土	植物遺体を少量含む。
8b層	5Y4/2　灰オリーブ色 5Y2/1　黒色	粘土 粘土	植物遺体を多量に含む。
9層	10YR3/1　黒褐色 10YR1.7/1　黒色	粘土 粘土	植物遺体を多量に含む。
10層	5Y5/2　灰オリーブ色 5Y4/3　暗オリーブ色	粗砂 砂	植物遺体を多量に含む。
11層	5Y4/2　灰オリーブ色 5Y2/1　黒色	泥炭 泥炭	植物遺体を多量に含む。

層位	土　色	土質	備　考
12層	10YR3/　黒褐色 10YR1.7/1　黒色	泥炭 泥炭	植物遺体を含む。
13層	5Y5/2　灰オリーブ色 5Y2/2　オリーブ黒色	泥炭 泥炭	植物遺体を多量に含む。
14層	5Y3/1　オリーブ黒色	泥炭	植物遺体を多量に含む。
15層	10YR2/2　黒褐色	泥炭	植物遺体を含む。
16層	5Y4/2　灰オリーブ色	粘土	植物遺体を多量に含む。全面がグライ化。
17層	7.5GY6/1　緑灰色	粘土	植物遺体を多量に含む。全面がグライ化。一部に2.5Y5/1黄灰色　砂の層を含む。
18層	7.5Y4/1　灰色	砂	全面がグライ化。
19層	7.5GY6/1　緑灰色	粘土	植物遺体を含む。
20層	5GY5/1　オリーブ灰色	砂	植物遺体を含む。
21層	10GY6/1　緑灰色	粘土	植物遺体を含む。一部に砂を含む。
22層	10GY6/1　緑灰色	粘土	植物遺体を含む。一部に砂を含む。
23層	10Y5/1　灰色	粘土	植物遺体を含む。
24層	2.5Y3/1　黒褐色	粘土	植物遺体を含む。2.5Y4/1黄灰色　粘土を含む。
25層	5GY6/1　オリーブ黒色	粘土	植物遺体を含む。
26層	10GY5/1　緑灰色	砂	植物遺体を含む。
自然流路ア	10YR5/3　にぶい黄褐色 10YR3/1　黒褐色	砂 粘土	
自然流路イ	10YR5/3　にぶい黄褐色 10Y4/1　灰色	砂 シルト質粘土	

第91図　3区東壁断面図

3 a 層　灰色粘土。層厚は0～5cm。調査区南半でのみ確認した。

3 b 層　黒色粘土。層厚は0～6cm。

4 a 層　オリーブ黒色粘土。層厚は5～25cm。灰白色火山灰のブロックを含み、下層の土を巻き込んでいる。平安時代の水田耕作土。

5 a 層　灰オリーブ色粘土と黒色粘土の互層。層厚は0～20cm。調査区南半部では上の層の削平を受け残存状況は良くないが、北半部では厚く堆積している。

5ｂ層　黒色粘土。層厚は２～20cm。下面に乱れが見られる。植物遺体を少量含む。水田耕作土。

5ｃ層　黒褐色粘土。層厚は０～５cm。２・３区で確認した。5b水田層の母材層と考えられる。

6ａ層　灰色粘土。層厚は０～16cm。植物遺体を含み、下の層の土を巻き上げている。水田耕作土。

6ｂ層　灰オリーブ色粘土と黒色粘土の互層。層厚は０～10cm。

7　層　黒色粘土。層厚は２～８cm。植物遺体を少量含む。

8ｂ層　灰オリーブ色粘土と黒色粘土の互層。層厚は20～30cm。植物遺体を含む。

9　層　黒褐色粘土と黒色粘土の互層。層厚は10～20cm。植物遺体を含む。

10　層　灰オリーブ色粗砂と暗オリーブ色砂の互層。層厚は18～23cm。植物遺体を含む。

11　層　灰オリーブ色泥炭と黒色泥炭の互層。層厚は15～20cm。植物遺体を含む。

12　層　黒褐色泥炭と黒色泥炭の互層。層厚は20～25cm。植物遺体を含む。

13　層　灰オリーブ色泥炭とオリーブ黒色泥炭の互層。層厚は10～14cm。植物遺体を含む。

14　層　オリーブ黒色泥炭。層厚20～26cm。植物遺体を含む。

15　層　黒褐色泥炭。層厚20～31cm。植物遺体を含む。

16　層　灰オリーブ色粘土。層厚10～24cm。植物遺体を含む。この層より下の層はグライ化。

17　層　緑灰色粘土。層厚29～35cm。植物遺体を含み、グライ化している。一部黄灰色砂の層を含む。

18　層　灰色砂。グライ化している。自然堆積層で層厚５～10cmである。

19　層　緑灰色粘土。層厚０～14cm。植物遺体を含む。グライ化。

20　層　オリーブ灰色砂。層厚０～18cm。植物遺体を含む。グライ化。

21　層　緑灰色粘土。層厚20～30cm。植物遺体を含む。グライ化。一部砂を含み、しまりが強い。

22　層　緑灰色粘土。層厚20～25cm。植物遺体を含む。グライ化。一部砂を含み、非常に硬質でしまりが強い。

23　層　灰色粘土。層厚４～10cm。植物遺体を含む。グライ化。

24　層　黒褐色粘土。層厚12～24cm。植物遺体を含む。黄灰色粘土を含む。第30次調査において旧石器時代の遺構・遺物が発見された地層の延長に相当すると考えられる。

25　層　オリーブ黒色粘土。層厚46～54cm。植物遺体を含む。グライ化。

26　層　緑灰色粘土。層厚５cm以上。植物遺体を含む。

５．発見遺構と出土遺物

１）１区

①２層水田跡（中世以降）

２層水田跡は水田面の上部を１層水田による削平を受けているため、畦畔は検出されなかった。また畦畔痕跡も検出されなかった。２層は均質な土壌で、底面の凹凸は著しい。遺物は土師器片４点・磨り面の見られる礫片１点が出土している。

②４ａ層水田跡（平安時代）

4a層水田跡は層中に灰白色火山灰（10世紀前葉降下）の小ブロックを含んでいることから、平安時代の灰白色火山灰降下以降の水田跡と考えられる。水田面の上部を２層水田跡によって削平を受けているため、畦畔は検出されなかった。また畦畔痕跡も検出できなかった。4a層は均質な土壌で、底面の凹凸は著しい。遺物は土師器片が４点・須恵器片が６点・木片が１点出土している。

③４ｂ層水田跡

4b層水田跡は１区でのみ確認した。水田面の上部を4a層水田跡によって削平を受けているため、畦畔は検出され

なかった。また畦畔痕跡も検出できなかった。4b層は均一な土壌であるが、5a層・5b層起源の土壌をブロック状に含む部分がある。底面の凹凸は著しい。遺物は木製品が１点、木片が１点出土しており、図化できたものは楔状の木製品Ｌ－２（第92図５）が１点である。

③５ａ層出土遺物

基本層5a層は灰オリーブ色の粘土からなる自然堆積層であるが、4b層水田跡によって削平を受けているため、残存状況は極めて悪い。層中から木片５点が出土している。

④５ｂ層水田跡

5b層水田跡は4b層水田跡による削平が著しく、残存状況は悪い。畦畔及び畦畔痕跡は検出できなかった。5b層は均一な土壌で、底面の凹凸は著しい。遺物は土師器片が３点出土している。

⑤６ａ層水田跡

6a層水田跡は5b層水田跡による削平が著しく、残存状況は極めて悪い。畦畔及び畦畔痕跡は検出できなかった。遺物は出土していない。

⑦８ａ層水田跡（弥生時代中期後葉）

8a層水田跡は１区でのみ確認した。周辺調査区との対応から弥生時代中期後葉の水田跡と考えられる。畦畔及び畦畔痕跡は検出できなかった。8a層は均質な土壌で、底面の凹凸は著しい。石器Ｋ－１（第92図１）が出土している。

⑧８ｂ層出土遺物

基本層8b層は黄褐色粘土と黒色粘土の互層からなる自然堆積層であるが、層中から石器Ｋ－２・３（第92図２・３）が出土している。この２点と8a層で出土した石器Ｋ－１は同一石材と見られる。なお、8b層の下の９層は粘土質の自然堆積層であり１～３区で確認しているが、１区のみ標高が50cm程度低い。

⑨11層水田跡（弥生時代中期中葉）

11層水田跡は１区でのみ確認した。畦畔及び畦畔痕跡は検出されなかった。11層は均質な土壌で、底面には緩やかな乱れが見られる。遺物は出土していないが、周辺調査区との対応から弥生時代中期中葉の水田跡と考えられる。

⑩27層

12層以下の地層は、泥炭質の土層を主とする自然堆積層が約２ｍ続き、27層に至って粘土質の比較的安定した土壌となる。周辺調査区では、本調査の27層に対応する地層から縄文時代早期後半から前期初頭の遺構・遺物が出土しているので、今回の調査でも27層の調査を実施したが、遺構・遺物を確認することはできなかった。

⑪その他の出土遺物

出土した層は不明であるが、調査区の側溝を掘削した際に１～4b層中より朱漆痕のある木製の容器の蓋Ｌ－１（第92図４）が出土している。

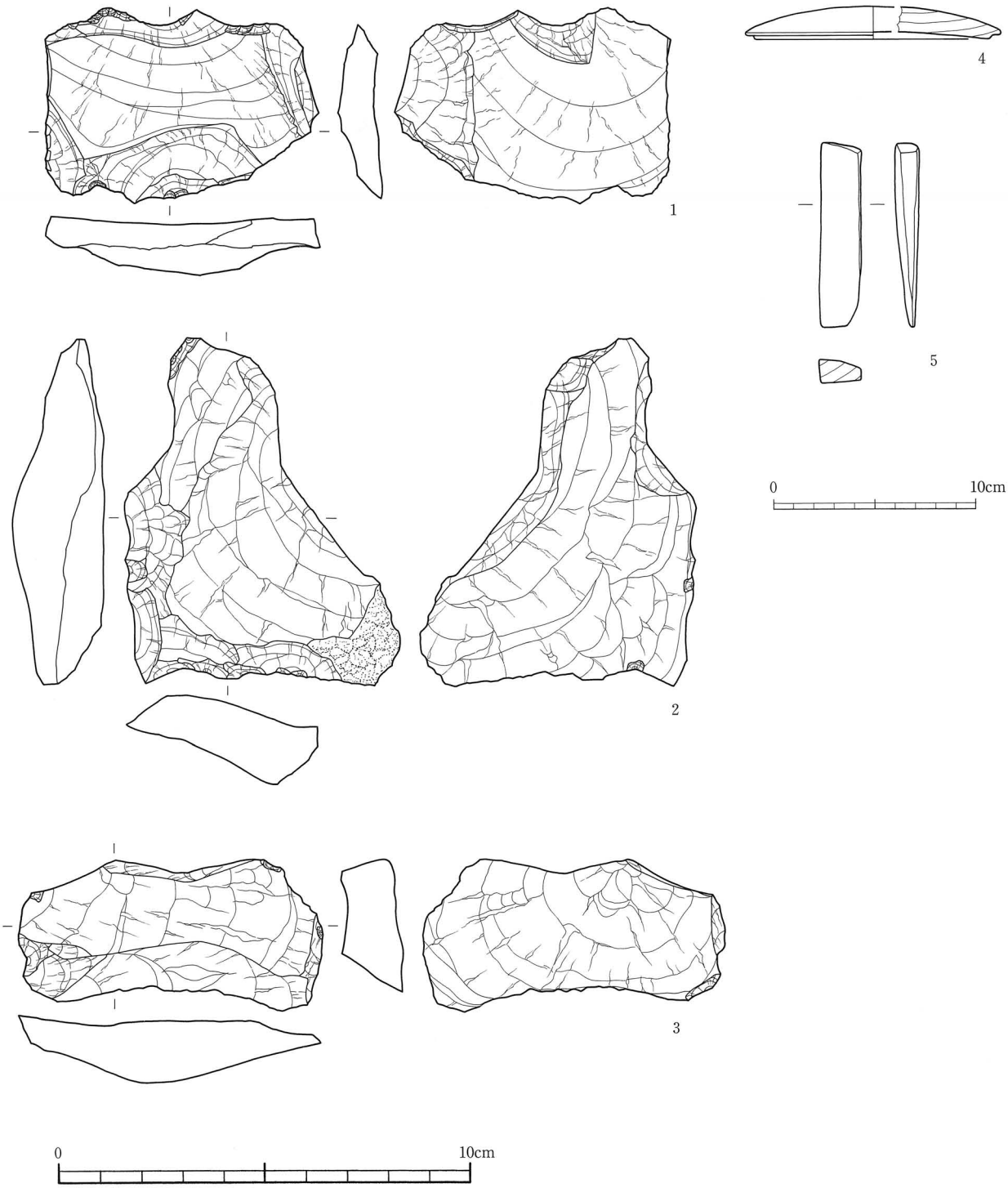
２）２区

①２層水田跡（中世以降）

２層水田跡は水田面の上部を盛土及び１層水田によって削平を受けているため、畦畔は検出されなかった。また畦畔痕跡も検出できなかった。２層は均質な土壌で、底面には緩やかな乱れが見られる。遺物は土師器片１点・磁器片５点・鉄製品２点が出土している。

②３ａ層出土遺物

基本層3a層は灰色の粘土からなる自然堆積層であり、１・３区でも確認している。１・３区では２層水田跡による削平が著しかったが、２区では3b層上面を北西から南東に向けて流れる自然流路の堆積土であることを確認する



図中番号	登録番号	出土地点 基本層	遺構名	遺構層	取上No.	分類 種別	器種	法量 器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	特徴・備考（調整・素材・産地・時期・分類）	写真図版
1	K－1	8 a層				剥片石器		4.8	6.7	0.9	31.5	流紋岩	45－1
2	K－2	8 b層				剥片石器		8.5	6.7	1.6	80.5	流紋岩	45－2
3	K－3	8 b層				剥片石器		3.7	7.3	1.6	39.5	流紋岩	45－3
4	L－1		側溝中			木製品	蓋	1.6	12.6	1.2		朱漆痕あり	
5	L－2	4 b層				木製品	板材	9.1	2.0	1.2		楔状	45－6

第92図　1区出土遺物

ことができた。遺物は土師器片４点・須恵器片１点・陶器片２点・木片２点が出土している。図化できたものは備前の灰釉埦Ｉ－１（第93図１）である。

③４ａ層水田跡（平安時代）

4a層水田跡は層中に灰白色火山灰（10世紀前葉降下）の小ブロックを含んでいることから、平安時代灰白色火山灰以降の水田跡と考えられる。水田面の上部を２層水田跡によって削平を受けている部分が多いため、畦畔は検出されなかった。また畦畔痕跡も検出できなかった。4a層は均質な土壌で、底面の凹凸は著しい。遺物は土師器片が８点出土している。

④５ｂ層水田跡

5b層水田跡は水田面の上部を4a層水田跡によって削平を受けている部分が多いため、畦畔は検出されなかった。また畦畔痕跡も検出できなかった。5b層は均質な土壌で、底面には緩やかな乱れが見られる。遺物は須恵器片が１点出土している。

⑤５ｃ層出土遺物

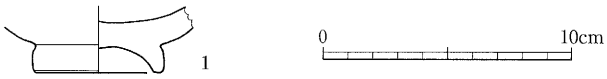
基本層5c層は黒褐色の粘土からなる自然堆積層であり、5b層水田跡の母材層であると見られる。5b層水田跡の削平が著しく、残存状況は良くない。層中から土師器片が１点出土している。

⑥６ａ層水田跡

6a層水田跡は水田面の上部を5b層水田跡によって削平を受けているため、畦畔は検出されなかった。また畦畔痕跡も検出できなかった。6a層は均質な土壌で、底面には緩やかな乱れが見られる。遺物は出土していない。なお、１区と３区では6a層の母材層と見られる6b層が確認できたが、２区では確認することができなかった。

⑦７層出土遺物

基本層７層は黒色の粘土からなる自然堆積層である。層の上面から土器片が１点出土しているが、摩滅が著しく調整痕跡の観察できるものではない。



図中番号	登録番号	出土地点 基本層	遺構名	遺構層	取上No.	分類 種別	器種	法量 器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	特徴・備考 (調整・素材・産地・時期・分類)	写真図版
1	I－1	3a層				陶器	埦	(2.6)			5.1	呉器手の灰釉　備前	44－2

第93図　２区出土遺物

３）３区

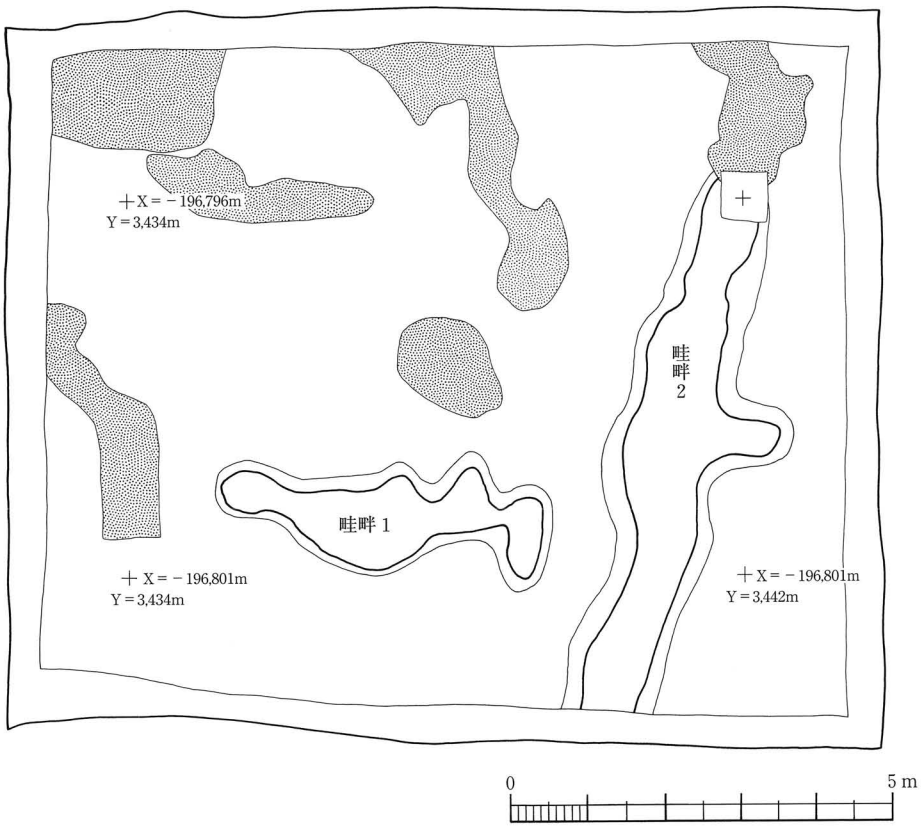
①１層水田跡

１層は土地区画整理前の現代の水田耕作土である。１層は均質な土壌で、底面の凹凸は著しい。後の撹乱が著しく、様々な時代の遺物が出土している。図化できたものは備前の灰釉埦I－２（第96図２）が１点である。

②２層水田跡（中世以降）

２層水田跡では畦畔２条を検出した。調査区南側で検出した東西方向の畦畔１は後の削平を受けているが、おおよその方向はＥ－9°－Ｓである。調査区東側で検出した南北方向の畦畔２は、方向はＮ—14°—Ｅ、幅は上面で60～90cmである。なお、東壁の断面観察では調査区の北部は南部に比べて高くなっていたが、調査区北半は広い範囲にわたって撹乱を受けており、高まりとして検出することはできなかった。２層は均質な土壌で、底面の凹凸は著しい。

遺物は畦畔２の除去中に土師器片２点、水田部分の除去中に土師器片９点・須恵器片５点・磁器１点・陶器片１点が出土している。

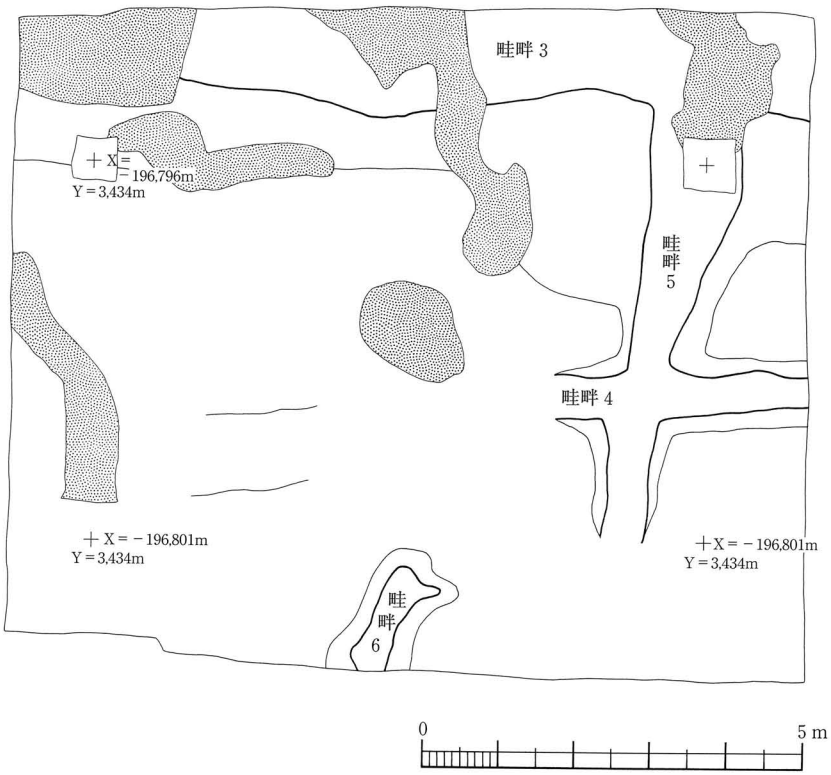


第94図　3区2層検出遺構

③4 a層水田跡（平安時代）

4a層水田跡は層中に灰白色火山灰（10世紀前葉降下）の小ブロックを含んでいることから、平安時代の灰白色火山灰降下以降の水田跡と考えられる。4a層水田跡では畦畔4条を検出した。東西方向の畦畔3・4、南北方向の畦畔5・6である。調査区北端で検出した畦畔3は北半が調査区外に延びているため全体の大きさは不明であるが、幅は上面で1.5m以上、方向は真東西である。その大きさから富沢地区で復元されている真北を基準とした条里型土地割（太田・平間：1991）の東西区画畦畔の可能性も考えられるが、推定位置よりも南にあるため、今後の調査による検討が必要である。調査区中央やや南を東西に延びる畦畔4は、方向はE－5°－N、平均の幅は上面で50cmである。層上面でははっきり検出したのは畦畔5と交わる東側のみで、西側は痕跡のみであったが、下層の調査で擬似畦畔Bが検出され、東西方向に延びることが確認できた。調査区東側を南北に延びる畦畔5は、方向はN—10°—Eで、南側に比べ北側の幅が広くなっている。下層の調査で擬似畦畔Bを検出しており、北半と南半では方向が微妙に異なっていることから、水田が2時期存在していた可能性も考えられる。調査区南端中央を南北に延びる畦畔6は、方向はN—12°—E、平均の幅は上面で50cmである。下層の調査で擬似畦畔Bを検出しており、畦畔4とほぼ直行する形で繋がっていることを確認している。4a層は均質な土壌であるが、5a層・5b層起源の土壌をブロック状に含む部分がある。底面の凹凸は著しい。

遺物は畦畔3の除去中に土師器片5点・須恵器片1点、水田部分の除去中に土師器片8点・須恵器片1点が出土している。この内、図化できたものは水田部分から出土した、内面黒色処理された回転糸切痕の見られる土師器の坏D－1（第96図1）が1点である。



第95図　3区4a層検出遺構

④5 a 層出土遺物

基本層5a層は灰オリーブ色粘土と黒色粘土の互層からなる自然堆積層である。この層の上面で4a層が形成した疑似畦畔Bを確認している。遺物は畦畔3の下から高坏の脚部と見られる土師器片1点、畦畔5の下から須恵器片が1点出土している。

⑤5 b 層水田跡

5b層水田跡は水田面の上部を4a層水田跡によって削平を受けている部分が多いため、畦畔は検出されなかった。また畦畔痕跡も検出できなかった。5b層は均質な土壌で、底面には緩やかな乱れが見られる。遺物は出土していない。

⑥6 a 層水田跡

6a層水田跡は水田面の上部を5b層水田跡によって削平を受けているため、畦畔は検出されなかった。また畦畔痕跡も検出できなかった。6a層は均質な土壌で、底面には緩やかな乱れが見られる。遺物は石器K-5（第96図5）が1点出土している。

⑦16層

11層以下の地層は、泥炭質の土層を主とする自然堆積層が約1m続き、16層に至って粘土質の比較的安定した土壌となる。周辺調査区では、本調査の16層に対応する地層から縄文時代早期後半から前期初頭の遺構・遺物が出土しているので、今回の調査でも16層の調査を実施したが、遺構・遺物を確認することはできなかった。1区の27層に対応すると考えられる。

⑧17層出土遺物

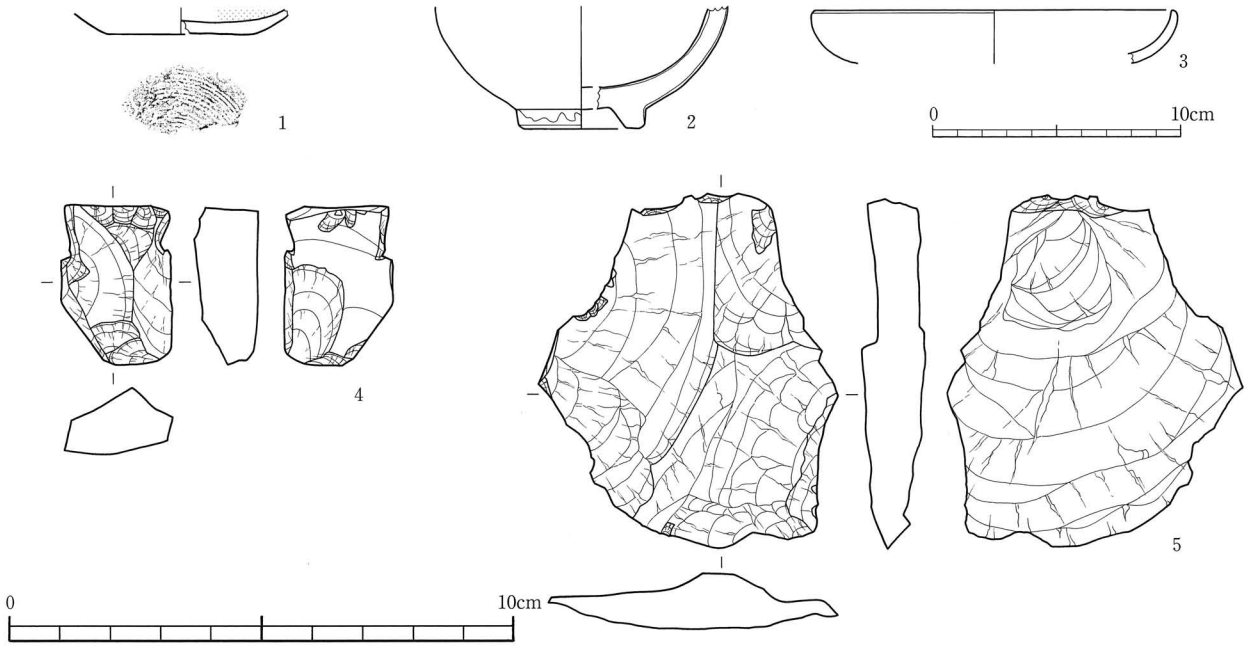
基本層17層は緑灰色の粘土からなる自然堆積層である。層の上面で石器K－4（第96図4）が1点出土している。

⑨24層

24層はしまりの強い粘土層で、全体的に黒褐色の腐植土が分布している。表面の全面にわたって亀甲状のひび割れが観察される。第30次調査において旧石器時代の遺構・遺物が発見された地層の延長に相当すると考えられる。遺物は出土していない。

⑩その他の出土遺物

2層～6a層の上面で、北西から南東に流れる自然流路跡と見られる落ち込みを数条検出している。3区は調査区の北部を中心に広い範囲に渡って撹乱されており、時期等について確認することはできなかった。5b層上面の調査中に調査区東側の自然流路跡から陶器片2点が出土している。この内、図化できたものは唐津の灰釉皿I－3（第96図3）である。



図中番号	登録番号	出土地点 基本層	遺構名	遺構層	取上No.	分類 種別	器種	法量 器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	特徴・備考（調整・素材・産地・時期・分類）	写真図版
1	D－1	4a層				ロクロ土師器	坏	(1.1)			6.0	外面：ロクロ調整　底部回転糸切り　内面：ヘラミガキ　黒色処理	44－1
2	I－2	1層				陶器	埦	(4.9)			4.8	長石釉系灰釉　備前　17C	44－3
3	I－3	5b層	自然流路			陶器	皿	(2.1)	(14.3)			灰釉　唐津　17C前半	44－4
4	K－4	17層				剥片石器		3.1	2.2	1.2	11.5	珪化凝灰岩？	45－4
5	K－5	6a層				剥片石器		7.0	5.9	1.2	39.5	流紋岩	45－5

第96図　3区出土遺物

6．まとめ

① 今回の調査は遺跡の北端部、第79次調査の北東側で実施した。遺跡の範囲がさらに北に広がっていることを確認した。

② 1区では調査を実施した深さ約4.2mの地層は大別27層、細別32層に分けられた。現代の水田耕作土層である1層を除き、2層・4a層・4b層・5b層・6a層・8a層・11層が水田耕作土層と考えられる。

③ 2区では調査を実施した深さ約3.0mの地層は大別12層、細別15層に分けられた。2層・4a層・5b層・6a層が水田耕作土層と考えられる。

④　3区では調査を実施した深さ約6.0mの地層は大別26層、細別30層に分けられた。現代の水田耕作土層である1層を除き、2層・4a層・5b層・6a層が水田耕作土層と考えられる。

⑤　出土遺物及び第93次調査・第104次調査との比較から、水田の年代は2層が中世以降、4a層が平安時代、4b層・5b層・6a層が平安時代から古墳時代、8a層が弥生時代中期後葉、11層が弥生時代中期中葉に所属するものと考えられる。

⑥　3区では2層、4a層で畦畔を確認した。4a層の畦畔3は規模が大きいため、条里型土地割の東西区画畦畔の可能性も考えられるが、推定位置よりも南にあるため、今後の調査による検討が必要である。

⑦　3区では富沢遺跡第30次調査で石器や炉跡が発見された旧石器時代後期の森林跡と同期の植物遺体包含層を確認した。

⑧　今回の調査地点の基本層序と、第104次調査の基本層序は下表のように対応するものと判断した。

第135次調査				第104次調査		
1区	2区	3区	備　　考	層	時　　代	備　　考
1	1	1	水田耕作土層	1	現代の水田	
2	2	2	水田耕作土層	2	中～近世の水田	
3a	3a	3a				
3b	3b	3b				
4a	4a	4a	水田耕作土層 灰白色火山灰のブロックを含む			
				3		白色火山灰層
4b			水田耕作土層			
5a	5a	5a		4b		
5b	5b	5b	水田耕作土層	5		
	5c	5c				
6a	6a	6a	水田耕作土層			
6b		6b				
7	7	7		6		
8a			水田耕作土層	7a	弥生中期後葉の水田	
8b	8b	8b		7b		
9	9	9		8		
10						
11			水田耕作土層	9a.10a	弥生中期中葉の水田	
12				11a.b.c		
13						
14	10	10	砂礫層	12		砂礫層～シルト質粘土層
15～26	11	11		13.14.15		
	12	12		16.17		
		13		18.19		
		14～15		20～24		24層：十和田中掫テフラのブロック
27		16.17		25a	縄文早期遺物包含層	
		18		25b	縄文早期遺物包含層	
		19		26a		
		20		26b		
		21		27		
		22				
				28		
		23		29		
		24		30	旧石器時代	

表　富沢遺跡第135次調査と第104次調査の土層対応表

＜参考文献＞

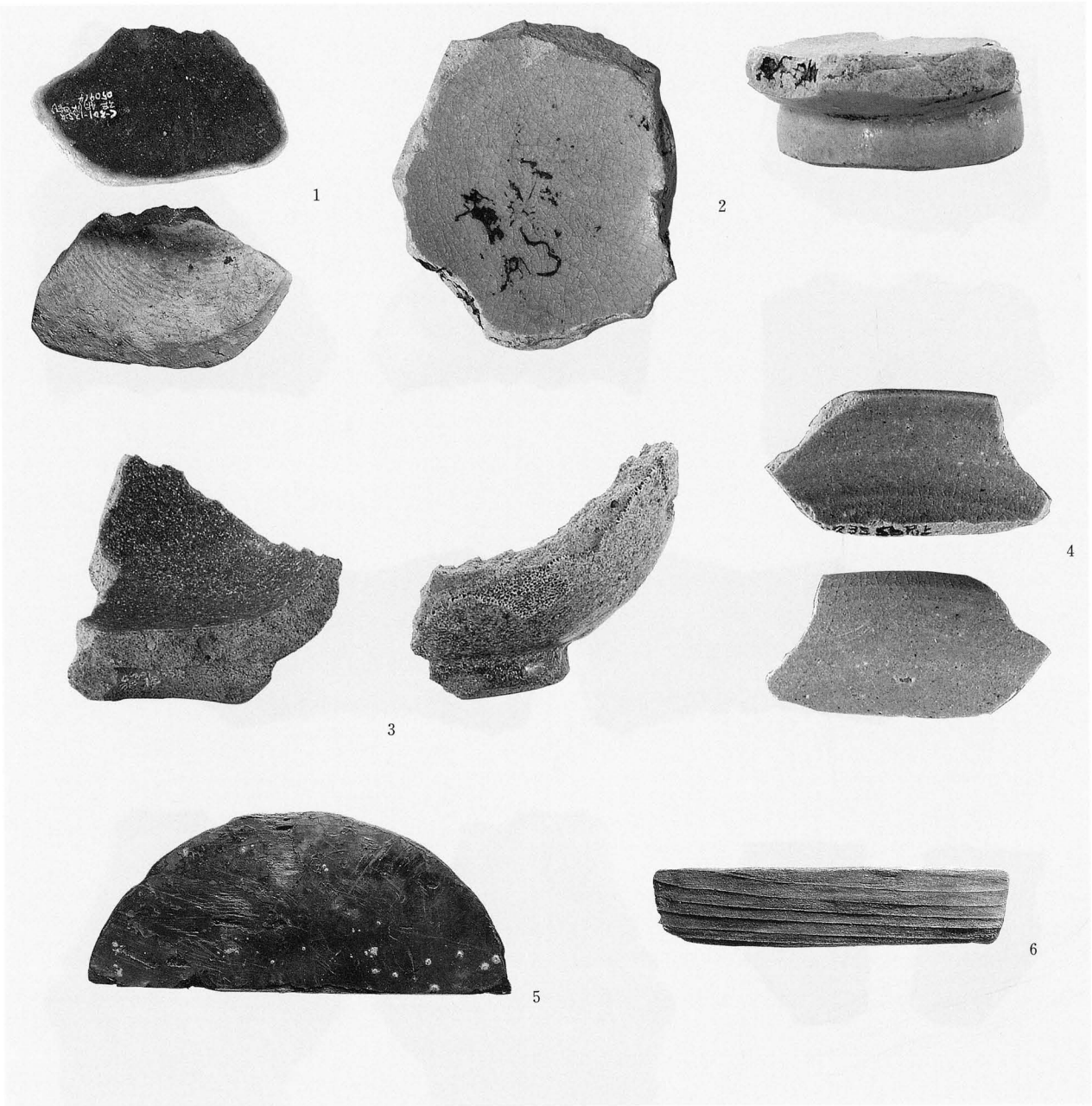
阿子島功（1991）：「東北地方　10C頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』

太田昭夫・斎野裕彦（1992）：「富沢遺跡－第30次発掘調査報告書第Ⅱ分冊－」仙台市文化財調査報告書第160集　仙台市教育委員会

太田昭夫（1992）：「第8節　富沢遺跡第79次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)』仙台市文化財調査報告書第163集　仙台市教育委員会

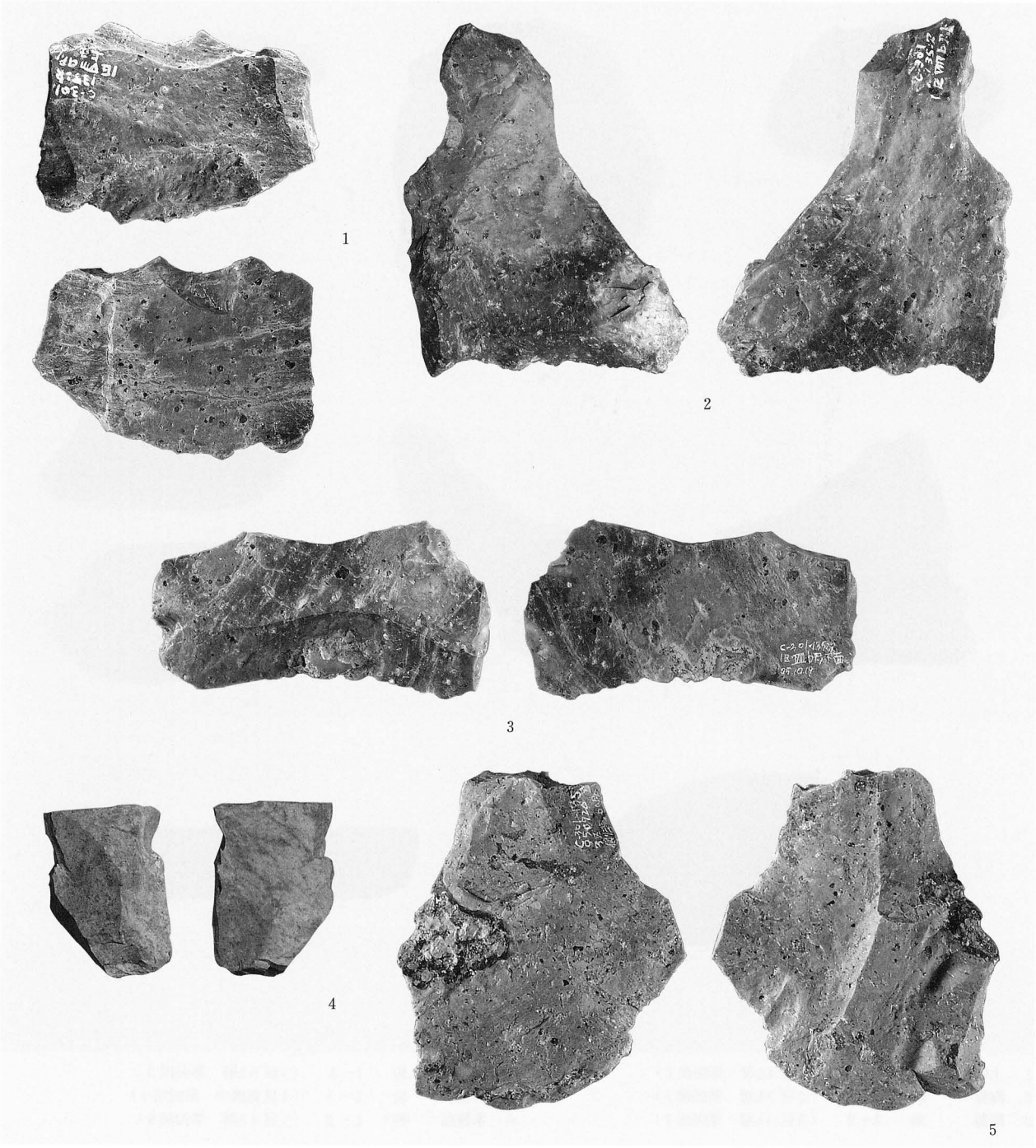
太田昭夫（1996）：「第9章　富沢遺跡第93次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(9)』仙台市文化財調査報告書第208集　仙台市教育委員会

工藤哲司（1999）：「富沢遺跡第104次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第235集　仙台市教育委員会



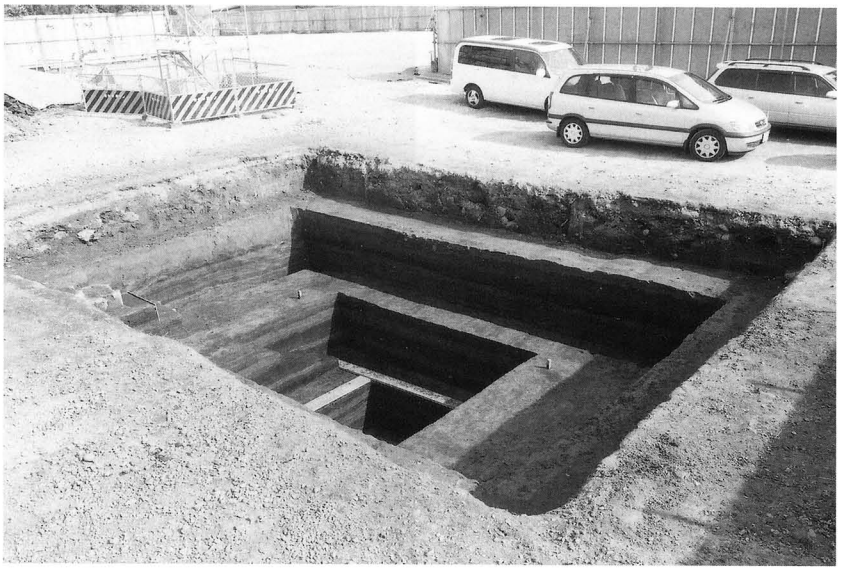
1	土師器	坏	D－1	（3区4a層　第96図1）	4	陶器	埦	I－3	（3区5b層　第96図3）
2	陶器	埦	I－1	（2区3b層　第93図1）	5	陶器	埦	L－1	（1区側溝中　第92図4）
3	陶器	埦	I－2	（3区5b層　第96図1）	6	木製品	楔？	L－2	（1区4b層　第92図5）

図版44　富沢遺跡第135次調査出土遺物1

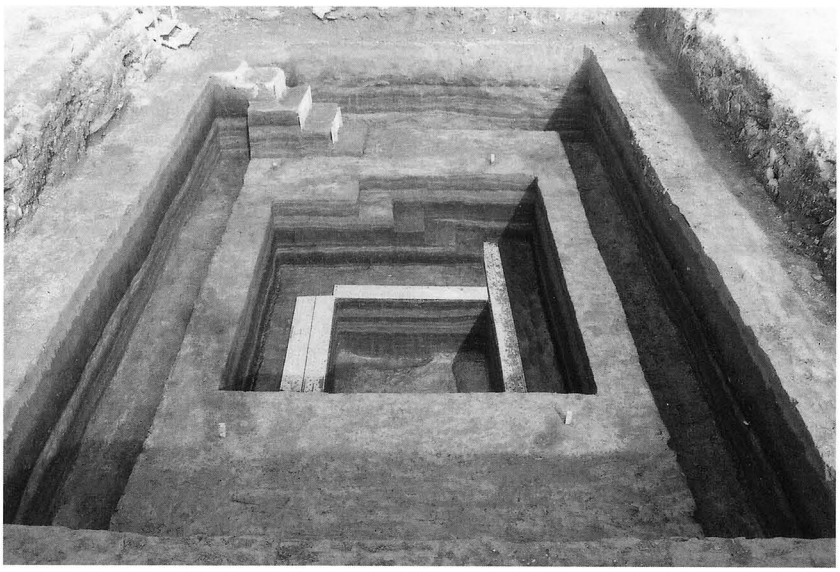


1　石器　剥片　K－1　（1区8a層　第92図1）
2　石器　剥片　K－2　（1区8b層　第92図2）
3　石器　剥片　K－3　（1区8b層　第92図3）
4　石器　剥片　K－4　（3区17層　第96図4）
5　石器　剥片　K－5　（3区6a層　第96図5）

図版45　富沢遺跡第135次調査出土遺物2



1　１区全景（南西より）



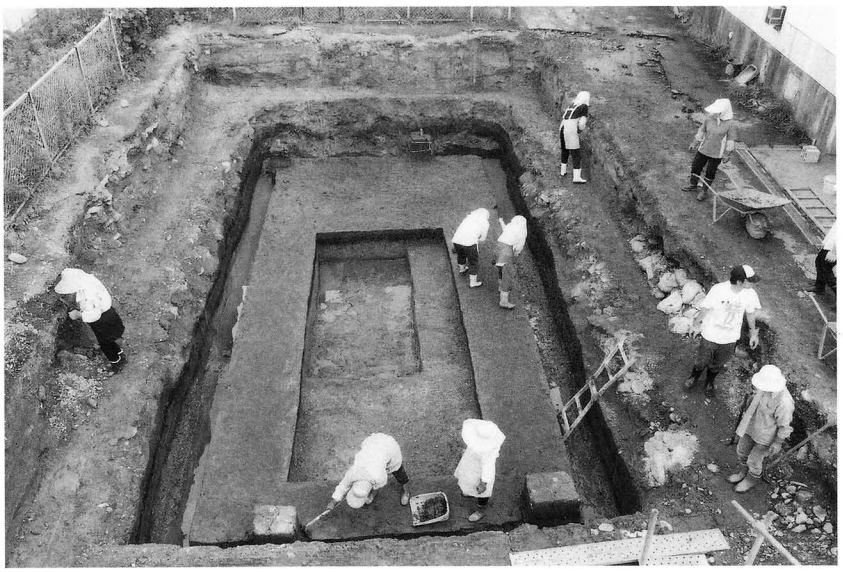
2　１区全景（南より）

3　１区19～27層全景（南より）

図版46　１区全景

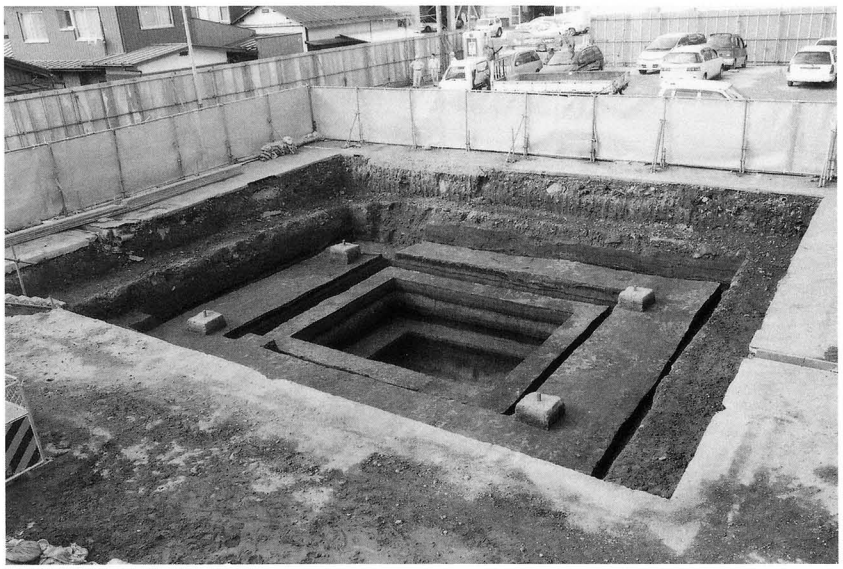
1　1区作業風景（南東より）

2　2区全景（南より）

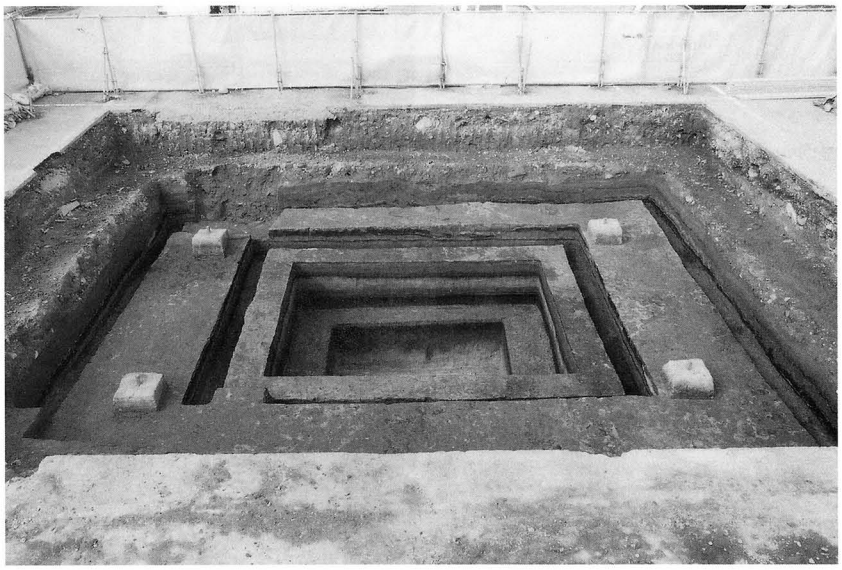


3　2区作業風景（西より）

図版47　1区作業風景・2区全景



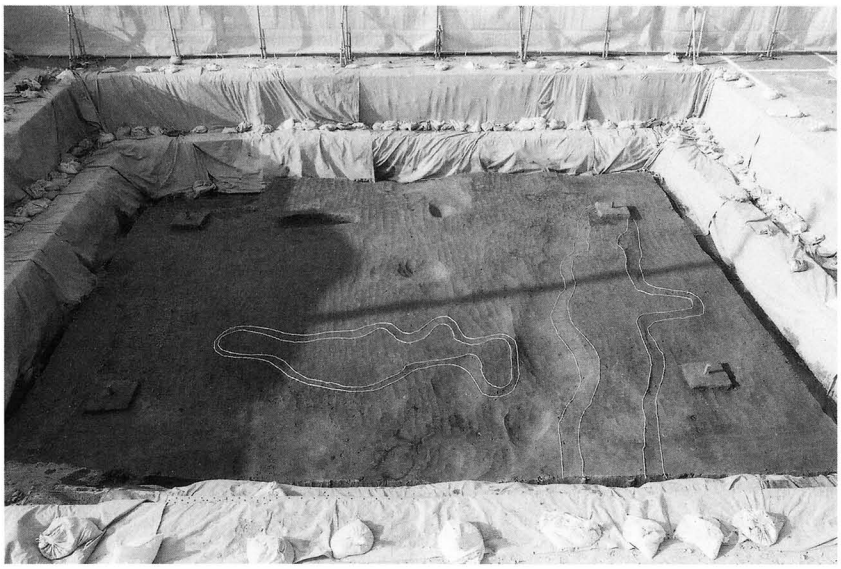
1　3区全景（南東より）



2　3区全景（南より）

3　3区13～26層（南より）

図版48　3区全景



1　3区2層水田跡（南より）

2　3区4a層水田跡（南より）

3　3区4a層の擬似畦畔B（南より）

図版49　3区検出遺構

7．仙台市富沢遺跡第135次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社　古環境研究所

1）はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO２）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山：2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山：1984）。

ここでは、富沢遺跡第135次調査における稲作の可能性を検討することを主目的に、プラント・オパール分析を行った。

2）試料

調査地点は、１区、２区、３区の３地点である。分析試料は、１区では南壁において上位より２層、4a層、4b層、5b層、6a層、8a層、10層、11層より採取された８点、２区では北壁において上位より２層、4a層、5a層、5b層、5c層、６層より採取された６点、３区では東壁において上位より１層、２層、4a層、5a層、5b層、5c層、6a層より採取された７点の計21点である。

3）分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原：1976）をもとに、次の手順で行った。

①試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

②試料約１gに直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

③電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

④超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

⑤沈底法による20μm以下の微粒子除去

⑥封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

⑦検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料１ｇ中のプラント・オパール個数（試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10－５g）を乗じて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.3である。

4）結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、シバ属、タケ亜科（メダケ節型、

ネザサ節型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１、図１～３に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。

以下に各地点におけるプラント・オパールの検出状況を記す。

①１区

イネは２層～8a層で検出されている。このうち、２層、4a層、4b層では高い密度である。ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、クマザサ属型およびミヤコザサ節型はすべての層で検出されている。ヨシ属はいずれも高い密度である。ススキ属型も4a層と11層以外では高い密度である。他はやや低い密度である。

②２区

イネは２層～６層のすべてで検出されている。このうち、２層では非常に高い密度であり、4a層、5b層、5c層でも高い密度である。ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、クマザサ属型およびミヤコザサ節型はここでもすべての層で検出されている。これらのうち、ヨシ属は４層を除く各層で高い密度である。ススキ属型は２層と5c層で高い密度である。ミヤコザサ節型は４層、5a層、6a層で比較的高い密度である。シバ属は２層のみで検出されているがここでも低い密度である。

③３区

イネは１層、２層、4a層、5b層、5c層および6a層で検出されている。１層では非常に高い密度であり、４層、5b層、6a層でも高い密度である。ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、クマザサ属型およびミヤコザサ節型は１区、２区同様ここでもすべての層で検出されている。ヨシ属は5b層と5c層で高い密度である。ススキ属型は１層、２層、4a層、5a層、5b層で高い密度である。クマザサ属型は5a層、5b層、5c層で、ミヤコザサ節型は5a層と5c層でそれぞれ比較的高い密度である。１層でシバ属が認められたが低い密度である。

５）考察

①１区

本地点では、２層、4a層、4b層でイネのプラント・オパールが高い密度で検出されている。プラント・オパール密度は4,900～5,400個/gであり、稲作跡の可能性を判断する際の基準値とされている3,000個/gを大きく超過している。こうしたことから、これらの層準については稲作跡である可能性が高いと考えられる。5b層ではプラント・オパール密度は2,400個/gとやや低い。直上の4b層が水田耕作土である可能性が高いことから、当該層においても稲作が行われていた可能性が考えられるものの、上層等から後代のプラント・オパールが混入した危険性も否定できない。6a層と8a層についてはプラント・オパール密度が低いことから、稲作跡である可能性を積極的に肯定することはできない。

イネ以外の分類群の検出状況をみると、各層ともヨシ属が高い密度であり、下位の11層から5b層にかけては、優占している。こうしたことから、当該調査区では11層から6a層の時期にかけては湿地の状態であり、4b層あるいは5b層の時期にそこを開いて水田が造成されたと推定される。5b層の時期以降も周辺は湿地あるいはそれに近い状況であったと思われる。

②２区

２区では、２層、4a層、5b層および5c層でイネのプラント・オパールが高い密度で検出されている。このうち、２層については10,000個/g近くの検出量であるが、これは比較的最近の水田耕作に起因するものと思われる。4a層、5b層、5c層では5,000個/g前後の高密度であることから、これらの層については稲作跡である可能性が高いと判断される。5a層と6a層ではプラント・オパール密度がそれぞれ1,200個/g、600個/gと低いことから、稲作が行われていた可能性を積極的に肯定することはできない。

本地点でも4a層を除いてヨシ属が概ね高い密度であり、6a層から5a層にかけての調査地周辺は湿地もしくはそれに近い環境であったと推定される。なお、２層と5c層ではススキ属型が、4a層、5a層、6a層ではミヤコザサ節型が比較的多く認められる。このことから、２層と5c層ではススキ属が4a層、5a層、6a層ではミヤコザサ節が近傍に生育していたと推定される。

③３区

３区では、１層、２層、4a層、5b層、5c層、6a層でイネが検出されている。このうち、１層と２層については比較的最近の水田耕作によるものであろう。4a層、5b層および6a層では、プラント・オパール密度が3,600～5,400個/gであり、稲作跡の判断基準値の3,000個/gを超過している。また、いずれも直上層よりも高い密度でありピークとなっている。こうしたことから、4a層、5b層、6a層の各層は水田耕作土であった可能性が高いと考えられる。5c層についてはプラント・オパール密度が1,800個/gと低いことから、上層もしくは他所からの混入の可能性も否定できない。

イネ以外では、ヨシ属が5b層と5c層でススキ属型が１層～5b層で、クマザサ属型が5a層、5b層、5c層で、ミヤコザサ節型が5a層と5c層で高い密度である。このことから、5c層と5b層の時期の調査地近辺は湿地の状態であり、5c層ではクマザサ属やミヤコザサ節が、5b層ではススキ属やクマザサ属が周辺に生育していたと推定される。また、5a層ではススキ属、クマザサ属およびミヤコザサ節が、4a層～１層にかけてはススキ属が周辺に生育していたと推定される。

６）まとめ

富沢遺跡第135次調査においてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性について検討した。その結果、１区では下位より4b層と4a層で、２区では5c層、5b層、4a層で、３区では6a層、5b層、4a層でそれぞれ稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

＜文献＞

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

表１　仙台市富沢遺跡第135次調査のプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群（和名・学名）＼層位		1区								2区						3区						
		2	4a	4b	5b	6a	8a	10	11	2	4	5a	5b	5c	6	1	2	4	5a	5b	5c	6a
イネ科	Gramineae (Grasses)																					
イ　ネ	*Oryza sativa*	54	54	49	24	18	6			97	54	12	48	48	6	72	24	36		36	18	54
ヨシ属	*Phragmites*	36	24	24	61	48	36	42	60	24	12	24	30	48	24	18	18	6	6	54	42	18
ススキ属型	*Miscanthus* type	24	12	24	24	30	24	36	12	42	18	18	24	42	18	36	36	48	48	48	24	24
シバ属	*Zoysia*	6								12						6						
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)																					
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	6	12	12	12	12	18	24	18	6	6	6	6	6	6	12	12	12	6	12	6	6
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa type	18	30	24	18	24	48	36	30	18	18	18	18	24	30	36	36	48	42	30	24	36
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*) type	30	36	36	61	42	54	42	72	85	72	54	42	42	72	54	66	60	120	120	120	90
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi type	30	36	36	61	48	60	48	60	85	120	96	42	42	96	48	36	36	102	60	84	54
その他	Others	24	18	18	30	24	30	24	30	24	24	18	18	18	12	18	12	6	12	12	12	18
未分類等	Unknown	344	245	315	176	206	193	168	156	193	144	126	150	245	227	245	187	114	144	192	180	204
プラント・オパール総数		572	467	538	467	452	469	420	438	586	468	372	378	515	491	545	427	366	480	564	510	504

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イ　ネ	Oryza sativa	1.60	1.58	1.43	0.71	0.53	0.18			2.84	1.59	0.35	1.41	1.41	0.18	2.11	0.71	1.06		1.06	0.53	1.58
ヨシ属	*Phragmites*	2.29	1.51	1.53	3.82	3.05	2.28	2.65	3.78	1.52	0.76	1.52	1.89	3.02	1.51	1.13	1.14	0.38	0.38	3.41	2.65	1.13
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.30	0.15	0.30	0.30	0.37	0.30	0.45	0.15	0.52	0.22	0.22	0.30	0.52	0.22	0.45	0.45	0.60	0.59	0.59	0.30	0.30
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	0.07	0.14	0.14	0.14	0.14	0.21	0.28	0.21	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	0.14	0.14	0.14	0.07	0.14	0.07	0.07
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa type	0.09	0.14	0.12	0.09	0.12	0.23	0.17	0.14	0.09	0.09	0.09	0.09	0.11	0.14	0.17	0.17	0.23	0.20	0.14	0.12	0.17
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*) type	0.23	0.27	0.27	0.45	0.32	0.41	0.32	0.54	0.63	0.54	0.41	0.31	0.31	0.54	0.40	0.50	0.45	0.90	0.90	0.90	0.67
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi type	0.09	0.11	0.11	0.18	0.15	0.18	0.14	0.18	0.25	0.36	0.29	0.13	0.13	0.29	0.14	0.11	0.11	0.31	0.18	0.25	0.16

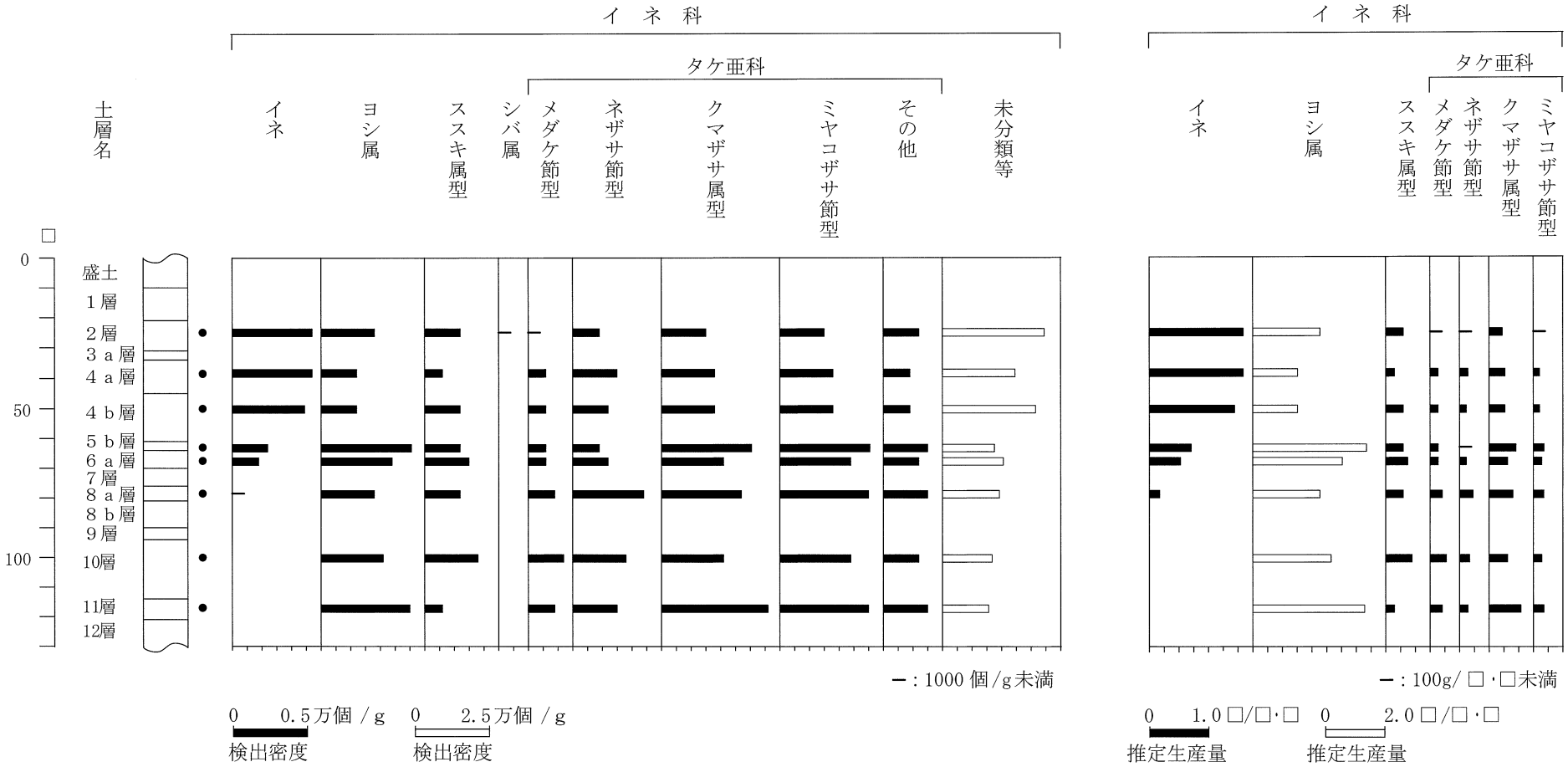


図1　富沢遺跡第135次調査1区におけるプラント・オパール分析結果

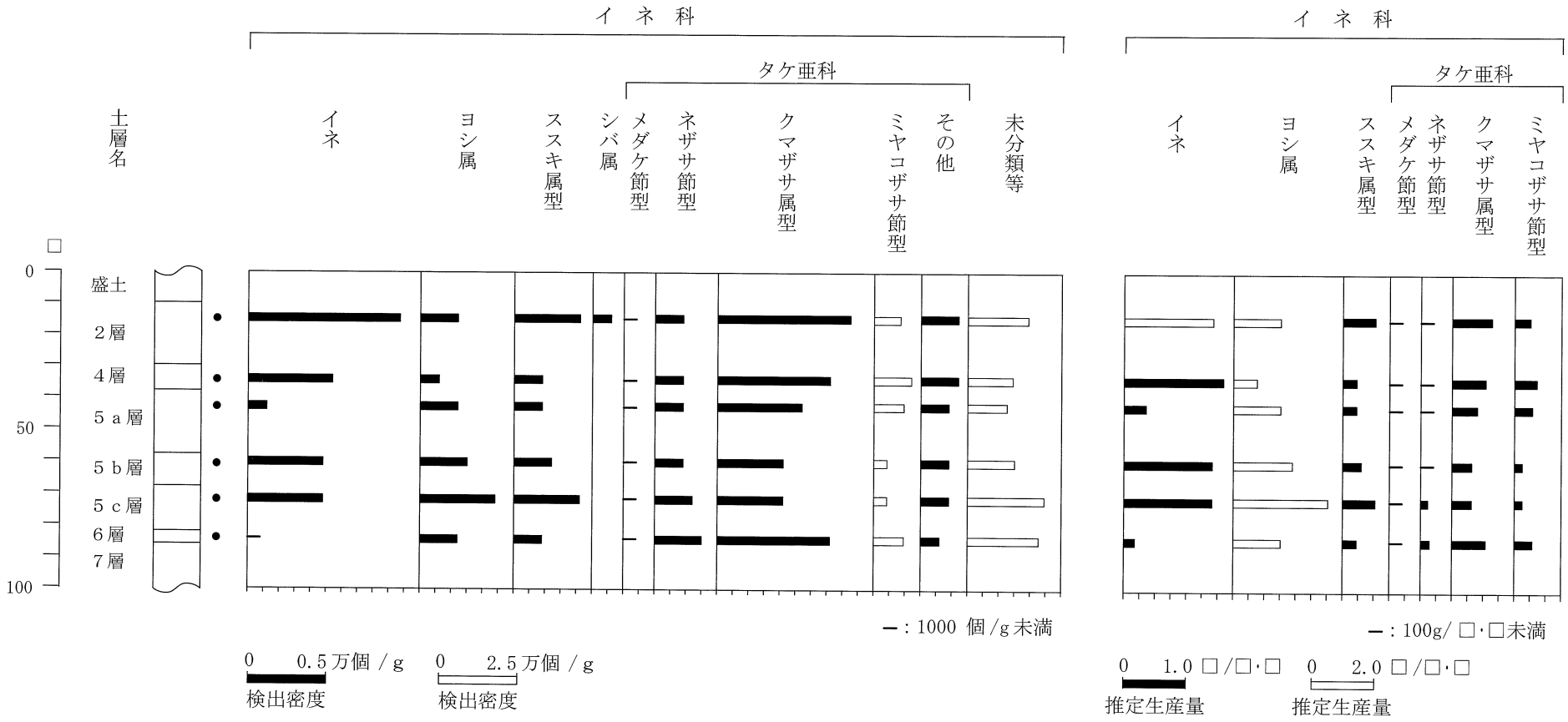


図2　富沢遺跡第135次調査2区におけるプラント・オパール分析結果

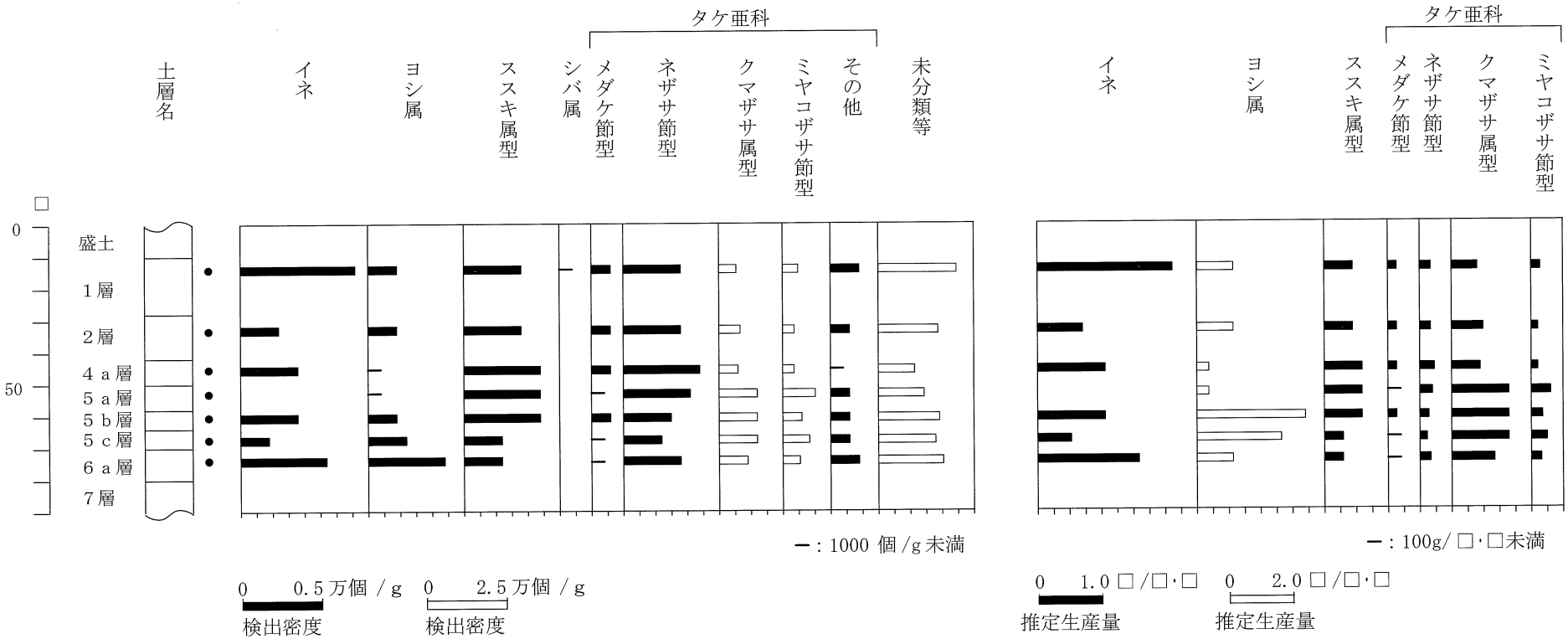
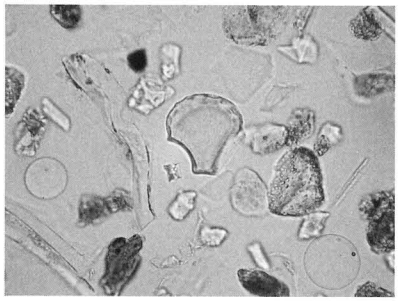
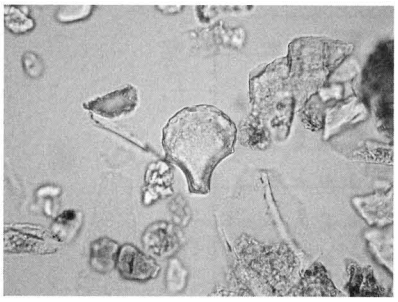


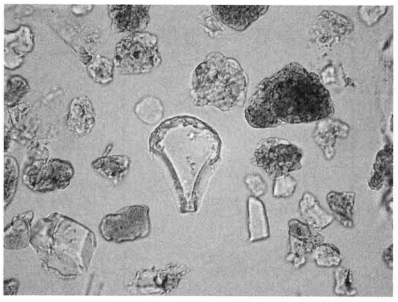
図3　富沢遺跡第135次調査3区におけるプラント・オパール分析結果



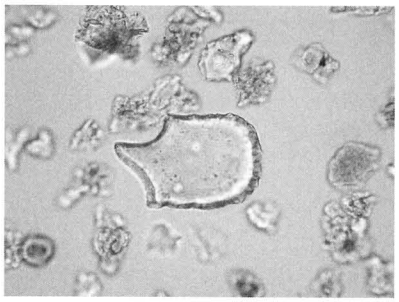
イネ



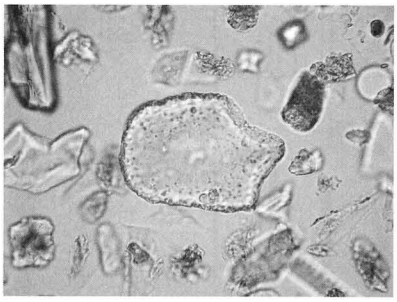
イネ



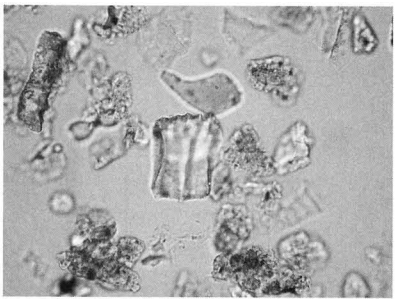
イネ



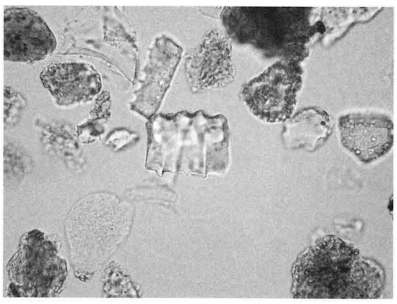
ヨシ属



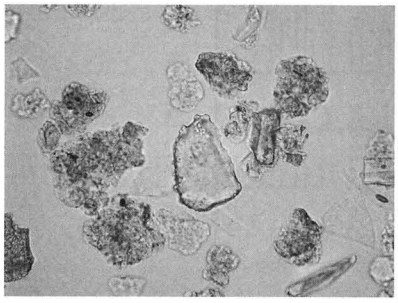
ヨシ属



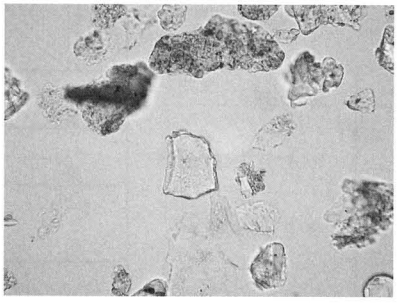
メダケ節型



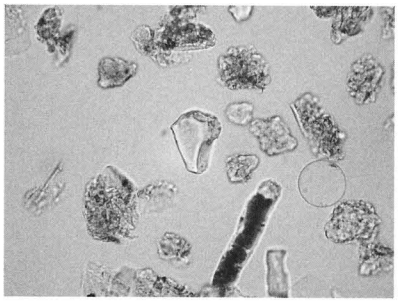
ネザサ節型



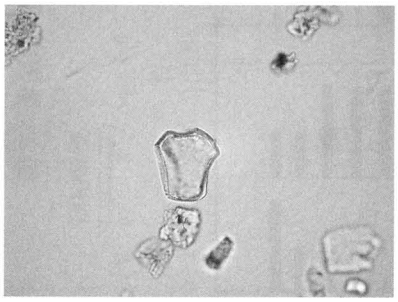
クマザサ属型



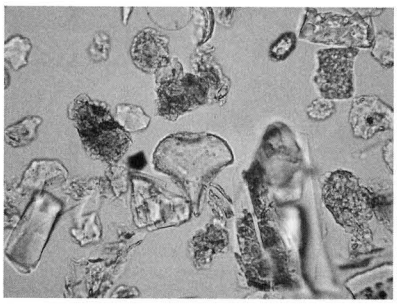
ミヤコザサ節型



ススキ属型



ススキ属型



シバ属

50 μm

プラント・オパールの顕微鏡写真

XVII　富沢遺跡第136次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　富沢遺跡（宮城県遺跡番号01369）
調 査 地 点　　仙台市太白区長町南１丁目201－３
調 査 期 間　　平成17年８月１日～８月12日
調査対象面積　　264㎡
調 査 面 積　　29㎡
調 査 原 因　　店舗付共同住宅建築
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　　主査　工藤哲司　　文化財教諭　赤岡光騎

2　調査に至る経過と調査方法

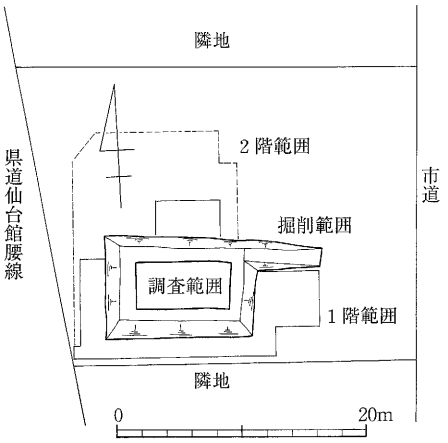
本調査は、平成17年４月25日付けで、栗谷川元氏より、杭打ちを伴う基礎工法の店舗付共同住宅の建築についての「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」が提出されたので、建築予定範囲の発掘調査を実施する旨を回答した。発掘調査は、平成17年８月１日から８月12日までの予定で実施した。当該地は盛土が厚いので、現地表面で東西12ｍ×南北８ｍの範囲を法面に傾斜をつけて盛土層を除去した後、旧水田面に東西7.6ｍ×南北3.8ｍの範囲の調査区を設定して調査を行なった。

今回の調査は、現地表面からの深さ約3.2ｍ、土地区画整理事業以前の旧水田面からの深さ約1.4ｍの弥生時代中期の水田層までで実施した。当該地周辺では過去の調査において、旧水田面からの深さ２～３ｍで縄文時代、４～５ｍで旧石器時代の遺構・遺物が発見されている場所もある。しかし、本調査区は面積が狭く、下層の調査を行った場合、調査の安全を確保することが困難であると判断されたので、弥生時代中期の水田層より下層の調査は行わなかった。

3　遺跡の位置と環境

本調査区は、富沢遺跡の東部中央付近に当たる。周辺では多数の調査が行われており、水田層についてみると、弥生時代中期以前・弥生時代中期中葉・弥生時代中期後葉・弥生時代後期・古墳時代中期・奈良～平安時代・平安時代・中世・近世などの各時期の水田跡が連続的に検出されている。

遺跡の立地と歴史的環境は、富沢遺跡第135次調査の報告に記載されているとおりである。

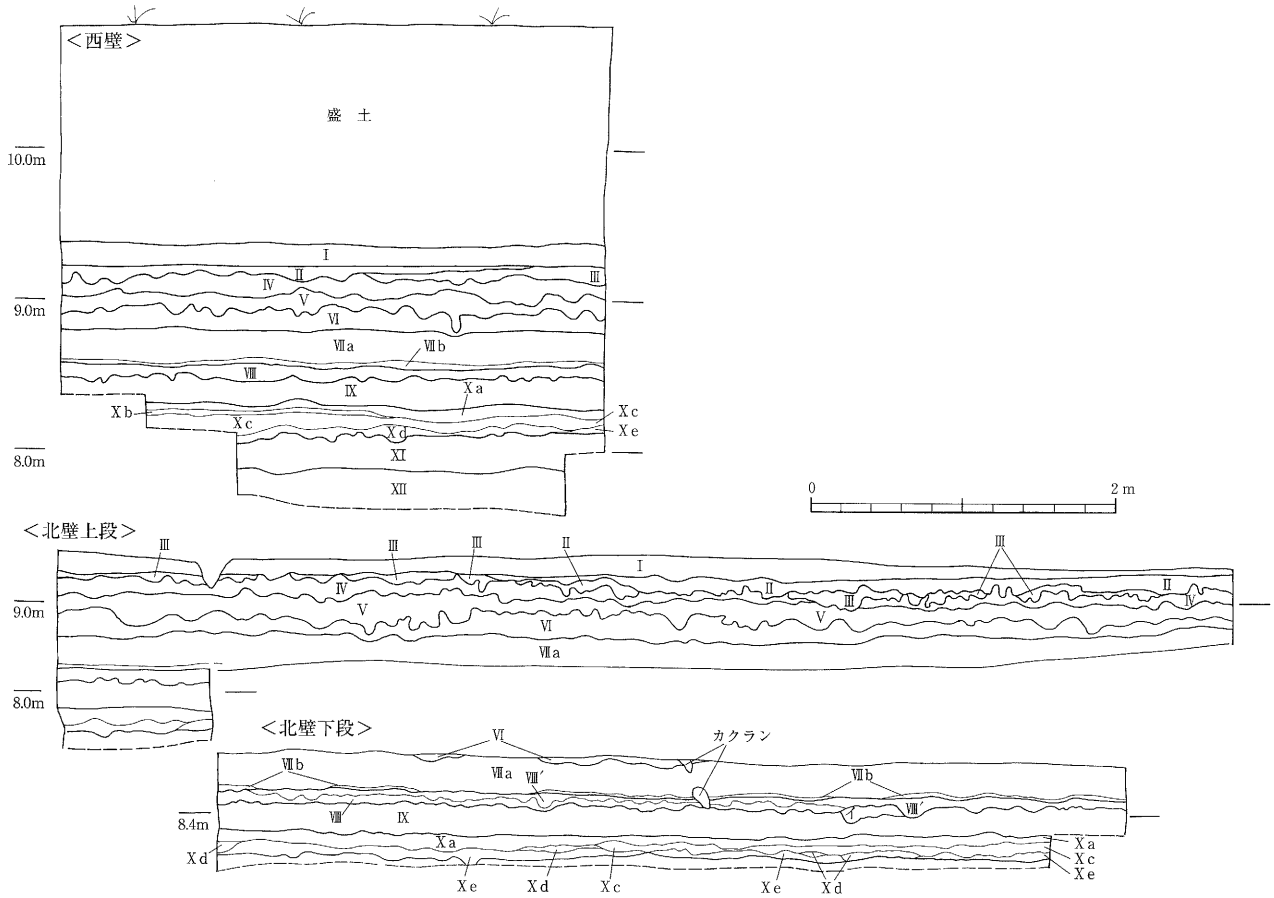


第97図　調査区配置図

4　基本層序

本調査区は約150cmの盛土層がある。旧表土（旧水田層）のⅠ層から水田に関係する最下層までは約140cmの深さがあり、この間の土層は大別11層・細別17層に分けられた。

Ⅰ　層　N3/0暗灰色粘土。層厚約20cm。砂を含み、層下部に酸化鉄が集積する。区画整理以前の水田耕作土層。



第98図　調査区断面図

II　層　N4/0灰色粘土。層厚15～0cm。I層の耕作による削平を受けて残存しない部分もある。III層起源の黒色土をわずかに含む。層下面に凹凸がある。近世の瓦片出土。水田耕作土。

III　層　N1.5/0黒色粘土。層厚10～0cm。II層及びI層の耕作のために残存しない部分がある。IV層起源の灰オリーブ色の粘土のブロックを含む。層下面の凹凸が著しい。水田耕作土。

IV　層　7.5YR4/2灰オリーブ色粘土。粘性が強い。層厚は15～5cm。上面はIII層水田の耕作による撹乱を受けている。層下部に灰白色火山灰のブロックをまばらに含んでいる。層下面は凹凸が著しい。水田耕作土。

V　層　5Y3/1オリーブ黒色粘土。粘性強い。層厚は20～5cm。層下部に灰オリーブ粘土のブロックを部分的に含む。層下面は凹凸が顕著である。水田耕作土。

VI　層　2.5GY2/1黒色粘土。層厚は20～10cm。暗灰黄色粘土及び黒色粘土のブロックを縞状に含む。本来は暗灰黄色粘土及び黒色粘土が互層状に堆積していたものが、乱れを生じたものと観察される。層の乱れの要因としては、上層（V層）の水田耕作の影響が考えられる。層底面は平坦である。自然堆積。

VIIa層　2.5Y5/2暗灰黄色粘土と2.5Y2/1黒色泥炭質粘土の互層。層厚は約20cm。自然堆積。

VIIb層　2.5Y6/1黄灰色粘土。層厚は約3～2cm。自然堆積。

VIII'層　5Y3/2オリーブ黒色粘土。層厚は10～3cm。植物遺体をわずかに含む。調査区の北西から南東にかけて検出された畦畔より北東側に分布。水田耕作土。

VIII　層　10YR4/1褐灰色粘土。層厚は10～5cm。植物遺体をわずかに含む。層下面に凹凸あり。水田耕作土。

IX　層　10YR1.7/1黒色粘土質泥炭と10YR4/2灰黄褐色粘土の互層。層厚は20cm前後。層下面は緩やかな起伏がある。自然堆積。

Ｘａ層　10YR4/1褐灰色粘土。層厚は10～５cm。植物遺体を含む。水田耕作土。

Ｘｂ層　10YR5/2灰黄褐色粘土。層厚は３～２cm。層上部に黒色泥炭質粘土が薄く分布。自然堆積。

Ｘｃ層　2.5Y4/1黄灰色粘土。層厚は約15～５cm。植物遺体をわずかに含む。浅黄色粘土粒を南西部の土層中にまばらに含む。水田耕作土。

Ｘｄ層　2.5Y4/2暗灰色粘土。層厚は約10～５cm。黒褐色の泥炭をわずかに含み、層全体が不均質な土壌である。調査区の北西から南東にかけて検出された畦畔より南西側を中心に分布する。層下面に凹凸あり。Ｘｃ層水田跡の下部耕作土。

Ｘｅ層　５Y4/2灰オリーブ色粘土。層厚は10～２cm。植物遺体を含む。Ｘｃ層水田の母材。自然堆積。

XI　層　2.5Y2/1黒色泥炭質粘土と7.5Y4/2灰オリーブ色泥炭質粘土の互層。層下部ほど灰オリーブ色泥炭質粘土が厚く堆積。層厚は20cm前後。自然堆積。

（XII層）　10YR1.7/1黒色粘土。灰オリーブ粘土をわずかに縞状に含む。植物遺体を含む。

5　発見遺構と出土遺物

1）Ⅱ層水田跡の遺構と遺物

Ⅱ層は、水田土壌であると観察されたが、上面がⅠ層水田による削平を受けているため水田に関わる畦畔等の遺構は検出されなかった。残存するⅠ層の検出面で土坑が１基検出されている。

SK１土坑　調査区中央の北壁際で検出された。平面形は円形を呈し、東西軸長119cm・南北検出部軸長100cmを測る。深さは38cmで、断面形は舟底形を呈する。堆積土は２層に分けられる。出土遺物はない。

Ⅱ層から出土した遺物としては、瓦片が３点（Ｆ－１・Ｇ－１他）、土師質土器片１点（Ｉ－１）、志野丸皿小片１点（Ｉ－２）、肥前産染付け碗小片１点（Ｊ－１）などが出土している（図版57）。Ｆ－１は丸瓦の玉縁付近の破片で、胎土が灰色で表面が黒色を呈す。出土遺物からⅡ層水田の時期は近世以降と考えられる。

2）Ⅲ層水田跡の遺構と遺物

Ⅲ層も土層の状況から水田土壌と観察されたが、Ⅱ層・Ⅰ層水田の連続耕作により畦畔は残存していない。ただし、調査区中央のⅣ層上面において、南北方向に平行する２条のⅢ層の落ち込みが確認された。２条の落ち込みのうち、西側は幅70～90cmで、調査区北壁から南に２ｍのところまでのびている。東側は幅90～110cmで、調査区を横断している。両落ち込みの間隔は内側で90～100cmである。この落ち込みについては、畦畔を構築する際に、畦畔の両側を掘削し、その土を盛土としたために生じた水田耕作土層底面の凹地と理解される。したがって、２条の間にⅢ層水田跡の畦畔が存在したと推定される。

Ⅲ層は、全体的に削平を受けているために、残る土層も薄く、出土遺物もない。

3）Ⅳ層水田跡の遺構と遺物

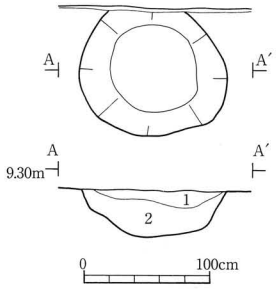
Ⅳ層も均質な土壌で、土層の底面に凹凸が認められることから水田土壌と観察された。Ⅲ層以降の連続耕作のため、上面に畦畔は残存していなかった。Ⅳ層の除去作業中に、Ⅴ層に近い層下部で、10cm前後の幅で帯状に分布する酸化鉄の集積が検出された。酸化鉄の帯は一定の間隔で平行して集積している。その間隔は、幅の広い南北方向の部分と、幅が狭く東西方向にのびる部分があり、全体として逆「ト」字状を呈している。幅広の部分は、北側で幅165cm前後、南側で幅120cmほどである。狭い部分は幅40cm前後で、西部がわずかに南側に寄っている。この酸化鉄の分布範囲は、Ⅳ層水田跡に伴う畦畔を反映するものと考えられる。

Ⅳ層の下部には、「灰白色火山灰」のブロックがまばらに認められることから、Ⅳ層が水田として開発されたのは10世紀前半以降に位置づけられる。出土遺物はない。

4）Ⅴ層水田跡の遺構と遺物

Ⅴ層は、稀にⅥ層起源の暗灰黄色粘土と黒色粘土のブロックを含むが、比較的均質な土壌で、土層の底面に凹凸が認められることから水田土壌と観察された。Ⅳ層の耕作による削平のため上面で畦畔は検出されなかった。Ⅴ層では、調査区中央の層下面付近で、Ⅵ層の高まりが２列に平行して検出された。それぞれの幅は西側で25～40cm・東側で25～70cmである。西側の北寄りには逆「ト」字状に西方に幅30cm前後でのびる突出部がある。東西の高まりの間隔は90～120cmである。２条のⅥ層の高まりに挟まれた部分と、高まりの両側とでⅤ層の深さに大差は認められない。

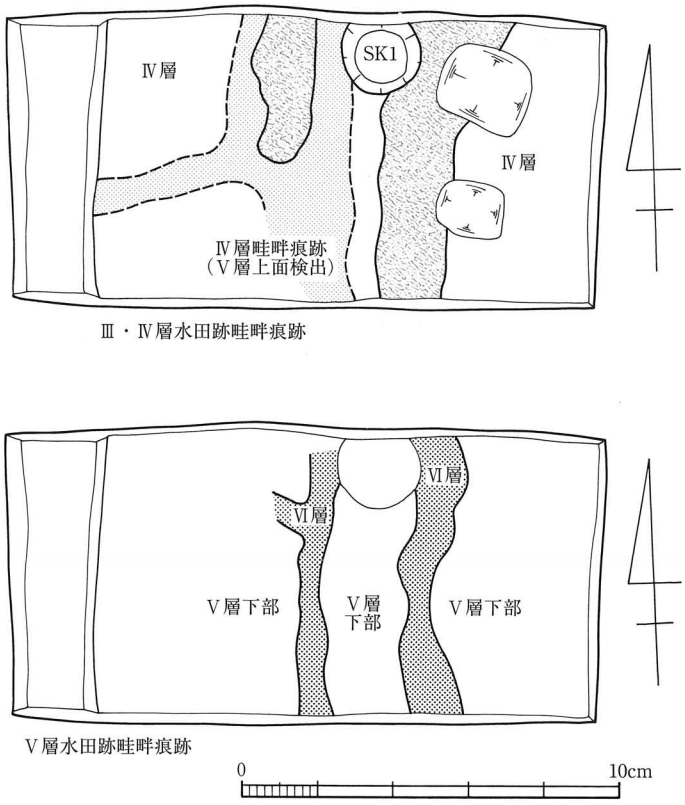
Ⅴ層下面で検出されたⅥ層の高まりは、Ⅴ層水田跡の畦畔を反映するもので、南北畦畔は、西列の西側から東列の東側までの２m前後の幅があったと推定される。畦畔の中央でⅤ層が窪んだ状況で検出された要因としては、この部分に畦畔を構築するために盛土がなされた結果の土圧及び人の移動等の加重などの可能性が考えられる。



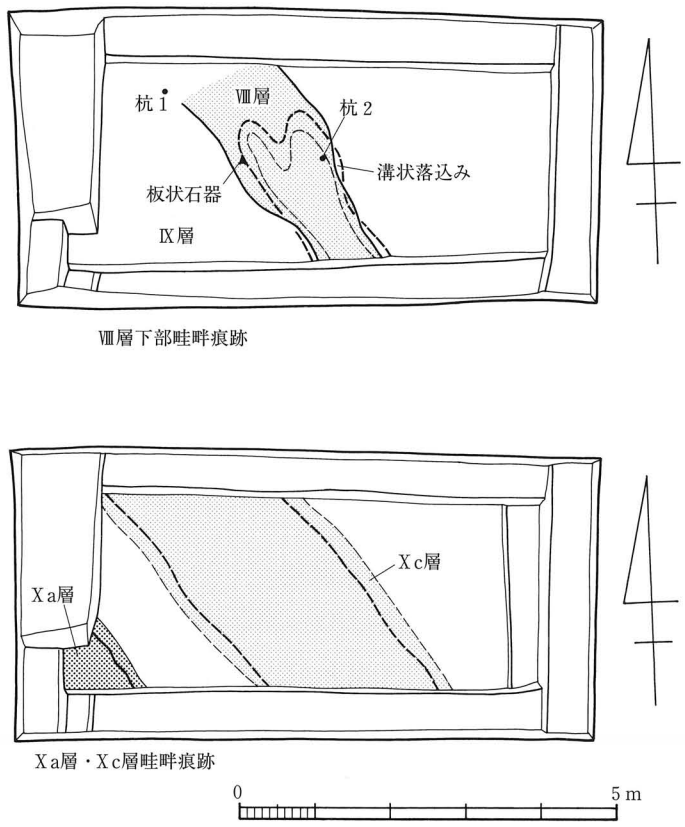
Ⅱ層SK１

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR4/1　灰色	粘土	自然堆積
2	5Y4/1　灰色	粘土	オリーブ黒色粘土・灰オリーブ粘土のブロックを含む

第100図　Ⅱ層SK1土坑



第99図　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層水田跡、畦畔痕跡



第101図　Ⅷ・Ⅹa・Ⅹc層水田跡畦畔痕跡

Ⅴ層中からの出土遺物はない。

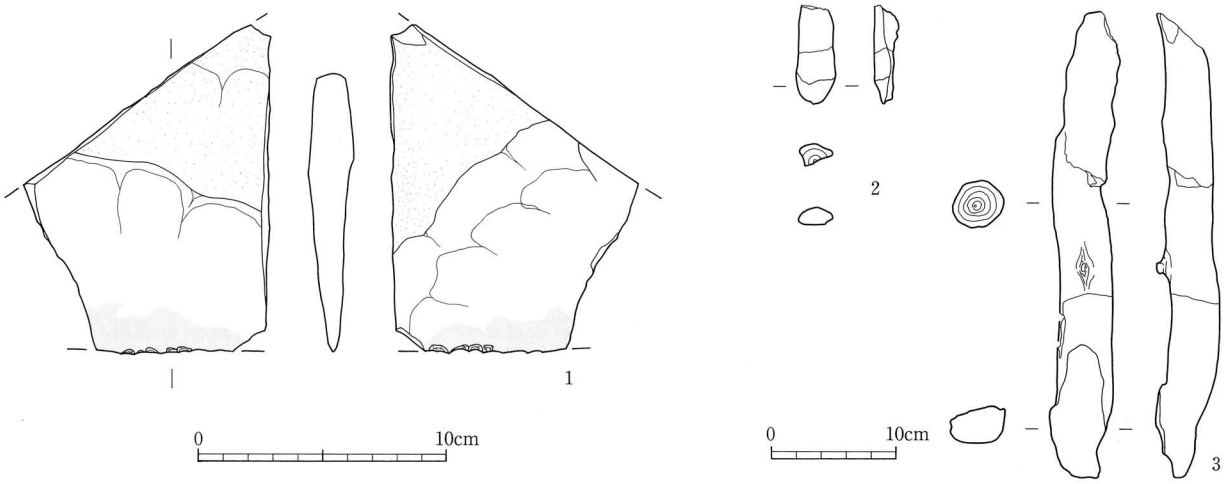
5）Ⅷ層水田跡の遺構と遺物

Ⅷ層については、周辺部の調査状況から水田跡の可能性の高い土層であったので、Ⅷ層の直上に層厚２～３cmで分布するⅦｂ層上面で遺構の検出作業を行ったが、畦畔は検出できなかった。Ⅶｂ層を除去した際に、調査区南壁中央から北壁西端部にかけて、他の部分に比べてⅧ層がやや高いレベルから検出されたが、その範囲については不明瞭であり、Ⅷ層上面で畦畔を確認することはできなかった。Ⅷ層を掘り下げる過程で、第101図のとおり調査区南壁中央から北壁西端部に通るように、Ⅷ層がⅨ層に落ち込むような状態で土層の変化が検出された。この土層は、南側で幅70cm・北側で幅120cmを測る。この位置の南壁を精査した結果、Ⅷ層が２cm前後高くなっていることが確認されたことから、この土層の変化については、畦畔を反映するものと判断される。

Ⅷ層を除去し、Ⅸ層上面を検出した段階で、畦畔痕跡の南半と重複する位置で、溝状の落ち込みが確認された。落ち込みは、幅が80～110cmで、Ⅸ層上面からの深さは15cm前後である。横断面形は舟底形である。堆積土はⅧ層と同様である。

Ⅷ層の上面では、杭が２本検出されている。杭１は畦畔痕跡の南西側側面の北西端に位置する。長さ7.9cm・直径約3.5cmの芯持ちの半丸材で、全面が焼けている。先端がⅧ層中に収まる短い材であり、付近には炭化材の小片の散布が認められたことから、杭ではない可能性もある。杭２は畦畔痕跡の北西側側面の中央付近に位置する。畦畔の中心側から水田側に向って傾いている。杭の先端はⅩ層の上部に達している。杭は、長さ37.2cm・直径4.9cmの芯持ちの丸材で、先端に加工は認められない。

遺物としては板状石器が１点ある。畦畔上のⅧ層上面からⅧ層中に刃部を斜め上に向けて刺さった状態で出土した。大きさは、現状の最大長14.4cm・器幅10.9cm・最大厚さ1.8cmを測る。刃部の幅は5.7cm残り、両面には肉眼でも明瞭な光沢（コーン・グロス）が確認できる。



図中番号	登録番号	出土地点 基本層	遺構名	遺構層	取上No.	分類 種別	器種	法量 器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	特徴・備考（調整・素材・産地・時期・分類）	写真図版
1	K-1	Ⅷ層中				石器	板状石器	14.4	10.9	1.8	230g	刀部に２次加工有り　下側縁両面に光沢面　安山岩	57－１
2	L-1	Ⅷ層中			杭１	木製品	杭	(7.9)	3.2	1.9		半裁丸杭、炭化面有り	
3	L-2	Ⅷ層			杭２	木製品	杭	37.2	4.9	3.9		芯持ち丸杭	57－７

第102図　出土遺物

6）Ｘ層水田跡の遺構と遺物

Ｘ層は、Ｘa層～Ｘe層の５層に細分されるが、水田面と考えられるのは、Ｘa層とＸc層の２面である。

Ｘa層水田跡　Ｘ層については周辺部の調査で水田遺構が検出されている土層と対応すると観察された。Ⅸ層下部から徐々に掘り下げ、Ｘa層上面までの検出作業を行ったが、畦畔は検出されなかった。

Ｘa層は、調査区の全面に分布する。Ｘa層を除去する過程で、調査区南西角において北西から南東方向にのびるＸb層とした自然堆積層と観察される灰黄褐色粘土の薄層が検出された。またその下層のＸc層もわずかに高くなっていることが確認された。この状況から、調査区西南角のＸb層とＸc層の高まりは、Ｘa層水田跡に伴う大型畦畔の痕跡の可能性があると判断された。畦畔部分の幅は検出範囲で約70cm・高さ３cm程である。

Ｘc層水田跡　Ｘc層は、調査区南西部では層厚が10～５cmほどあるが、調査区北西角から調査区南壁中央を結ぶラインから東側は北壁側に部分的に分布するだけである。調査区東部でＸc層の分布が部分的である要因としては、Ｘa層水田の耕作の際に、Ｘc層が削平を受けたためと理解される。Ｘc層の残りの良い調査区南西部でも、Ｘa層を除去する過程で、Ｘc層に伴う畦畔は検出されなかった。

Ｘa層及びＸc層を除去する過程で、調査区北西角から調査区南壁中央にかけて北西から南東方向にのびるＸe層の高まりが検出された。Ｘe層はＸa・Ｘc層を明るくした灰オリーブ色の自然堆積層である。幅は上面で180cm前後ある。この高まりについては、Ｘc層水田に伴う畦畔痕跡（擬似畦畔Ｂ）と理解される。規模的に観ると「大畦畔」と呼ばれる水田を大きく区画する畦畔と考えられる。Ｘc層の耕作深度は、この畦畔を境として東西で異なる。東側は比較的浅く、Ｘe層上面からの比高差で３cm前後であり、Ｘe層がなお残存している。これに対し、西側は掘削深度が深く、Ｘe層上面からの比高差が10cm前後であり、Ｘe層は残っておらずＸⅠ層の上部まで掘削されている。

Ｘa層及びＸc層の下層にはＸe層をブロック状に含むＸd層が部分的に分布している。この層については、人為的な攪拌を受けていることから、水田耕作に関係する土層と考えられるが、Ｘd層自体が独立した水田層を構成するものではなく、主にＸc層の耕作土の下部を形成する土層で、起耕されながらも恒常的な耕作土層とならなかった部分と考えられる。Ｘa層・Ｘc層からの出土遺物はない。

6　まとめ

①本調査区は、富沢遺跡の東部の中央付近に位置する。

②基本層のⅡ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅷ・Ｘa・Ｘc層の７層で、水田耕作土層ないし水田跡が検出された。

③Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層水田跡は連続的に形成された水田跡で、ほぼ南北方向を向く比較的幅の広い畦畔が、ほぼ同位置で検出された。前段階の畦畔が意識され、踏襲されていたことが考えられる。

④Ⅷ・Ｘa・Ｘc層水田跡では、北西から南東方向にのびる畦畔が検出された。各畦畔とも大型の畦畔である。

⑤出土遺物としては、Ⅱ層から近世の瓦と陶器・磁器が、Ⅷ層から板状石器が出土した。

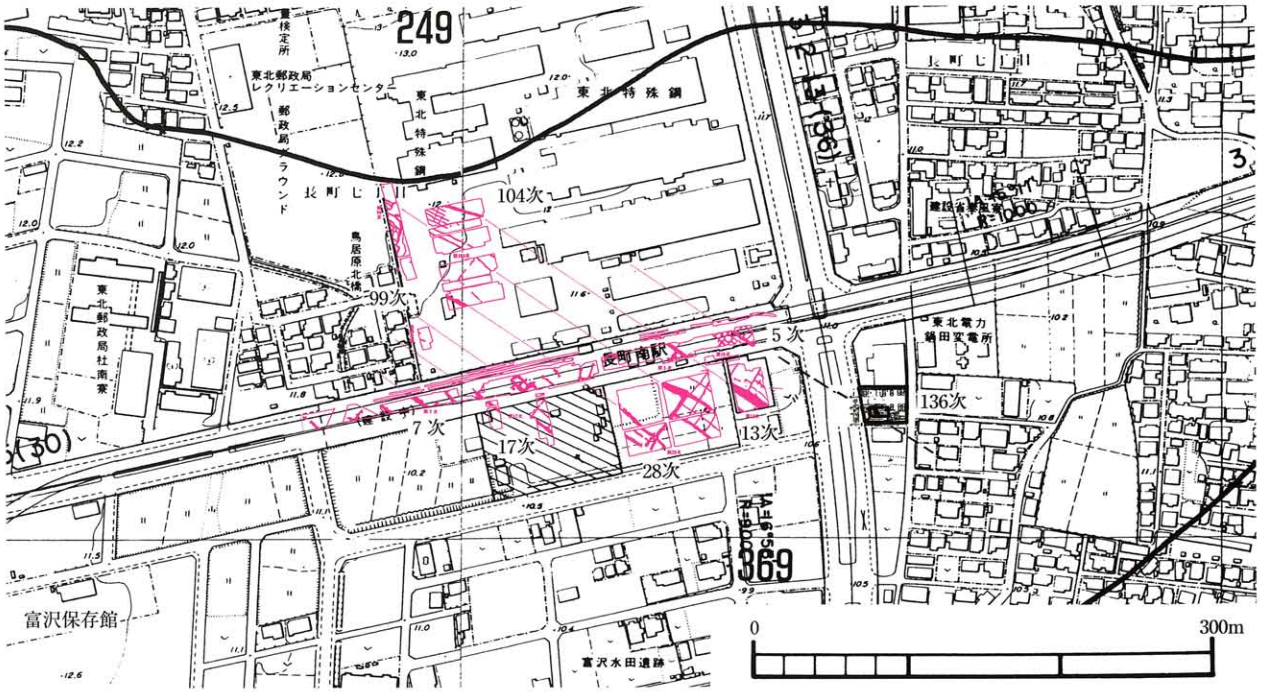
⑥板状石器は、富沢遺跡では弥生時代の土層中から出土することが多く、中在家南遺跡や高田Ｂ遺跡などでも弥生時代の遺構や土層から出土しているので、弥生時代に属する遺物と考えられる。したがって、Ⅷ層水田は弥生時代に位置づけられる。

⑦各水田層の所属時期については、周辺部の調査成果との層序・土壌の特徴・出土遺物等の比較から、主に第28次調査等を参考にして、次表のように整理される。

⑧Ｘc層で検出された大畦畔の方向は、北西から南東方向にのびている。この方向は、第103図のように、富沢遺跡の北西部で20～30mの間隔で検出されている弥生時代中期の畦畔と一致し、仙台市の地下鉄建設に際して行われた第５次調査の7c層で検出された「畦畔２」の延長上に位置すると推定される。

＜表：第136次調査と周辺調査区の土層対応と年代＞　　※アミは水田層

136次	（土層の状況）	（土色）	（土質）	12次	28次	49次 No 4	132次	所属年代（28次調査基準）
Ⅰ	水田耕作土	暗灰色	粘土	1	1	1	Ⅰ	現代
Ⅱ	水田耕作土	灰色	粘土	2	2	2	Ⅱ	近世以降～現代以前
Ⅲ	畦畔痕跡	黒色	粘土	3	3	3 a		近世
Ⅳ	畦畔痕跡	灰オリーブ色	粘土	4	4	4 a	Ⅲ	平安時代（灰白色火山灰降下以降）
Ⅴ	畦畔痕跡	オリーブ黒色	粘土	5 ?	5	5 a		平安時代（灰白色火山灰降下以前）
Ⅵ	互層状	黒色	粘土	6 a	6	6 a	Ⅳa	
Ⅶa	互層	暗灰黄色 黒色	粘土 泥炭質粘土	6 b	7 ・ 8 a ・ 8 b	7 ・ 8 a ・ 8 b	Ⅵb	
Ⅶb	（互層の一部）	黄灰色	粘土				Ⅴ	
Ⅷ	畦畔痕跡	褐灰色	粘土	7	9 a	9 a	Ⅵ	弥生時代中期後葉（十三塚式期）
Ⅸ	互層	灰黄褐色 黒色	粘土 粘土質泥炭	8	9 b ・ 10a	9 b ・ 10a	Ⅶ	
Ⅹa	畦畔痕跡	褐灰色	粘土	9	10b ?		Ⅷ	弥生時代中期中葉～後葉（桝形囲式期～十三塚式期）
Ⅹb	自然堆積	灰黄褐色	粘土		10d ?	10d ?		弥生時代中期中葉～後葉（桝形囲式期～十三塚式期）
Ⅹc	畦畔痕跡	黄灰色	粘土		11a ?	11 ?		弥生時代中期中葉（桝形囲式期）
Ⅹd	耕作土下部	暗灰黄色	粘土					
Ⅹe	自然堆積	灰オリーブ色	粘土			12b ?		
ⅠⅩ	互層	灰オリーブ色 黒色	泥炭質粘土 泥炭質粘土	12	13	13		



第103図　富沢遺跡北東部の桝形囲式期の水田跡

＜参考文献＞

仙台市教育委員会（1998）：「富沢遺跡・泉崎遺跡　－仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅰ－」仙台市文化財調査報告書第126集

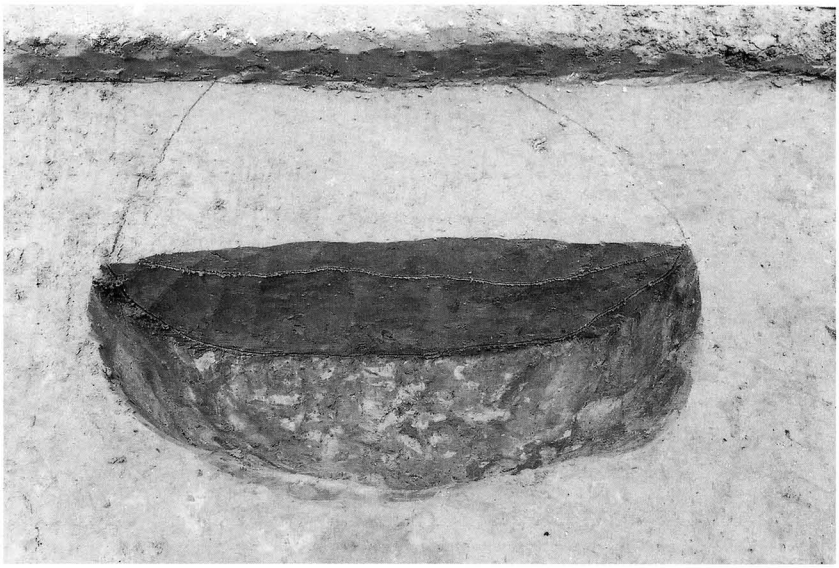
仙台市教育委員会（1984）：「〔1〕富沢水田遺跡」『仙台平野の遺跡群Ⅲ』仙台市文化財調査報告書第65集

仙台市教育委員会（1990）：「富沢遺跡第49次」『富沢遺跡第49次・東光寺遺跡第3次・青葉山A遺跡』仙台市文化財調査報告書第142集

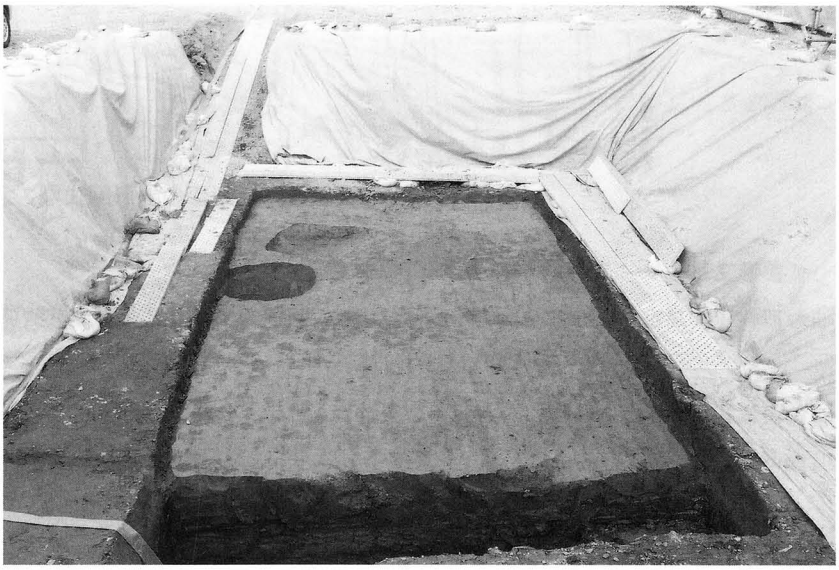
仙台市教育委員会（2004）：「富沢遺跡第104次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第235集

仙台市教育委員会（2005）：「Ⅹ　富沢遺跡第132次発掘調査報告書」『山田本町遺跡他』仙台市文化財調査報告書第287集

1　基本層序（西壁断面）

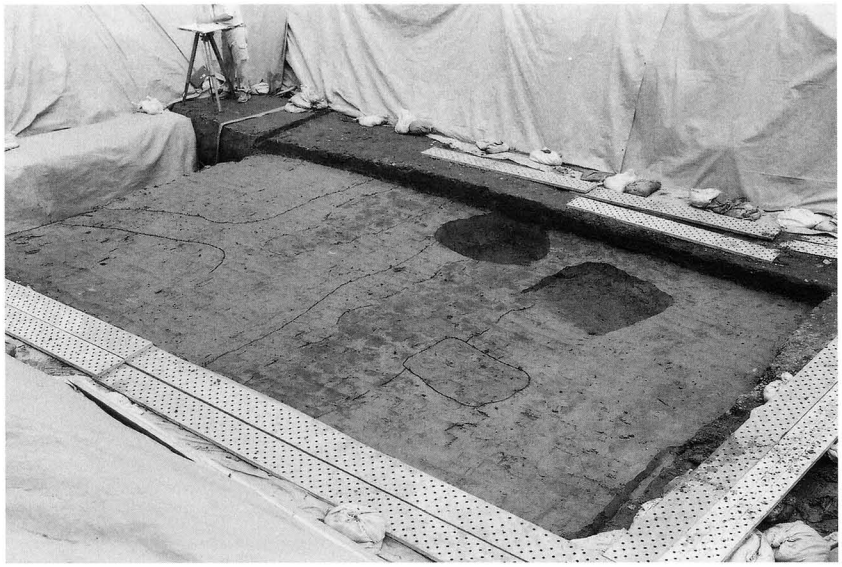


2　II層検出SK１土坑（南から）

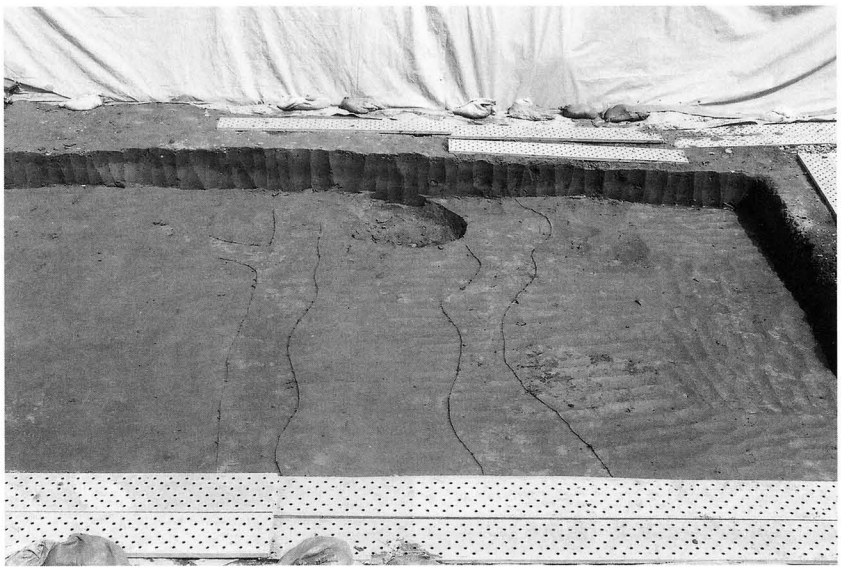


3　Ⅳ層上面検出状況（西から）

図版50　基本層とII～Ⅳ層の状況



1　Ⅲ～Ⅳ層の畦畔痕跡（南東から）



2　Ⅴ層水田跡の畦畔痕跡（南から）

3　Ⅵ層上面の状況（南西から）

図版51　Ⅲ～Ⅵ層の状況

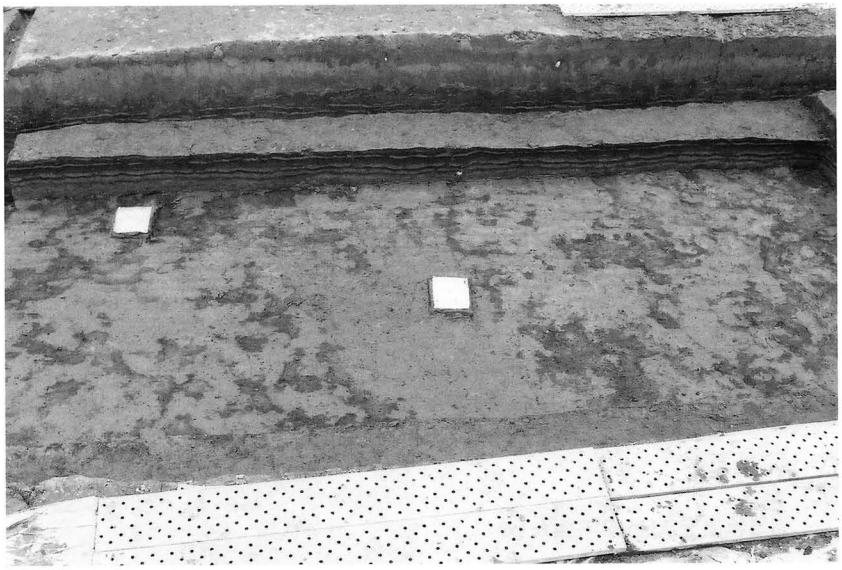
1　Ⅶ層下部検出状況（西から）

2　Ⅷ層上面検出状況（西から）

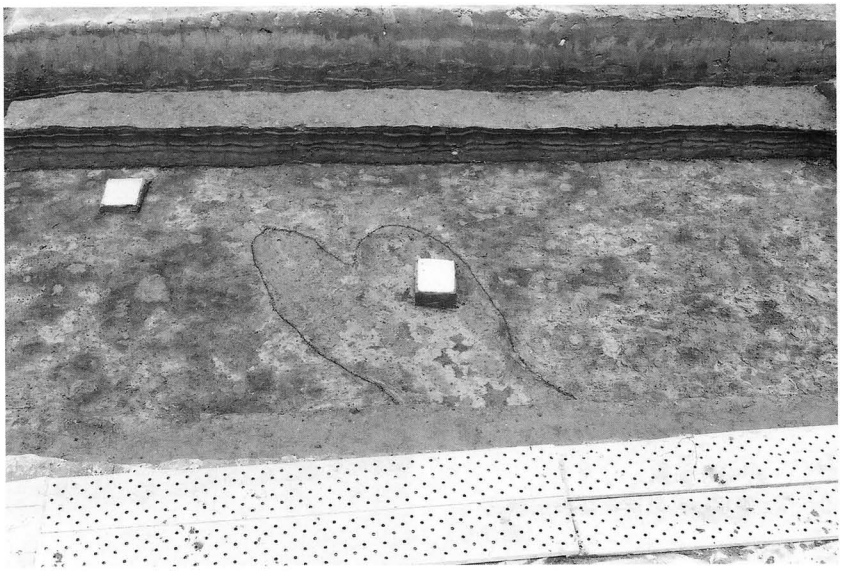
3　Ⅷ層中の板状石器出土状況
（北東から）

図版52　Ⅶ～Ⅷ層上部調査状況

1　Ⅷ層水田跡畦畔痕跡（南から）

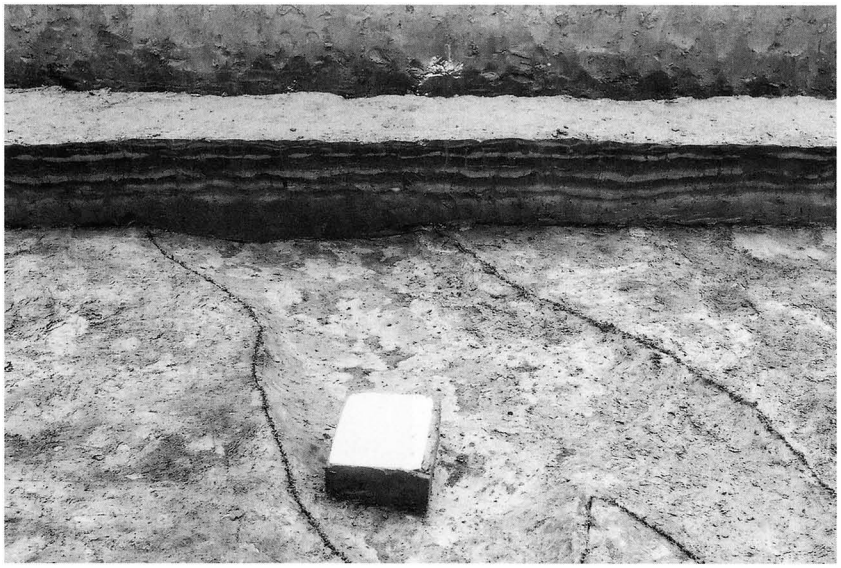


2　Ⅷ層下部からⅨ層上面検出状況（南から）



3　Ⅷ層畦畔下部の落ち込み（南から）

図版53　Ⅷ層水田跡調査状況



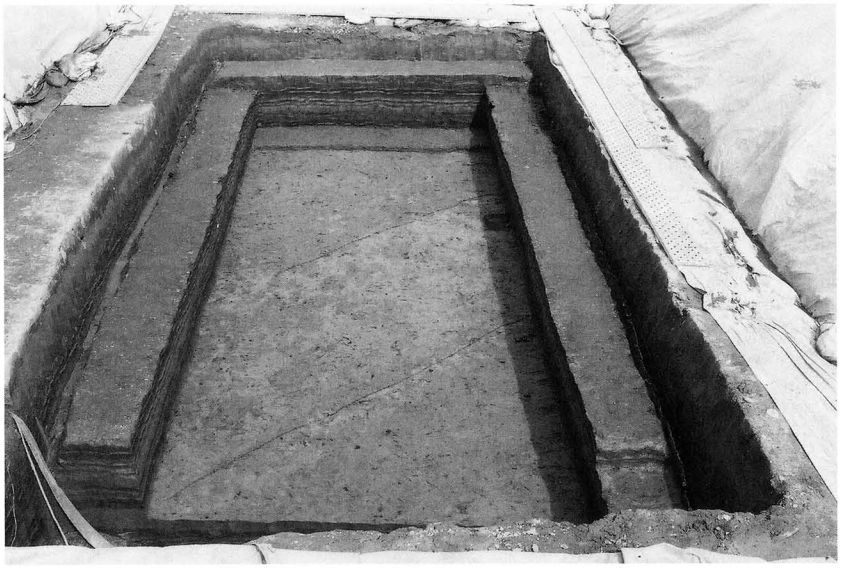
1　Ⅷ層畦畔下の落ち込み断面
（北から）

2　Ⅷ層検出土坑No. 2（西から）

3　Ⅹa層水田跡畦畔痕跡検出状況
（西から）

図版54　Ⅷ～Ⅹ層水田跡調査状況

1　Ｘa層水田跡畦畔痕跡（北西から）

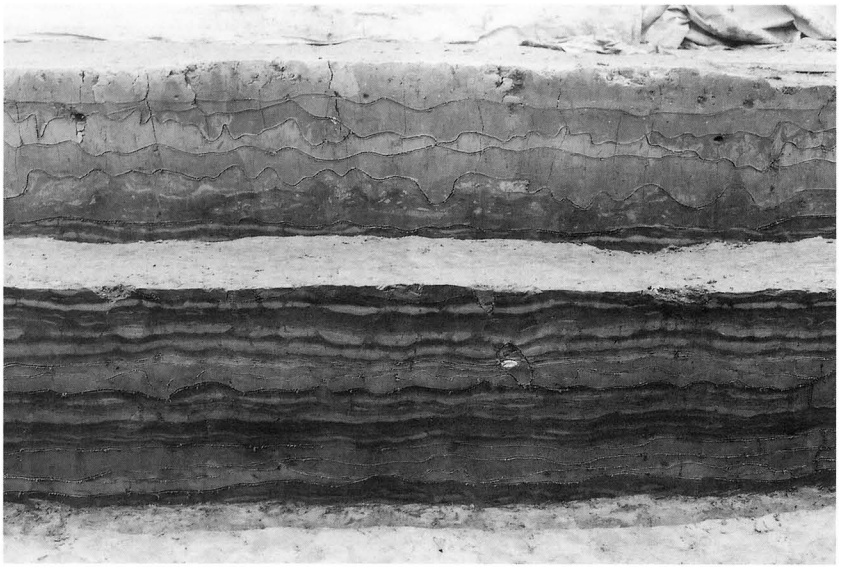


2　Ｘc層水田跡畦畔痕跡検出状況（西から）

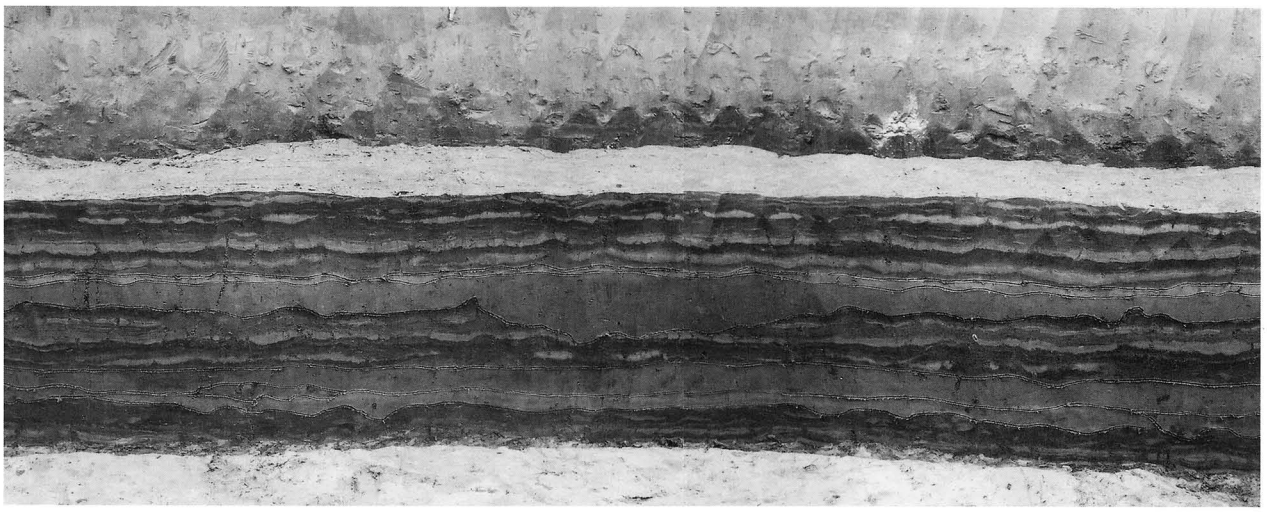
3　Ｘc層水田跡畦畔痕跡（西から）

図版55　Ｘ層水田跡の調査状況

1　Xc層水田跡畦畔痕跡（南から）

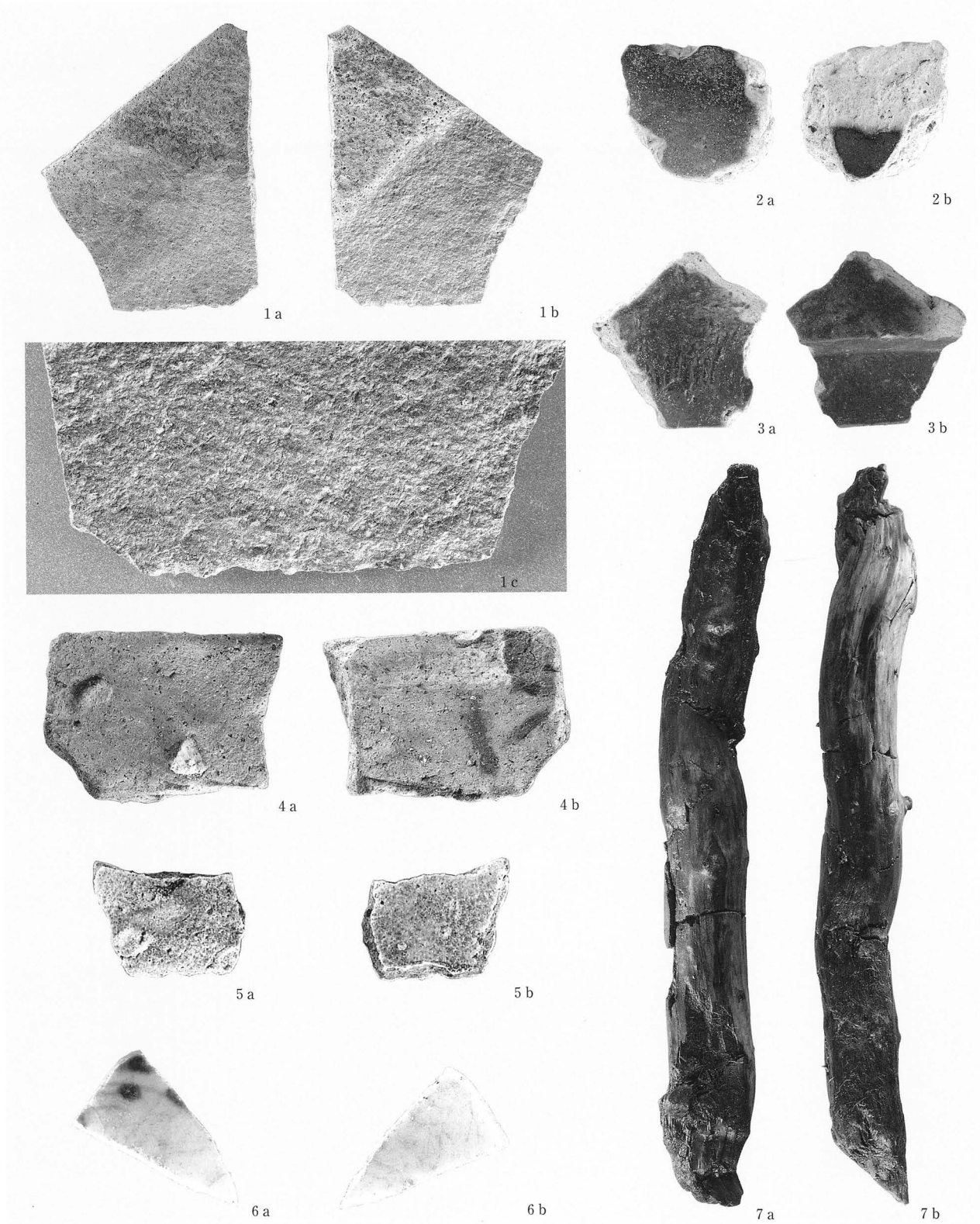


2　北壁中央上層断面（南から）



3　南壁上層断面

図版56　X層水田と上層断面



1	石器	板状石器	K－1	（Ⅷ層　第102図１）	5	陶器	皿	I－1	（Ⅱ層）
2	瓦	平瓦	G－1	（Ⅱ層）	6	磁器	碗	J－1	（Ⅱ層）
3	瓦	丸瓦	F－1	（Ⅱ層）	7	杭	丸杭	L－2	（Ⅷ層　第102図２）
4	土師質土器	甕？	I－1	（Ⅱ層）					

図版57　富沢遺跡第136次調査出土遺物

XVIII　西上野原遺跡発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　西上野原遺跡（宮城県遺跡番号19027）
調 査 地 点　　仙台市泉区福岡字大前通10－1・81、字下野沢１－１
調 査 期 間　　平成17年７月20日
調査対象面積　　100㎡
調 査 面 積　　34㎡
調 査 原 因　　送水ポンプ場建築及び送水管埋設工事
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　　主査　工藤哲司　　文化財教諭　赤岡光騎

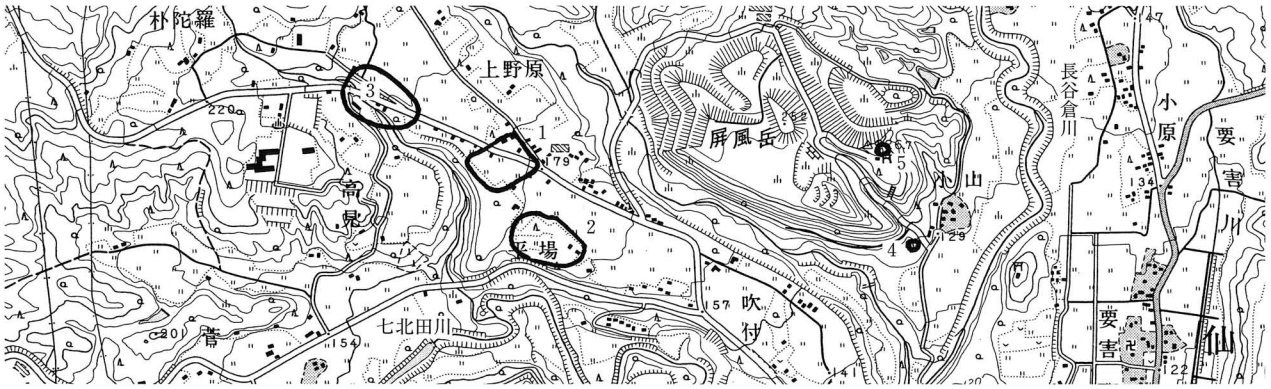
2　調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成17年４月28日付けで、仙台市水道事業管理者　佐藤孝一氏から埋蔵文化財の発掘通知が提出されたので、確認調査を実施し、そのうえで必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成17年７月20日に実施した。ポンプ場建築予定地は３ｍ×９ｍのトレンチを設定して調査を行なったが、遺構・遺物は検出されなかった。送水管埋設工事（進入路）予定地には、2.5ｍ×3.5ｍのトレンチを設定して調査を行なったところ、土坑が１基検出されたため、この遺構について調査を実施した。

3　遺跡の位置と環境

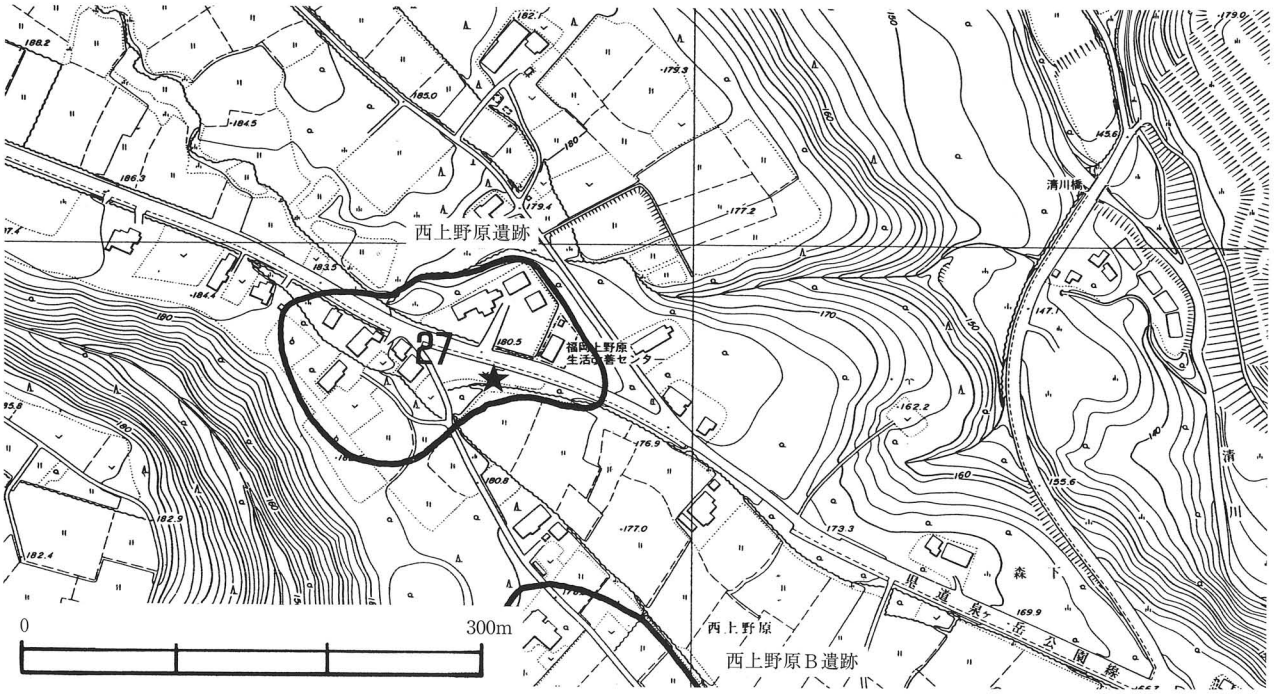
西上野原遺跡は、仙台市北西部の丘陵地帯に位置する。付近は、標高1175ｍの泉ケ岳を源とする七北田川・清川・長谷倉川などの河川が形成した河岸段丘面が平坦な谷状を成している。河岸段丘面は、北西から南東方向に緩やかに傾斜して下がっている。標高は180ｍ前後である。

丘陵部とあって、周辺には遺跡も少ない。近くには、西上野原Ｂ遺跡・泥畑遺跡などの縄文時代の遺物散布地と、鷲倉神社周辺に中世の板碑群があるだけである。

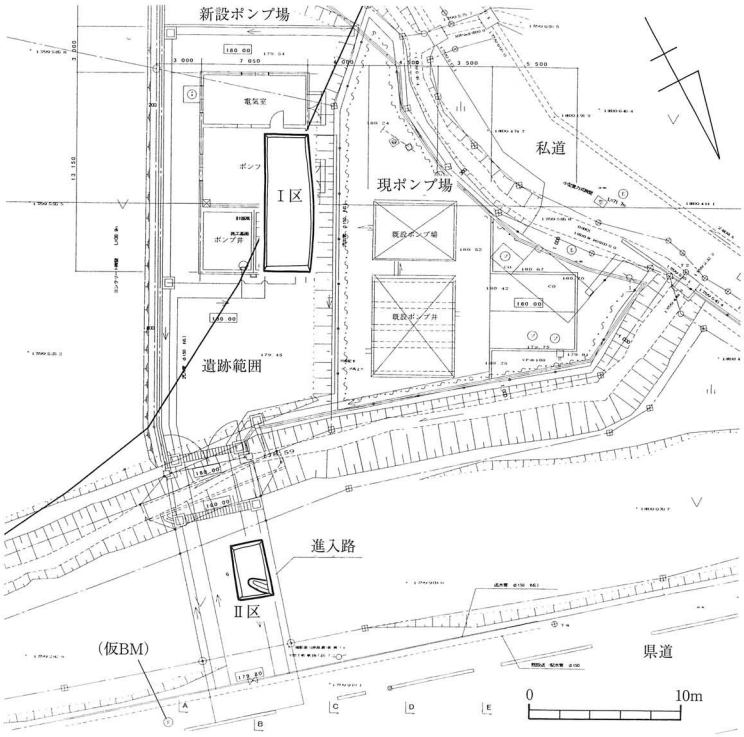


番号	遺跡名	種　別	立　地	時　　代	番号	遺跡名	種　別	立　地	時　　代
1	西上野原遺跡	散布地	段丘	縄文（早・前）	4	小山B遺跡	板碑	丘陵	中世
2	西上野原B遺跡	散布地	段丘	縄文（早・前）	5	小山A遺跡	板碑	丘陵	中世
3	泥畑遺跡	散布地	段丘	縄文					

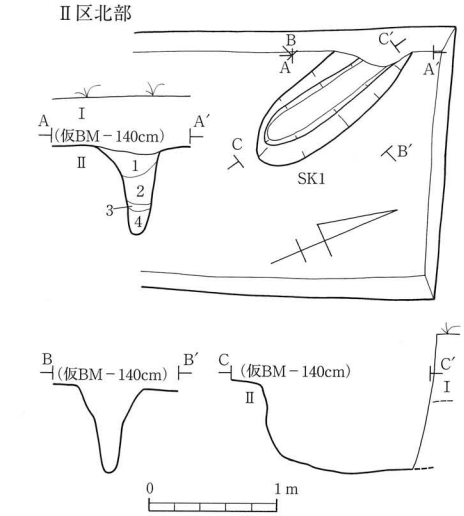
第104図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第105図　調査地点の位置



第106図　調査区と遺構配置



SK 1

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR2/3　暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを少量含む。
2	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	旧表土層からの落ち込みと観察される。
3	10YR6/8　明黄褐色	粘土	壁崩落土
4	10YR3/4　褐色	シルト質粘土	明黄褐色土粒を霜降り状に含む。

第107図　SK1土坑実測図

4　基本層序

ポンプ場建築予定地（Ⅰ区）は、Ⅰ層（表土層）がにぶい黄褐色（10YR4/3）のシルト質粘土層で、層厚は約20cmである。水田耕作土層である。Ⅱ層は明黄褐色（10YR6/6）の粘土層で、大小の礫をまばらに含んでいる。この付近の地山層を形成している。

送水管埋設工事予定地（Ⅱ区）は、Ⅰ層（表土層）が、暗褐色（10YR3/3）のシルト層で、層厚は40cm前後で

ある。畑の耕作土層で、礫を少量含む。Ⅱ層は明黄褐色（10YR6/8）の粘土層で、大小の礫を多く含んでいる。この付近の地山層を形成している。

5　発見遺構と出土遺物

送水管埋設工事予定地（Ⅱ区）のⅡ層上面で土坑が１基検出された。

１）土坑

SK１土坑　Ⅱ区北東角で検出された。一部は調査区の外にのびる。平面形は長い楕円形を呈する。検出部で長軸147cm・短軸53cmを測る。深さは70cmで、横断面形は漏斗状に下半部が狭くなっており、底面幅は約10cmである。縦断面形は袋状に下半部が広がっており、上部がわずかに迫り出している。堆積土は４層に分けられるが、壁崩落土や旧表土からの流入土からなる自然堆積土層と観察される。この遺構については、その形状から「落とし穴」と考えられる。

２）出土遺物

今回の調査では、表土層及び遺構堆積土からの出土遺物はなかった。

6　まとめ

①今回、西上野原遺跡での初めての発掘調査が行われた。

②遺物は出土しなかったが、「落とし穴」と考えられる土坑が１基検出された。

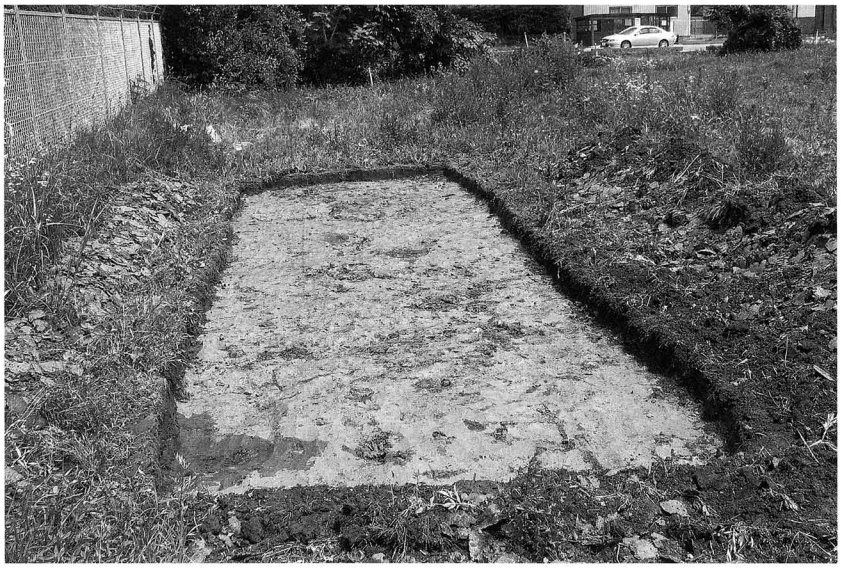
③落とし穴の年代は、出土遺物が無いために不明であるが、市内で同様の形態の遺構が検出されている川添東遺跡・富沢遺跡・山田本町遺跡などの例から、縄文時代の遺構と推定される。

＜参考文献＞

仙台市教育委員会（1988）：『富沢遺跡　第24次調査　富沢中学校地区発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第113集

仙台市教育委員会（1997）：「第４部　川添東遺跡」『相ノ原・大貝中・川添東遺跡』仙台市文化財調査報告書第217集

仙台市教育委員会（2005）：「Ⅰ　山田上ノ台塚・山田本町遺跡発掘調査報告書」『山田本町遺跡他』仙台市文化財調査報告書第287集



1　Ⅰ区の状況

2　Ⅱ区全景

3　SK１土坑

図版58　西上野原遺跡調査状況

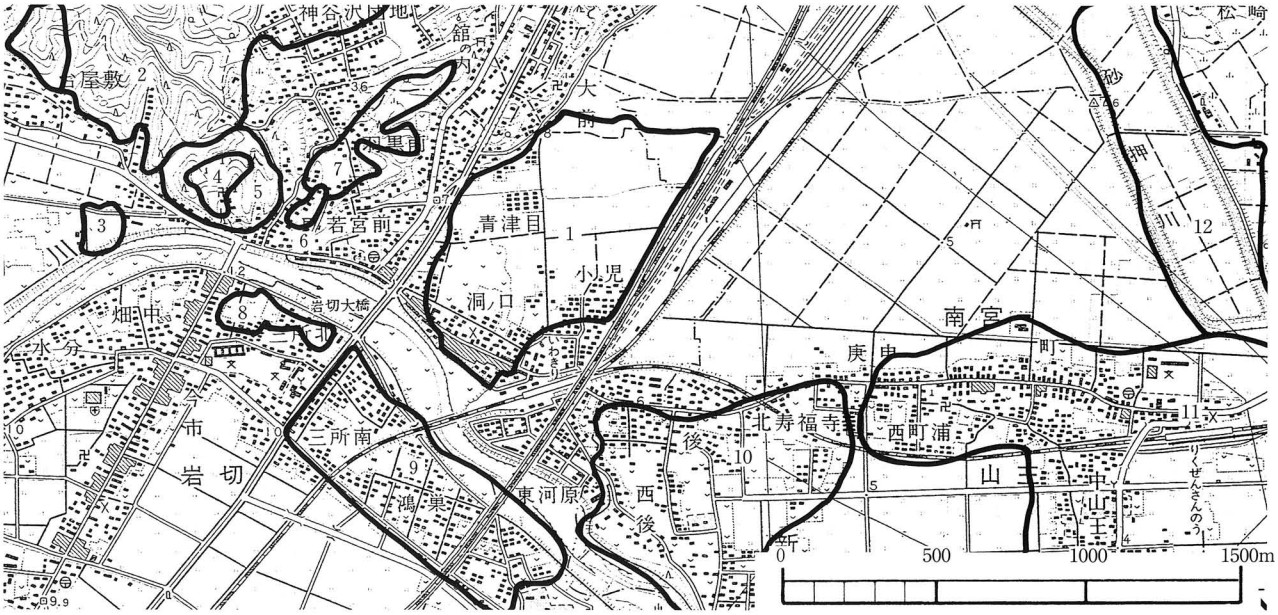
XIX　洞ノ口遺跡第12次発掘調査報告書

1．調査要項

遺　跡　名　　洞ノ口遺跡（宮城県遺跡番号01372）
調 査 地 点　　仙台市宮城野区岩切字洞ノ口164－２、164－４
調 査 期 間　　平成17年６月13日～６月17日
調査対象面積　　77㎡
調 査 面 積　　26㎡
調 査 原 因　　個人住宅建築
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　　文化財教諭　　浅野克樹　　三塚博之

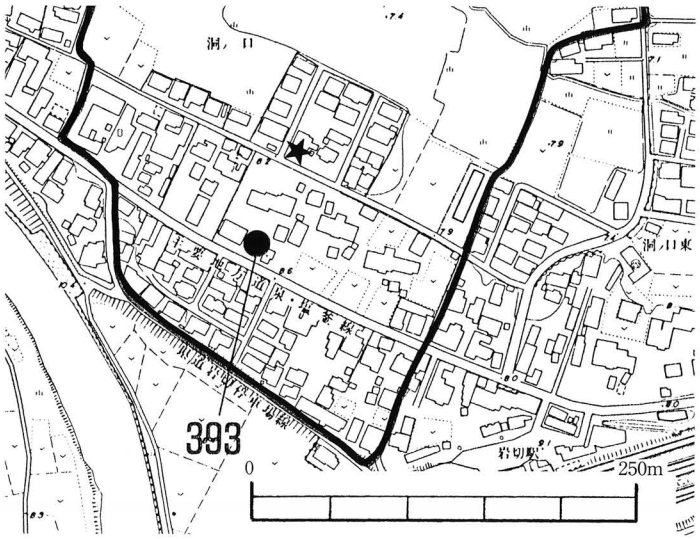
2．調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成17年３月１日付けで、地権者である千葉洋子氏より木造２階建て個人住宅建築のため協議書が提出されたことにより実施した。建物建築予定部分に東西7.5m・南北3.5mの調査区を設定し、重機により盛土部分からⅡ層まで掘り下げ、Ⅲ層上面（標高約7.8m）で人力による遺構検出作業を行った。Ⅲ層上面の調査終了後、Ⅳ層上面で遺構検出作業を行ったが、湧水が激しく調査が困難であったため、西半の遺構調査のみを行った。湧水はほぼⅣ層上面まで湧き、調査区西半に比べ東半の方が湧水による影響を受けた。調査区南壁で確認すると、Ⅱ層が東に向けて低くなっており、堆積の違いが影響しているものと考えられる。

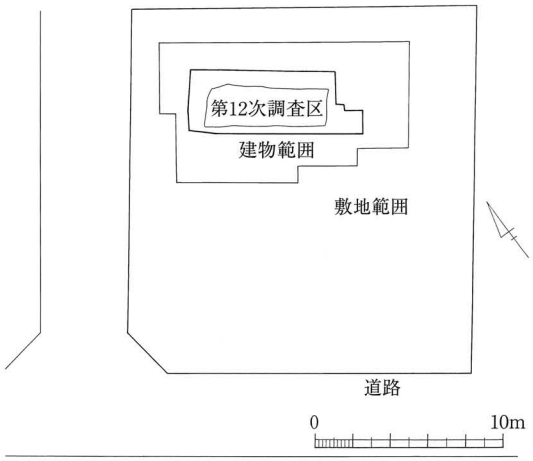


番号	遺跡名	種　別	立　地	時　　代	番号	遺跡名	種　別	立　地	時　　代
1	洞ノ口遺跡	城館	自然堤防	古墳・古代～近世	7	羽黒前遺跡	散布地	丘陵	中世・近世
2	岩切城跡	城館	丘陵	中世	8	今市遺跡	集落	自然堤防	古代・中世・近世
3	新宿囲遺跡	散布地	自然堤防	古代	9	鴻ノ巣遺跡	集落	自然堤防	古墳・古代・中世
4	東光寺板碑群	板碑	丘陵	中世	10	新田遺跡	集落	自然堤防	古墳・古代・中世
5	東光寺遺跡	城館	丘陵	中世	11	山王遺跡	集落	自然堤防	弥生・古墳・古代
6	若宮前遺跡	散布地	丘陵	縄文・古代～近世	12	市川橋遺跡	官衙関連他	自然堤防他	縄文～中世

第108図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第109図　調査地点の位置



第110図　調査区配置図

3．遺跡の位置と環境

洞ノ口遺跡は、仙台市北東部の利府町・多賀城市と接する地区でＪＲ岩切駅と県道仙台松島線（利府街道）の間にあたり七北田川北岸の自然堤防とその北側の後背湿地に立地する。本遺跡周辺には、数多くの遺跡が分布しており、そのほとんどは七北田川両岸の丘陵面と自然堤防上に集中している。国指定史跡岩切城跡、東光寺遺跡、鴻ノ巣遺跡などの中世の遺跡や、東方には陸奥国府であった多賀城がある。そのほか、岩切から多賀城にかけては新田遺跡、山王遺跡、市川橋遺跡などの古代から中世にかけての遺跡が分布している。

本遺跡は、土地区画整理に先立って、平成４年より調査が開始され、これまでの調査で、中世の堀、土塁、土坑、溝、城館成立前の建物跡、井戸、竪穴遺構、溝などが発見されている。中世の遺構は城館成立前と後の２時期に大別される。前者は13～15世紀前半頃の屋敷跡と考えられ、後者は土塁を伴う城館として改変されたもので、15世紀後半～16世紀後半の年代が推測されている。これらの遺構の他にも平安から江戸時代の水田跡や近世墓なども発見されている。

4．基本層序

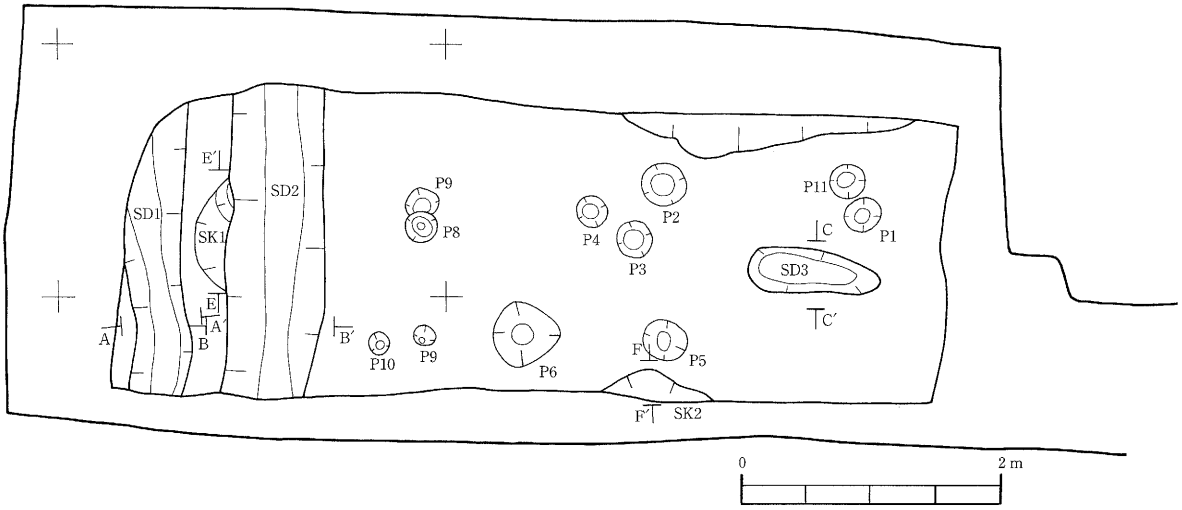
Ⅰ層：褐色砂質シルト	にぶい黄褐色粘土質シルトのブロックを含む。下面にゆるやかな乱れが見られる。
Ⅱ層：暗褐色シルト質粘土	全体に褐色土の小ブロックを含む。南壁でのみ確認している。東半で厚くなる。
Ⅲa層：褐色粘土	上面に暗褐色土の小ブロックを含む。
Ⅲb層：にぶい黄褐色粘土	黄褐色粘土のブロックを含む。酸化鉄粒を少量含む。
Ⅲc層：黒褐色粘土	全体に炭化物粒・焼土粒を少量含む。　下面にゆるやかな乱れが見られる。
Ⅳ層：にぶい黄褐色砂	全体に酸化鉄粒を多量に含む。

5．Ⅲ層発見遺構と出土遺物

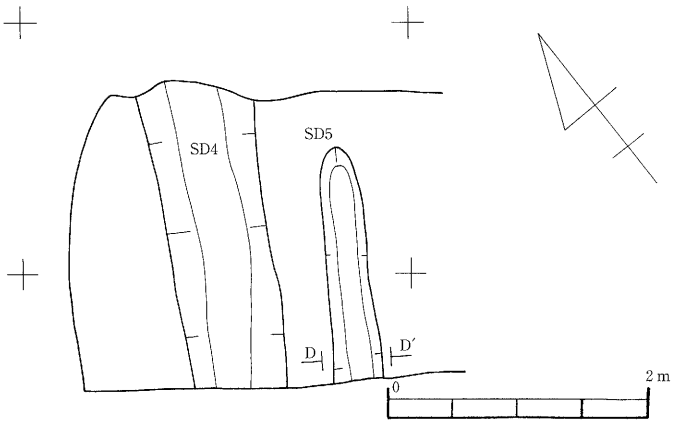
Ⅲ層上面では溝跡３条、土坑３基、ピット11個を確認した。

１）溝跡

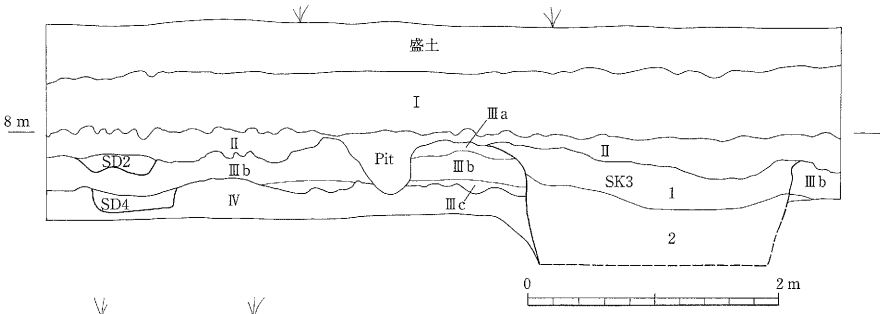
SD１溝跡　調査区西端で確認した。検出部の全長は2.1mで、南北方向に延びている。幅は上面40cm・底面20cmである。深さは16cmで、断面形はゆるやかなU字形を呈する。堆積土は黒褐色粘土の１層である。遺物は出土していない。

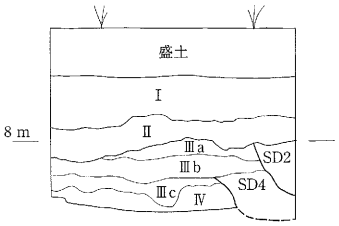


第111図　Ⅲ層遺構配置図



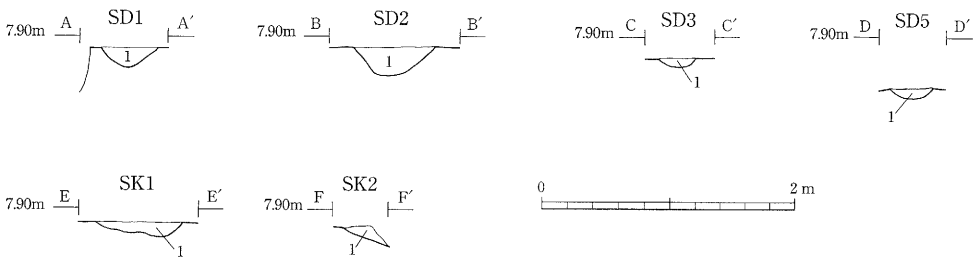
第112図　Ⅳ層遺構配置図





層位	土　　色	土質	備　　考
Ⅰ	10YR4/4　褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色粘土質シルトのブロックを含む 下面にゆるやかな乱れが見られる
Ⅱ	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	全体に褐色粘土の小ブロックを含む 南壁でのみ確認　東半で厚くなる
Ⅲa	10YR4/6　褐色	粘土	上面に暗褐色シルト粘土の小ブロックを含む
Ⅲb	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	黄褐色粘土のブロックを含む　酸化鉄粒を含む
Ⅲc	10YR3/1　黒褐色	粘土	全体に炭化物粒・焼土粒を少量含む 下面にゆるやかな乱れが見られる
Ⅳ	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂	全体に酸化鉄粒を多量に含む

第113図　北・南壁土層断面図



SD 1

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR3/2　黒褐色	粘土	にぶい黄褐色シルトの小ブロックを含む 炭化物粒・焼土粒を含む

SD 2

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR3/2　黒褐色	粘土	にぶい黄褐色シルトの小ブロックを含む 炭化物粒・焼土粒を含む

SD 3

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR3/2　黒褐色	粘土	暗褐色粘土の小ブロックを含む 炭化物粒を含む

SD 4

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	Ⅳ層の大ブロックを含む 全体に酸化鉄粒を含む

SD 5

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR3/2　黒褐色	粘土	下面にⅣ層の土を巻き込んでいる

SK 1

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR3/1　黒褐色	粘土	焼土粒を少量含む

SK 2

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR3/2　黒褐色	粘土	暗褐色粘土の小ブロックを含む 炭化物粒を含む

SK 3

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR2/3　黒褐色	シルト質粘土	Ⅳ層の中ブロックを含む
2	10YR2/3　黒褐色	シルト質粘土	Ⅳ層の中ブロックを含む　下層グライ化

層No.	土　色	土質	備　考
P 1	10YR3/2　黒褐色	粘土	暗褐色粘土の小ブロック、炭化物、焼土粒含む
P 2	10YR3/2　黒褐色	粘土	暗褐色粘土の小ブロック、炭化物粒を含む
P 3	10YR3/2　黒褐色	粘土	暗褐色粘土の小ブロック、炭化物粒を含む
P 4	10YR4/4　褐色	シルト	黒褐色シルトの小ブロック、炭化物粒を含む
P 5	10YR3/2　黒褐色	粘土	暗褐色粘土の小ブロック、炭化物粒を含む
P 6	10YR3/2　黒褐色	粘土	暗褐色粘土の小ブロック、炭化物粒を含む
P 7	10YR3/2　黒褐色	粘土	にぶい黄褐色シルトの小ブロック、焼土粒含む
P 8	10YR3/2　黒褐色	粘土	褐色シルトの小ブロックを含む
P 9	10YR3/2　黒褐色	粘土	暗褐色粘土の小ブロック、炭化物粒を含む
P10	10YR3/2　黒褐色	粘土	暗褐色粘土の小ブロック、炭化物粒を含む
P11	10YR3/2　黒褐色	粘土	暗褐色粘土の小ブロック、炭化物粒を含む

第114図　遺構断面図

SD 2 溝跡　調査区西側で確認した。検出部の全長は2.3mで、南北方向に延びている。幅は上面80cm・底面23cmである。深さは20cmで、断面形はゆるやかなU字形を呈する。堆積土は黒褐色粘土で１層である。磁器片６点、土師器片１点が出土している。

SD 3 溝跡　調査区東側で確認した。検出部の全長は１mで、南北方向に延びている。幅は上面33cm・底面20cmである。深さは7cmで、断面形はゆるやかなU字形を呈する。堆積土は黒褐色粘土で１層である。遺物は出土していない。

２）土坑

SK 1 土坑　調査区西側で確認した。検出部で長さ90cm・幅25cm、深さ20cmを測る。大半をSD２溝跡に切られているため不明であるが、平面形は円形を呈するものと思われる。断面形はゆるやかなU字形を呈する。堆積土は、黒褐色粘土で１層である。遺物は出土していない。

SK 2 土坑　調査区南端中央で確認した。検出部で長さ90cm・幅25cm、深さ20cmを測る。遺構の大半が調査区外に延びているため、平面形は不明である。堆積土は、黒褐色粘土で1層である。遺物は出土していない。

SK 3 土坑　調査区北東部で南半部を確認した。遺構の北半が調査区外に延びているため不明であるが、平面形は方形もしくは長方形を呈すると思われる。検出部で長さ220cm、深さは１m以上ある。堆積土は２層あり、１層は黒褐色シルト質粘土で基本層Ⅳ層の中ブロックを含む。２層は黒褐色シルト質粘土で下層はグライ化しており、基本層Ⅳ層の大ブロックを大量に含む。人為的に埋め戻したものと見られる。遺物は土師器片２点、磁器片１点が出土している。

3）ピット

ピットは11個検出した。堆積土はすべて１層で、Ｐ４以外はすべて黒褐色粘土である。Ｐ４のみ褐色シルトである。また、Ｐ７、８以外のすべてのピットの堆積土に炭化物粒が見られた。遺物は出土していない。

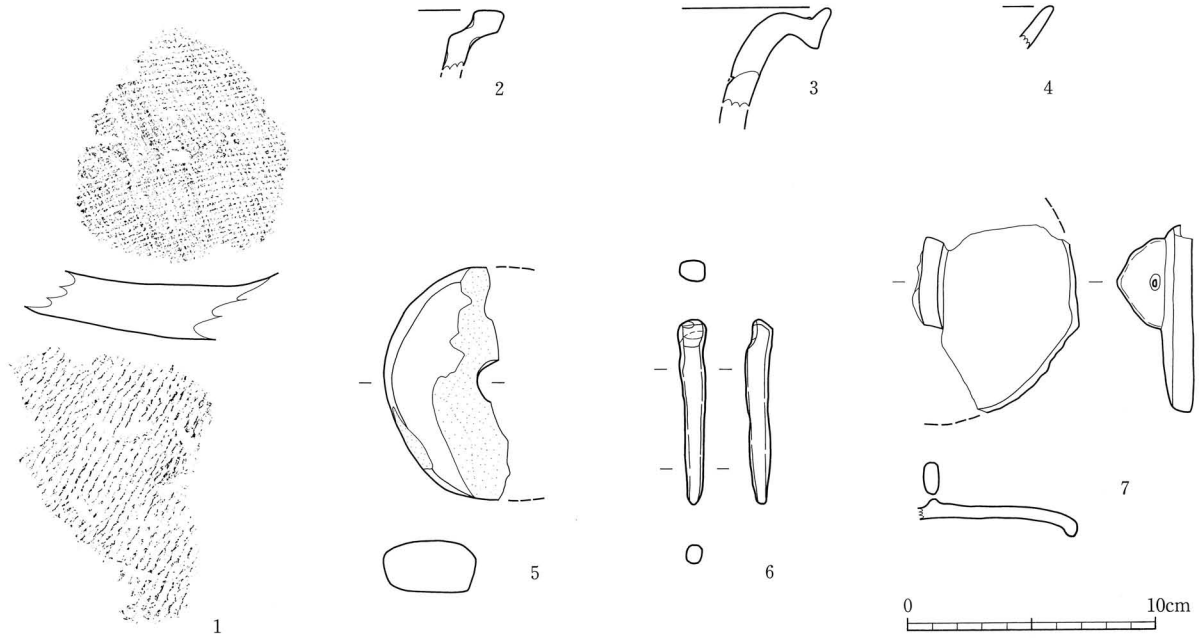
6．Ⅳ層発見遺構と出土遺物

Ⅳ層上面では西半で溝跡２条を確認した。

1）溝跡

SD４溝跡　調査区西端で確認した。検出部の全長は2.5mで、南北方向に延びている。幅は上面80cm・底面40cmである。深さは50cmで、断面形は逆台形を呈する。堆積土は、灰黄褐色粘土で1層である。土師器片が１点出土している。

SD５溝跡　調査区西側で確認した。検出部の全長は1.9mで、南北方向に延びている。幅は上面35cm・底面７cmである。深さは８cmで、断面形はゆるやかなU字形を呈する。下面に掘削具痕が見られる。SD５溝跡の東側にも同様の溝状のプランが数条見られ、小溝状遺構の可能性を考慮し精査したが、湧水が激しく確認することはできなかった。堆積土は、黒褐色粘土で１層である。遺物は出土していない。



図中番号	登録番号	出土地点 基本層	遺構名	遺構層	取上No.	分類 種別	器種	法量 器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重	特徴・備考（調整・素材・産地・時期・分類）	写真図版
1	G－1	Ⅱ層				瓦	平瓦			2.2		凹面：布目痕　凸面：縄叩目	59－1
2	I－1	Ⅲ層				陶器	盤（深皿）					灰釉　古瀬戸　14C中頃	59－2
3	I－2		SD２	１層		陶器	壺					受口状口縁　常滑　13C後半	59－3
4	I－3		SK３	２層		土師質土器	皿					内面：ロクロ調整　外面：ロクロ調整	59－4
5	K－1	Ⅱ層				石製品	有孔円盤	9.4	3.7	2.1	125	緑泥石片岩	59－6
6	N－1	Ⅲ層				金属製品	釘	7.4	1.0	0.8			59－5
7	N－2	Ⅲ層				金属製品	蓋	3.0	(11.5)			つまみ幅3.6　厚0.7	59－7

第115図　出土遺物

7．まとめ

①今回の調査区は、洞ノ口遺跡の南側中央付近に位置する。当該地の西15mの地点では、平成13年にも確認調査が行われ古代・中世・戦国時代のものと思われる遺構が確認されている。

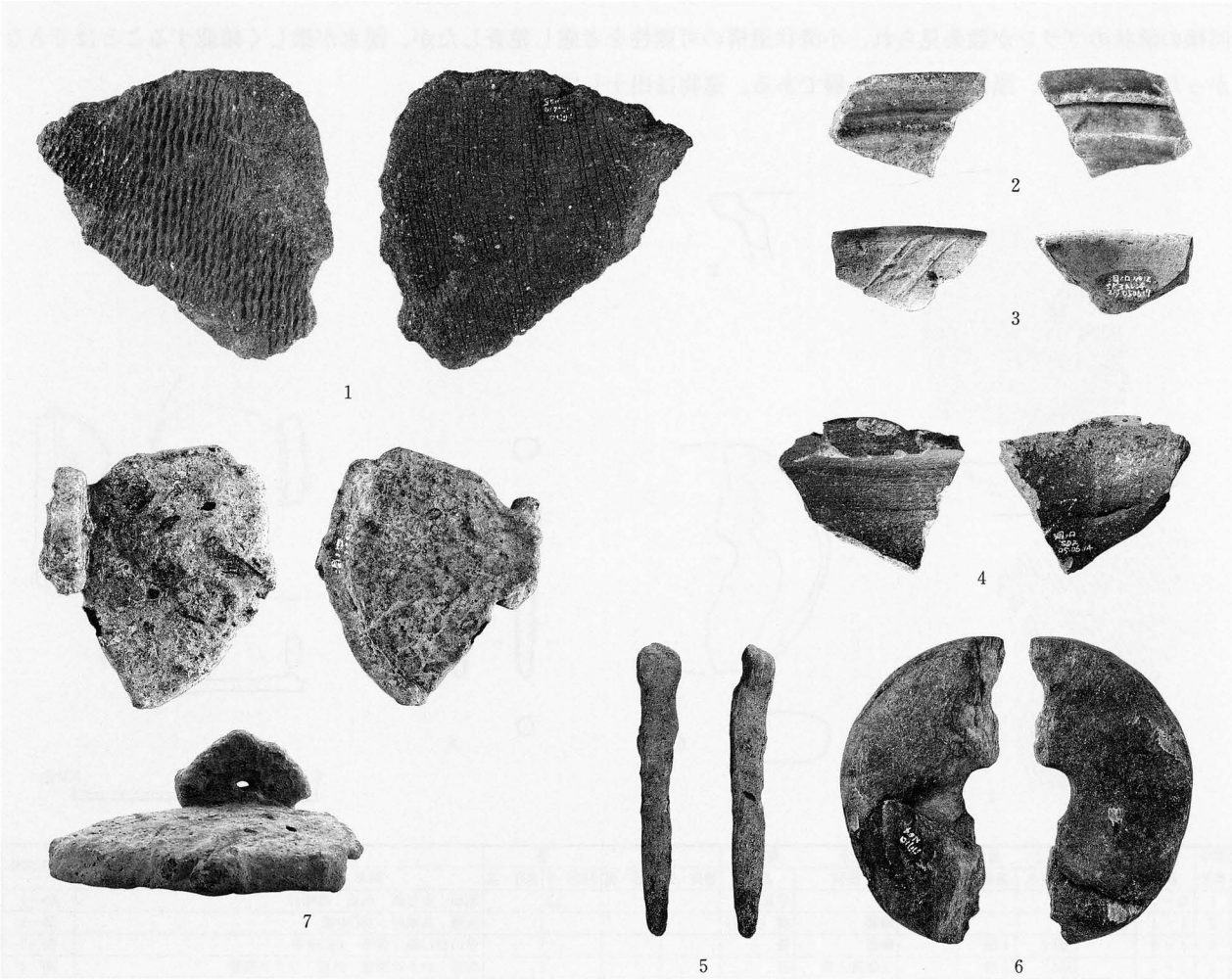
②今調査の結果、Ⅲ層上面で溝跡３条・土坑３基・ピット11個、Ⅳ層上面で溝跡２条を確認した。出土遺物や以前の近隣での調査結果と比較すると、中世の遺構と考えられる。

＜参考・引用文献＞

篠原信彦・佐藤洋・主浜光朗・吉田和正・村上秀樹（2001）「洞ノ口遺跡第３次発掘調査報告書」　仙台市文化財調査報告書第253集

吉岡・平間（2001）「洞ノ口遺跡第６次発掘調査報告書」　仙台市文化財調査報告書第253集

吉岡恭平・吉田和正（2002）「洞ノ口遺跡第８次発掘調査報告書」　仙台市文化財調査報告書第261集

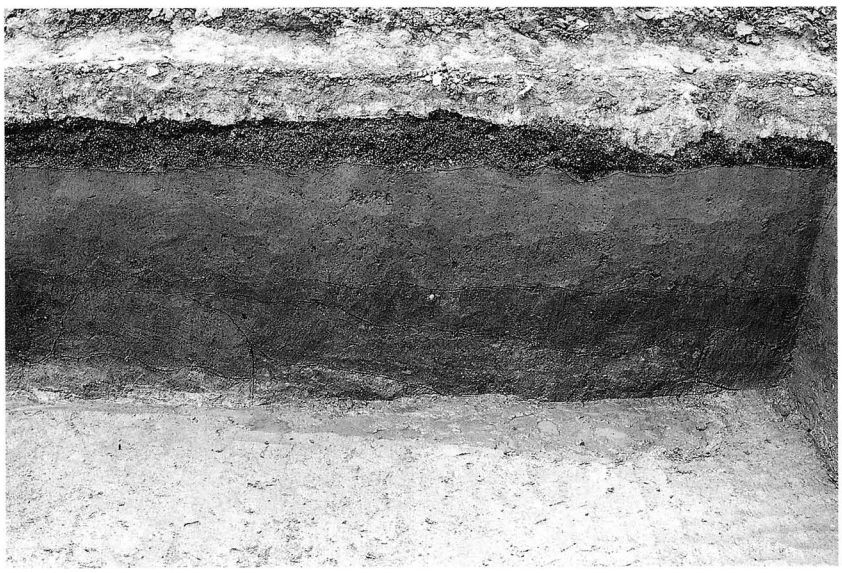


1	瓦	平瓦	G－1	Ⅱ層		（第115図１）	5	鉄製品	釘	N－1	Ⅲ層（第115図６）
2	陶器	盤	I－1	Ⅲ層		（第115図２）	6	石製品	有孔円盤	K－1	Ⅱ層（第115図５）
3	土師質土器	皿	I－3	SK３	２層	（第115図４）	7	鉄製品	蓋	N－2	Ⅲ層（第115図７）
4	陶器	壺	I－2	SD２	１層	（第115図３）					

図版59　洞ノ口遺跡第12次調査出土遺物

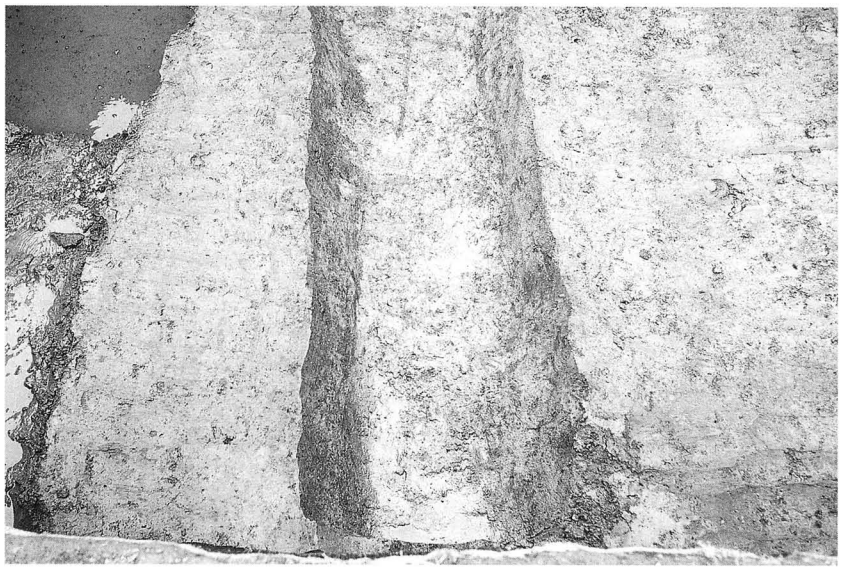
1　遺構検出状況（東より）

2　ピット群完掘状況（南西より）



3　北壁東部断面（南より）

図版60　遺構検出状況・ピット群・Ⅲ層全景



1　SD4溝跡完掘状況（南より）

2　北壁西部断面（南より）

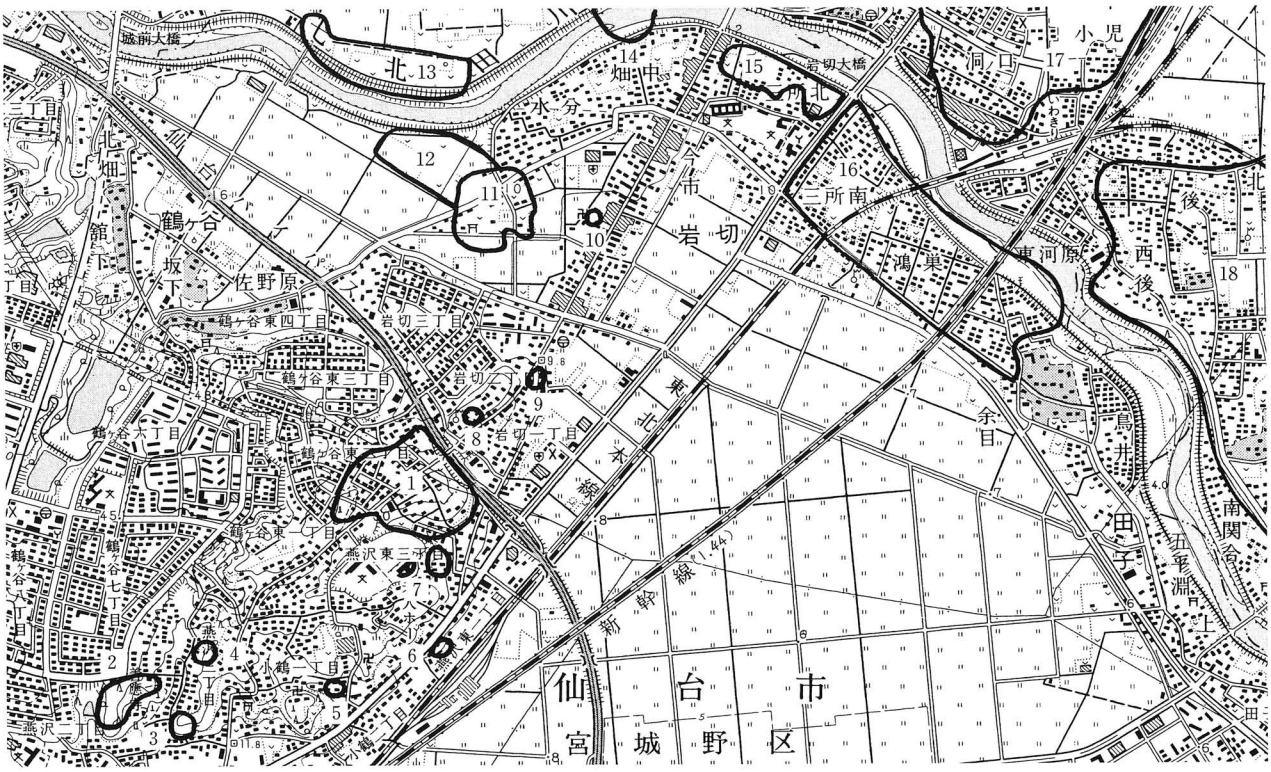
3　Ⅲ層完掘状況（西より）

図版61　検出遺構・北壁断面

XX　燕沢遺跡第12次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　燕沢遺跡（宮城県遺跡番号01001）
調 査 地 点　仙台市宮城野区燕沢３丁目528－１
調 査 期 間　平成17年２月22日
調査対象面積　422㎡
調 査 面 積　36㎡
調 査 原 因　宅地造成（私道敷設）
調 査 主 体　仙台市教育委員会
調 査 担 当　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　主査　工藤哲司　　文化財教諭　今野秀治

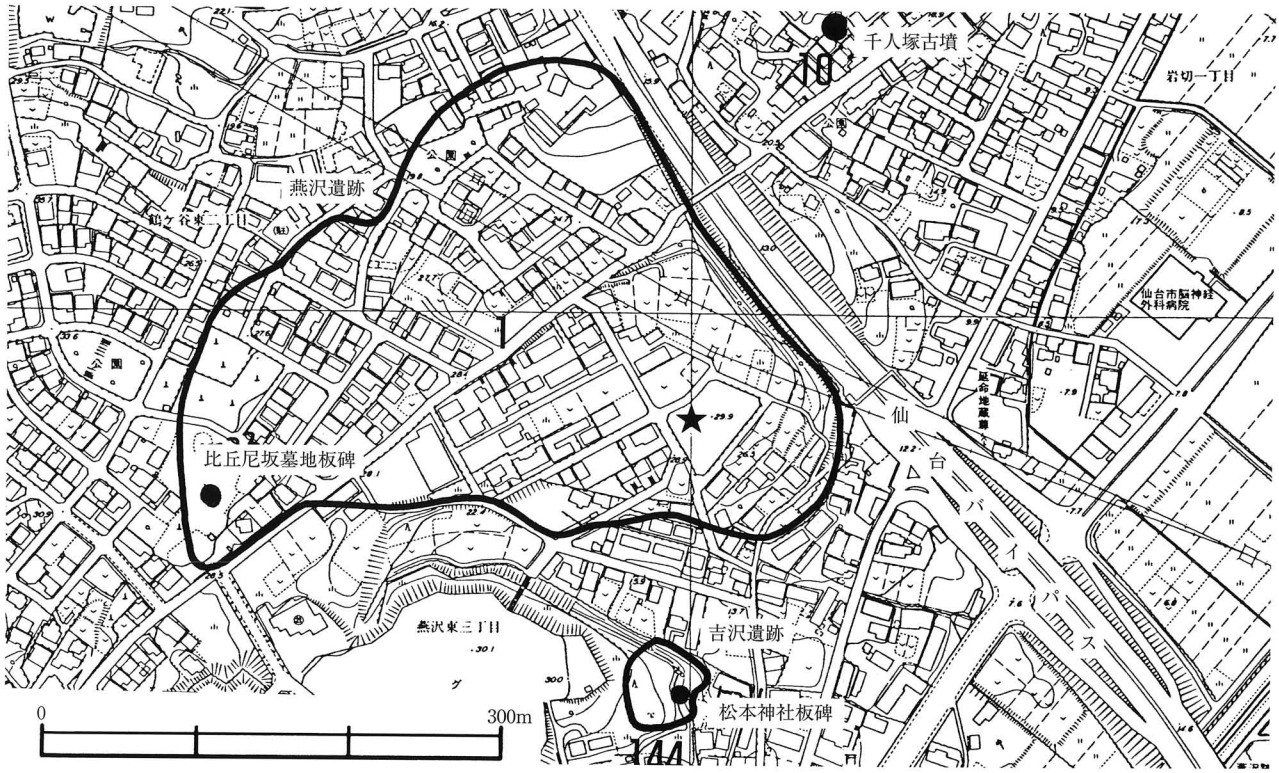


番号	遺跡名	種　別	立　地	時　　代	番号	遺跡名	種　別	立　地	時　　代
1	燕沢遺跡	集落・寺院	段丘	縄文・弥生～古代	10	耕田寺板碑群	板碑	自然堤防	中世
2	善応寺横穴群	横穴墓	段丘斜面	古墳・古代	11	稲荷館跡	城館	自然堤防	中世
3	善応寺東横穴群	横穴墓	段丘斜面	古墳・古代	12	岩切畑中遺跡	集落･包含地	自然堤防	縄文・弥生～近世
4	比丘尼塚古墳	古墳	段丘	古墳	13	大正囲遺跡	散布地	自然堤防	古代
5	五郎兵衛古墳	古墳	段丘斜面	古墳	14	新宿囲遺跡	散布地	自然堤防	古代
6	糠塚古墳	古墳	段丘斜面	古墳	15	今市遺跡	集落･包含地	自然堤防	古墳・古代～近世
7	吉沢遺跡	散布地	段丘斜面	古代	16	鴻ノ巣遺跡	集落･包含地	自然堤防	古墳・古代～近世
8	千人塚古墳	古墳	段丘	古墳	17	洞ノ口遺跡	城館･集落･水田	自然堤防	古墳・古代～近世
9	山崎囲遺跡	散布地	段丘裾部	縄文	18	新田遺跡	城館･集落･水田	自然堤防	弥生・古墳～近世

第116図　遺跡の位置と周辺の遺跡

2　調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成17年１月20日付けで、地権者大本博文氏より、宅地造成工事に伴う「埋蔵文化財の取扱いについ



第117図　調査地点の位置

て（協議）」が提出された。計画は、2172㎡の敷地に422㎡の私道敷設し、道路中に最深で1.7mの深さに下水管を埋設するものであった。当該地は、北から南側に向って下がる傾斜地に既に１～４mの盛土が行われていることから、現地表から約1.7mより浅い面で遺構が検出される可能性のある範囲の下水管埋設予定部分の調査を実施する旨の回答をした。

調査は、平成17年２月22日に実施した。下水管埋設予定部分に幅２mのトレンチを設定し、盛土の浅い北側から調査を行ない、南側に15mまで掘り進んだところで地山の検出面が地表２mを超えたので、掘削をやめ、遺構の検出作業を行った。遺構は、調査区の北側で溝跡が２条検出された。溝の調査後、調査記録を作成した。

3　遺跡の位置と環境

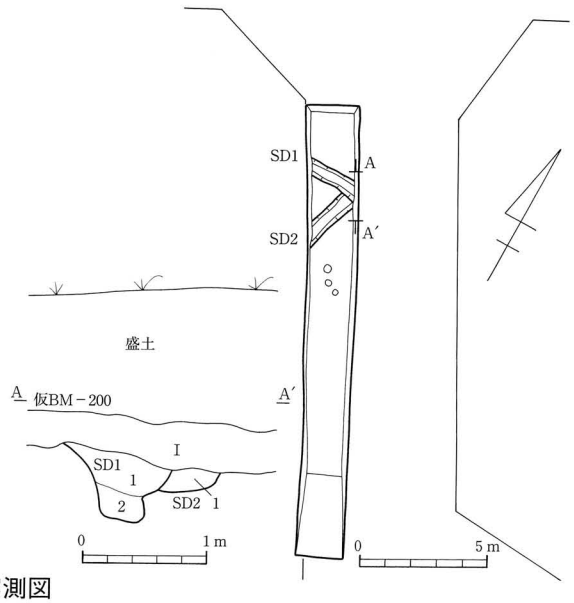
燕沢遺跡は、仙台市北東部のJR東仙台駅の北東約２kmに位置する。仙台市の地形は、西部は奥羽山脈から派生する丘陵と段丘地帯からなり、東部は「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積地から成っている。丘陵から流下する河川は、市内では北から七北田川・広瀬川－名取川となって太平洋に注いでいる。丘陵の東部は、七北田川の北側は富谷丘陵、

SD１

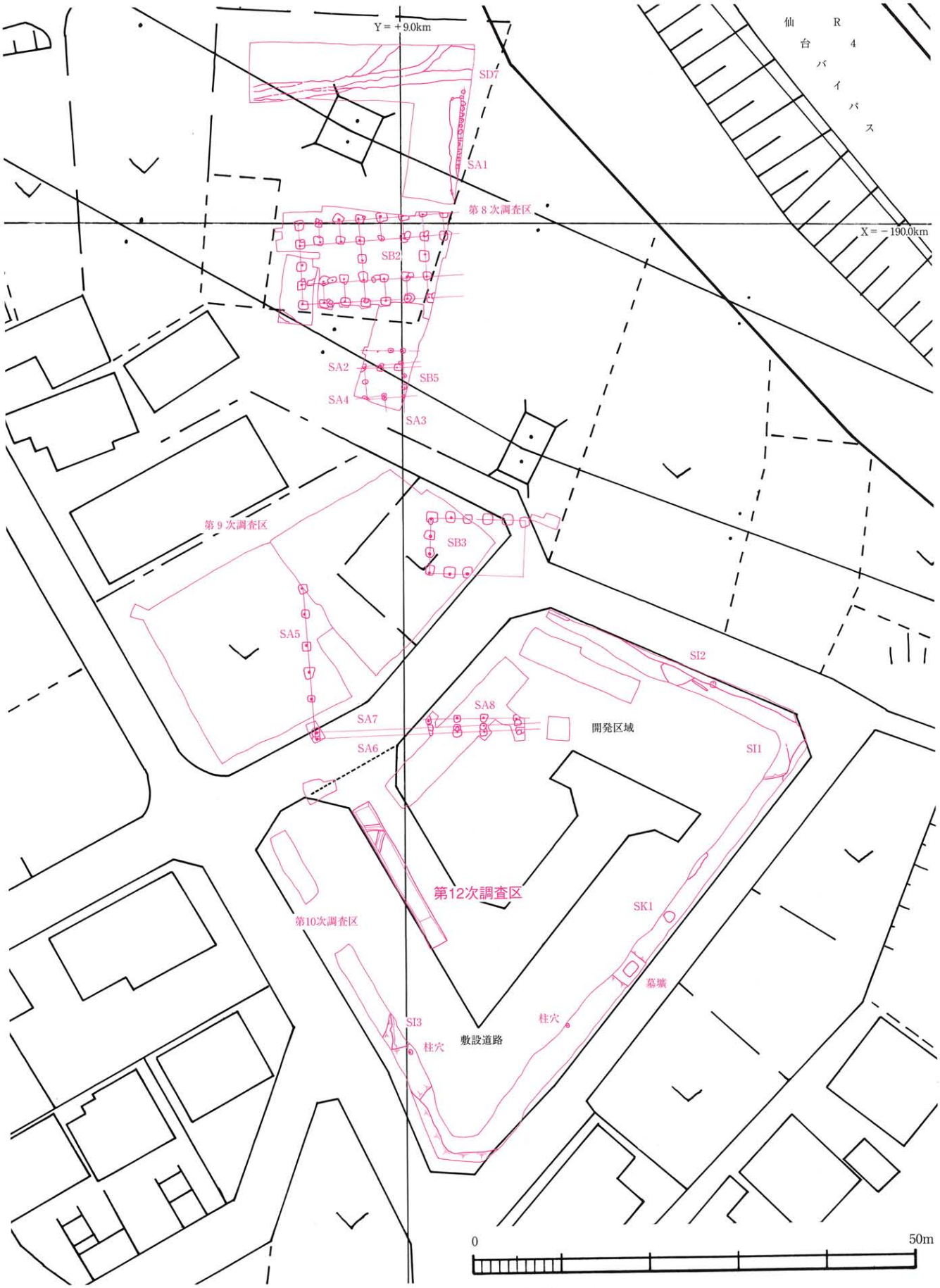
層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	風化した礫片を多量に含む。瓦片・土師器片を多く含む。
2	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	直径２～５cmの風化礫を含む。

SD２

層No.	土　色	土質	備　考
1	10YR2/2　黒褐色	粘土	風化した礫片を多量に含む。瓦片・土師器片を僅かに含む。



第118図　遺構実測図



第119図　燕沢遺跡東部遺構配置図

七北田川と広瀬川の間が七北田丘陵、広瀬川と名取川の間が青葉山丘陵と呼ばれている。さらに七北田丘陵の東端は、台原・小田原丘陵と呼ばれる。燕沢遺跡は、台原・小田原丘陵の最東端の段丘上に位置し、遠くに七北田川や多賀城跡を望むことができる。遺跡の標高は20～30mで、周辺の沖積平野よりも15～20m高い。

遺跡周辺は、遺跡内から縄文時代早期から前期にかけての土器片が出土しているが、縄文時代から弥生時代にかけては不明な点が多い。古墳時代になると、燕沢遺跡で前期の竪穴住居跡が発見されているほか、七北田川沿いの鴻ノ巣遺跡に中期の溝と柵に囲まれた大きな集落が形成されている。また、千人塚古墳・五郎兵古墳・案内古墳・善応寺横穴墓群などの古墳も造営されるほか、大蓮寺窯跡では、5世紀中頃に須恵器が焼成されている。奈良時代になると対岸の丘陵には多賀城が造営され、宮城野原に陸奥国分寺・尼寺が建立される。この時期、台原・小田原丘陵には瓦や須恵器焼成のため多数の窯が造られている。平安時代には、周辺に多くの集落が形成さる。中世には、岩切城や洞ノ口遺跡に城館が築かれ、その近くには、中世東光寺を中心として板碑群や石窟仏群からなる宗教遺跡群が形成される。さらに城下・門前には水運の七北田川と陸路の奥大道が交差する今市橋周辺には「冠屋市場」・「河原宿五日市場」の二つの市が存在した記録がある。

燕沢遺跡はこれまでの調査で、5時期の変遷が考えられている。

1期＝縄文時代：遺構は未発見であるが、早期・前期の縄文土器とこれに伴うと考えられる石器が出土している。

2期＝弥生時代：土坑や桝形囲式の土器・石庖丁・石器が出土している。

3期＝古墳時代：前期の竪穴住居跡が4軒確認されている。

4期＝奈良時代：遺構は検出されていないが、多賀城創建以前から創建期頃の瓦が出土した。

5期＝平安時代：2期に細分される。

5a期－10世紀前半以前：主に竪穴住居跡で構成されている。

5b期－10世紀前半以降：掘立柱建物跡で構成され、遺跡南東部では「僧坊」と推定される建物が検出され、その周辺の建物群とともに寺院の伽藍を形成していたと考えられる。この寺院に関係する「讀院□」と書かれた須恵器坏をはじめとする多数の墨書土器、「右？　婦　合？」の漆紙文書、多くの瓦などの遺物が出土している。

4　基本層序

基本層序は、3層に分けられる。

盛土層：北部の薄い部分で90cmあり、南側ほど徐々に厚くなっている。

Ⅰ　層：10YR3/3暗褐色のシルト質粘土。風化した粒状の礫を多量に含む。層厚約15cm。盛土以前の近年の畑耕作土である。

Ⅱ　層：10YR2/3黒褐色のシルト質粘土。風化した礫の小片・炭化物を含む。層厚15cm前後。旧表土層。調査区の北端部のみに分布する。

Ⅲ　層：10YR5/3にぶい黄褐色の砂礫。風化した礫層で、礫間を砂が埋めている。表面には酸化鉄が集積している。地山層。

5　発見遺構と出土遺物

調査区北部のⅢ層で溝跡2条とピット3個が検出された。

1）溝跡

SD1溝跡：調査区を東西に横切る。SD2溝跡を切る。上面幅70cm前後・底面幅35cm前後で、深さは20～50cm

で東側が深くなっている。断面形は逆台形を呈する。堆積土は２層に分けられ、上半部は黒褐色のシルト質粘土層で風化した礫片や土器片を多く含む。下半部は灰黄褐色の粘土層で、風化した礫を含む。溝の位置は、遺跡の南東部で寺院を構成する遺構群のうち、現在発見されている南端の遺構（SA６柱列）から９～10m南側に平行して存在している。遺物は、平瓦片８点・丸瓦片１点・土師器片４点が出土している。平瓦は、凸面が縄叩き・凹面が布目のものである。土師器片の中には、ロクロを使用し、内面黒色処理された坏の破片が２点含まれる。

SD２溝跡：南北に伸びて検出された。SD１溝跡に切られ、これと直行している。上面幅60～70cm・底面幅30cm前後で、深さは15cm前後である。断面形は逆台形を呈する。堆積土は１層で、黒褐色の粘土層で風化した礫を多量に含む。遺物は平瓦片２点・丸瓦片１点・土師器片１点が出土している。

２）ピット

調査区の中央付近で３個検出された。平面形は円形を基調とし、直径25～30cm・深さ５～10cmを測る。堆積土は基本層Ⅰ層に類似するので、新しい掘り込みと考えられる。

３）その他の出土遺物

表土中から平瓦片３点が出土している。平瓦のうち１点の凹面には模骨痕の可能性がある凹凸が観察される。

6　まとめ

①本調査区は、遺跡の南東部で寺院跡と推定される遺構群の南側の傾斜面に位置する。

②SD１溝跡は、出土した瓦と土師器片から平安時代の遺構と考えられる。

③SD１溝跡は、その位置と方向からこれまでの調査で検出されている僧坊に比定される建物の北側で平行方向に検出されている溝跡とともに、寺院を区画する施設の可能性が考えられる。

④調査区内のSD１溝跡より南側の斜面は、これまでに検出されている遺構の配置から、寺院跡の正面中央付近に相当するが、古代の遺構は検出されなかった。

＜参考文献＞

仙台市教育委員会（1982）：「燕沢遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第39集
仙台市教育委員会（1984）：「燕沢遺跡」仙台市文化財調査報告書第62集
仙台市教育委員会（1988）：「燕沢遺跡」仙台市文化財調査報告書第116集
仙台市教育委員会（1991）：「燕沢遺跡第４・５・６次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第154集
仙台市教育委員会（1994）：「仙台平野の遺跡群ＸⅢ」仙台市文化財調査報告書第179集
仙台市教育委員会（1995）：「仙台平野の遺跡群ＸⅣ」仙台市文化財調査報告書第195集
仙台市教育委員会（1996）：「仙台平野の遺跡群ＸＶ」仙台市文化財調査報告書第211集
仙台市教育委員会（1997）：「仙台平野の遺跡群ＸⅥ」仙台市文化財調査報告書第216集
仙台市教育委員会（1998）：「仙台平野の遺跡群ＸⅦ」仙台市文化財調査報告書第228集

1　調査区全景（南から）

2　SD１・２溝跡（南から）

3　SD１２溝跡断面（西から）

図版62　燕沢遺跡の調査状況

報告書抄録

ふりがな	まえだたてあとほか
書名	前田館跡他
副書名	発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第301集
編著者名	工藤哲司　三塚博之　浅野克樹　門間有希　赤岡光騎
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671　宮城県仙台市青葉区国分町３丁目７－１　電話　022-214-8894
発行年月日	平成18年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
前田館跡	仙台市太白区中田 ６丁目55の一部	04100	01121	38° 11′ 18″	140° 53′ 16″	2005・05・24 2005・06・06	50㎡	宅地造成
中田南遺跡 （第３次）	仙台市太白区中田７丁目 226-17、225-10、230-6・7	04100	01272	38° 11′ 10″	140° 53′ 30″	2005・06・22 2005・06・30	21㎡	個人住宅 建築
中田北遺跡	仙台市太白区中田 ７丁目20	04100	01271	38° 11′ 19″	140° 53′ 29″	2005・04・11 2005・04・13	102㎡	共同住宅 建築 （２棟）
南目城跡	仙台市宮城野区 銀杏町508-2	04100	01226	38° 15′ 43″	140° 54′ 50″	2005・04・25	21㎡	個人住宅 建築
大野田古墳群 （第１０次）	仙台市太白区大野田 字宮13番・14番の各一部	04100	01361	38° 12′ 48″	140° 52′ 27″	2005・04・27 2005・04・28	21㎡	個人住宅 建築
大野田古墳群 （第１１次）	仙台市太白区大野田字千刈田 8-4、8-5、8-6の各一部	04100	01361	38° 12′ 53″	140° 52′ 21″	2005・06・01 2005・06・23	47㎡	個人住宅 建築
元袋遺跡 （第５次）	仙台市太白区大野田 字元袋19	04100	01179	38° 12′ 55″	140° 52′ 52″	2005・04・18 2005・04・28	32㎡	店舗付 個人住宅建築
鴻ノ巣遺跡 （第１０次）	仙台市宮城野区岩切 三所北123-2、124-9	04100	01034	38° 18′ 04″	140° 56′ 54″	2005・05・13	21㎡	個人住宅 建築
北目城跡（第４次）	仙台市太白区東郡山 ２丁目106-4・107-2	04100	01029	38° 13′ 3″	140° 54′ 17″	2005・06・07 2005・06・08	24㎡	個人住宅 建築
北目城跡（第５次）	仙台市太白区東郡山 2-548-13	04100	01029	38° 13′ 6″	140° 54′ 10″	2005・10・12 2005・10・13	8㎡	個人住宅 建築
南小泉遺跡 （第４４次）	仙台市若林区遠見塚 １丁目22番	04100	01021	38° 14′ 5″	140° 54′ 56″	2005・03・01 2005・03・03	18㎡	防火水槽 建築
南小泉遺跡 （第４５次）	仙台市若林区遠見塚 2丁目291-10・11番	04100	01021	38° 14′ 14″	140° 55′ 2″	2005・06・16 2005・06・17	32㎡	個人住宅 建築
南小泉遺跡 （第４６次）	仙台市若林区南小泉 ４丁目50－１　他１筆	04100	01021	38° 13′ 9″	140° 54′ 28″	2005・11・28 2005・11・29	36㎡	宅地造成
南小泉遺跡 （第４７次）	仙台市若林区遠見塚 １丁目37-1	04100	01021	38° 13′ 59″	140° 54′ 54″	2005・12・13 2005・12・15	32㎡	個人住宅 建築
袋前遺跡 （第２次）	仙台市太白区大野田 字袋前23の一部	04100	01439	38° 12′ 51″	140° 52′ 49″	2005・9・26	10㎡	個人住宅 建築
富沢遺跡 （第１３５次）	仙台市太白区鹿野 ３丁目22-1他	04100	01369	38° 13′ 25″	140° 52′ 30″	2005・07・11 2005・11・08	246㎡	共同住宅 建築
富沢遺跡 （第１３６次）	仙台市太白区長町南 １丁目201-3	04100	01369	38° 13′ 16″	140° 52′ 56″	2005・08・01 2005・08・12	29㎡	店舗付共同 住宅建築
西上野原遺跡	仙台市泉区福岡大前通8-1 福岡字下野中沢1-1	04100	19027	38° 22′ 10″	140° 46′ 11″	2005・07・20	34㎡	送水ポンプ場建築及び送水管埋設工事
洞ノ口遺跡 （第１２次）	仙台市宮城野区岩切 字洞ノ口164-2・164-4	04100	01372	38° 17′ 59″	140° 57′ 22″	2005・06・13 2005・06・17	26㎡	個人住宅 建築
燕沢遺跡 （第１２次）	仙台市宮城野区燕沢 ３丁目528-1	04100	01001	38° 17′ 25″	140° 55′ 58″	2005・02・22	36㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前田館跡	城館跡	中世	溝跡・土坑	陶器・磁器・木製品・石製品等	
中田南遺跡 第3次	集落跡・屋敷跡	縄文～中世	竪穴住居跡・溝跡・土坑	土師器・須恵器・陶器・磁器・石製品等	
中田北遺跡	散布地	古代	竪穴住居跡・溝跡・土坑・ピット	土師器・須恵器・砥石	
南目城跡	城館跡	中世	溝跡・土坑・ピット		
大野田古墳群 第10次	円墳	古墳	小溝状遺構・ピット		
大野田古墳群 第11次	円墳	古墳	土坑・小溝・ピット	土師器	
元袋遺跡 第5次	集落跡・水田跡	弥生～近世	溝跡・土坑・ピット	縄文土器・土師器・陶器・石製品	
鴻ノ巣遺跡 第10次	集落跡・屋敷跡	弥生～中世	溝跡・土坑・ピット	中世陶器	
北目城跡 第4次	城館跡・集落跡・水田跡	縄文～中・近世	土坑・井戸跡	陶器	
北目城跡 第5次	城館跡・集落跡・水田跡	縄文～中・近世	井戸跡・ピット	陶器・鉄製品	
南小泉遺跡 第44次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	掘立柱建物跡・竪穴住居跡・土坑など	弥生土器・土師器・石製模造品等	
南小泉遺跡 第45次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	溝跡・土坑・ピット	土師器	
南小泉遺跡 第46次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	溝跡	土師器・須恵器・鉄製品	
南小泉遺跡 第47次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	掘立柱建物跡・土坑・ピット	土師器・須恵器・鉄滓	
袋前遺跡 第2次	集落跡	縄文・古代	溝跡・小溝状遺構・ピット	鉄滓	
富沢遺跡 第135次	水田跡・包含地	後期旧石器～中・近世	水田跡・畦畔	石器・土師器・磁器・陶器等	
富沢遺跡 第136次	水田跡・包含地	後期旧石器～中・近世	水田跡・畦畔	瓦・陶器・磁器・石器	
西上野原遺跡	散布地	後期旧石器～中・近世	土坑		
洞ノ口遺跡 第12次	水田跡・集落跡・屋敷跡	古墳～中・近世	溝跡・土坑・ピット	土師器・磁器	
燕沢遺跡 第12次	散布地・集落跡・寺院跡	縄文～古代	溝跡・ピット	平瓦・丸瓦・土師器	

仙台市文化財調査報告書第301集

前田館跡他

発掘調査報告書

2006年3月

発　行　仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目7－1

文化財課　022(214)8894

印　刷　株式会社　東北プリント

仙台市青葉区立町24－24

TEL 022(263)1166